

塚 奥 山 遺 跡

(第1分冊 遺構編)

2007

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター



第3B 調査面全景（北西から）



SB6出土绳文土器

序

揖斐川上流域に位置する旧徳山村域には、縄文時代を中心とする遺跡が数多く知られています。この地に徳山ダムが建設されることになり、水没地域に含まれる遺跡の発掘調査が、昭和61年度から岐阜県教育委員会によって開始され、平成3年度からは当センターが引き継いで行ってきました。

今回、報告する塚奥山遺跡は、ダムの建設により水没する遺跡の中では最も揖斐川上流にあり、左岸段丘上に位置しています。平成8年度から平成14年度の発掘調査によって、縄文時代中期後葉から後期前葉の環状集落跡や、後期前葉の配石遺構などの遺構が検出され、縄文時代早期から晩期までの遺物が見つかりました。これらは旧徳山村域における縄文時代の様相を理解する上で貴重な成果であり、本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、旧藤橋村教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成19年3月1日

財團法人岐阜県教育文化財団
文化財保護センター
所長 田口久之

例　言

- 1 本書は、揖斐郡揖斐川町塚字塚奥山に所在する塚奥山遺跡（岐阜県遺跡番号21401-00919）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、徳山ダム建設事業に伴うもので、独立行政法人水資源機構（旧水資源開発公団）徳山ダム建設所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は、大參義一愛知学院大学教授（平成8年度）、泉拓良奈良大学教授（平成9～14年度、現京都大学教授）の指導のもとに、平成8～10・13・14年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第2章第1節・第3章第2節は藤岡比呂志、第6章第2節～第11節を除くそれ以外は三輪晃三が行った。また編集は三輪が行った。
- 6 平成13・14年度発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、地形測量、空中写真測量、一次整理などの業務は、株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文（平成14・16・17年度、主に土器）・STUDIO SKY（平成15年度、主に石器）に委託して行った。遺構写真是各調査担当者が撮影した。
- 8 地形測量・基準点測量・水準測量は株式会社イビソク、空中写真測量は株式会社イビソク（平成9・13・14年度）・アジア航測株式会社（平成10年度）、遺構図編集は株式会社岐阜テクノス（平成14年度）・株式会社帝国建設コンサルタント（平成15年度）に委託して行った。
- 9 SB16床下遺構分析・種実及び樹種同定・放射線性炭素年代測定・赤色顔料分析・ウルシ分析・胎土分析は株式会社パレオ・ラボ、ヒスイ分析は糸魚川市フォッサマグナミュージアムに委託して行った。ヒスイ分析を除き、結果は第6章に掲載した。
- 10 自然科学的分析の一部について、名古屋大学博物館新美倫子、京都大学原子炉実験所薬科哲男、国立歴史民俗博物館小林謙一、今村峯雄・坂本稔、近畿大学南武志各氏（掲載順）に玉稿をいただいた。結果は第6章に掲載した。
- 11 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

赤澤徳明 麻生優 伊藤正人 岩瀬彰利 奥義次 岡田憲一 木下哲男 小林達雄 小島俊彰
扇間重男 戸田哲也 富井眞 長屋幸二 八賀晋 藤澤良祐 欠野健一 山本孝一 渡邊博人
揖斐川町歴史民俗資料館 旧久瀬村教育委員会 旧藤橋村教育委員会
奈良大学文学部文化財学科
- 12 本文中の方位は、日本測地系第Ⅷ系の座標北を示している。
- 13 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄1997・1998・2001『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 14 調査記録及び出土品は、財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターで保管している。

第 1 分 冊 目 次

序	
例言	
目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経緯	2
第2章 遺跡の環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 周辺の遺跡	11
第3章 基本層序	12
第4章 遺構	16
第1節 遺構の概要と分類	16
第2節 第1調査面	21
第3節 第2調査面	29
第4節 第3A調査面	47
第5節 第3B調査面	74
第6節 第4調査面	196
第7節 第5調査面	236
第8節 第6調査面	247
調査区全体図分割図	257

卷頭図版1 第3B調査面全景

卷頭図版2 S B 6出土繩文土器

第2分冊 遺物・分析・考察編 目次

- 第5章 遺物
- 第6章 自然科学分析
- 第7章 考察

第3分冊 表・写真図版編 目次

- 表（遺構観察表・遺物観察表）
- 写真図版

挿 図 目 次

図1 道路位置図	1	図40 第3A調査面検出遺構図(7)	62
図2 調査区設定図	2	図41 第3A調査面検出遺構図(8)	63
図3 試掘坑及び調査溝配置図	4	図42 第3A調査面検出遺構図(9)	65
図4 各調査面の位置図	4	図43 第3A調査面検出遺構図(10)	67
図5 道路周辺の地形図	10	図44 第3A調査面検出遺構図(11)	69
図6 周辺の遺跡地図	11	図45 第3A調査面検出遺構図(12)	71
図7 土層堆積状況図	14	図46 第3A調査面検出遺構図(13)	73
図8 b24グリッドの土層断面図	15	図47 第3B調査面全体図	74
図9 配石遺構の分類模式図	17	図48 S B5遺構図(1)	76
図10 土坑の分類模式図	18	図49 S B5遺構図(2)	77
図11 遺構の計測方法模式図	19	図50 S B6遺構図(1)	78
図12 遺構理上の分類模式図	20	図51 S B6遺構図(2)	79
図13 第1調査面全体図	21	図52 S B6遺構図(3)	80
図14 第1調査面検出遺構(1)	23	図53 S B6の主な土器の出土状況模式図	81
図15 第1調査面検出遺構(2)	25	図54 S B7遺構図(1)	83
図16 第1調査面検出遺構(3)	27	図55 S B7遺構図(2)	84
図17 第2調査面全体図	29	図56 S B8遺構図(1)	85
図18 S B1遺構図(1)	30	図57 S B8遺構図(2)	86
図19 S B1遺構図(2)	31	図58 S B8遺構図(3)	87
図20 S B2遺構図(1)	33	図59 S B9遺構図(1)	89
図21 S B2遺構図(2)	34	図60 S B9遺構図(2)	90
図22 S B3遺構図(1)	35	図61 S B10遺構図	92
図23 S B3遺構図(2)	36	図62 S B11遺構図(1)	93
図24 S B3遺構図(3)	37	図63 S B11遺構図(2)	94
図25 S B4遺構図(1)	38	図64 S B11遺構図(3)	95
図26 S B4遺構図(2)	39	図65 S B12遺構図(1)	96
図27 S B4遺構図(3)	40	図66 S B12遺構図(2)	97
図28 第2調査面検出遺構図(1)	42	図67 S B12遺構図(3)	98
図29 第2調査面検出遺構図(2)	44	図68 S B13遺構図(1)	100
図30 第2調査面検出遺構図(3)	45	図69 S B13遺構図(2)	101
図31 第3A調査面全体図	47	図70 S B13遺構図(3)	102
図32 第3A調査面検出遺構図(1)	49	図71 S B14遺構図(1)	103
図33 第3A調査面検出遺構図(2)	51	図72 S B14遺構図(2)	104
図34 配石遺構群検出状況図	52	図73 S B15遺構図(1)	105
図35 配石遺構群と下部土坑位置図	53	図74 S B15遺構図(2)	106
図36 第3A調査面検出遺構図(3)	55	図75 S B16遺構図(1)	108
図37 第3A調査面検出遺構図(4)	57	図76 S B16遺構図(2)	109
図38 第3A調査面検出遺構図(5)	59	図77 S B16遺構図(3)	110
図39 第3A調査面検出遺構図(6)	61	図78 S B16床下遺構図	111

图79 S B16 F部造桥图 ······	113	图120 第3 B调查面检出造桥图 (21) ······	177
图80 S B17造桥图 ······	114	图121 第3 B调查面检出造桥图 (22) ······	179
图81 S B18造桥图 (1) ······	116	图122 第3 B调查面检出造桥图 (23) ······	181
图82 S B18造桥图 (2) ······	117	图123 第3 B调查面检出造桥图 (24) ······	182
图83 S B19造桥图 (1) ······	118	图124 第3 B调查面检出造桥图 (25) ······	183
图84 S B19造桥图 (2) ······	119	图125 第3 B调查面检出造桥图 (26) ······	185
图85 S B20造桥图 (1) ······	120	图126 第3 B调查面检出造桥图 (27) ······	187
图86 S B20造桥图 (2) ······	121	图127 第3 B调查面检出造桥图 (28) ······	190
图87 S B21造桥图 (1) ······	123	图128 第3 B调查面检出造桥图 (29) ······	191
图88 S B21造桥图 (2) ······	124	图129 第3 B调查面检出造桥图 (30) ······	193
图89 S B22造桥图 ······	125	图130 段丘斜面位置·断面图 ······	195
图90 S B23造桥图 ······	127	图131 第4·第5 调查面全体图 ······	197
图91 S B24造桥图 (1) ······	128	图132 S B27造桥图 ······	198
图92 S B24造桥图 (2) ······	129	图133 S B28·29造桥图 (1) ······	199
图93 S B25造桥图 (1) ······	131	图134 S B22·29造桥图 (2) ······	200
图94 S B25造桥图 (2) ······	132	图135 S B29造桥图 (3) ······	201
图95 S B25造桥图 (3) ······	133	图136 S B30造桥图 (1) ······	203
图96 S B26造桥图 (1) ······	134	图137 S B30造桥图 (2) ······	204
图97 S B26造桥图 (2) ······	135	图138 S B31造桥图 (1) ······	205
图98 S H1造桥图 (1) ······	135	图139 S B31造桥图 (2) ······	206
图99 S H1造桥图 (2) ······	137	图140 S B32造桥图 (1) ······	207
图100 第3 B调查面检出造桥图 (1) ······	139	图141 S B32造桥图 (2) ······	208
图101 第3 B调查面检出造桥图 (2) ······	141	图142 S B33造桥图 (1) ······	210
图102 第3 B调查面检出造桥图 (3) ······	143	图143 S B33造桥图 (2) ······	211
图103 第3 B调查面检出造桥图 (4) ······	145	图144 S B34造桥图 (1) ······	212
图104 第3 B调查面检出造桥图 (5) ······	147	图145 S B34造桥图 (2) ······	213
图105 第3 B调查面检出造桥图 (6) ······	149	图146 S B34造桥图 (3) ······	214
图106 第3 B调查面检出造桥图 (7) ······	151	图147 S B35造桥图 ······	215
图107 第3 B调查面检出造桥图 (8) ······	153	图148 S B36造桥图 ······	217
图108 第3 B调查面检出造桥图 (9) ······	155	图149 S B37造桥图 (1) ······	218
图109 第3 B调查面检出造桥图 (10) ······	157	图150 S B37造桥图 (2) ······	219
图110 第3 B调查面检出造桥图 (11) ······	159	图151 S B38造桥图 (1) ······	220
图111 第3 B调查面检出造桥图 (12) ······	161	图152 S B38造桥图 (2) ······	221
图112 第3 B调查面检出造桥图 (13) ······	163	图153 S H 2造桥图 (1) ······	223
图113 第3 B调查面检出造桥图 (14) ······	165	图154 S H 2造桥图 (2) ······	224
图114 第3 B调查面检出造桥图 (15) ······	166	图155 第4 调查面检出造桥图 (1) ······	225
图115 第3 B调查面检出造桥图 (16) ······	169	图156 第4 调查面检出造桥图 (2) ······	227
图116 第3 B调查面检出造桥图 (17) ······	170	图157 第4 调查面检出造桥图 (3) ······	229
图117 第3 B调查面检出造桥图 (18) ······	173	图158 第4 调查面检出造桥图 (4) ······	230
图118 第3 B调查面检出造桥图 (19) ······	174	图159 第4 调查面检出造桥图 (5) ······	232
图119 第3 B调查面检出造桥图 (20) ······	175	图160 第4 调查面检出造桥图 (6) ······	234

図161 第4調査面検出遺構図(7) ······	235	図195 第3B調査面調査区分割図(16) ······	274
図162 S B39遺構図(1) ······	237	図196 第3B調査面調査区分割図(17) ······	275
図163 S B39遺構図(2) ······	238	図197 第3B調査面調査区分割図(19) ······	276
図164 S B40遺構図(1) ······	239	図198 第3B調査面調査区分割図(20) ······	277
図165 S B40遺構図(2) ······	240	図199 第3B調査面調査区分割図(21) ······	278
図166 S H 3 遺構図 ······	242	図200 第4・第5調査面調査区全体剖付図 ······	279
図167 S H 4 遺構図 ······	243	図201 第4・第5調査面調査区分割図(1) ······	280
図168 第5調査面検出遺構図(1) ······	245	図202 第4・第5調査面調査区分割図(3) ······	280
図169 第5調査面検出遺構図(2) ······	246	図203 第4・第5調査面調査区分割図(2) ······	281
図170 第6調査面全体図 ······	247	図204 第4・第5調査面調査区分割図(4) ······	282
図171 S B41遺構図(1) ······	249	図205 第4・第5調査面調査区分割図(5) ······	283
図172 S B41遺構図(2) ······	250	図206 第4・第5調査面調査区分割図(6) ······	284
図173 S B42遺構図(1) ······	251	図207 第4・第5調査面調査区分割図(9) ······	284
図174 S B42遺構図(2) ······	252	図208 第4・第5調査面調査区分割図(7) ······	285
図175 S I41遺構図 ······	253	図209 第4・第5調査面調査区分割図(8) ······	286
図176 第6調査面検出遺構図(1) ······	255	図210 第4・第5調査面調査区分割図(10) ······	287
図177 第6調査面検出遺構図(2) ······	256	図211 第4・第5調査面調査区分割図(11) ······	288
図178 第3B調査面調査区全体剖付図 ······	258	図212 第4・第5調査面調査区分割図(12) ······	289
図179 第3B調査面調査区分割図(1) ······	259	図213 第4・第5調査面調査区分割図(13) ······	290
図180 第3B調査面調査区分割図(2) ······	260	図214 第6調査面調査区全体剖付図 ······	291
図181 第3B調査面調査区分割図(3) ······	261	図215 第6調査面調査区分割図(1) ······	292
図182 第3B調査面調査区分割図(4) ······	262	図216 第6調査面調査区分割図(2) ······	293
図183 第3B調査面調査区分割図(5) ······	263	図217 第6調査面調査区分割図(3) ······	294
図184 第3B調査面調査区分割図(6) ······	264	図218 第6調査面調査区分割図(4) ······	295
図185 第3B調査面調査区分割図(7) ······	265	図219 第6調査面調査区分割図(5) ······	295
図186 第3B調査面調査区分割図(18) ······	265	図220 第6調査面調査区分割図(8) ······	296
図187 第3B調査面調査区分割図(8) ······	266	図221 第6調査面調査区分割図(6) ······	297
図188 第3B調査面調査区分割図(9) ······	267	図222 第6調査面調査区分割図(7) ······	298
図189 第3B調査面調査区分割図(10) ······	268	図223 第6調査面調査区分割図(9) ······	299
図190 第3B調査面調査区分割図(11) ······	269	図224 第6調査面調査区分割図(10) ······	300
図191 第3B調査面調査区分割図(12) ······	270	図225 第6調査面調査区分割図(11) ······	301
図192 第3B調査面調査区分割図(13) ······	271	図226 第6調査面調査区分割図(12) ······	302
図193 第3B調査面調査区分割図(14) ······	272	図227 第6調査面調査区分割図(13) ······	303
図194 第3B調査面調査区分割図(15) ······	273	図228 第6調査面調査区分割図(14) ······	304

表目次

表1 年度別調査進捗状況 ······	6
表2 周辺の道路一覧表 ······	11
表3 検出遺構一覧表 ······	18

写真

写真1 平成9年度体験発掘 ······	6
写真2 平成10年度体験発掘 ······	6
写真3 竪穴住居跡調査状況 ······	6
写真4 遺構掘削状況 ······	6
写真5 b24グリッドの上層断面写真 ······	15

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

当遺跡は、昭和19年からの本格的な開田により多数の縄文土器や石器が出土し、「宮ヶ原遺跡」として知られた。昭和24年には、岐阜県教育委員会により小規模な調査が行われて、良好な遺物包含層が確認され、開墾時に炉跡を2か所発見したこと、北西の高い地点から大型の石棒（第2分冊図179・第3分冊図版179）1点が採集されたことなどが報告されている（岐阜県教育委員会1950）。また、小沢一弘氏や徳山村の歴史を語る会などが採集資料の一部を紹介しており（小沢1975、徳山村の歴史を語る会1984など）、出土遺物は旧石器時代、縄文時代中期前半から晚期前葉までの時期幅があり、遺跡の主体となる時期は縄文時代中期後半であると指摘されている。

当遺跡は徳山ダム建設に伴う水没地域に含まれることから、平成6年度に当センターが範囲確認のため試掘確認調査（調査坑11か所・調査面積44m²）を行った。この結果を受けて、水資源開発公団徳山ダム建設所と岐阜県教育委員会との協議により、本発掘調査の対象は12,100m²とされ、平成8～9年度に第1・2調査面の調査を実施した。平成10年度には第3調査面の調査中に、台風7号により植原地区北部で国道417号線が崩落して通行止めとなり、調査を中断した。平成10年度の調査で、新たに調査区内下層の遺物包含層と遺構面（調査面積8,100m²）を確認した。これを受け平成11年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会で、この部分の本発掘調査が必要と判断され、平成11年3月に「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」の一部が変更された。これに基づき、平成13年度で第3・4・5調査面、平成14年度で第6調査面の調査を実施した。こうして平成8年度に開始した当遺跡の調査は都合5年度に及び、調査面6面、調査総面積20,200m²となった。



図1 遺跡位置図（国土地理院 平成15年2月1日発行「中部近畿」1:500,000地方図）

第2節 調査の経緯

発掘調査の経緯

調査を開始するに当たり、現況の地形測量図 ($S = 1/200$) を作成した。4級基準点測量及び水準測量を実施し、遺跡が広がる段丘全体を網羅できるように、日本測地系に基づき4m四方で割り付け、随時グリッド杭を設置した。グリッド名の呼称は、座標北から南に向けて順に1～38のアラビア数字、西から東に向けて順にA～Z、a～nのアルファベットを付けて併用し、北西角の杭番号を用いた(図2)。基準となる北西端A1グリッドの北西杭は $X = -28184 \cdot Y = -67728$ に位置する。

調査前の土地利用は水田・畠地・林で、東西方向に石垣が築かれ棚田が形成されていた。表面採集資料は多いものの、試掘確認調査では弥生時代以降の明確な土地利用の痕跡は検出されず、遺跡の遺存状況は比較的良好であると予想された。



図2 調査区設定図

試掘確認調査と本発掘調査の調査期間及び調査面積、各年度の調査の経緯は以下のとおりである。

平成6年度 試掘確認調査、44m²

平成8年度 5月7日～11月29日、3,600m²

平成9年度 5月1日～11月28日、7,000m²

平成10年度 4月20日～9月18日、(1,456m²の調査途中で中断)

平成13年度 5月7日～12月5日、6,856m²（調査面積は平成10年度の面積も含む）

平成14年度 5月7日～11月25日、2,700m²

平成8年度当初、調査区内に立入が禁止された区域があったため、バックホウによる表土の除去ができなかった。このため土層確認と遺物包含層の位置及び所属時期を把握するために、4m四方の調査坑14箇所（図3・TP21～34）を人力で掘削した後に土層断面を記録し、試掘坑の壁面や石垣裏側の断面を比較して土層確認を行った。この結果により、I～X層までの基本層序（第3章参照）を設定した。現地表から浅い地点で遺物が出土することが判明したため、以降、調査区内の北西端からI層からⅢ層までを人力で掘削して、最終的にIV層上面まで達した。10月中旬に立入禁止区域の立入許可が下りたため、バックホウでI層からIIc層まで除去した。調査と並行して7月8日に地形測量を実施し、10月30日には八賀晋三重大学教授に現地で指導を受けた。

平成9年度は、6月2日に水準測量を実施し、調査区全体の立入が許可されたため残るすべてのI層をバックホウで除去した。層序と調査面を面的に把握するため調査溝（A～Cトレンチ）をバックホウで掘削して土層断面を検討し、Va層はBトレンチ以西・13列以南で広がると判断した。また平成8年度調査の13列以北の出土遺物の中に、縄文時代早期の土器を散見していたため、上記の範囲でIV層を人力掘削して、Va層上面で遺構検出・掘削し、記録を行った（第1調査面）。8月8日には調査区の景観の撮影と遺構の図化作業のため、空中写真撮影を実施した。第1調査面の調査終了後、第1調査面のVa層を人力で掘削してVb層上面を中心に精査を行い（第2調査面）、10月21日に空中写真撮影を実施した。図化に際しては、配石遺構と自然疊との分布の相違を明確にするために疊の記録に努めた。Vb層は第2調査面の外側にも広がるため、同調査面の外側のVb層上面で精査を行い（第3調査面）、一部の遺構を検出して掘削し記録を進めた。10月15日に麻生優愛知学院大学教授に現地で、3月10日に泉拓良奈良大学教授に揖斐川整理所で指導を受けた。

平成10年度は、引き続き第3調査面の調査を実施した。遺構の理土とVb層の土性が類似するためVb層上面での検出は困難と判断し、Vb層を人力掘削しVb層基底面で遺構検出を行った。ただし調査区北西部の3・4列ではVI・VII層が分布せず、Vb層とVIII層が接しており土層を誤認したため、調査面の一部は下層に達した。この作業中にVa層より現れた配石遺構を特に留意しながら検出し、その一部については詳細な記録を、調査区全体については配石遺構の位置及び遺構以外の疊の分布の相違を明確にするために、8月18日及び11月10日に空中写真撮影を実施した。しかし9月24日に国道417号線が通行止めとなり現場への交通路が遮断されたため調査を中断し、福井県側から調査員が現場に入り、一部の遺構の調査と遺構の保護作業を行った。通行止めにより、当遺構面の多くの遺構の調査が途中のまま、平成13年度調査まで待つこととなった。5月28日～10月13日にかけて随時泉拓良教授に、10月13日に小林達雄國學院大学教授に現地で指導を受けた。

平成13年度は、7月1日に土砂崩れにより開田地区的国道417号線が通行止めとなつたが、迂回路

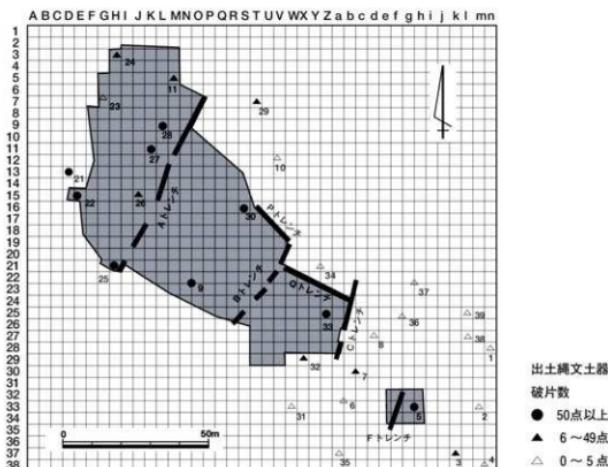


図3 試掘坑及び調査溝配置図

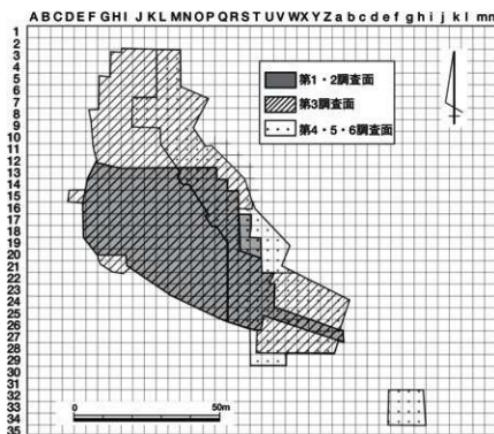


図4 各調査面の位置図

を経由して現場に入り、調査を実施することができた。まず5月7日に水準測量を実施、調査区内の廃土処理用通路のI層からⅢ層までをバックホウで除去後、IV層を人力で掘削してV a層上面（第1調査面）・V b層上面（第2調査面）で精査し、遺構掘削・記録を行った。調査途中の第3調査面については、平成10年度以前の調査で配石遺構と認定し、平成11年度以降の遺構の再検討により必要と判断した縄については図化後除去したが、一部の配石遺構や土坑中の縄は原位置から移動していたり、堅穴住居跡などの遺構の掘影が失われているなど遺構の解釈の点で多くの課題が残った。調査が進むと遺構の密度が高く重複が著しいことから、平成10年度以前の遺構名との対比が困難な場合が多いため、敢えて新規に命名し慎重に対応した。R列以東で遺構密度が低くなったことにより、R～V列の一部は第5調査面の調査に委ねることとした。遺構を掘削して必要な記録作業を終え、9月20日に空中写真撮影を実施した。図化に際しては、原則として遺構は完掘状態とし、自然縄は図化しなかった。

第4調査面以下の調査区については、第3B調査面における土層の堆積状況（図7）から、VI b層基底面（第4調査面）及びVI c層基底面（第5調査面）で精査し、遺構検出を行うこととした。ただし調査区東端のC・Qトレチヤ第3調査面の完掘遺構の壁面では、VI b層及びVI c層で遺構がなく遺物も少量であったため、21列で調査面を南北に分割し、以北を第4調査面1区、以南を第5調査面とした。これとは別に、試掘坑（TP5）のVI c層上面で焼土を確認していたため、遺構の性格の解明と周辺の遺構検出を目的に、第4調査面2区を設定した。第4調査面1区では、遺物の包含状況からVI a層とVI b層の一部をバックホウで除去し、VI b層の一部を人力で掘削してVI b層基底面で精査を行った。第4調査面2区でも、VI b層からVI b層の一部までをバックホウで除去した以外は、同様の方法で実施した。第5調査面では、遺物の包含状況からVI a層・VI b層及びVI c層の大半をバックホウで除去し、VI c層の一部を人力で掘削してVI c層基底面で精査を行った。なお調査区西端・南端の斜面の一部を拡張して掘削を行い、遺物の回収と検出遺構の掘削・記録を行った。遺構を掘削して必要な記録作業を終え、11月28日に空中写真撮影を実施した。11月21日に泉拓良教授に現地で指導を受けた。

平成14年度は、第4調査面1区及び第5調査面のVI c層をバックホウで除去後、VI a層・VI b層・VI a・VI b層を人力で掘削し、VI b層下面で精査を行った（第6調査面）。ただしVI b層の分布状況を勘案し、第5調査面の掘立柱建物跡の広がりを確認するため、部分的に拡張した形となった。遺構を掘削して必要な記録作業を終えた10月25日に空中写真撮影を実施した。11月11日に泉拓良教授に現地で、2月25日に三田洞整理所で指導を受けた。

教育普及活動として、大垣市立北小学校下文化財愛護少年団の体験発掘（平成9年7月22日・10年8月25日）、揖斐郡老人クラブ連合会（平成10年8月4日）・揖斐郡民生委員（平成10年9月2日）、本巣郡学校教育会理科学部（平成13年8月22日）などの視察を受け入れた。平成15・16年度の発掘速報展や当センターのホームページで、遺跡と遺物の紹介を行った。



写真1 平成9年度体験発掘



写真2 平成10年度体験発掘



写真3 聚穴住居跡調査状況



五、真4 请根据前状况

整理作業の経緯

出土遺物の一次整理（洗浄・注記）は、発掘調査と並行して平成8～10年度は揖斐川整理所で、平成13・14年度は業者に委託して実施した。二次整理は、平成11～13年度は他の遺跡の調査と並行して実施した。ただし調査途中の遺構が多いため必然的に限定された作業となり、第5調査面の調査が終了した平成14～17年度に本格的な二次整理を実施した。

表1 年度別調査進捗状況

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

- 理事長 篠田幸男（平成8・9年度）、村木光男（平成10・11年度）、服部卓郎（平成12～14年度）、日比治男（平成15～17年度）
- 副理事長 高橋宏之（平成15～17年度）、平光明彦（平成15～17年度）
- 専務理事兼事務局長 河合周治（平成8・9年度）、原隆男（平成10～12年度）、成戸宏二（平成13・14年度）
- 常務理事兼センター所長 福田安昭（平成15・16年度）、田口久之（平成17年度）
- 常務理事兼経営（総務）部長 石黒美智雄（平成8～10年度）、二山晃（平成11・12年度）、福田安昭（平成13・14年度）
- 経営部次長兼経営課長 平林哲男（平成10年度）、坂東隆（平成11・12年度）、福田熙行（平成13・14年度）
- 経営（総務）課長 平林哲男（平成8・9年度）、川瀬崇敏（平成15～17年度）
- 調査部長 臼井進（平成8年度）、山元敏治（平成9～11年度）、高橋幸仁（平成12年度）、武藤貞昭（平成13～15年度）、川部誠（平成16・17年度）
- 調査部次長 小木曾文和（平成8年度）、高橋幸仁（平成9～11年度）、武藤貞昭（平成12年度）、片桐隆彦（平成13・14年度）
- 担当調査課長 高橋幸仁（平成8年度）、中島康夫（平成9年度）、柘植卓伸（平成10～12年度）、坂東隆（平成13・14年度）、高木徳彦（平成13～15年度）、藤岡比呂志（平成16年度）、近藤聰（平成17年度）
- 担当調査員 竹中一秋（平成8～11年度）、三島誠（平成8・12年度）、小谷和彦、福川威・阿部昌史（平成9年度）、近藤大典（平成10年度）、春日井恒（平成11・13年度）、林芳樹、浅野哲男（平成13年度）、近藤聰（平成13・14年度）、三輪晃三（平成13～17年度）
- 補助調査員（調査補助員） 小坂宗和、知本俊美
- 発掘作業員
- 池田満子、石原公子、石原敏枝、泉武光、泉利子、今井敏隆、今村昭夫、今村昭吾、岩井弘子、岩井正夫、岩田郁夫、梅本みつゑ、江口はる子、江口もと、小倉富恵、小倉ふみ子、小沢やゑ子、勝野千佳子、加藤あさゑ、加藤きよ子、加藤淳、金指とめの、川口ふじゑ、木本梅雄、倉地幸子、小玉春子、小寺清子、小寺ひさゑ、小寺正輝、小西直政、小西きよ子、小西政治郎、小西かの、小林さずゑ、佐島岩吉、佐島みさを、清水おぎの、清水久雄、杉里健三、杉島利秋、杉島寛之、杉山利子、清生スミ子、肩間重男、高橋あきゑ、高橋いちらの、高橋勝美、高橋鈴子、高橋戸佐男、高橋つや、高橋花子、高橋春枝、高橋政雄、高橋ミツ子、高橋みね、高橋実、高橋文子、竹中直太、竹中三博、竹中ももゑ、竹中よしの、田中寿躬枝、丹度芳子、土屋重義、中井しづゑ、中石たけ、中川つる、中川操、中村たみゑ、中山清子、成瀬又勇、二村久美子、野田タツ子、野原明、橋本義治、早野よさを、樋口聰、前田晶、増田昭治、増元清子、増元幸雄、増元文子、増元なつゑ、増元みち、増元やゑ、松岡正夫、松田智恵子、真鍋由美、村山みづ子、森たかゑ、森本勉、山北満、山本きみの、若原慶子、渡辺あきゑ

整理作業員

栗野由美子、市橋美栄、岩田のり子、江口陽子、大塚道子、大野里美、小澤真紀子、加藤里佳、後藤悦子、小西清美、小西尚美、小西真由美、小林孝美、小松博子、関晶子、宗宮登美子、宗宮朋子、高橋郷美、竹部泉、竹中栄子、長柄励子、丹羽香、野々村みさと、橋本法子、林美枝、林睦、原幸子、樋口弘子、日比野登美子、広瀬みどり、堀恵理奈、堀孝浩、牧村美和子、村瀬俊哉、森なえ、山口久子、山田弘子、戸下賀代子、湯城里美

第3節 調査の方法

発掘調査における記録の方法

遺構の図化については、必要に応じて遺構平面図や土層断面図（図化縮尺 S = 1/5～1/20）などを個別に作成し、基準となる任意の2点の座標をトータルステーションで計測した。一方調査面全体の図化は委託により実施し、ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真撮影（撮影縮尺 S = 1/400）後、解析図化機を使用してデジタル形式で測定し、図化した（図化縮尺 S = 1/50）。遺構の記録写真については、モノクロ・リバーサル（本体ニコンF3・35mm又は50mmレンズ、必要に応じて本体マミヤRZ67・50mm又は110mmレンズを使用）・カラー（コンパクトカメラ又はデジタルカメラを使用）フィルムで各々撮影した。

遺物の取り上げ方法については遺構出土遺物（検出作業で出土し遺構に帰属しない遺物を含む）は層位・グリッド単位、遺構出土遺物は遺構単位とした。また現場で、土器類・石器・動物遺体・炭化物を区別し、加工・調整痕の可能性がある疊は極力取り上げた。

整理作業の方法

一次整理では、土器類は洗浄後に強化のため合成樹脂に含浸（バインダーNo17、7～10%溶液に24時間）した。注記の方法は全点手書きで行ったが、微細な土器は注記をせずに一括してチャック付ボリ袋に収納した。注記の記入事項は、平成8～10年度調査は遺跡略号（TO）・調査年度（96～98）・グリッド名・層位名（遺構出土の場合は遺構名）・取り上げ単位中の枝番号とした。平成13・14年度は、注記作業の効率化のため、記入事項は調査年度（01・02）・遺跡略号（TO）・班名（A～H）・取り上げ番号・枝番号とした。石器については遺物に直接注記せず、チャック付きボリ袋に記入した。

二次整理は、次のような方針に基づき実施した。土器類は①遺構出土土器、②遺構外出土土器、③特徴的な遺物（土製品・土器片円板・顔料等付着土器・補修孔を持つ土器・焼成粘土塊・縄文時代以外の遺物）に分類した。①については遺構毎に接合した上で実測した。②については縄文土器のうち、端部が遺存し口縁部（ただし3cm以上遺存するもの）・注口部・底部・脚台部・圧痕を有する底面を抽出した。胴部片については、本格的なグリッド間及び遺構間接合は行わなかった。②・③についてはグリッド別の出土傾向を把握するための資料とした。石器類については器種分類案を作成した上で、質量や法量の計測を行った。ただし、製品と剥片との接合は行わなかった。動物遺体については、新美倫子氏に全点の分析を依頼した（結果は第6章第4節に掲載）。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

遺跡周辺の地形・地質の概要

当遺跡は、揖斐川本流と東から流れる支流（ヒン谷）が合流する南東部に位置し、本流の左岸の段丘面上に立地する。この段丘面は、本流に沿って北西から南東に長く、北西から南東方向に約200m、北東から南西方向に約50mの広がりをもつ。現河床との比高差は約10mである。この段丘面より上流には同様な広がりをもつ段丘面は見られない。遺跡の北東側は山地であり、北側に南北約100m、東西約50m、高さ約30mの小山状の凸部があり、その東側はやや緩傾斜となっている。遺跡の北側に位置する小山状の凸部は緩傾斜部を東に伴い、かつ山地の斜面上に独立して存在しており、周辺の地形と比べ不自然な地形である（図5）。また小山状の凸部は確認できる限り、かなり破碎を受けた泥岩から成っている。のことより、この凸部は東からの地すべりによって形成された地形であると考えられる。地すべりがいつ起こったかは不明であるが、遺跡における土石流堆積物の堆積、遺跡の地山に含まれる礫種から、遺跡形成以前に起こったと考えられる。段丘崖に見られる露頭から、当遺跡の基盤は砂岩によって成っている。遺跡近辺では、基盤となる砂岩などの上に段丘堆積物があり、その上に土石流堆積物があり、そこに遺跡が形成されている。また、遺跡の土層中には2枚以上の角繙層が挟まっており、いずれも山側からの土石流堆積物と思われる（第3章参照）。

遺跡周辺に分布する石材について

徳山地域には、ほぼ全城において美濃帯堆積岩類が分布している。そのため、砂岩、チャート、泥岩などは、周辺の河原に多く存在する。ホルンフェルスは、泥岩などが熱変成作用によって生じる岩石であり、徳山地域にも分布する。また福井県境の尾根沿いに安山岩類が、その東の能郷白山には花崗閃綠岩や閃綠岩などが分布し、それらの岩石は揖斐川の支流によって下流に運ばれる。

以上により、遺跡周辺や揖斐川沿いの河原で得られる石材として、砂岩、泥岩（珪質泥岩、粘板岩も含む）、礫岩、チャート、ホルンフェルス、安山岩（角閃石安山岩、凝灰岩も含む）、花崗閃綠岩、閃綠岩、ドレライト、はんれい岩が挙げられる。具体的な供給源は不明ではあるが、徳山地域内で流紋岩質溶結凝灰岩（流紋岩質凝灰岩も含む）も確認できる。また徳山地域の南に位置する貝月山周辺では、花崗岩（石英、花崗斑岩も含む）が広く分布する。これらの石材は、現地若しくは移動して採取することにより手に入れることができるものである。ただし、これらの石材についての所見は、成因による岩石名称を使用して肉眼観察により分類していること、実際の産地が離れていても成因が同じ岩石であれば同一の岩石名称になっていることより、概略を述べているにすぎない。そのため、上記の石材の一部には近くで手に入れない石材が含まれている可能性もある。

一方近くで手に入れることができない石材として、黒曜石、下呂石、サヌカイト、ひすい、滑石、結晶片岩（緑色片岩を含む）、蛇紋岩が挙げられる。これらの石材は徳山地域周辺には見られないため、河川によっても運ばれる可能性はないと思われる。



図5 遺跡周辺の地形図

第2節 周辺の遺跡

当遺跡から揖斐川沿いに約1.8km上流に上ると石橋遺跡がある。石橋遺跡では、縄文時代中期とされる土器1点（岐阜県教育委員会1985）、石鏡4点・石錘1点・石匙1点・スクレイバー3点（徳山村の歴史を語る会1984）が採集されている。当遺跡から北東に位置する、県境の冠山山頂近くにある冠平遺跡（図6の範囲外）でも石鏡1点が採集されているが、いずれも徳山ダム建設により水没しない遺跡であるため、発掘調査は行わず、詳細は不明である。

一方、当遺跡から揖斐川沿いに約1.9km下ると塚遺跡がある。発掘調査により、中期後葉から後期前葉にかけての堅穴住居跡・集石構造・土器埋設構造・土坑・ピットが検出された（財團法人岐阜県文化財保護センター1998）。塚遺跡から下流の遺跡の概要是、既刊の発掘調査報告書に述べられているので、説明を割愛する（財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003a b・2006）。

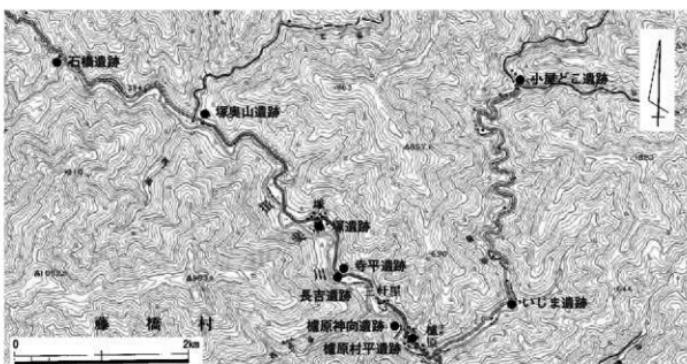


図6 周辺の遺跡地図（国土地理院 平成7年4月1日発行「冠山」1:50,000地形図）

表2 周辺の遺跡一覧表

	縄文時代						弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代
	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期						
石橋												
塚奥山												
塚												
寺平												
長吉												
植原神向												
植原村平												
小原どこ												
いじま												

太字は発掘調査した遺跡　■遺物あり　■まとまった遺物あり　■遺構あり

※本表は「寺平遺跡」（財團法人岐阜県文化財保護センター2003b）p.6-表6の一部を改変した。

小原どこ遺跡は徳山村の歴史を語る会1984を参考にした。

第3章 基本層序

第1節 基本層序の概要

基本層序の設定に際しては、周辺遺跡の調査を参照の上、土色の大きな違いで区分（ローマ数字で表す）し、さらに土色や分布範囲の違いなどで細分（英小文字で表す）して呼称した。各層位の特徴は、概ね次のとおりである。

I層【現代の表土】

黒褐色土（10YR 2／2）、粘性・締まりなし、少量の礫を含む。

II a層【現代の水田敷土】

褐色土（7.5YR 4／4）、風化した礫を含む。旧水田の範囲に広がる。

II b層【現代の盛土】

土色は多様、多量の礫を含む。

III層【現代の旧表土】

黒褐色土（7.5YR 3／2）、粘性なし、締まりややあり、少量の礫・炭化物を含む。

IV層【遺物包含層】

黒褐色土（10YR 2／2）、粘性・締まりややあり、少量の礫を含む。ほぼ全域に広がる。

V a層【遺物包含層】

黒褐色土（10YR 2／3）、粘性・締まりややあり、少量の礫を含む。ほぼ全域に広がる。

V b層【遺物包含層】

黒褐色土（10YR 2／2）、粘性・締まりややあり、少量の亜角礫・炭化物を含む。ほぼ全域に広がる。

VI a層【無遺物層】

にぶい黄褐色土（10YR 4／3、西へ行くと暗色化する）粘性ややあり、締まりあり、地点により異なるが多量の亜角礫を含む。北東部に厚く堆積するが、N列以西及び26列以南には分布しない。

VI b層【遺物包含層】

暗褐色土（10YR 3／3、西へ行くと暗色化する）、粘性・締まりややあり、少量の亜角礫・炭化物を含む。VI a層より広い範囲に広がる。

VI c層【無遺物層】

褐色土（10YR 4／4、西へ行くと暗色化する）、粘性・締まりあり、少量の亜角礫・炭化物を含む。北東部に厚く堆積するが、K列以西には一部を除き分布しない。

VI a層【遺物包含層】

暗褐色土（10YR 3／3）、東ほど砂質、粘性ややあり、締まりあり、褐色土ブロック・少量の亜角礫・炭化物を含む。VI c層とほぼ同じ範囲に広がる。

VII b 層【遺物包含層】

暗褐色土（10Y R 3／4）、粘性・締まりあり、少量の褐色土ブロック・小砾・炭化物を含む。V列以東及び26列以北の限られた範囲に広がる。

VII a 層【遺物包含層】

黒褐色土（10Y R 1.7／1）、粘性・締まりあり、少量の亜角礫を含む。北西部に厚く堆積する。

VII b 層【遺物包含層】

黒褐色土（10Y R 2／2）、粘性・締まりあり、多量の亜角礫を含む。VII b 層よりも広い範囲に広がる。

IX a 層【無遺物層】

褐色土（10Y R 4／4）、礫や粗砂で占められ粘性なし・締まりややあり、少量の亜円礫と多量の亜角礫を含む。IX b 層を除く全域に広がる。

IX b 層【無遺物層】

にぶい黄褐色シルト（10Y R 5／3）、粘性・締まりあり、少量の灰黄褐色土ブロック・亜角礫を含む。I列以西及び16列以南の狭い範囲に広がる。

第3B調査面では、V b 層を除去したところVI a 層以下の土層がIX層上面と同一面上で共存していた（図7）。南北方向の断面を見ると、土層は比較的緩やかな斜面堆積を示しているが、南側の末端（G 21グリッド）は急傾斜となっており遺跡が立地する段丘の斜面である。またVI層の堆積が厚い調査区の北東から南東側にかけては、土層はより急な斜面堆積となる。一方東西方向の断面図を見ると、調査区の西側（I 15グリッド）が高く、末端（F 14グリッド）は急傾斜となっており段丘の斜面である。また東側の斜面には、VII b ~ VI a 層の供給によって平坦近くになるまで埋没した様子がわかる。

本調査では、すべての遺構検出面で遺構を記録することは困難であるため、上記の層位の境界で複数の遺構検出面の調査（以下「調査面」と呼称）を同時に行つた。このため各調査面は調査の時間的経緯を投影したにすぎないため、検出した遺構が所属する時期幅は広いことを確認しておきたい。遺構の所属時期を決定するためには、遺構埋土から出土する遺物と共に、個別遺構をどのようにして検出したかを相互に検討する必要がある。しかし調査面上で検出される層位は、各調査面や地点によって様々である。例えば安定した厚い堆積のため同一の層位の境界で遺構が検出される調査面（第1・2・6調査面）もあれば、一部の層位が欠落したり、複数の層位が分布する調査面（第3～5調査面）もある。そこで「遺構検出面の便利的な呼称」（趙1983）に基づいて、各調査面で検出した遺構を概ね次のように整理した。ただし個別遺構のうち、検出状況が明確な場合はそれに従つた。

第1調査面 V a 層上面検出

第2調査面 V b 層上面検出

第3A・3B調査面 V b 層基底面検出

（VI a ~ c・VII b・VII b・IX a・IX b 層が、同一面上で共存する）

第4調査面 VII b 層基底面検出（VI c・VII a・VII b 層が、同一面上で共存する）

第5調査面 VII c 層基底面検出（VII a・VII b・VII b・IX a 層が、同一面上で共存する）

第6調査面 IX a 層上面検出遺構

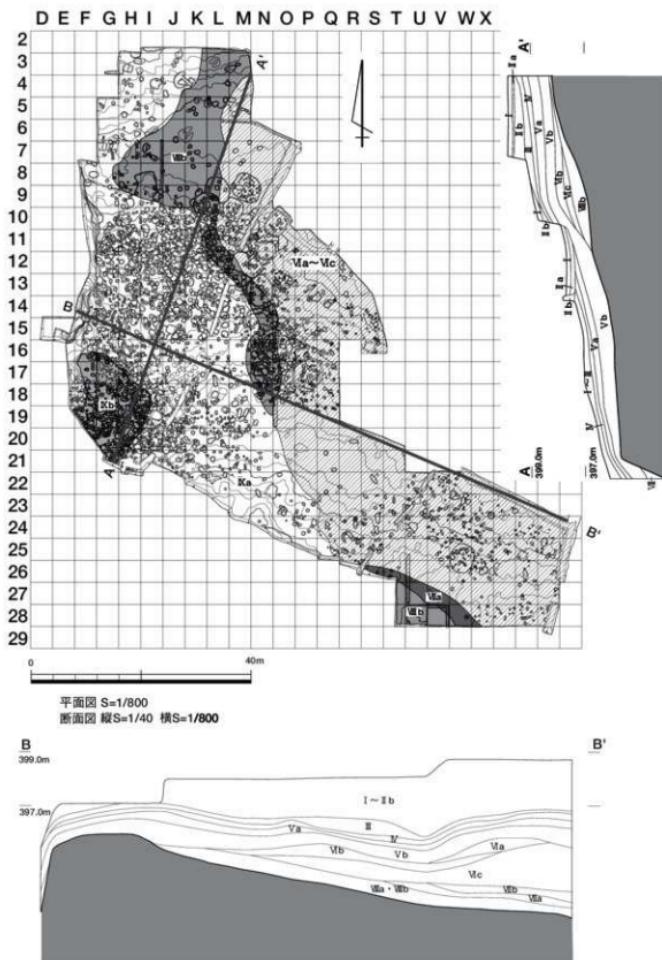


図7 土層堆積状況図

第2節 土石流堆積物の観察と地形の変遷

VI層以下には土石流堆積物と考えられる土層（写真5）が認められるため、わんがけ法によって洗い、双眼実体顕微鏡で観察した結果、気づいた点を述べる。

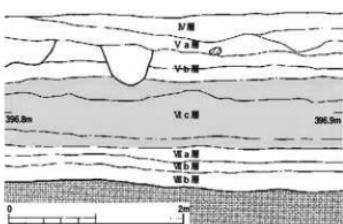


図8 b24グリッドの土層断面図



図5 b24グリッドの土層断面写真（南から）

VIa層は角礫が多く入り、土石流堆積物と思われる。前述のように北東側のみ堆積しており、山側からの供給として矛盾しない。少量の炭化物と、少量のK・A h火山灰と思われる火山ガラスを含む。VIb層は、少量の植物の炭化物と思われるものと、少量のK・A h火山灰と思われる火山ガラスを含む。VIc層はVIa層と同様に土石流堆積物と思われる土層で、多量の炭化物と、多量のK・A h火山灰と思われる火山ガラスを含む。VIIa層は他の土層と比べ砂が多く、少量のK・A h火山灰と思われる火山ガラスを含む。VIIb層はVIIa層のように砂を多く含まない。少量のK・A h火山灰と思われる火山ガラスを含む。VIIa層は炭化物は目立たず、多量のK・A h火山灰と思われる火山ガラスを含む。VIIb層は径5~10cmの角礫・亜角礫を含み基質が少ない。K・A h火山灰と思われる火山ガラスは確認できなかった。VIII層は地山であり多量の亜角礫・角礫が入る。基質はシルトで、砂を含む場合もある。このことから土石流堆積物と思われる。火山ガラスは確認できなかった。5mm~3cmの礫種を調べたところ、砂岩…約70%、チャート…約15%、泥岩…約12%、安山岩、石英…数%であった。支流（ヒン谷）の現在の河床礫は、砂岩>チャート>安山岩であり、泥岩礫を除けばヒン谷の礫組成と似ている。地すべり移動体と思われる小山は泥岩からなり、それが支流の河床礫と比較するとVIII層に割合多く入っていることからして、地すべりが起こった時期は地山が形成される時期の可能性がある。また、VIII層の下部であるVIIb層の基質には砂が多く混ざっており、下に存在する砂礫層をまきこんでいると思われる。

遺跡周辺の変遷をたどると、次のように想定される。遺跡の北東300mほどの位置で、地すべりが起こり、その移動体が遺跡の北100mほどのところに移動した。その後、揖斐川本流若しくは支流の段丘堆積物を覆うように、土石流堆積物が東の山地部よりもたらされる。数mの厚さをもっており、かなりの規模の土石流であったと考えられる。土石流の上部は雨水で洗われ、北西から東南方向にかけて浅い凹地も存在するようになる（第6調査面）。そのような頃に、人が活動の場所として利用し始める。その後数回（VIIa・VIIc層など）土石流が起ったが、遺跡全面を埋めるほどの規模ではなかった。

第4章 遺構

第1節 遺構の概要と分類

検出した遺構は、堅穴住居跡（S B、以下括弧内アルファベットは遺構略号）42軒、掘立柱建物跡（S H）4棟、炉跡・焼土遺構（S F）87基、焼廻集積遺構（S I）6基、配石遺構（S I）36基、立石遺構（S R）2基、土坑（S K）3,625基、堅穴住居跡内土坑（P）596基、埋甕・埋設土器（S Z）16基、溝（S D）1条、遺物集積（S U）5か所である。各調査面毎の詳細と本書における掲載遺構数は表3のとおりである。例えば第2調査面の炉跡・焼土遺構数4／11は、検出数11基のうち本書の掲載数は4基ということを示す。

表3 検出遺構一覧表

遺構の種類	1面	2面	3 A面	3 B面	4面	5面	6面	合計
堅穴住居跡	S B	4/4		22/22	12/12	2/2	2/2	42/42
掘立柱建物跡	S H			1/1	1/1	2/2		4/4
炉跡・焼土遺構	S F	0/18	4/11	1/1	38/48	5/8	0/1	48/87
焼廻集積遺構	S I			1/1	1/1	2/2	2/2	6/6
配石遺構	S I	5/5	1/1	27/27	3/3			36/36
立石遺構	S R				2/2			2/2
土坑	S K	13/32	9/63	33/36	211/2,334	25/410	10/131	5/619
堅穴住居跡内土坑	P		107/120		239/240	163/165	30/30	41/41
埋甕・埋設土器	S Z	1/1	4/4	1/1	8/8	1/1	1/1	16/16
溝	S D				1/1			1/1
遺物集積	S U			2/2	1/1	1/1	1/1	5/5
合計	19/56	129/203	65/68	526/2,660	209/599	47/168	51/666	1,045/4,420

遺構名は、遺構を検出した時点で遺構の種類別に通し番号を与えた。しかし検出した遺構の性格を再検討した上で遺構名を付け直したため、本書に掲載する遺構名は現場で使用した遺構名と異なっている。遺構の埋土からは弥生時代以降の遺物は出土しておらず、第1調査面の一部を除く全ての遺構が縄文時代の所産である。

遺構の分類

ここでは、遺構の認定基準と、分類する上での留意点を挙げる。

1 堅穴住居跡（S B）

直径約4m以上の堅穴と、堅穴内部における柱穴状の遺構（堅穴住居跡内土坑）の検出をもって「堅穴住居跡」と認定した。ただし調査所見により確實に住居跡であると認定できた事例はないため、その見地からは建物跡と表現しても良い。しかし、多数の土坑が重複したりVb層上面での遺構の検出が困難であったりしたために、堅穴が検出されずに炉跡のみ検出した場合には、炉跡周辺で柱穴状の遺構を確認し、その配置を検討した上で認定した事例がある（S B10・12・17・18・20・25）。いずれも壁面の痕跡や硬化面が検出されていないため、平地式住居跡と認定するには至らなかった。また、今回検出した堅穴住居跡の中には、堅穴外部に柱穴状の遺構は認められなかったため、内部に柱穴を持つない住居構造の住居はないと判断し、最終的に土坑と判断した遺構がある（S K1257・3627）。

2 掘立柱建物跡（S H）

柱穴状の形状と判断できる土坑が、四角形・五角形・六角形等に規則的に並ぶ遺構を、「掘立柱建

物跡」と認定した。一般に、遺構密度の低い地区では掘立柱建物跡を認定しやすいが、密度の高い地区では困難である。今回の調査では、前者の条件下で認定したため、実際の掘立柱建物跡数は認定数を上回る可能性が高い。

3 炉跡・焼土遺構（S F）

地面で固定的に火を焚いた際に生じた被熱の痕跡（底面や壁面、または均質で面的に焼土が分布する）がある遺構を「炉跡」とし、炉の周囲を礫で囲む「石囲炉」と、囲まない「地床炉」に分けた。ただし、地床炉のうち炉石の抜き取り痕跡が認められた場合は石囲炉とし、底面や壁面に被熱の痕跡がなく、かつ焼土粒・ブロックが二次堆積であると認められた場合は「焼土遺構」とした。

4 焼穀集積遺構（S I）

「とくに人為的な被熱による焼穀・破碎穀が故意に集積された一群の遺構」（谷口1986）とし、「充填型集石遺構」と「被覆型集石遺構」に二分する。前者は「用礫が坑底部分までくまなく充填」した遺構、後者は「土坑の開口部を被覆するように用礫を坑内上半部に充填した」遺構である。充填された礫に被熱痕跡が認められない遺構は、「土坑」に分類した。

5 配石遺構（S I）

複数の礫が面的に集中する遺構を「配石遺構」とし、下部土坑の有無は問わない。よって、礫が土坑埋土中で検出される場合は、「土坑」として扱う。遺物包含層中に含まれる礫のほとんどが亜角礫であるのに対し、配石遺構及び土坑に伴う礫は亜円礫や円礫などが主体であったり混入したりしているため、本書では極力礫の円磨の程度を示した。個別の礫の据え方は林1991に従い、礫の「縦断面の長軸を上下の方向において据え（中略）一方の小口を地中に埋め込む」立て方を「長手立て」、「横断面の長軸を上下の方向において据え（中略）両方の小口は両隣の石材に接している」立て方を「小口立て」、「横断面の短軸が上下にむかっている」立て方を「平置き」と規定し、図9のように分類した。「配石1類」「配石2類」「配石3類」は、日本道路公团名古屋建設局1993における「1群」「2群」「3群」に該当し、土坑の記述における立石も長手立てと小口立てを区別する。

配石1類：縁石を伴うもの。

配石2類：置石のみを伴うもの。

配石3類：礫が点在するもの。

6 立石遺構（S R）

土坑内に礫1個を長手立てとする遺構。ただし礫を立てるために土坑を掘削すると想定できるため、礫の下端が土坑の掘形に接する場合に限定した。以上の条件を満たす遺構はSK1777・1817である。

7 土坑（S K）

地面に掘った穴（堅穴住居跡を除く。）を総称する。その用途については柱穴・墓坑・貯蔵穴が想定されている。本書では、埋土中に土器や礫（石器を含む。）を含む遺構を、次のように分類した。

A類：穴だけのもの。

B類：土坑内に礫を配置するもの（ただし設置の位置を区別しない）。

B1類：土坑内に礫を敷いているもの（該当例なし）。

B2類：土坑内の壁際に礫をおいているもの。

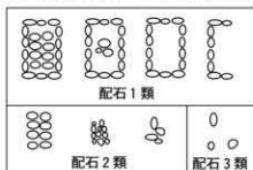


図9 配石遺構の分類模式図

C類：埋土中に土器が伴うもの。

C 1類：完形土器（ただし土器よりも土坑の掘形の規模が大きいもの。なお土器は欠損部があつてもその形態を留めるものを含む）。

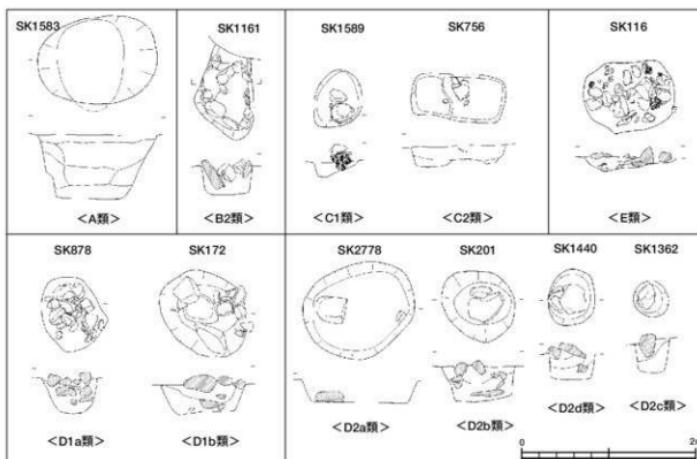
C 2類：破片（ただし形状が復原できるほどの破片が面的に広がっているもの）。

D類：埋土中に礫が伴うもの。

D 1類：多数の礫が伴うもの（a：充填するもの、b：浮上するもの）。

D 2類：若干数の礫が伴うもの（a：枕石、b：抱石、c：立石状、d：蓋石）。

E類：土器と礫が伴うもの。



8 壊穴住居跡内土坑（P）

壊穴住居跡の内部で検出された遺構とする。ただし、壊穴の埋土を切る土坑や明らかに壊穴住居跡に先行する遺構を除く。

9 埋甕・埋設土器（S Z）

完形土器（欠損部があつてもその形態を留めるものを含む）を埋設した遺構のうち、土器の形状に比べ、それを埋設した掘形の規模がやや大きいもの。便宜上、壊穴住居跡の床面で検出した遺構を「埋甕」、屋外の遺構は「埋設土器」と呼ぶ。

10 溝（S D）

溝状の遺構。1条（S D 1）のみ南斜面上部で検出した。ただし、流水の痕跡は認められなかった。

11 遺物集積（S U）

遺構外で遺物がまとまって出土、あるいは完形に近い土器が単独で出土した場合に、遺構の可能性を想定し、「遺物集積」と認定した。

掲載遺構図の選定基準と凡例

本書における掲載遺構の種類は、竪穴住居跡及び関連土坑・掘立柱建物跡及び関連土坑・炉跡・焼窯集積遺構・配石遺構・立石遺構・土坑（ただし埋土中に遺物や礫を伴う遺構と自然科学分析の対象とした遺構）・埋甕・埋設土器・溝・遺物集積（遺構の可能性があるものに限定）である。焼土遺構は遺構観察表で必要な属性を記載した。

掲載遺構図のうち、調査区全体図分割図（図178～228）は遺構の掘形の輪線を図示したため、重複関係を示していない。また倒木痕は長めの点線で、調査済みの遺構は掘形の上端線のみを実線で、掘削により消滅した遺構は掘形の上端線のみを短めの点線で、掘形のない焼土遺構の範囲及び掘形の形状が袋状となり地上からは目視できない下端線を一点鎖線で各々表現した。このほか調査のため掘削した試掘坑やトレーナー、石垣構築による段差は法記号を用い、現代の掘乱坑は「T」字を連続させて表現した。なお長手立て及び小口立てとする礫の位置に▲印、焼土・炭化物・竪穴住居跡の貼床の範囲をスクリーントーンで示したが、石垣炉や焼窯集積遺構などの礫や地山の被然範囲は図示していない。

原則として、掲載遺構図の縮尺は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡及びその関連土坑は $1/40$ （ただし平面図を掲載する場合に限っては $1/20$ ）、炉跡・焼土遺構・焼窯集積遺構・配石遺構・立石遺構・土坑・埋甕・埋設土器・遺物集積は $1/20$ とした。

遺構属性の記載内容

本書では次のように定め、個別の遺構の属性を記載した。

1 遺構の平面形は、掘形の上端における形状とした。「円形」（概ね縦：横の比が $1:1$ ）・「楕円形」（概ね縦：横の比が $1:1.2$ 以上）・「方形」（概ね縦：横の比が $1:1$ ）・「長方形」（概ね縦：横の比が $1:1.2$ 以上）に分類し、整っていない形状には先頭に各々「不整」を付けた。また上記に当てはまらない形状は「不定形」とし、形状が不明の場合は「不明」とした。

2 遺構の壁面や底面の形状分類は、作業員の掘削精度や遺構図作成の図化精度等に大きく左右されるため、掲載していない。

3 遺構の規模は、掘形の下端値をm単位で計測した。ただし、全形が不明の場合には括弧を付けて示した。当遺跡では遺構の重複が著しく、本来想定される遺構検出面からかなり下がった時点で、ようやく遺構を検出できたと考えられるため、掘形の上端値については掲載しなかった。なお掘形の底面で段をもつ場合、下記に述べる埋土Aと埋土F又は埋土Gの遺構計測方法を図11のとおりとした。深さについては、検出面から最も深い地点までの距離を計測した。



図11 遺構の計測方法模式図

4 遺構の方位は、掘形の上端の長軸方向を座標北から東西に傾く角度を計測した。ただし土坑の軸線上の一方で礫や遺物が集中的に出土する場合は、出土地点に何らかの意味が考えられることから、

その出土地点からの傾きとした。また遺構の平面形が円形又は方形の場合や、遺構の重複により軸線方向を決定できない場合には、計測不能と判断した。

5 埋土の堆積状況については、以下に示すA～G（図12）・不明の8種類に分類した。このうちEについてはA～D・Gと組み合わせて用いたが、埋土が複数層に細分された場合には、埋土全体の傾向として最も当たる種類を選択した。

- A：単層 B：ほぼ水平な堆積 C：中央がU字状に窪むような堆積 D：一方に偏った堆積
- E：ブロック状に土層が入り込む堆積 F：急な立ち上がりが認められる堆積
- G：柱痕状の垂直な堆積 不明：堆積状況が不明

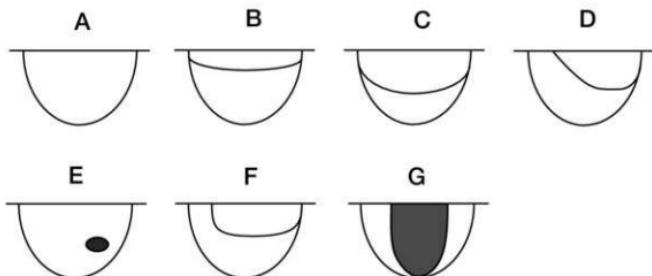


図12 遺構埋土の分類模式図

6 出土遺物については、第2分冊第5章の分類に基づいて記載した。ただし、「遺構編」における縄文土器の内容は分類名とせず、所属時期の区別を示した。

7 所属時期については、竪穴住居跡の時期決定の優先順位は、①埋甕又は炉跡など住居と関連の深い遺構からの出土土器、②柱穴と考えられる遺構からの出土土器、③埋土出土土器の主体とした。ただし③については竪穴が深い住居跡の場合には適切な判断方法ではなく、出土位置が最も重要なことは言うまでもない。一方、土坑など少量の遺物が出土した遺構については、原則として出土遺物のうちで最も新しい時期を遺構の所属時期と判定した。

第2節 第1調査面

第1調査面ではV a層がほぼ全面に広がるが、調査区を東西に横断する現代の石垣の構築により削平され、M 18 グリッドの一部でIX a層が露出する。標高ではP 13 グリッドが最も高く（約 398.2 m）、a 27 グリッドが最も低い（約 396.4 m）。調査区の中央ではほぼ平坦であるが、西端では段丘斜面に伴い西に向かって緩やかに傾斜する。

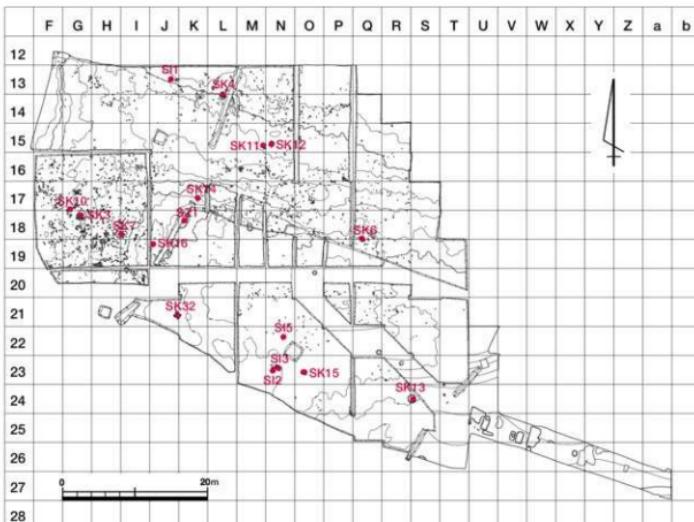


図 13 第1調査面全体図

1 焼土遺構

18基検出した。このうちの6基は、G 19 グリッド周辺（直径約 8 m 以内）に集中する。いずれも V a層上面で検出し、焼土は不均質でブロック状に点在し、周囲との区別が不明瞭で、掘形は検出されなかった。礫及び砾の抜き取り痕跡はなく、周辺に柱穴は確認されなかった。

2 配石遺構

S I 1 (図 14)

位置 J 13 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は長方形を呈し、長辺 0.75 m・短辺 0.47 m を測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。長径 6 ~ 24 cm の礫を平置きにする（配石 2 類）。礫

の大半が亜円碟で少量の亜角碟を伴い、被熱した碟を多量に含む。本遺構の東隣でも碟が集中しているが、大半がV a層に含まれるため遺構として認定しなかった。なお、本遺構は碟除去後の第3B調査面で検出した土坑（SK 1050）の平面位置と一致しないため、両者は関連がなく、下部に土坑を持たないと判断できる。

出土遺物 なし。

S I 2（図14、図版2）

位置 N 23 グリッドに位置し、S I 3 に隣接する。

形状と規模 平面形は長方形とみられ、長辺 0.80 m・短辺 0.62 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。碟の集中が東西に分散するため、東を S I 3、西を S I 2 としたが、同一の遺構の可能性もある。西端の長径 15 cm の亜円碟 1 個（▲）のみを小口立てとし、長径 8~21 cm の碟を平置きにする（配石 2 類）。なお北端の大型の亜円碟 1 個は、本遺構及び S I 3 の碟よりも接地面がやや高い。碟の大半の種類が亜円碟で少量の円碟・亜角碟を伴い、被熱した碟を多量に含む。

出土遺物 埋土から、後期前葉の土器（1）が出土した。ただし S I 3 と同一遺構と認定する場合には、混入と解釈することになる。

S I 3（図14、図版2）

位置 N 23 グリッドに位置し、S I 2 に隣接する。

形状と規模 平面形は長方形を呈し、長辺 0.95 m・短辺 0.71 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はなし。長径 5~24 cm の碟を平置きにする（配石 2 類）。碟の大半の種類が亜円碟で少量の円碟・亜角碟を伴い、被熱した碟を多量に含む。

出土遺物 周辺から、後期末の土器（2）が出土した。

S I 4・SK 7（図14、図版2）

位置 I 18 グリッドに位置する。

上面配石 V a 層上面で検出した。平面形は不明で、長さ 1.35 m を測る。碟の集中は比較的疎で、南北に分散する。長径 16~47 cm の碟を概ね平置きにするが、東南端・中央北寄りの 2 箇所に各 1 個の碟を小口立てとする（配石 3 類）。平置きの碟の上面は概ね北に向かって下がるが、中央の大型碟のみ東に向かって下がる。碟の種類は亜円碟が主体で少量の亜角碟・角碟・円碟が含まれる。これらの中には少量の被熱した碟を含む。

土坑 上面配石を除去後に掘形を検出した。掘形の位置は、上面配石の範囲からやや南にずれる。平面形は不整脩円形で、長径 0.99 m・短径 0.42 m・深さ 0.40 m を測る。重複遺構はない。

出土遺物 上面配石中から骨片、土坑埋土から後期前葉の土器（4）と石錐 1 点、埋土 1 層から骨片が出土した。

S I 5・SK 1870（図14、図版2）

位置 N 22 グリッドに位置する。

上面配石 V a 層上面で検出した。平面形は長方形を呈し、長辺 0.50 m・短辺 0.47 m を測る。長径 3~19 cm の碟を平置きにし、北西端では隣り合う碟の長軸が平行しており小口置きと考えられる（配石 1 類）。碟の大半の種類が亜円碟で少量の角碟・亜角碟を伴い、被熱した碟を少量含む。

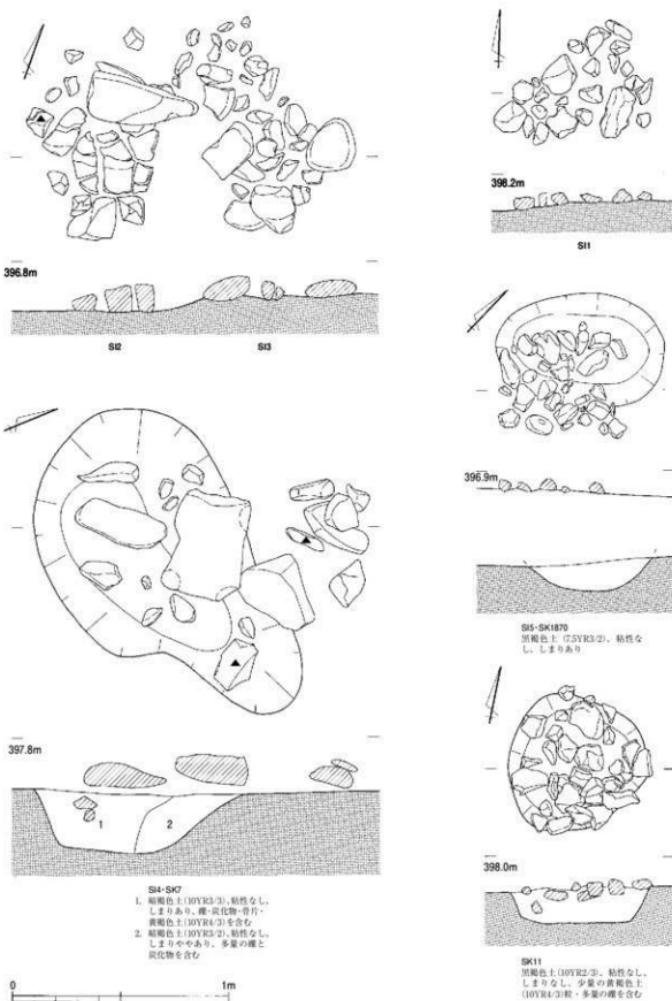


図14 第1調査面検出遺構（1）

土坑 碰除後のV b層基底面で検出した土坑（SK 1870）の平面位置と一致するため、関連が深いと判断した。平面形は長方形を呈し、長辺0.64m・短辺0.32m・深さ0.16mを測る。重複遺構はない。

出土遺物 上面配石の南端で磨石・凹石・敲石類（以下「磨・敲石類」と略称）1点が出土した。

3 土坑

U 25グリッド周辺のSK 18～20・28～30は、規模・形態・埋土の特徴が他の土坑と大きく異なることから、縄文時代以外の所産の可能性が高い。図示した遺構については、次のとおりである。

SK 3（図15、図版2）

位置 G 18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形を呈し、上端長径1.40m・上端短径1.15m・深さ0.22mを測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。土坑埋土と周辺のV a層の土性が類似しており、掘形の検出に時間要した。埋土上部の土坑中央寄りでは、口縁部を欠損する注口土器（18）が正位で出土し、同一レベルで土坑の南壁沿いに多数の礫が検出された（土坑E類）。礫の大半の種類が亜円礫で多数の亜角礫・円礫と少量の角礫を伴い、少量の被熱した礫を含む。

出土遺物 埋土から、後期前葉・中葉の土器（17）・（18）、石核1点・石鏃1点・楔形石器1点・搔器1点・RF 3点・切目石錐2点、骨片が出土した。なお土器（18）の出土状況から、土器（17）は混入の可能性がある。

SK 4（図16、図版2）

位置 L 13・M 13グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明で、短径0.83m・深さ0.15mを測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で長径5～21cmの多量の礫が検出された（土坑D 1 b類）。礫の円磨度は亜円礫が主体で少量の亜角礫・角礫・円礫を伴い、多量の被熱した礫を含む。土坑の底面・壁面に被熱痕跡がなく炭化物が出土しないことから、焼礫集積遺構の可能性は低いと判断した。

出土遺物 埋土から、後期中葉の土器（5）とRF 2点が出土した。

SK 6（図16）

位置 Q 18・19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形を呈し、長径0.59m・短径0.38m・深さ0.18mを測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑東側では礫1個（長径27cm・短径23cm・厚さ11cm）を長手立てとし、西側では長径16cmの礫を平置きとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 土坑の埋土から、後期末の土器（11）・（12）、RF 1点・切目石錐1点が出土した。

SK 10（図16）

位置 G 17・18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形を呈し、長径0.60m・短径0.28m・深さ0.20mを測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。土坑底面の西壁に沿って長径39cmの円礫1個を置く（土坑B 2類）。また土坑上面でこれと直行する長径33cmの礫が平置きで検出され、上面配石の可能性がある。埋土下部で焼土ブロックが観察されたが、底面では被熱の痕跡は認められなかった。

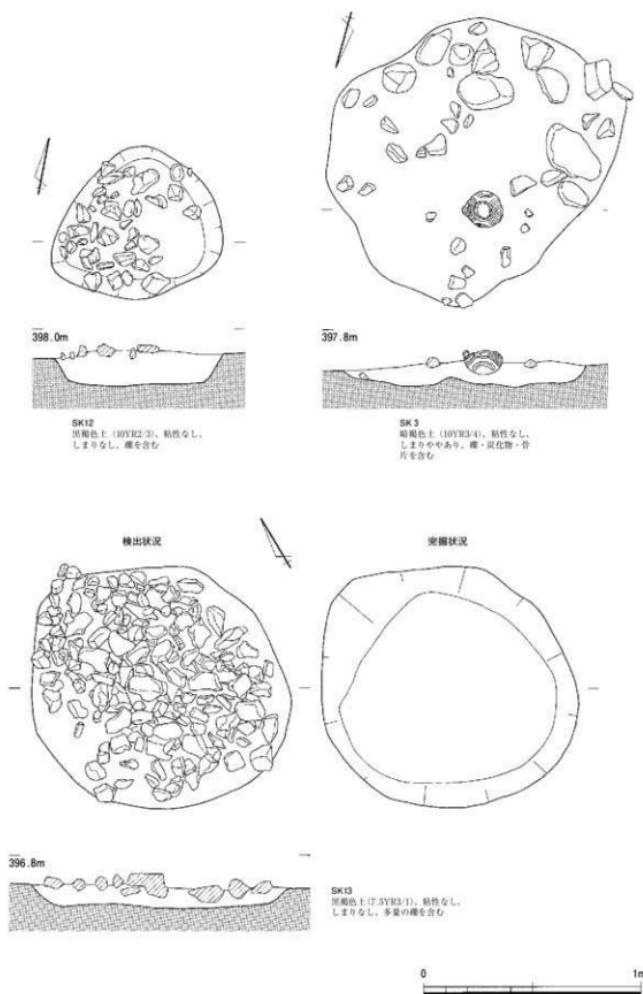


図15 第1調査面検出遺構（2）

出土遺物 墓土から、後期前葉の土器（7）が出土した。

S K 11 (図14、図版3)

位置 N 15・M 15 グリッドに位置し、S K 12 に隣接する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径 0.52 m・短径 0.50 m・深さ 0.34 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。墓土上部で長径 5～20 cm の多量の縹が検出された（土坑D 1 b 類）。縹の円磨度は亜円縹と亜角縹がほぼ同じ割合で少量の角縹と円縹を伴い、少量の被熱した縹を含む。

出土遺物 墓土から、後期中葉又は後葉の土器（3）が出土した。

S K 12 (図15)

位置 N 15・M 15 グリッドに位置し、S K 11 に隣接する。

形状と規模 平面形は不定形を呈し、長径 0.65 m・短径 0.57 m・深さ 0.33 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。墓土上部で長径 5～15 cm の多量の縹が検出された（土坑D 1 b 類）。縹の円磨度は亜円縹と亜角縹がほぼ同じ割合で少量の角縹と円縹を伴い、少量の被熱した縹を含む。

出土遺物 墓土から、切目石錐 1 点が出土した。

S K 13 (図15、図版3)

位置 R 24・S 24 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径 1.00 m・短径 0.86・深さ 0.10 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。墓土上部で長径 5～20 cm の多量の縹が検出された（土坑D 1 b 類）。縹の円磨度は亜円縹と亜角縹がほぼ同じ割合で少量の角縹・円縹を伴い、大半の縹に被熱の痕跡が認められた。ただし土坑の底面・壁面では被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 なし。

S K 14 (図16、図版3)

位置 K 17 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形を呈し、長径 0.23 m・短径 0.17 m・深さ 0.18 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。墓土上部で長径 16～31 cm の縹 4 個を用いて囲む。東西の 2 個を小口立てとし、南端の 2 個を長手立てとする（土坑B 2 類）。北西端の縹を欠くが、抜き取りの有無は不明である。縹の大半は円縹で、北東端のみ亜角縹であり、被熱した縹を含む。

出土遺物 墓土から、後期前葉の土器（6）が出土した。

S K 15 (図16、図版3)

位置 O 23 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形を呈し、長径 0.61 m・短径 0.51 m・深さ 0.14 m を測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の墓土上部で長径 36 cm の縹 1 個が浮上し、その周囲に径 5～13 cm の多量の縹を配置する（土坑D 2 b 類）。縹の円磨度は中央のみ扁平円縹で、周囲は亜円縹と亜角縹がほぼ同じ割合で少量の角縹と円縹を伴い、少量の被熱した縹を含む。

出土遺物 なし。

S K 16 (図16、図版3)

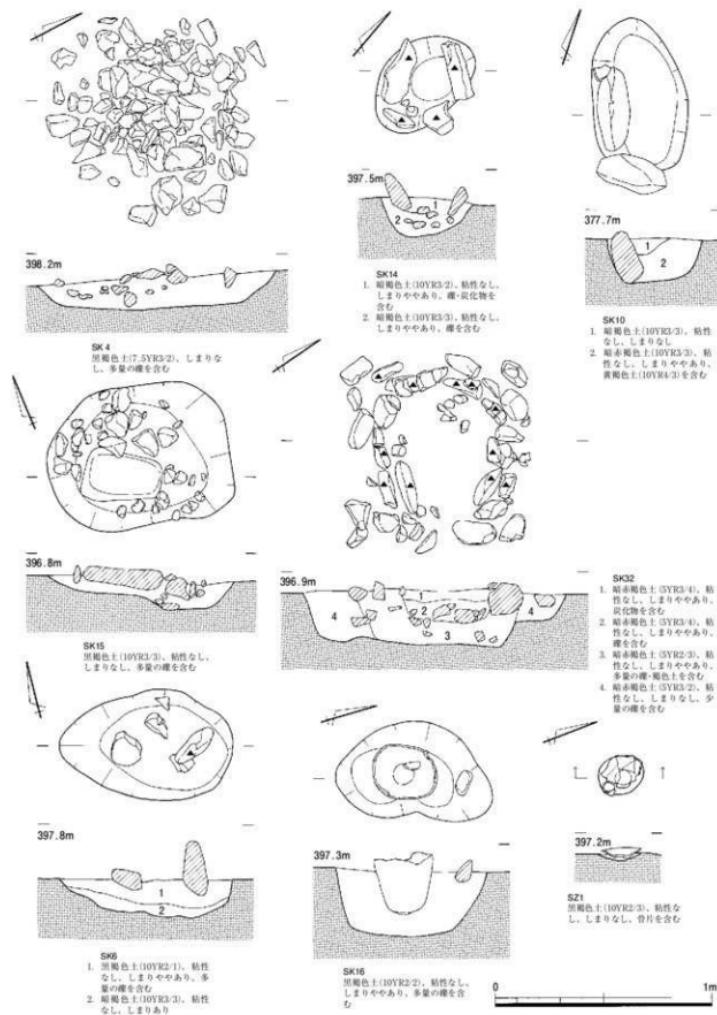


図16 第1調査面検出遺構 (3)

位置 J 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形を呈し、長径0.47m・短径0.25m・深さ0.30mを測る。

概要 V a ~ V b層で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、口縁部を欠損し底部が完存する後期後葉の土器（15）が正位で出土した（土坑C 1類）。この土器は土坑の底面から浮上し、土器の直径よりも掘形の規模が明確に大きいことから、土坑に埋納されたものと考えられる。

出土遺物 土器（15）のみが出土した。

S K32（図16、図版3）

位置 J 21・K 21グリッドに位置する。

形状と規模 磨の並ぶ向きに合わせ短軸方向に断ち割ったところ、複数の土坑の立ち上がりが認められ、平面精査でそのプランを検出することはできなかった。短辺0.83m・深さ0.25mを測る。プランの全体を検出することはできなかったため、土坑の長辺と平面形は不明である。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で長径5~25cmの磨を小口立て又は平置きとする。磨はほぼ全体にわたって二重に配置され、内側の磨は小口立てで占められ、外側の磨は平置きが多い（土坑B 2類）。磨の円磨度は圓円磨と亜角磨が主体で少量の円磨・角磨を伴い、多量の被然した磨を含む。

出土遺物 埋土から、早期中葉・後期中葉・後期末の土器（8）~（10）・（1434）、石錐1点・RF 2点・磨・敲石類2点が出土した。

4 埋設土器

S Z 1（図16、図版3）

位置 K18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形を呈し、長径0.22m・短径0.16m・深さ0.07mを測る。

概要 V a 層上面で検出した。SK 1・SK 2を切る。胴部上半を欠損し底部が完存する、後期中葉の土器（16）が正位で出土した。平面精査では掘形を検出することができなかつたが、その規模は土器の残存径とほぼ同じとみられる。

出土遺物 埋土から、石錐1点と骨片が出土した。

第3節 第2調査面

第2調査面ではVb層がほぼ全面に広がるが、M18グリッドの一部とJ18グリッド周辺では、Vb層が欠落してIx a層がすでに露出している。標高ではP13グリッドが最も高く(約398.2m)、a27グリッドが最も低い(約396.3m)。当調査面の形状は、第1調査面と概ね同様である。

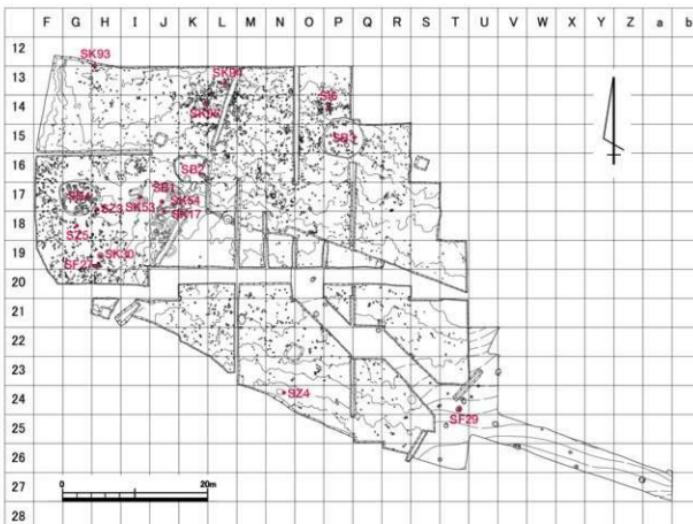


図17 第2調査面全体図

1 穩穴住居跡

S B 1 (現場名 S X 2、図18・19、図版4)

位置 J17・J18・K17・K18グリッドに位置する。

検出状況 V a 層上面で検出した。SK55-59に切られる。堅穴の南側の埋土は周辺の土色と酷似していたため、堅穴の範囲は不明瞭であった。埋土は2層に分けられ、亜円礫が多く含まれた。土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は円形を指向していると考えられる。長径4.96m・短径4.49m・深さ0.30m・床面積推定17.40m²を測る。

壁・床面の状況 北壁は明瞭に立ち上がる。貼床や硬化面は確認できず、IX-a層上面で遺構を検出したため検出面は凹凸が著しく、竪穴の掘形に達した可能性がある。全体の形状としては、竪穴の中央がやや窄め。

施設 竪穴の内部で、22基の遺構を検出した。柱穴は5基（P.2・7・9・20・21）が想定できる。

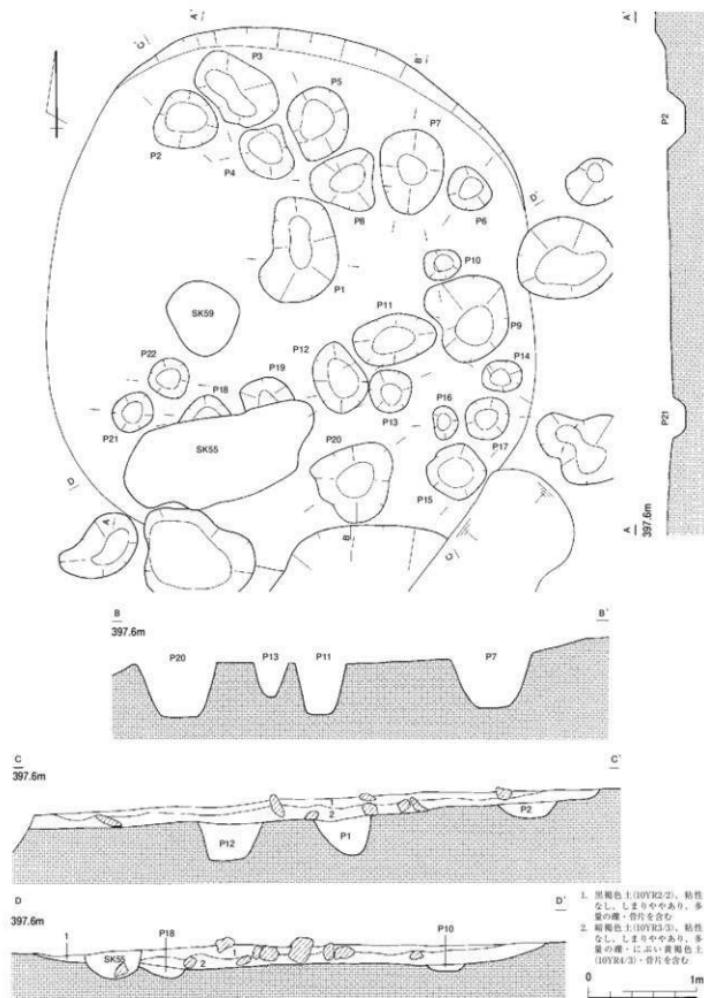


図18 SB1遺構図(1)

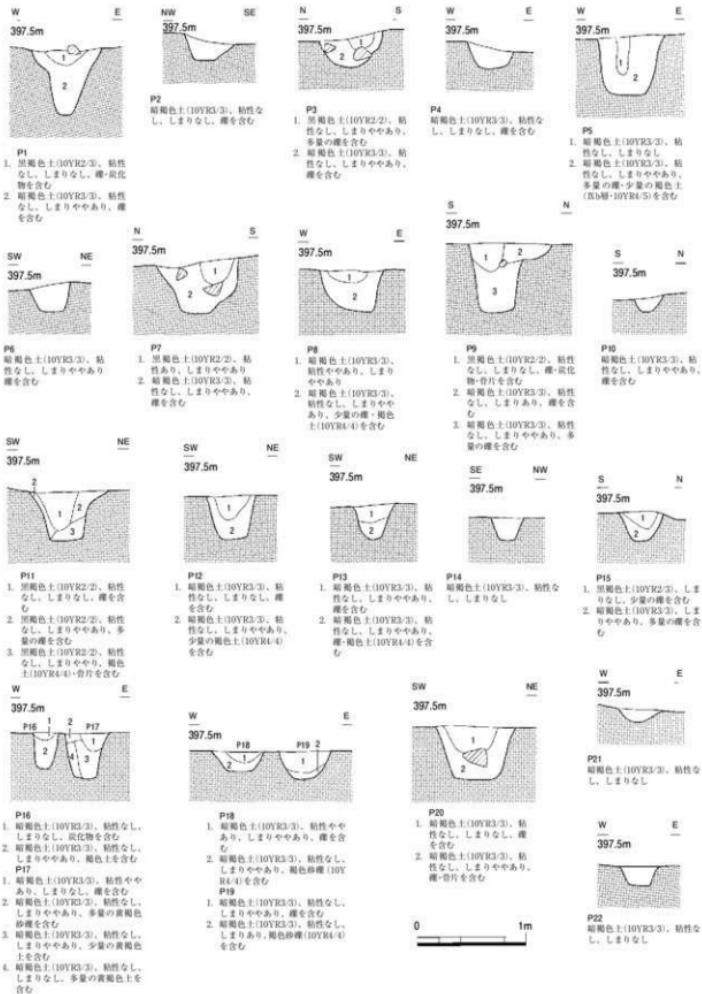


図19 SB 1遺構図 (2)

これらはP 2・21の中点とP 9を結ぶ線を軸にして、P 20・21とP 2・7が左右対称に位置する。他にも柱穴とみられる遺構は多く認められるが、判然としない。焼跡は検出されなかった。

出土遺物 堅穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は中期後葉から後期末(39~41)まで認められるが、後期後葉の土器の破片が大きい。石器は、石鎌5点・石錐1点・ノッチドスクレイバー1点・楔形石器1点・RF 1点・打製石斧1点・磨・敲石類1点・切目石錐4点が出土した。

所属時期 P 9から後期中葉の土器(65)と後期後葉の土器(62)が出土している。のことから、本遺構の所属時期は後期後葉井口2式期であると判断できるが、埋土出土土器に後期中葉に遡る土器も多く、立て替えの可能性を示唆する。

S B 2 (現場名S X 3、図20・21、図版5)

位置 J 16~L 16, K 17グリッドに位置する。

検出状況 V a層上面で検出した。本遺構の南側ではS K 66・71と重複するが、現地調査で重複関係を明らかにすることはできなかった。埋土は単層で、多数の亜円礫が含まれた。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径4.51m・短径3.63m・深さ0.50m・床面積14.35m²以上を測る。**壁・床面の状況** 南壁はわずかに立ち上がるが他は明瞭である。貼床や硬化面は確認できず、V a層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく堅穴の掘形に達した可能性がある。全体の形状としてはほぼ平坦である。

施設 堅穴の内部で、14基の遺構を検出した。柱穴は4基(P 24・26・29・36)が想定できる。これらはP 24・26の中点とP 29・36の中点を結ぶ線を軸として、P 24・36とP 26・29がほぼ左右対称に位置する。この軸線と直交する延長線上にP 27・33が壁に接して対に位置していることから、出入口施設の痕跡の可能性がある。焼跡は検出されなかった。

出土遺物 堅穴埋土から、縄文土器・石器・骨片が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後期後葉(72)まで認められる。石器は、石鎌10点・削器1点・RF 6点・UF 1点・磨・敲石類2点・打欠石錐1点・切目石錐4点・磨製石斧1点が出土した。

所属時期 埋土出土土器の主体から、後期中葉井口1式期と判断する。

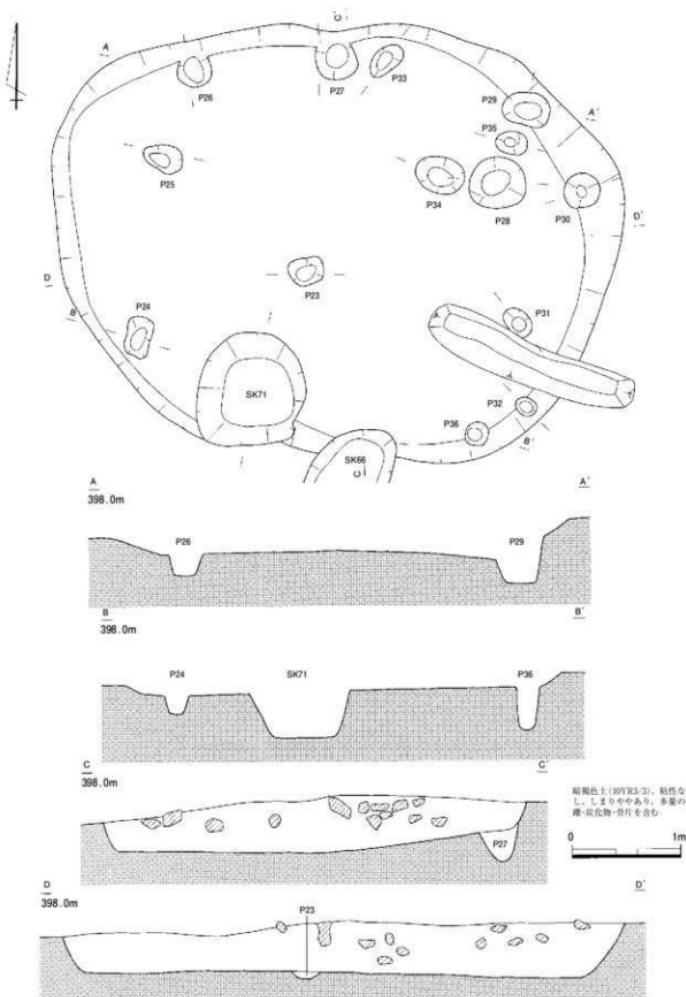
S B 3 (現場名S X 4、図22~24、図版5)

位置 P 15グリッドに位置する。S B 16(第3B調査面)の北東に位置する。

検出状況 V b層上面で検出した。周辺遺構との重複はない。堅穴の東側の埋土は周辺の土色と酷似していたため、堅穴の範囲は不明瞭である。埋土は3層に分けられ、亜円礫が多く含まれた。土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は円形を指向していると考えられる。長径5.42m以上・短径4.95m・深さ0.25m・床面積推定22.25m²を測る。

壁・床面の状況 東壁を除き、他は比較的緩やかに立ち上がる。貼床や硬化面は確認されなかった。全体の形状としては、堅穴の南側がやや崖む。



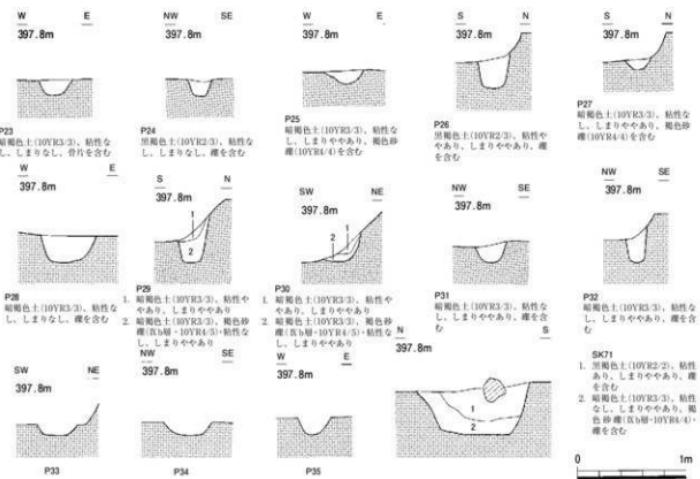


図21 SB 2 造構図(2)

施設 堪穴の内部で、38基の造構を検出した。柱穴は6基（P38・40・44・47・56・69）が想定できる（柱配置1）。P40・47を結ぶ線を軸としてP38・69とP56・44がほぼ左右対称に位置する。これとは別に6基（P39・42・43・45・51・70）が想定できる（柱配置2）。P43・51を結ぶ線を軸としてP39・42とP45・70がほぼ左右対称に位置する。現地調査ではP39（柱配置2）がP38（柱配置1）を切るということを確認したため、柱配置1が柱配置2に先行することは明白である。また6基（P41・46・50・53・58・63）も想定できる（柱配置3）。堪穴中央のP63を中心にして5基（P41・46・50・53・58）を放射状に配置する。跡跡は地床炉2基（S F19・S F20）が検出された。S F19は掘形の有無が不明であるが、S F20は掘形を持ち底面では被然痕跡が認められなかった。

出土遺物 堪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期中葉（80）から後期初頭（111）まで認められるが、主体は中期後葉である。石器は、石核1点・石鏃10点・石錐7点・石匙1点・搔器3点・ノッチドスクレイバー1点・R F21点・U F12点・打製石斧1点・磨・敲石類1点・打欠石錐6点・切目石錐20点・磨製石斧2点・石皿1点・石棒1点が出土した。

所属時期隣接する第3B調査面のS B15よりも検出面が高いが、出土遺物の全てが堪穴住居周辺のVb層からの混入と推測するには、あまりに時期差が認められない。このことから中期後葉（第3段階）と判断する。

S B 4 (現場名 S X 6、図25~27、図版6)

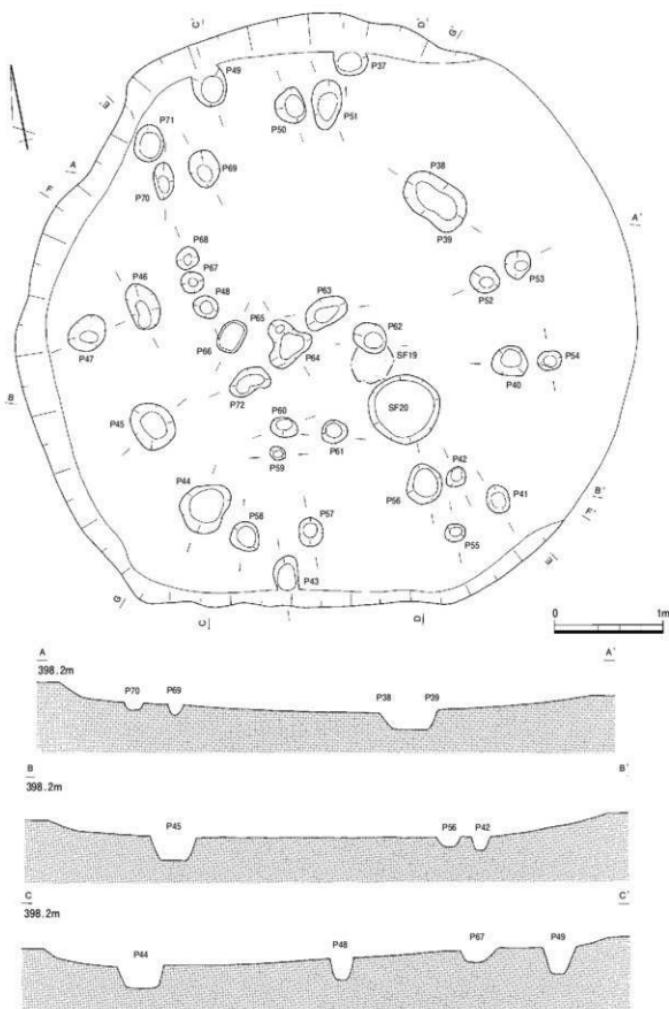


図22 SB 3遺構図（1）

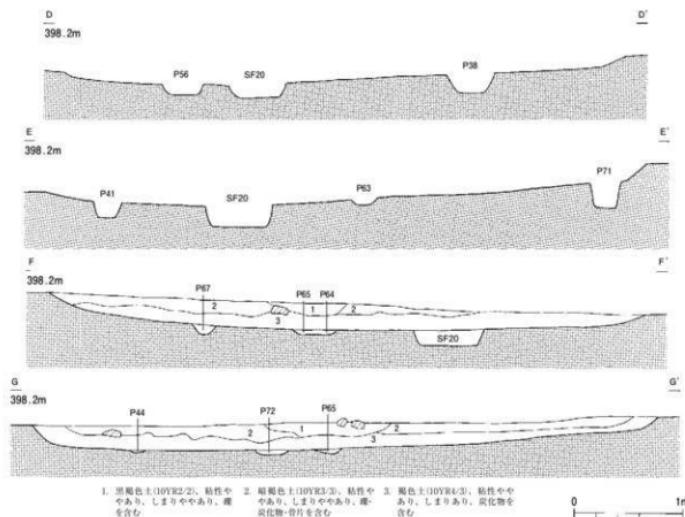


図23 S B 3 造構図（2）

位置 G17グリッドに位置する。

検出状況 V a 層中から V b 層基底面で検出した。埋土は暗褐色土で 2 層に分けられ、亜円礫が多く含まれた。土層は水平に堆積する。本造構の調査が平成10年度に一時中断して平成13年度に再開するまでに掘形が流失したため、平成9年度に V a 層中で検出した竪穴の平面図と、平成13年度に V b 層基底面で検出した竪穴内部の造構の平面図を合成した。よって竪穴と周辺造構との重複関係は不明である。竪穴埋土出土土器の主体は後期前葉で占められるが、中期後葉の S Z 2 (図27、図版6) を埋土上部で検出していることから、本竪穴は浅いためには同一面で複数時期の造構を検出したことが推測される。

形状と規模 平面形は円形を指向していると考えられる。長径5.42m以上・短径4.95m以上・床面積推定17.55m²を測る。

壁・床面の状況 壁の状況については不明である。貼床や硬化面は確認できず、V a 又はV b 層上面で造構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性が高い。全体の形状としてはほぼ平坦である。

施設 竪穴の内部で51基の造構を検出した。柱穴は4基 (P83・95・102・108) が想定できる (柱配置1)。柱配置は不規則である。P83・95・108の土層堆積状況は造構の重複の可能性を示唆しており、ほぼ同様な柱配置で4基 (P103・83・95・108) を想定することができる (柱配置2)。現地調

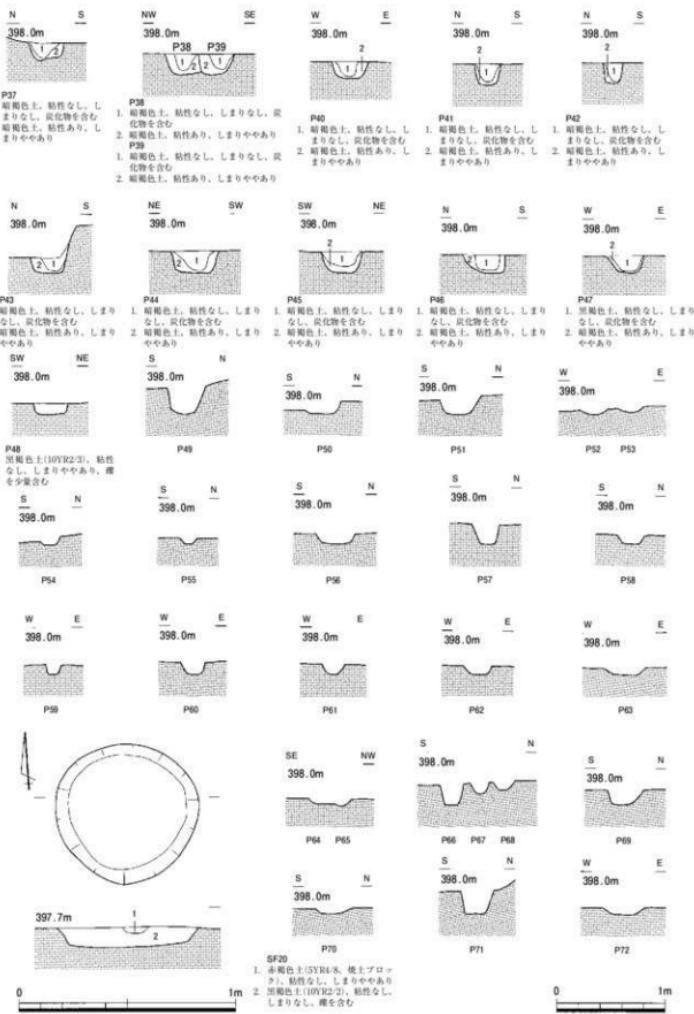


図24 SB 3 遺構図 (3)

検出当初の豎穴のプラン

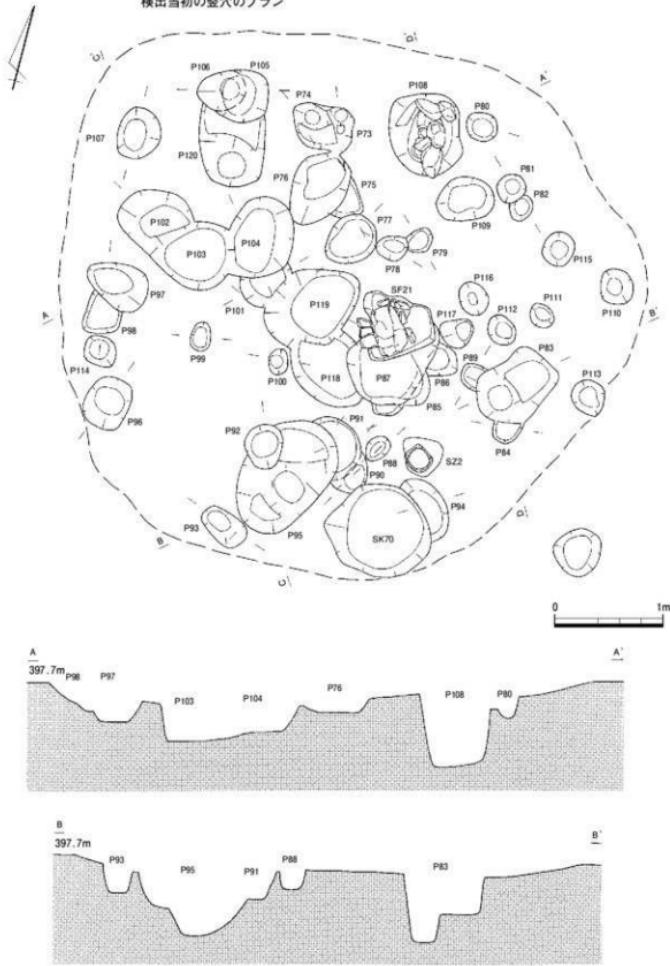


図25 SB 4 遺構図 (1)

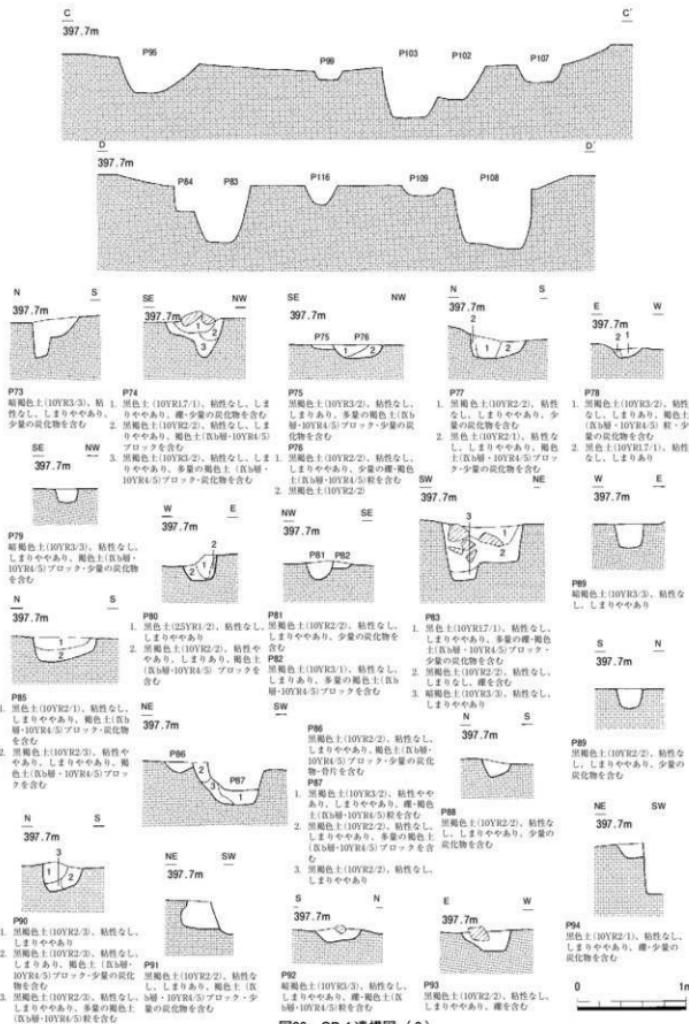


図26 SB 4 造構図 (2)

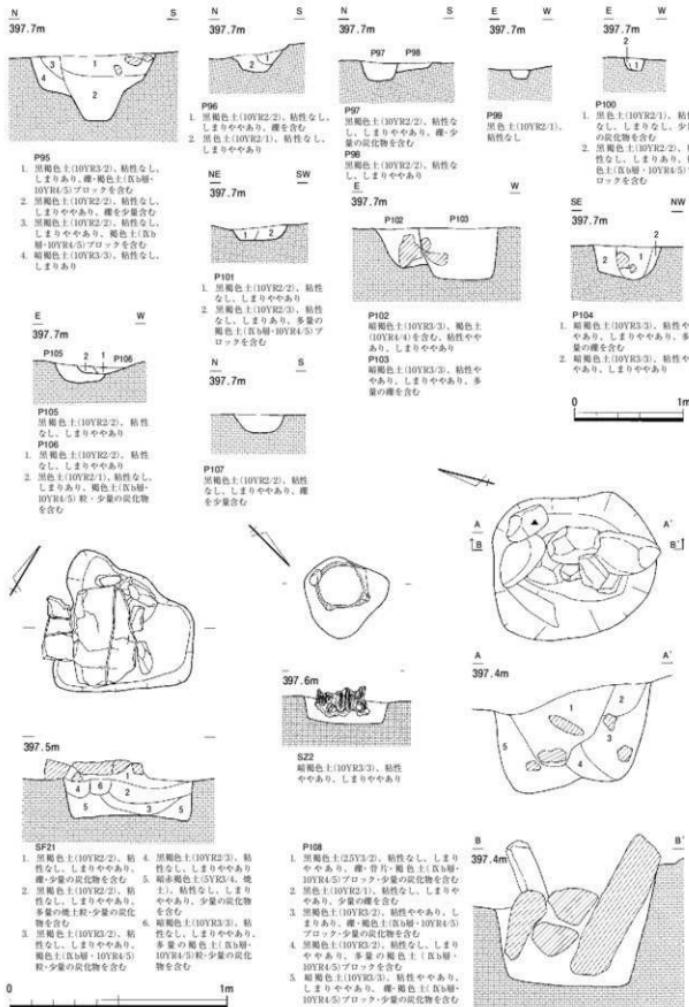


図27 SB 4 遺構図 (3)

査ではP103（柱配置2）がP102（柱配置1）を切るということを確認したため、柱配置1が柱配置2に先行することは明白である。炉跡S F21は竪穴の中央東寄りに位置する。掘形の底面には被熱痕跡がないが、埋土中に焼土やIX b層ブロックが確認されたことから、廃絶時に埋め戻され上部に礫を配置したと推測できる。なおP87は埋土に共通の特徴があることから、S F21に先行する炉跡の可能性がある。

出土遺物 竪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は中期後葉（116）から後期前葉（120）まで認められるが、主体は後期前葉である。石器は、石核2点・石礫6点（うち1点は2118）・石錐1点・石匙1点・搔器2点・削器2点・R F10点・U F1点・磨・敲石類3点・打欠石錐1点・切目石錐9点が出土した。

所属時期 S F21から堀之内2式系の深鉢（137）が出土しており、埋土出土土器の主体時期、立て替えたの状況から、北白川上層式2期併行と判断する。

2 炉跡・焼土遺構

3基の炉跡（S F19・27・S F29）と8基の焼土遺構を検出した。焼土遺構は、いずれの焼土も不均質で粒状に点在し、周囲との区別が不明瞭で遺構の性格は不明である。

S F27（図28、図版4）

位置 G19・20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明で、礫の分布範囲は長径0.20m・短径計測不能・深さ0.14mを測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。北西・南東の一対の礫を小口立てとし、他は概ね平置きとするが、北西隅には礫が認められなかった。このうち一部の礫に被熱の痕跡が認められ、また礫を取り除いた下から焼土を検出していることから、石囲炉の廃絶時に炉石を移動した可能性がある。断面観察では土坑状の立ち上がりと共に厚さ11cmの焼土が検出されたが、平面精査では検出されなかつた。内部の焼土は不均質で、粒状に点在する。

出土遺物 検出時に中期後葉の土器（142）が出土した。

S F29（図28）

位置 T24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形で、長径0.69m・短径0.60m・深さ0.36mを測る。

概要 V b層上面で検出した。重複遺構はない。焼土ブロックを多数含む1層を取り除くと、硬化してはいないものの強く被熱した均質な2層が面的に検出されたため、炉跡と認定した。この焼土面の下部土層（4層）は焼土ブロックを少量含むが、掘形の底面で被熱痕跡は認められなかつた。

出土遺物 検出時に、前期後葉の土器と骨片が出土した。

3 配石遺構

S I 6（図28、図版4）

位置 P14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形とみられ、長径1.90m・短径1.28mを測る。

概要 V a層上面で検出した。重複遺構はない。図化後、下部より礫が出現して密度が高くなり南にも広がつたが、追加実測ができなかつたため詳細に検討することはできない。全般に置石は長径4～48cmの礫を用いて平置きとするが、中央の東西2箇所の礫を小口立てとする（配石2類）。概ね礫の

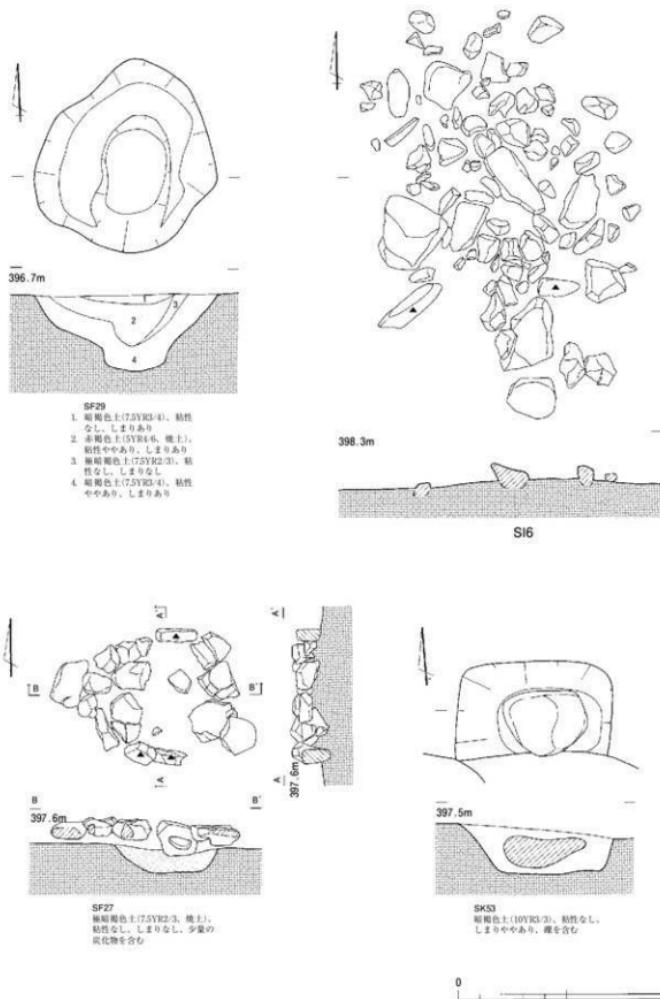


図28 第2調査面検出遺構図（1）

の種類の大半が亜円碟とみられる。なお本遺構から1m東の地点でも碟の集中がみられたが、遺構として認定しなかった。

出土遺物 なし。

4 土坑

J 18グリッドでは掘削がIX a層に達したため遺構検出が比較的容易となり、見かけ上遺構が集中しているが、この区域を除外すると全体に散在して分布する。

S K44 (図29、図版6)

位置 I 17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は指円形を呈し、長径0.85m・短径0.42m・深さ0.63mを測る。

概要 V a層上面で検出した。S K50・52・53を切る。土坑南端の埋土下部で、長径16~47cmの碟が浮上する（土坑D 1 b類）。碟の円磨度は角碟が主体で、少量の亜円碟が伴う。

出土遺物 埋土から、後期中葉の土器（143）・切目石錘1点が出土した。

S K53 (図28)

位置 I 17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明で、長径0.48m・短径0.30m以上・深さ0.25mを測る。

概要 V a層上面で検出した。S K44・50に切られる。埋土下部で台石1点が出土した（土坑D 2 b類）。

出土遺物 埋土から、中期（ただし詳細不明）の土器・台石1点（2328）が出土した。

S K55 (図29、図版7)

位置 J 17・18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整指円形を呈し、長径1.35m・短径0.52m・深さ0.40mを測る。

概要 V a層上面で検出した。土坑中央に円碟（長径72cm・短径22cm・厚さ14cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。この碟はS B 1の埋土掘削中に検出したため、本遺構はS B 1廃絶後の所産である。土層断面の状況から、2基の土坑が重複する可能性がある。

出土遺物 埋土から、後期後葉の土器（149~155）・削器1点、各層から骨片が出土した。

S K59 (図29、図版7)

位置 J 17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径0.35m・短径0.34m・深さ0.40mを測る。

概要 V b層上面で検出した。埋土の全体にわたって長径4~34cmの多量の碟を検出した（土坑D 1 b類）。碟の円磨度は亜円碟と亜角碟がほぼ同じ割合で少量の角碟を伴い、多量の被熱した碟を含む。なおこの碟はS B 1の埋土掘削中に検出したため、本遺構はS B 1廃絶後の所産である。

出土遺物 埋土から土器が出土したが、所属時期は不明である。

S K68 (図29)

位置 H 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形を呈し、長径0.77m・短径0.67m・深さ0.52mを測る。

概要 V b層底面で検出した。重複構造はない。埋土上部に長径7~18cmの碟が浮上する（土坑D 1 b類）が、このうち北側の碟2個は長手立ての可能性がある。碟の円磨度は亜円碟で占められる。

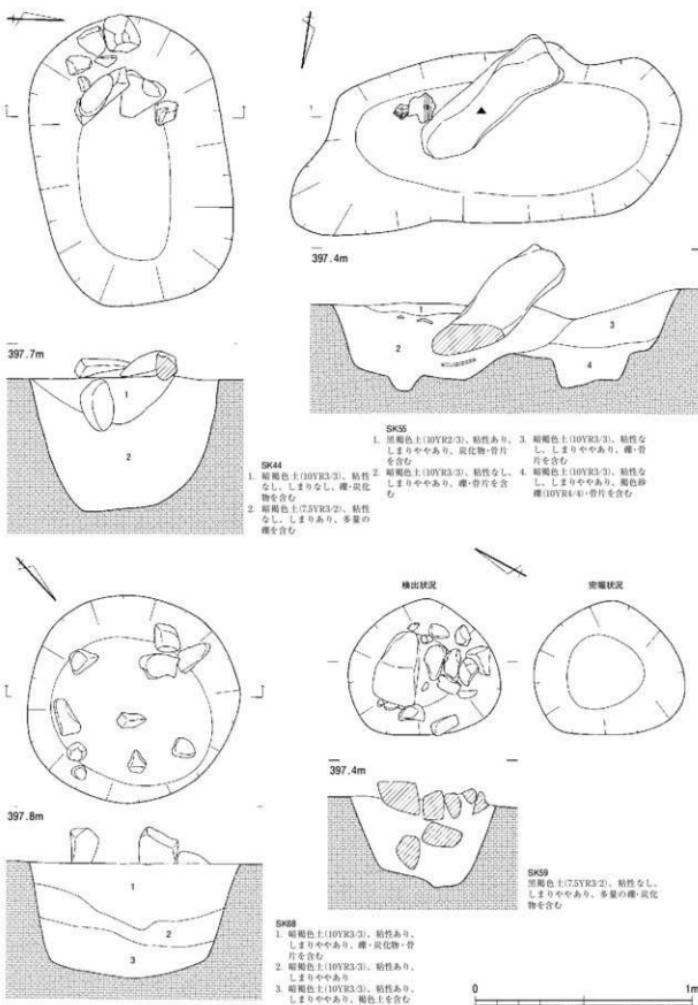


図29 第2調査面検出造構図(2)

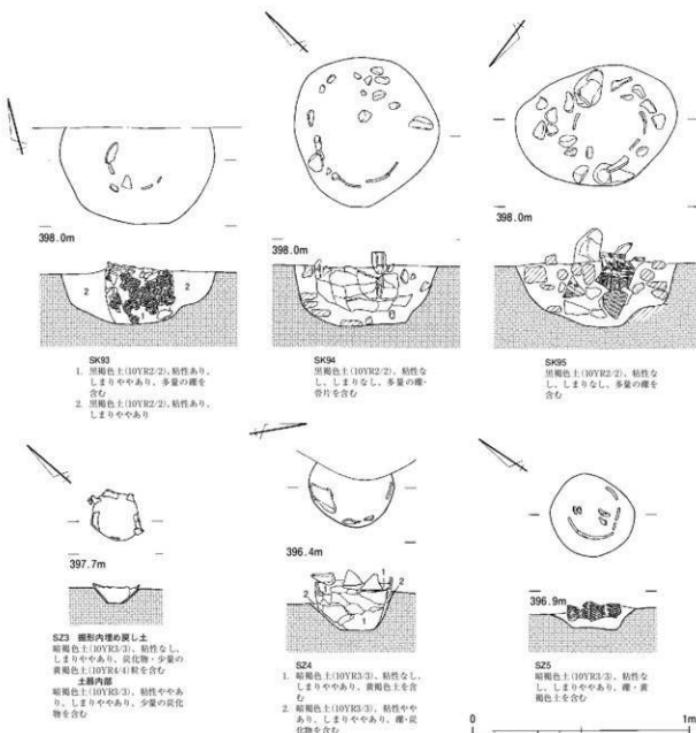


図30 第2調査面検出遺構図(3)

出土遺物 墓土から、後期中葉の土器(157)・石鏃2点・石鏃末製品1点・ノッチドスクレイバー1点・R F 1点・UF 1点・打欠石錐1点・切目石錐3点・土層1層から骨片が出土した。

S K93(図30、図版7)

位置 H 13グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形と考えられ、上端長径0.70m・上端短径0.44m以上・深さ0.24mを測る。

概要 V b層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑中央で、口縁部の一部と底部を欠損する後期前葉の土器(165)が正位で出土した(土坑C 1類)。

出土遺物 土器(165)のみが出土した。

S K94(図30、図版7)

位置 L13グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、上端長径0.69m・上端短径0.65m・深さ0.28mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑中央で、口縁部と胴部下半を欠損する中期後葉の土器（158～161）が正位で出土した（土坑C 1類）。ただし接合作業の結果、この土器の器面は一周しなかった。

出土遺物 埋土から、R F 1点と骨片が出土した。

S K95（図30、図版7）

位置 K14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形を呈し、上端長径0.72m・上端短径0.55m・深さ0.29mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑中央で、底部を欠損する後期前葉の土器（166）が正位で出土した。土器の外側では、埋土中に長径5～19cmの亜円窪が多数含まれる（土坑E類）が、これらのうち1個は長手立ての可能性がある。

出土遺物 土器（166）のみが出土した。

5 埋設土器

S Z 3（図30、図版7）

位置 H17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明で、上端長径0.32m・上端短径0.21m・深さ0.07mを測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。胴部上半を欠損し、底部中央が穿孔された後期中葉以前の土器（162）が正位で出土した。平面精査では掘形を検出することができなかったが、土器内部の埋土の特徴が周辺と異なっている点から、規模は土器の残存径とほぼ同じとみられる。

出土遺物 土器（162）のみが出土した。

S Z 4（図30、図版7）

位置 N24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明で、上端長径0.40m・上端短径0.23m以上・深さ0.18mを測る。

概要 V a 層上面で検出した。S F25に切られる。胴部上半を欠損する、後期後葉の土器（167）が正位で出土した。平面精査では掘形を検出することができなかったが、土器内部の埋土の特徴が周辺と異なっている点から、規模は土器の残存径とほぼ同じとみられる。土器と同一の検出面で疊1個が平置きにされており、上面配石の可能性がある。

出土遺物 土器（167）のみが出土した。

S Z 5（図30、図版7）

位置 G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明で、上端長径0.40m・上端短径0.35m・深さ0.10mを測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。口縁部と胴部下半を欠損する、中期後葉の土器（163・164）が出土した。埋位は不明で、正位か逆位か判断できない。

出土遺物 土器（163・164）が出土した。

第4節 第3A調査面

第3調査面は2回に分けて調査した。1回目はVb層を掘削していく途中で検出した遺構の調査であり、2回目はVb層基底面で検出した遺構の調査である。そこで便宜上1回目を「第3A調査面」、2回目を「第3B調査面」と呼称する。

標高ではH3グリッドが最も高く(約398.9m)、N24グリッドが最も低い(約396.0m)。当調査面は南に向かって傾斜するが、第1・2調査面よりもさらに緩やかな形状である。

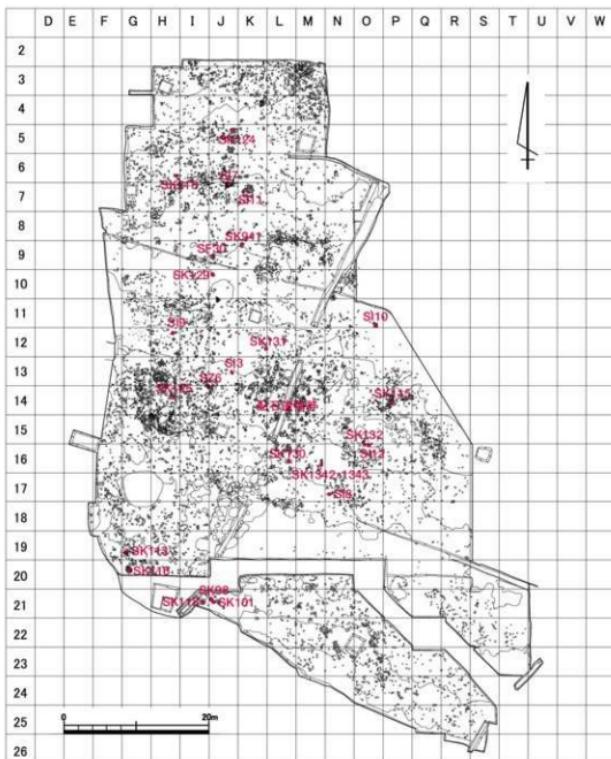


図31 第3A調査面全体図

1 炉跡

S F 30 (図32、図版8)

位置 I 9・J 9グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は長方形を呈し、長辺0.53m・短辺0.60mを測る。

概要 V b 層中で検出した。重複遺構はない。東西辺の炉石は細長い蹠を立て、他はやや小ぶりの蹠を用いて固むが、北東・南西隅を欠く。炉の内部で焼土は検出されず、炉石の内側で被熱の痕跡が認められた。平面精査では、炉跡の掘形は検出されなかった。

出土遺物 なし。

2 烧砾集積遺構

S I 7 (図32、図版8)

位置 J 7グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径0.53m・短径0.43m・深さ0.22mを測る。

概要 V b 層中で検出した。重複遺構はない。埋土上部で長径3~26cmの多量の蹠が検出された。蹠の円磨度は角蹠が主体で少量の亜円蹠を伴い、蹠の大半に被熱の痕跡が認められた。しかし、土坑内壁面に被熱の痕跡や焼土は認められなかつた。また埋土下部では混入と考えられる少量の蹠を含む黒色土が堆積していた。このことから、当遺構はいわゆる「被覆型集石遺構」であるといえる。

出土遺物 埋土から、炭化物が少量出土した。

3 配石遺構

S I 8 (図32、図版8)

位置 N17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明である。東西長1.00mを測る。

概要 V a 層中で検出した。重複遺構はない。東端では長径40cm程度の完形の石皿2個を小口立てとし、西端では長径23cmの石皿片1個を平置きとし、列状に配置する。これらとは別にやや北寄りに長径20cm以上・幅8cmの蹠2個を長手立てとする（配石3類）。中央の石皿の下部では、焼土ブロックが認められた。なお本遺構の下部で、土坑は検出されなかつた。

出土遺物 石皿3点が出土した。

S I 9 (図32、図版8)

位置 H12グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は三角形を呈し、一辺0.56mを測る。

概要 V b 層中で検出した。重複遺構はない。長径11~22cmの蹠で囲み（配石1類）、その内部で土器片が少量出土した。蹠の円磨度は大半が角蹠で少量の亜円蹠を伴う。なお本遺構の下部で、土坑は検出されなかつた。

出土遺物 蹠の精査中に、後期前葉の土器（169・170）が出土した。

S I 10・SK 341 (図32、図版9)

位置 O11グリッドに位置する。

上面配石 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。平面形は不明である。東西長0.84mを測る。長径22cm~45cmの蹠6個を平置きとする（配石2類）。蹠の円磨度は概ね扁平角蹠・扁平角蹠・亜

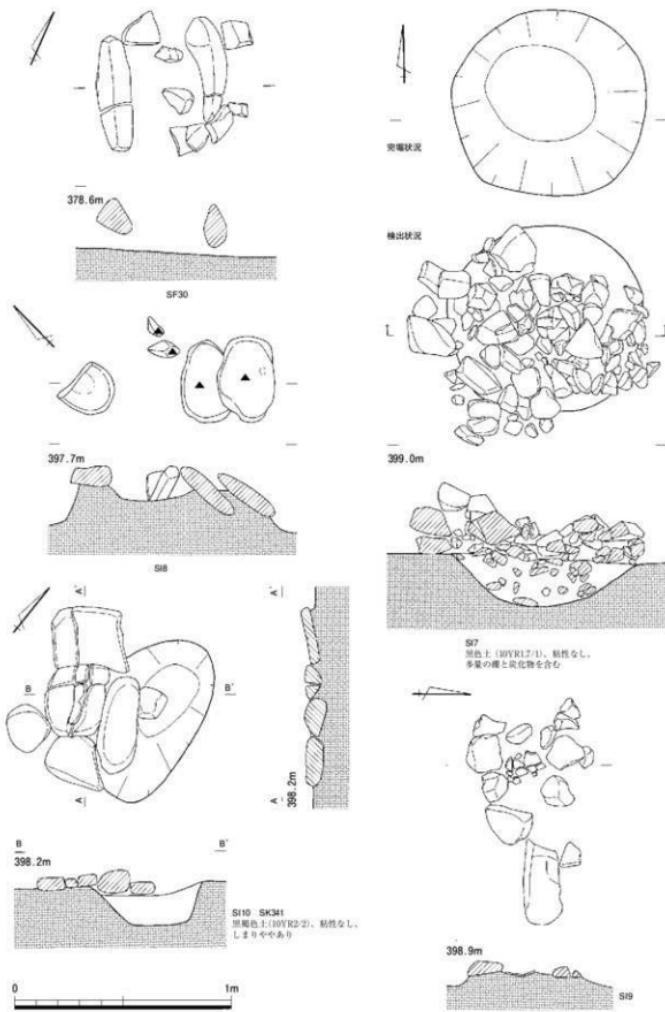


図32 第3 A調査面検出遺構図 (1)

円碟である。

土坑 碟を除去後、平面精査により土坑（SK341）を検出した。土坑の長軸方位と上面配石の方位はややずれる。

出土遺物 なし。

S I 11・SK216 (図33、図版8)

位置 K7グリッドに位置する。

上面配石 Vb層中で検出した。重複遺構はない。平面形は三角形で、一边約1.90mを測る。三辺の頂点に角碟を置き、縁石は二重とし長径8~47cmの碟を長手置きにする。置石はほとんどみられなかつたが、北隅に長径42cmの碟を平置きにする（配石1類）。碟の円磨度は概ね扁平円碟・角碟・亜円碟であり、完形の石皿1点を含む。

土坑 碟除去後のVb層基底面で検出した。平面形は不定形である。重複遺構はない。長径0.45m・短径0.30m・深さ0.34mを測る。

出土遺物 上面配石の精査中に、石錆1点・切目石錐1点・石皿1点が出土した。

S I 12・SK2427 (図33、図版9)

位置 O16グリッドに位置する。

上面配石 Va層中で検出した。重複遺構はない。調査溝により南西端を欠く。平面形は五角形である。南北長約0.57m・東西長0.60mを測る。中心に長径32cmの丸い碟を芯石とし、長径19~35cmの碟で小口立てとし固む。縁石との間にはやや小ぶりの長径20cm以下の碟を充填する（配石1類）。碟の円磨度は多様（角碟・扁平角碟・円碟）である。

土坑 平面形は梢円形である。長径0.52m・短径0.40m・深さ0.24mを測る。碟除去後のVb層基底面SB16の床面で検出した。土坑の位置は上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。遺構の重複関係は不明である。

出土遺物 土坑埋土から、中期後葉の土器（746）と骨片が出土した。

S I 13・SK1051 (図36、図版8)

位置 J13グリッドに位置する。

上面配石 Vb層中で検出した。重複遺構はない。平面形は不明である。南北長約70mを測る。碟3個が列状に並び、長径43cmと23cmの碟2個を長手立てとし、南端には長径20cmの碟を長手置きとする（配石1類）。碟の円磨度は扁平角碟と角碟である。

土坑 碟除去後のVb層基底面で検出した。SK1046・1048・1050に切られSK1076を切る。長径0.3m以上・短径0.26m・深さ0.60mを測る。土坑の長軸方向と、本遺構の碟の配置方向がほぼ一致することから、両遺構の関連は深いと判断した。

出土遺物 なし。

配石遺構群 (図34・35、図版9・10)

Vb層中には主に20cm以下の角碟が含まれるが、40cmを超える亜円碟や扁平な角碟・円碟が集中する箇所がK13~K15・L13~L16・M14・M15グリッドの範囲約75.0m²に認められた。またこれらは、Vb層に含まれる碟の大きさと円磨の度合いを比較すると大きく異なる（図34）ため、「配石遺構群」（S I 14~34）と認定する。大半が砂岩で、他に安山岩・チャートがある。いずれも遺跡周辺で採可

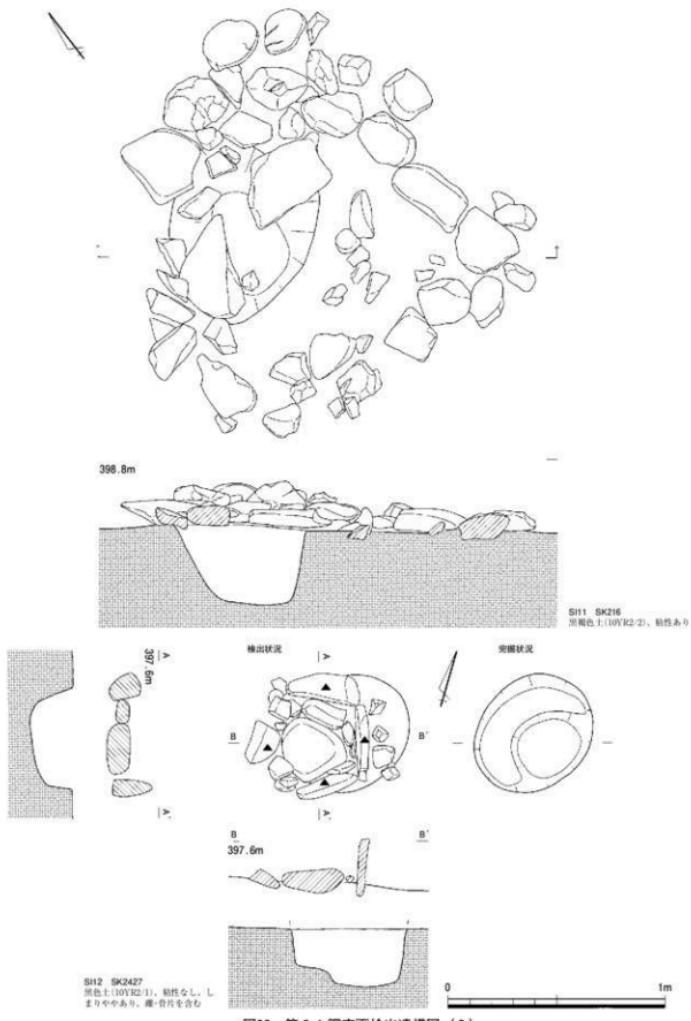


図33 第3A調査面検出遺構図 (2)

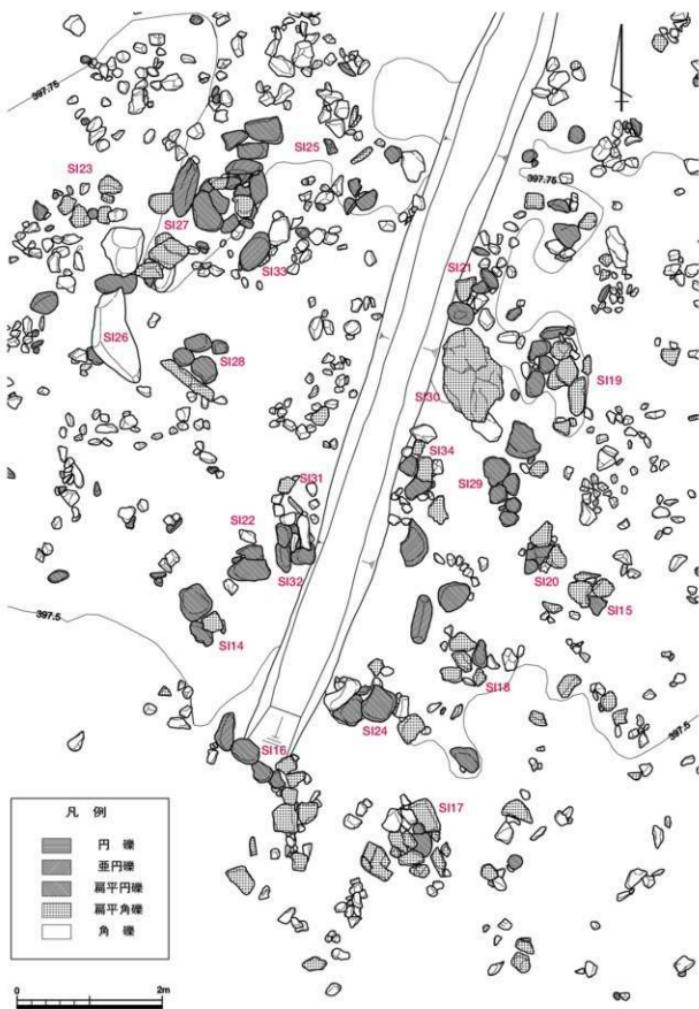


図34 配石遺構群検出状況図

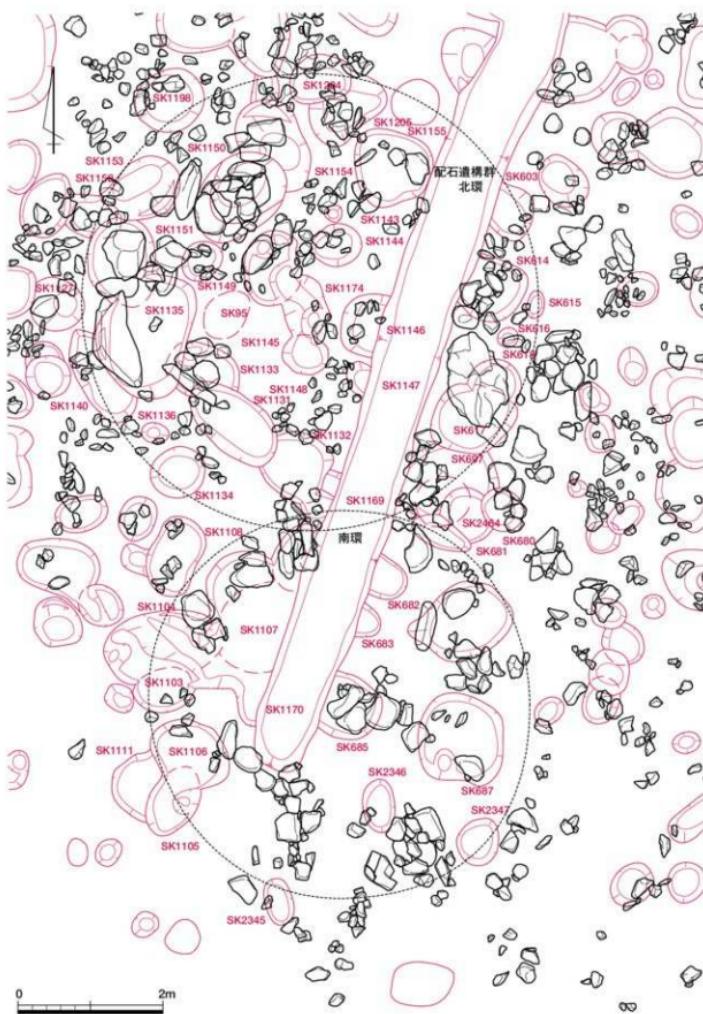


図35 配石遺構群と下部土坑位置図

能な蹕であり、特定の石材が集中する傾向は認められなかった。なおV b層中に含まれる角蹕は、概ね蹕の供給源に近い山手の北側に多く、南側にゆくに従って少なくなるが、石を据える際の整地や盛土の痕跡を、現地調査で確認することはできなかった。

配石の下部（第3B調査面）では土坑が検出され、周辺の土坑よりも出土土器の時期が新しいことから、土坑と配石とは密接な関連をもつと考えられた。一方、下部に土坑を持たない配石遺構も、同一調査面で検出していることから関連が深いと予測されるため、ここで併せて説明する。

S I 14（図36、図版11）

位置 K15～L15グリッドに位置し、S I 22に隣接する。

形状と規模 平面形は不明である。南北長0.86mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。長径28～46cmの3個の蹕を平置きとする。蹕の上面は東にやや下がる（配石2類）。蹕の円磨度は、扁平円蹕2個・扁平角蹕1個である。南東の角蹕には被熱の痕跡が認められた。なお本遺構の下部で土坑は検出されなかった。

出土遺物 なし。

S I 15（図36、図版11）

位置 M15グリッドに位置し、S I 20に隣接する。

形状と規模 平面形は方形である。長辺0.57m・短辺0.49mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。長径24～40cmの蹕を平置きとする。北端の蹕のみ、上面が南に下がる（配石2類）。蹕の円磨度は、扁平角蹕3個・扁平円蹕1個である。東端の蹕に被熱の痕跡が認められた。なお、蹕除去後の第3B調査面で検出した土坑（SK 653）の位置は本遺構の範囲と一致しているが、両遺構検出面の標高差は約0.4mを測り、また土坑埋土からの出土遺物がないため、関連の有無は判断できない。

出土遺物 なし。

S I 16（図36、図版11）

位置 K15・L15グリッドに位置し、S I 17に隣接する。

形状と規模 平面形は不明である。東西長1.92mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。長径32～54cmの蹕を列状に平置きとするが、東端寄りで、長径28cmの角蹕1個を小口立てとする。蹕の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（配石2類）。蹕の円磨度は、大半が扁平角蹕と扁平円蹕でア円蹕1個を伴う。東半の蹕の大半に、被熱の痕跡が認められた。なお本遺構の下部で土坑は検出されなかった。

出土遺物 なし。

S I 17（図37、図版11）

位置 L15・L16グリッドに位置し、S I 16に隣接する。

形状と規模 平面形は不明である。東西長1.92mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。長径32～54cmの蹕5個を平置きとし、その上にややこぶりな長径16～33cmの蹕6個を置く。平置きの蹕の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（配石2類）。蹕の円磨度は、大半が扁平角蹕で、少量の角蹕と扁平円蹕を伴う。一部の蹕に被熱の痕跡が認められた。なお本遺構の下部で土坑は検出されなかった。

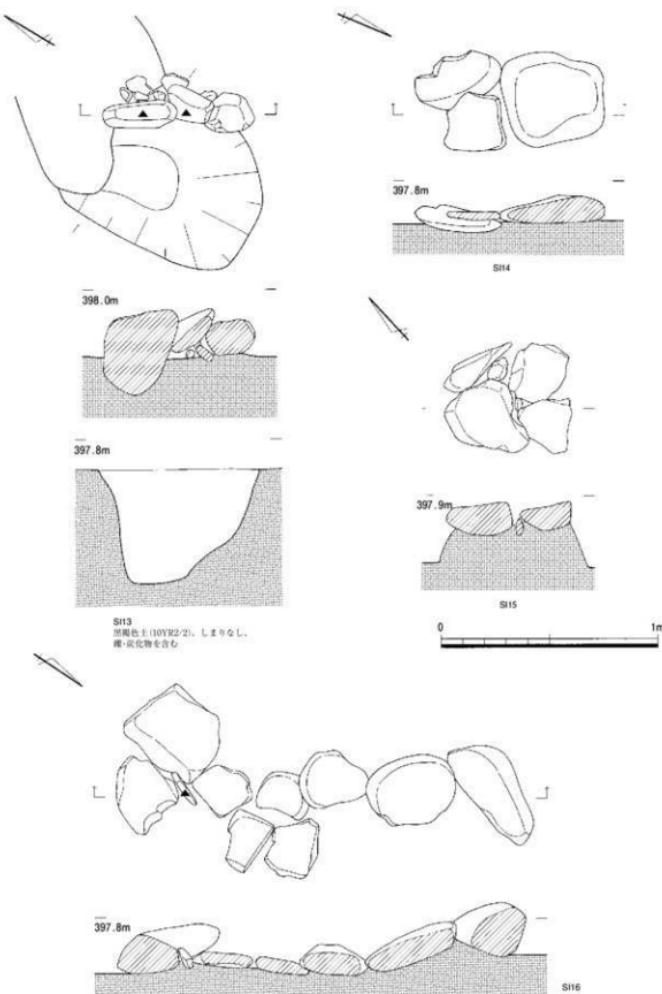


図36 第3 A調査面検出遺構図 (3)

出土遺物 平置きの置石に完形の石皿1点（2322）が含まれ、また置石の直下から、UF1点・磨製石斧1点（2312）・切目石錐1点（2304）が出土した。

S I 18 (図37、図版11)

位置 L15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不明である。小口立ての碟2個を縁石とみると、その幅は0.53mを測り、直交する方向で0.93mを測る（配石1類）。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。やや小ぶりの長径20cm程度の角碟2個を小口立てとし、その間に長径19~39cmの碟を平置きとする。平置きの碟の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる。碟の円磨度は大半が角碟と扁平角碟で、扁平円碟1個を伴う。一部の碟に被熱の痕跡が認められた。なお本遺構の下部で土坑は検出されなかった。

出土遺物 なし。

S I 19 (図37、図版18)

位置 M14グリッドに位置し、S I 30に隣接する。

形状と規模 平面形は不明である。南北長1.53m・東西長0.95mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。中央に長径35cmの碟1個（以下「底石」とする）を平置きにし、北端と西端に長径30~35cmの3個の碟を長手立て又は小口立てとし、縁石とする。北端の碟は南に、西端の碟は東に傾く。底石と立石の上には、長径14~55cmの碟（以下「天井石」とする）を少なくとも7個平置きとする。なお底石と天井石の間には、厚さ3~17cmの黒褐色土が堆積していた（配石1類）。碟の円磨度は大半が角碟と扁平角碟で、少量の亜円碟と扁平円碟を伴う。一部の碟に被熱の痕跡が認められた。なお、本遺構の掘形及び下部土坑は検出されなかった。

出土遺物 なし。

S I 20 (図37、図版18)

位置 M15グリッドに位置し、S I 15に隣接する。

形状と規模 平面形は不明である。南北長0.79m・東西長0.57mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。長径8~54cmの碟を平置きにする。北端の碟のみ、上面が西に下がる（配石2類）。碟の円磨度は多様（多い順に角碟・扁平角碟・扁平円碟・亜円碟）である。一部の碟に被熱の痕跡が認められた。なお本遺構の下部で土坑は検出されなかった。

出土遺物 なし。

S I 21 (図38、図版18)

位置 L14グリッドに位置し、S I 30に隣接する。

形状と規模 平面形は五角形とみられる。南北長約0.88mを測る。

概要 V a層中で検出した。重複遺構はない。西側を調査溝（Aトレーナー）により欠く。縁石は長径31~47cmの碟を用いて平置き又は小口立て（南東端のみ）とし、北東端を欠く。中心には長径23cm以上・短径19cm・厚さ13cmの碟を長手立てとし、縁石との間にやや小ぶりの碟を詰める（配石1類）。碟の円磨度は、角碟・扁平角碟・扁平円碟である。一部の碟に被熱の痕跡が認められた。碟除去後の第3B調査面で土坑（SK614）を検出した。ただし、土坑の位置は上面配石の範囲から北西部に寄り、また、同土坑埋土出土の中後葉の土器（535）が配石遺構の時期と比べて古いことから、関連性は

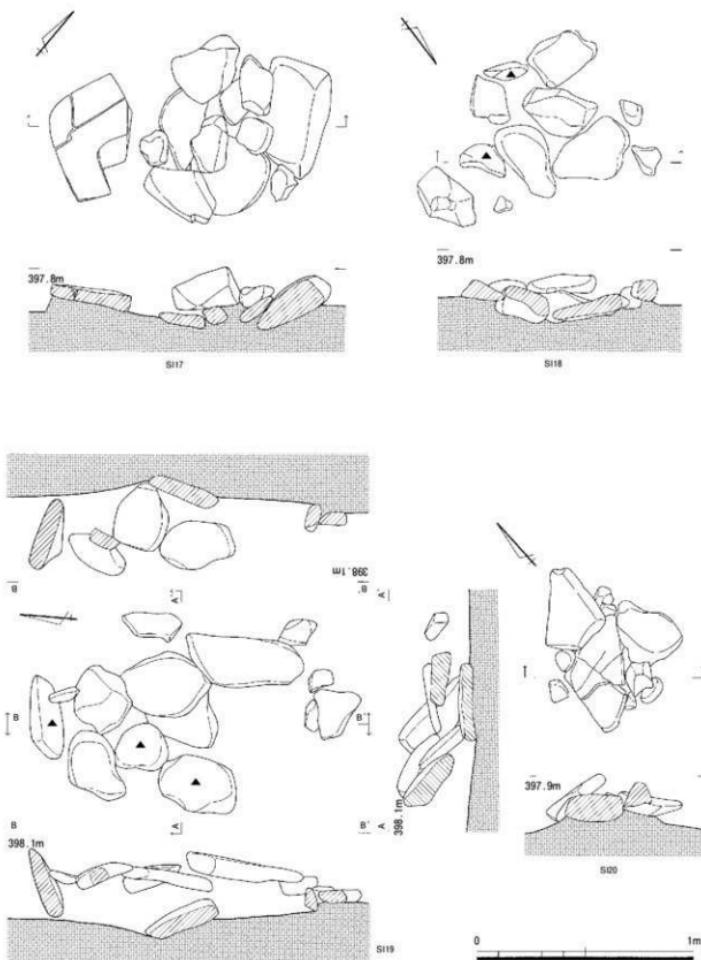


図37 第3A調査面検出遺構図(4)

低いと判断する。

出土遺物 なし。

S I 22・SK 1108 (図38、図版11)

位置 L15グリッドに位置し、S I 14・31・32に隣接する。

上面配石 V a 層中で検出した。重複遺構はない。平面形は不明である。南北長約0.51mを測る。長径36cm・60cmの礫2個を小口置きとする。礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる(配石2類)。礫の円磨度は扁平円礫である。

土坑 稲を除去後のV b 層基底面で検出した。長径1.00m以上・短径0.60m以上・深さ0.22mを測る。土坑の位置は上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。SK 1108はSK 1104・1107・1110に切られている。よって、一部の礫は移動している可能性がある。

出土遺物 なし。

S I 23・SK 1152 (図38、図版12)

位置 K13グリッドに位置し、S I 27に隣接する。

上面配石 V a 層中で検出した。重複遺構はない。平面形は不明である。東西長約0.80mを測る。西端に礫1個(長径35cm・短径17cm・厚さ16cm)を長手立てとし、その東側に長径17cm~30cmの3個の礫を小口置きとする。礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる(配石2類)。礫の円磨度は大半が扁平角礫で、少量の角礫・扁平円礫を伴う。

土坑 稲除去後のV b 層基底面で検出した。長径0.63m・短径0.42m・深さ0.21mを測る。土坑の位置は上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。SK 1125に切られSK 1151・1153を切る。よって、一部の礫は移動している可能性がある。

出土遺物 なし。

S I 24・SK 685 (図38、図版12)

位置 L15グリッドに位置し、S I 18に隣接する。

上面配石 V a 層中で検出した。重複遺構はない。平面形は不明である。東西長1.45mを測る。西側を調査溝(Aトレンチ)により欠く。長径25~56cmの礫を小口置きとするが、東西での礫のレベル差が認められ、その間には厚さ数cm程度の黒褐色土が堆積していた。検出高の低い西半の礫の上面は概ね北東に向かって下がり、検出高の高い東半の礫は概ね南西に向かって下がる(配石2類)。礫の円磨度は角礫と扁平角礫である。

土坑 稲を除去後のV b 層基底面で検出した。長径0.72m以上・短径0.70m・深さ0.17mを測る。重複遺構はない。土坑の位置は上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。

出土遺物 上面配石周辺で磨・敲石類1点(2198)・切目石錐片1点が出土した。

S I 25・SK 1150 (図39、図版12)

位置 K13~L14グリッドに位置し、S I 27・33に隣接する。

上面配石 V a 層中で検出した。重複遺構はない。平面形は楕円形である。南北長約1.91m・東西長1.22mを測る。中央に長径35cm前後の礫3個(以下底石とする)を平置きとし、底石上の外周に礫を平置きとし囲む。縁石のうち、南北端では長径30~62cmの4個の礫を1段に、東西端ではやや小ぶりの長径27~34cmの礫を2段に積む。礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる。南東

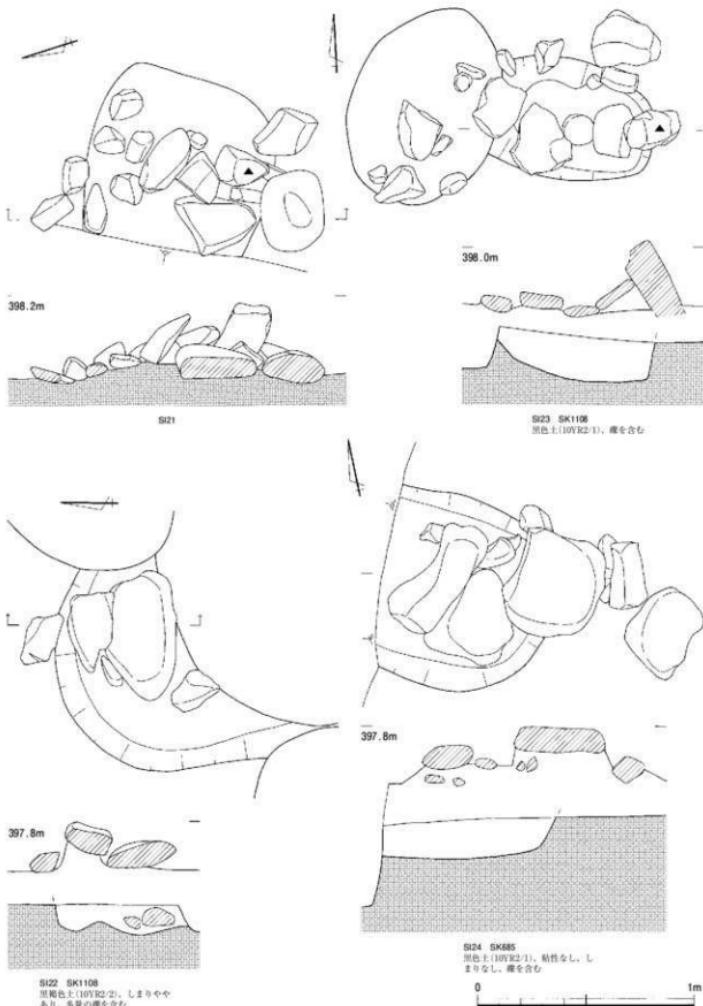


図38 第3A調査面検出遺構図 (5)

端には長径46cm・幅15cmの礫1個を長手立てとし、南西端には長径84cmの礫1個を小口立てとする（配石1類）。礫の円磨度は大半が扁平円礫で、少量の角礫・亜円礫・扁平角礫を伴う。長手立ての礫を確認した際に、南北方向に土層を断ち割ったが、明確な掘形は認められなかった。

土坑 碾除去後のV b層基底面で検出した。長径0.76m・短径0.54m・深さ0.44mを測る。土坑の位置は、上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。S K1154を切る。

出土遺物 土坑埋土から、後期中葉の土器（172・173）が出土した。

S I 26・S K1135（図40、図版13）

位置 K14グリッドに位置し、S I 7に隣接する。

上面配石 V b層中で検出した。S I 27を切る。長径135cmの礫1個を平置きとする。礫の上面では、被熱が原因とみられる剥離が顕著である。礫の円磨度は角礫である。

土坑 碾を除去後のV b層基底面で検出した。長径1.60m・短径1.03m・深さ0.34mを測る。土坑の位置は上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。S K1133・1151に切られS K1140を切る。礫は土坑の西壁沿いに配置された縁石とみられるため、一部の礫は移動している可能性がある（配石1類）。

出土遺物 なし。

S I 27・S K1151（図40、図版12）

位置 K14グリッドに位置し、S I 26に隣接する。

上面配石 V a層中で検出した。西南端の礫は底石と同じレベルにあり、西北端の礫とS I 26の礫がある。このことは、S I 26とS I 27の関連が深いことを示している。平面形は長方形と考えられる。長辺1.12m・短辺0.95mを測る。北西端には長径70cmのやや大型の礫1個を置き、その東側には長径50cm前後の礫3個を（以下「底石」とする）を平置きとし、その上に長径15cm～41cmの礫4個を積む（配石2類）。底石と上部の礫との間には、厚さ数cm程度の黒褐色土が堆積していた。礫の円磨度は、角礫・扁平角礫・扁平円礫が同じ割合を占める。

土坑 碾を除去後のV b層基底面で検出した。長径1.04m・短径0.82m・深さ0.27mを測る。土坑の位置は上面配石の範囲とはほぼ一致しており、関連が深いと判断した。S K1152に切られS K1135・1153を切る。

出土遺物 なし。

S I 28・S K1133（図41、図版12）

位置 K14・L14グリッドに位置し、S I 26に隣接する。

上面配石 V a層中で検出した。重複構造はない。平面形は不明である。南北長約0.78mを測る。南端に長径90cmの礫1個を小口立てとし、その東側に長径21cm～45cmの4個の礫を平置きとする。平置きの礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（配石1類）。礫の円磨度は、扁平角礫（小口立て）と扁平円礫（平置き）である。

土坑 碾除去後のV b層基底面で検出した。長径0.80m・短径0.56m・深さ0.22mを測る。土坑の位置は上面配石の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。現地調査では、S K1133はS K1131に切られかつS K1135を切ると判断し、S I 28の東端がS K1131の掘形上に位置することから、S K1131・1133は関連が深い可能性がある。

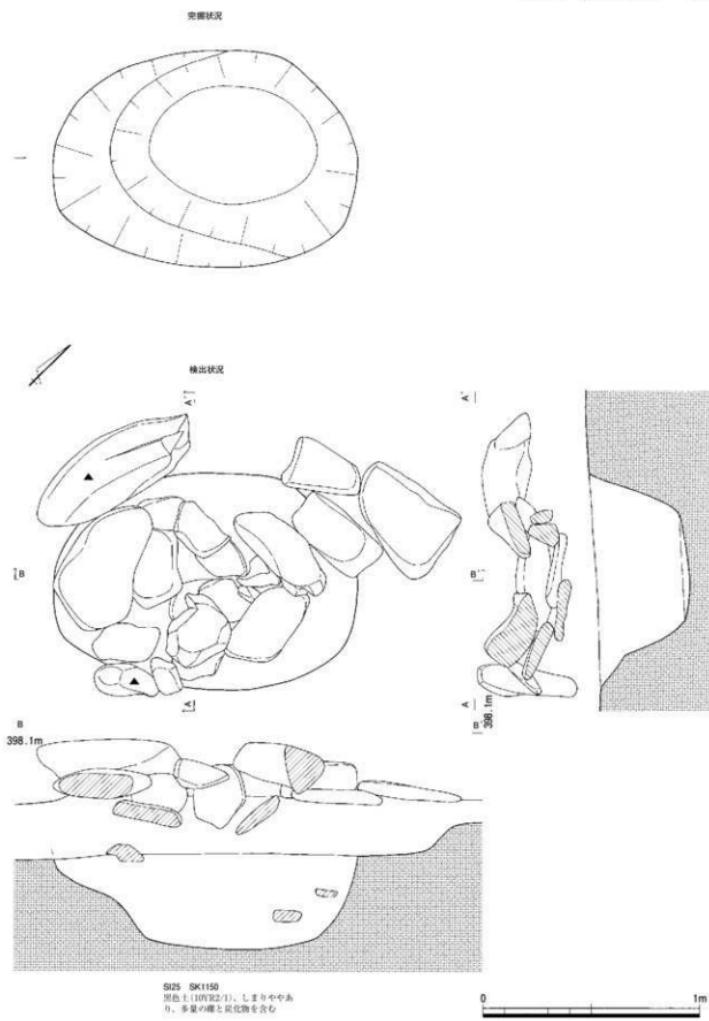


図39 第3 A調査面検出遺構図 (6)

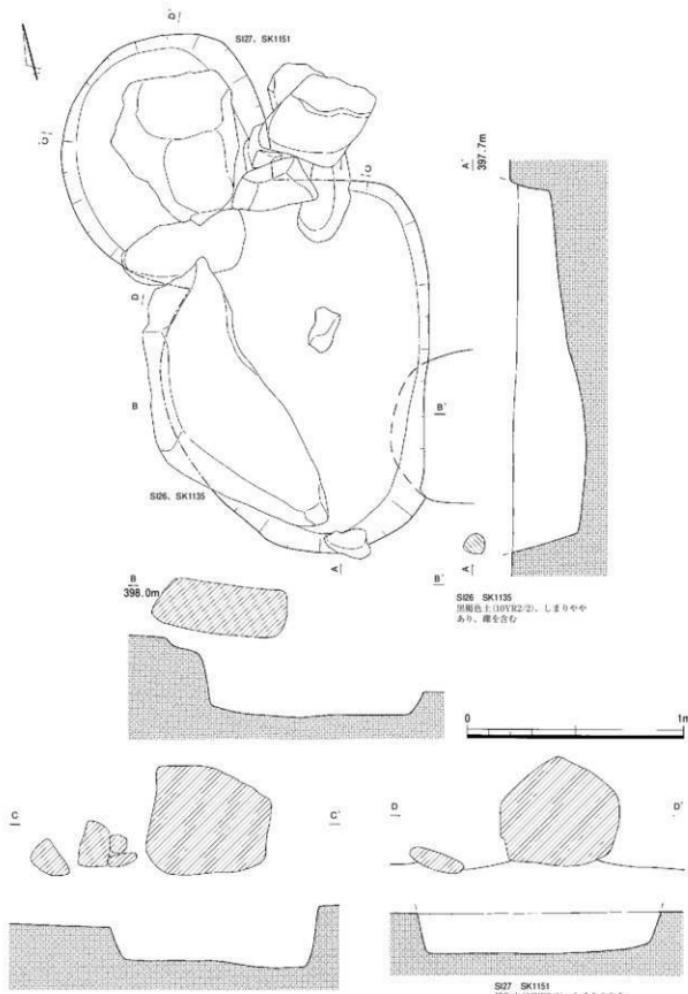
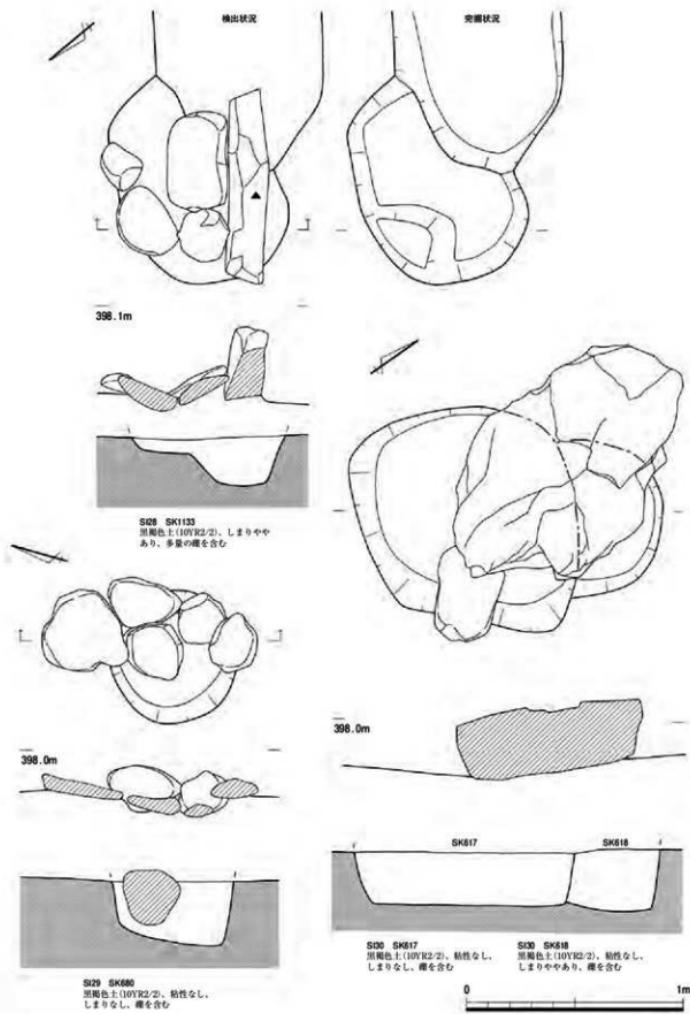


図40 第3A調査面検出構造図 (7)



出土遺物 なし。

S I 29・SK 680 (図41、図版13)

位置 L14・M15グリッドに位置し、S I 20に隣接する。

上面配石 V a 層中で検出した。重複遺構はない。平面形は不明で、南北長0.99mを測る。長径23~38cmの礫5個を平置きとする。礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（配石2類）。礫の円磨度は扁平角礫である。一部の礫に被熱の痕跡が認められた。

土坑 種除去後のV b 層基底面で検出した。長径0.47m・短径0.43m・深さ0.29mを測る。SK 697を切る。土坑の位置は上面配石の範囲とほぼ一致しており、関連が深いと判断した。土坑の埋土中から、長径26cmの礫1個が底面から浮いた状態で出土した。

出土遺物 上面配石の直下から、石礫片1点・打欠石錐1点(2226)が出土した。

S I 30・SK 617 (図41、図版13)

位置 L14グリッドに位置し、S I 21に隣接する。

上面配石 V a 層中で検出した。重複遺構はない。平面形は不明である。長径46cmと134cmの礫2個を平置きとする。礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（配石2類）。礫の円磨度は、角礫と扁平角礫である。いずれの礫にも被熱の痕跡が認められ、大型の礫の上面は剥離が顕著である。

土坑 種除去後のV b 層基底面で検出した。長径0.87m・短径0.85m・深さ0.28mを測る。SK 618・697を切る。土坑の位置は上面配石の範囲とほぼ一致しており、関連が深いと判断した。

出土遺物 なし

S I 31・S I 32・SK 1110 (図42、図版12)

位置 L15グリッドに位置し、S I 22に隣接する。 調査当初1基の配石遺構と認定していたが、礫の配置状況・石材の違いから、2基の重複（北側をS I 31・南側をS I 32とする。）と判断した。

上面配石 V a 層中で検出した。S I 31の南端の礫が、S I 32の上に位置する。S I 31の平面形は円形であり、直径0.64mを測る。一方のS I 32の平面形は長方形であり、長辺0.70m・短辺0.55mを測る。S I 31は中心に長径30cmの礫1個を北西に向けて置き、やや小ぶりの長径12~23cmの礫を平置きで縁石とする（配石1類）。礫の円磨度は大半が角礫で、扁平角礫1個を伴う。礫の下部では、土坑は検出されなかった。一方のS I 32は中央に長径35cmの礫1個（以下「底石」とする）を平置きにとし、その上に長径28cmの礫1個を長軸方向に向けて置く。底石の外周上には、礫を長手立てとし縁石とする。礫の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（配石1類）。礫の円磨度は扁平円礫が主体で角礫を伴い、石材は砂岩で占められる。

土坑 種を除去後のV b 層基底面で検出した。長径0.83m・短径0.40m以上・深さ0.09mを測る。土坑の位置は上面配石（S I 32）の範囲と一致しており、関連が深いと判断した。SK 1107・1108・1169を切る。

出土遺物 なし。

S I 33・SK 1145 (図42)

位置 L14グリッドに位置し、S I 25に隣接する。

形状と規模 級2個のみ遺存しているため、判断できない。平面形は不明である。

概要 V b 層中で検出した。重複遺構はない。径44cm・60cmの礫2個を平置きとする（配石2類）。

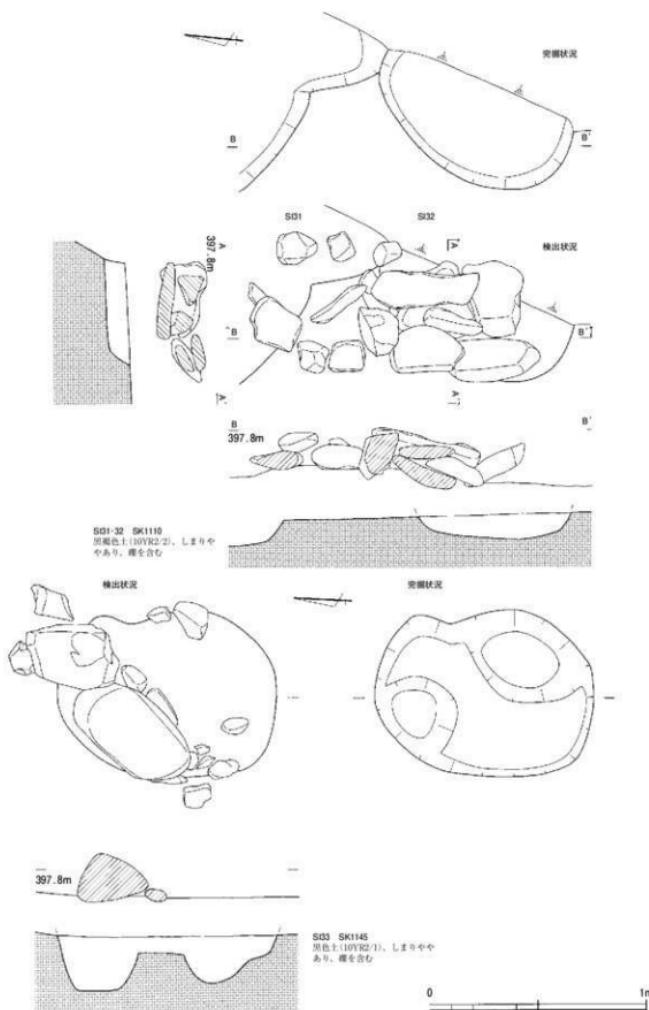


図42 第3 A調査面検出遺構図 (9)

蝶の円磨度は角蝶と亜円蝶である。南側の蝶には被熱の痕跡が認められた。

土坑 蝶除去後のV b層基底面で検出した。長径0.92m・短径0.64m・深さ0.28mを測る。土坑の位置は上面配石の範囲とほぼ一致しており、関連が深いと判断した。蝶の偏りや土坑の平面形・底面の様子から、2基の土坑の重複の可能性もある。

出土遺物 なし

S I 34・S K2464 (図43、図版12)

位置 L14グリッドに位置し、S I 30に隣接する。

上面配石 V b層中で検出した。重複造構はない。平面形は不明で、南北長2.00mを測る。長径18~66cmの蝶を平置きとする。北半では蝶の上面は概ね西に向かって下がるのでに対し、離れた位置にある2個の蝶はほぼ水平である(配石2類)。蝶の円磨度は大半が角蝶と扁平角蝶で、少量の亜円蝶・円蝶・扁平円蝶を伴う。一部の蝶に被熱の痕跡が認められた。

土坑 蝶除去後のV b層基底面で、重複する5基の土坑を検出した。このうち、プランが完結する円形の土坑(S K2464)が、S I 34に伴うと考えられる。長径0.41m・短径0.40m・深さ0.27mを測る。土坑中央で、底部を欠損する後期前業の土器(207)が斜位で出土した(土坑C 1類)。

出土遺物 上面配石の精査中に、後期後業の土器(171)が出土した。

4 土坑

S K98 (図43、図版13)

位置 I 21・J 21グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形で、長径0.49m・短径0.32m・深さ0.34mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複造構はない。土坑の東壁に沿って、蝶1個を置く(土坑B 2類)。土坑の底面は、西に向かって深くなる。

出土遺物 なし。

S K101 (図43、図版13)

位置 J 21グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形で、長径0.20・短径0.19・深さ0.36mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複造構はない。埋土上部の土坑中央で、蝶1個(長径29cm・短径11cm・厚さ10cm)を長手立てとする(土坑D 2 c類)。

出土遺物 なし。

S K113 (図44、図版13)

位置 F 19・G 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形で、長径計測不能・短径0.55m・深さ0.20mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複造構はない。埋土上部で、長径5~24cmの蝶を用いて方形囲い(長辺0.76m・短辺0.54m)とする。蝶は小口立て又は平置きとし、北東辺と南東辺のみ二重に配置する(土坑B 2類)。蝶の円磨度は大半が亜円蝶で少量の角蝶を伴い、被熱した蝶を含む。

出土遺物 なし。

S K115 (図45、図版13)

位置 P 14グリッドに位置する。

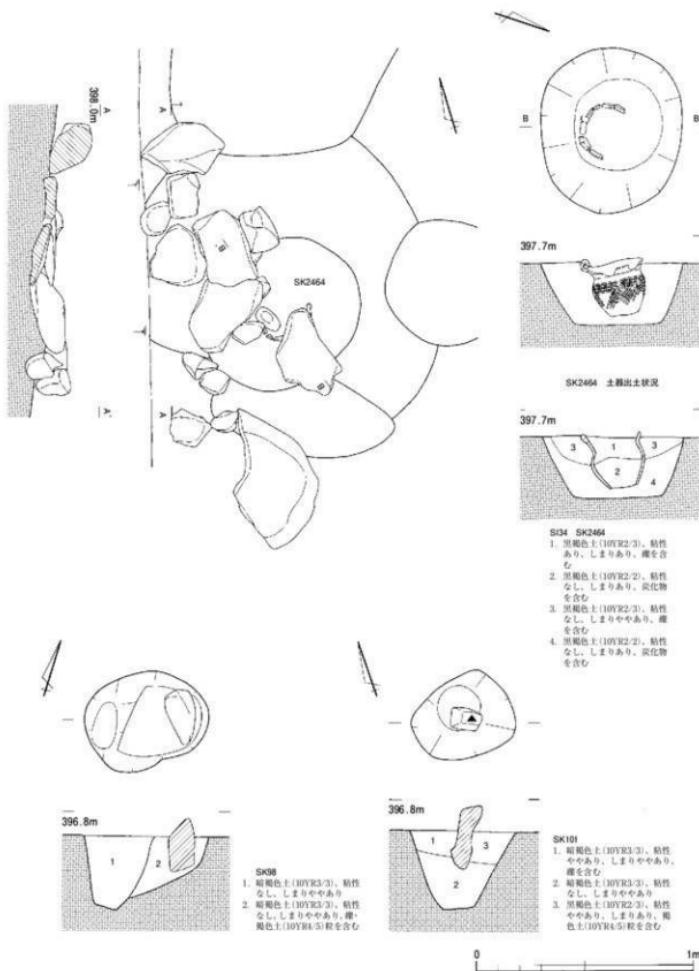


図43 第3 A調査面検出遺構図 (10)

形状と規模 平面形は不整円形で、長径0.60m・短径0.53m・深さ0.18mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、北西辺を除く3辺では長径17~37cmの縹を小口立てとし、北西辺ではやや小ぶりの長径15cm程度の縹を2段に積み、方形囲いとする（土坑B 2類）。縹の円磨度は大半が亜円縹で少量の亜角縹を伴い、被熱した縹を含む。なお埋土中に焼土ブロックが点在していたが、底面・壁面では被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 なし。

S K116 (図45、図版14)

位置 G20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形で、上端長径1.04m・上端短径0.78m・深さ0.16mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土全体にわたって、長径5~28cmの多量の縹が検出された。縹の円磨度は大半が亜角縹で、少量の亜円縹を伴う。また、土器片も埋土全体にわたって出土した。接合作業の結果、土器（175）は口縁部から胴部下半まで遺存し、器面を一周した（土坑E類）。

出土遺物 埋土から、中期後葉の土器（175~181）、石錐1点・搔器1点・石皿1点が出土した。

S K118 (図46、図版14)

位置 I21グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形で、長径0.55m・短径0.46m・深さ0.17mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、長径19~40cmの縹を2列に長手置きとする（土坑D 1 b類）。縹の円磨度は亜円縹又は亜角縹で、被熱した縹を含む。

出土遺物 埋土から、後期初頭の土器（190）が出土した。

S K124 (図44、図版13)

位置 J 5グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径0.51m・短径0.28m・深さ0.09mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。長径33~40cmの縹4個を花弁状に平置きとし、中心にやや小ぶりの縹1個を置く。縹の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる（土坑B 2類）。縹の円磨度は、扁平円縹と扁平角縹である。

出土遺物 なし。

S K125 (図45、図版14)

位置 H14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形で、長径1.07m・短径0.82m・深さ0.50mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K925に切られる。埋土全体にわたって、長径8~43cmの多量の縹が検出された（土坑D 1 b類）。縹の円磨度は亜円縹が主体で、少量の亜角縹を伴う。北西端にある長径0.5m程度の不整梢円形の土坑と重複し、土坑中央の埋土上部で亜円縹1個（長径40cm・幅29cm・厚さ10cm）を長手立てとするが、本遺構との切り合い関係を現地調査で明らかにすることはできなかつた。

出土遺物 なし。

S K128 (図46、図版14)

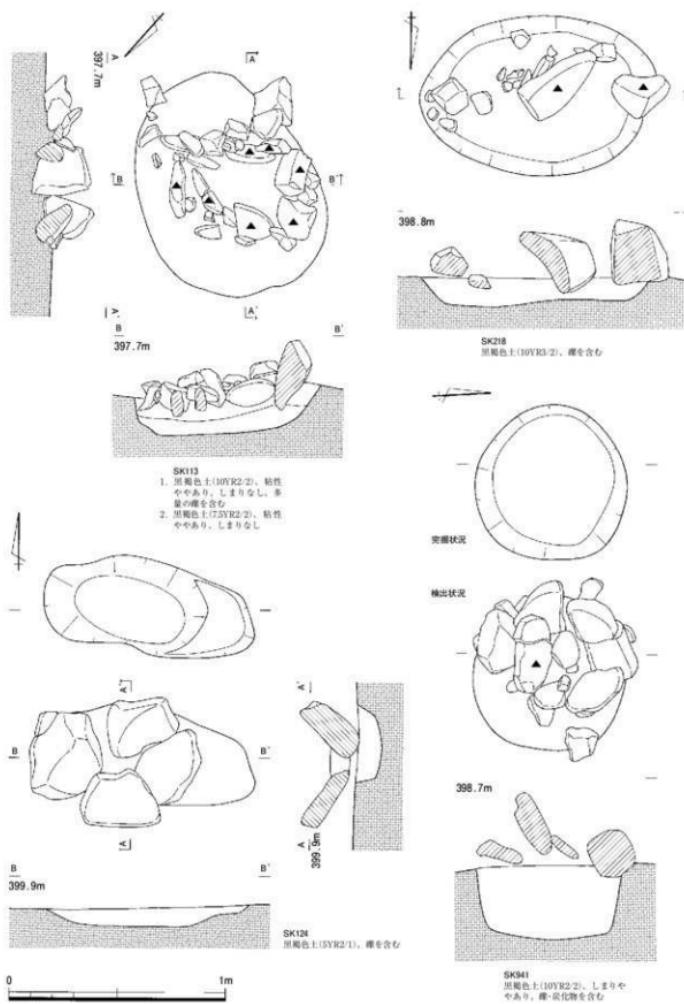


図44 第3A調査面検出遺構図 (11)

位置 K 7 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形で、上端長径0.49m・上端短径0.47m・深さ0.17mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑中央で、口縁部を欠損する後期前葉の土器（194）が正位で出土した（土坑C 1類）。

出土遺物 土器（194）のみが出土した。

S K129（図46、図版14）

位置 J 10 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形で、上端長径0.70m・上端短径0.54m・深さ0.19mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。S K780を切る。埋土上部の土坑中央で、後期前葉の土器片が集中的に出土した。接合作業の結果、土器（193）は胴部上半を欠損するものの器面を一周した（土坑C 2類）。

出土遺物 埋土から、R F 1点・U F 1点・切目石錐1点が出土した。

S K130（図46、図版14）

位置 L 16 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形で、長径0.7m・短径0.45m・深さ0.29mを測る。

概要 V a 層上面で検出した。重複遺構はない。底面は西側で段状に下がる。埋土上部の中央やや西側で、後期中葉の土器片と少量の蝶が集中的に出土した。接合作業の結果、土器（195）は口縁部から底部まで遺存し器面を半周した（土坑E類）。

出土遺物 土器（195）のみが出土した。

S K131（図46、図版14）

位置 K 12 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形で、上端長径0.54m・上端短径0.45m・深さ0.38mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑中央で、口縁部の一部と底部を欠損する後期初頭の土器（196）が、ほぼ正位で出土した（土坑C 1類）。

出土遺物 埋土から、R F 2点が出土した。

S K132（図46、図版15）

位置 O 15 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形で、上端長径0.48m・上端短径0.47m・深さ0.14mを測る。

概要 V b 層基底面のS B16 埋土上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑中央で、口縁部を欠損する後期前葉の土器（197・199）が、斜位で出土した（土坑C 2類）。

出土遺物 埋土から、石鏃2点と骨片が出土した。

S K218（図44）

位置 H 6 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.85m・短径0.60m・深さ0.14mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑西端にの亜角蹠1個（長径30cm・短径27cm・厚さ18cm）を長手立てとし、土坑の中央に長径40cmの亜円蹠を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

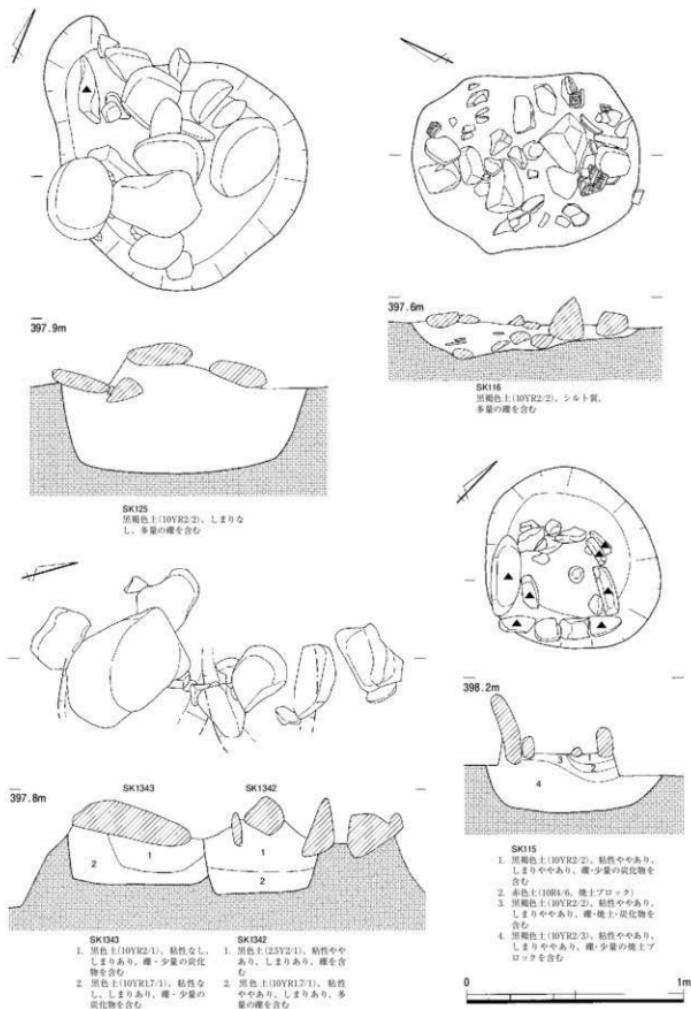


図45 第3A調査面検出遺構図 (12)

S K941 (図44、図版15)

位置 K 9 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.6m・短径0.6m・深さ0.4mを測る。

概要 V b 層基底面で検出したが、埋土中の蹠は、本調査面のV b 層中で検出した。重複遺構はない。中央の円蹠1個（長径45cm・短径20cm・厚さ20cm）を長手立てとし、南西端に30～35cm程度の蹠2個を平置きとする（土坑D 1 b）。蹠の上面は、概ね本遺構の中央に向かって下がる。蹠の円磨度は、亜円蹠又は円蹠で占められる。北端の立石は被熱による表面の剥離が顕著で、石圓炉の炉石の転用の可能性がある。

出土遺物 なし。

S K1342・S K1343 (図45)

位置 M16グリッドに位置する。

形状と規模 蹠の並ぶ向きに合わせて南北方向に断ち割ったところ、複数の土坑の立ち上がりが認められ、うち北側を S K1342（短径0.44m・深さ0.25m）、南側を S K1343（短径0.55m・深さ0.22m）とした。プランの全体を検出することはできなかったため、土坑の長径と平面形は不明である。

概要 V a 層中で検出した。S K1342がS K1343を切る。S K1342では、埋土上部で長径30cm前後の蹠を平置き又は小口立てとし、列状に配置する（土坑D 1 b類）。S K1343では、長径28cmと59cmの蹠が浮上する（土坑D 2 b類）。いずれも蹠の円磨度は亜円蹠で占められる。

出土遺物 蹠の直下で後期中葉から後葉の土器（174）が、S K1342の埋土からU F 1点と骨片が出士した。

5 埋設土器

S Z 6 (図46、図版15)

位置 I 13・J 14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形で、長径0.50m・短径0.40m・深さ0.27mを測る。

概要 V b 層上面で検出した。重複遺構はない。胴部上半を欠損する後期前葉の土器（200）が、正位で出土した。

出土遺物 土器（200）のみが出土した。

6 遺物集積

S U 1 (図版15)

位置 H 6 グリッドに位置する。

概要 V b 層中で検出した。重複遺構はない。2個体の土器が集中的に出土した。

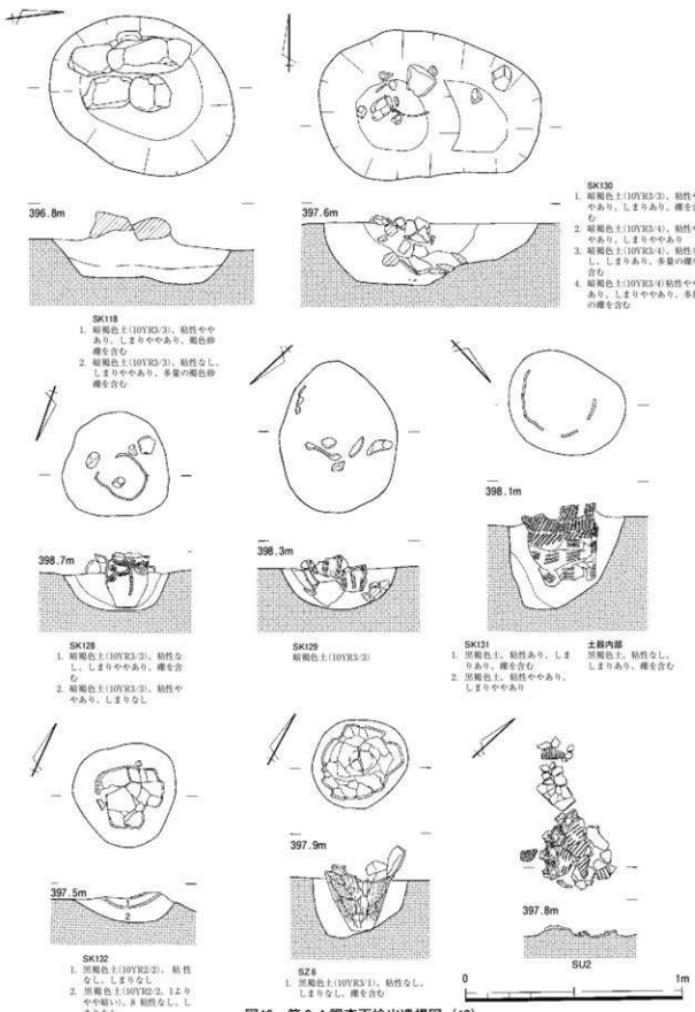
出土遺物 中期後葉の土器（203～206）が出土した。

S U 2 (図46、図版15)

位置 Q16グリッド、S B 6 の北東部に隣接する。

概要 V a 層中で検出した。重複遺構はない。3個体の土器が、東西0.71m・南北0.42mの範囲で集中的に出土した。

出土遺物 中期後葉の土器（198・201・202）が出土した。



第5節 第3B調査面

第3B調査面では地点によって検出面の土層が異なり（図7）、特にVI・VII・VIII層上面における遺構の検出は困難であった。標高ではH3グリッドが最も高く（約399.0m）、N24グリッド及びU28グリッドが最も低い（約396.0m）。当調査面の形状をみると、遺構密度の高い調査区中央ではほぼ平坦で、遺構密度が低い地区では南に向かって傾斜する。特にN22グリッドからN24グリッドにかけては急で、段丘斜面に向けて浸食した可能性が考えられる。



図47 第3B調査面全体図

1 壊穴住居跡

S B 5 (現場名 S X 8、図48・49、図版17)

位置 G 8・G 9・H 8・H 9グリッドに位置する。

検出状況 V b 層中で検出した。壊穴の南西隅が削平され、IX a 層中で遺構を検出した。S K2441・2442との重複が認められるが、調査段階で切り合い関係を明らかにすることはできなかった。埋土は單層で、亜円礫が多く含まれた。

形状と規模 平面形は円形と考えられる。長径4.12m以上・短径3.87m以上・床面積13.50m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.16mを測り、壁は壊穴が遺存している箇所ではわずかに立ち上がる。当初 S F31の検出面が床面と想定されたが、同一面で遺構を検出することができず IX a 層上面に達したため、検出面は凹凸が著しく、壊穴の掘形に達した可能性がある。このような調査経緯から、S F31の検出面以下に最大厚約8cmの貼床が存在したことが想定される。ただし、明確な硬化面は認められなかった。

施設 壊穴の内部で8基の遺構を検出した。柱穴は4基（P 121・122・125・127）が想定できる。P 121・127とP 122・125は、壊穴の長軸を挟んで左右対称に位置する。P 124とP 126も長軸に左右対称に配置されているが、どのような性格の柱穴であるか不明である。石畳炉S F31（図49左下）は軸線上に位置する。炉石のうち西辺は抜き取られているが、他の3辺は遺存していた。いずれも礫の円磨度は、円礫又は亜円礫である。南北辺は上下二段に積まれ、南辺の礫は平坦面を上に向けて水平に置かれていた。3辺の炉石を安定させるために、掘形との隙間に亜角礫が詰められていたが、南西隅には亜円礫1個を立石状に配置していた。炉跡の内部には、北半に土器片（216・217・219・220）が敷かれ、その直上に焼土粒混じりの黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 壊穴の埋土から、繩文土器・炭化物が散在的に出土した。土器は中期後葉で占められる。石器については、石核1点・石鏃7点・石錐3点・削器1点・R F 9点・U F 3点・磨・敲石類4点・打欠石錐3点・切目石錐6点が出土した。

所属時期 S F31の土器敷きの土器から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B 6 (現場名 S X 9、図50~53、図版17・18)

位置 P 16・P 17・Q 17グリッドに位置する。

検出状況 V b 層中で検出した。S K424~426に切られ、S K440・497を切る。埋土は5層に分けられ、亜円礫又は亜角礫が多く含まれた。土層は東側に偏った堆積である。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径5.36m・短径4.86m・床面積19.40m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.66mを測り、南北壁は垂直に近く立ち上がるが、東西壁は比較的緩やかに傾斜する。埋土の5層上面でやや硬化が認められ床面の可能性があつたが、遺構が検出されないために掘削を進め、IX a 層上面で遺構を検出したため、結果的に壊穴中央に位置する埋甕S Z 7の土器が、壊穴の掘形の底面から約10cm露出した。このことから、5層は貼床であったと解釈できる。

施設 壊穴の内部で26基の遺構を検出した。柱穴は6基（P 129・135・136・140・145・152）が想定できる（柱配置1）。P 135・145を結ぶ線を軸として、P 129・152とP 136・140が左右対称に位

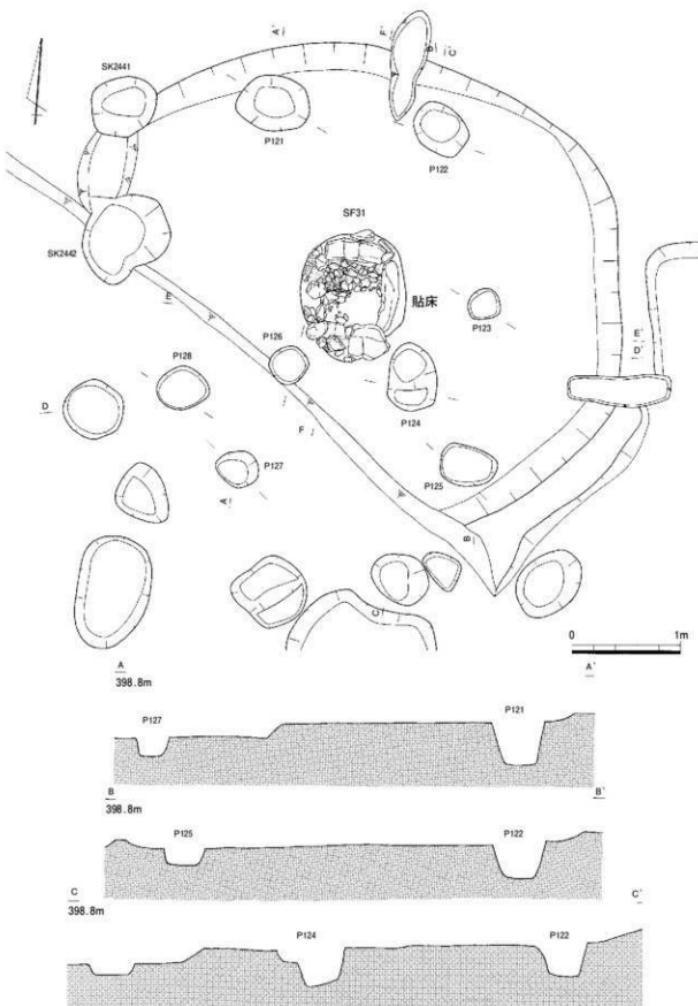
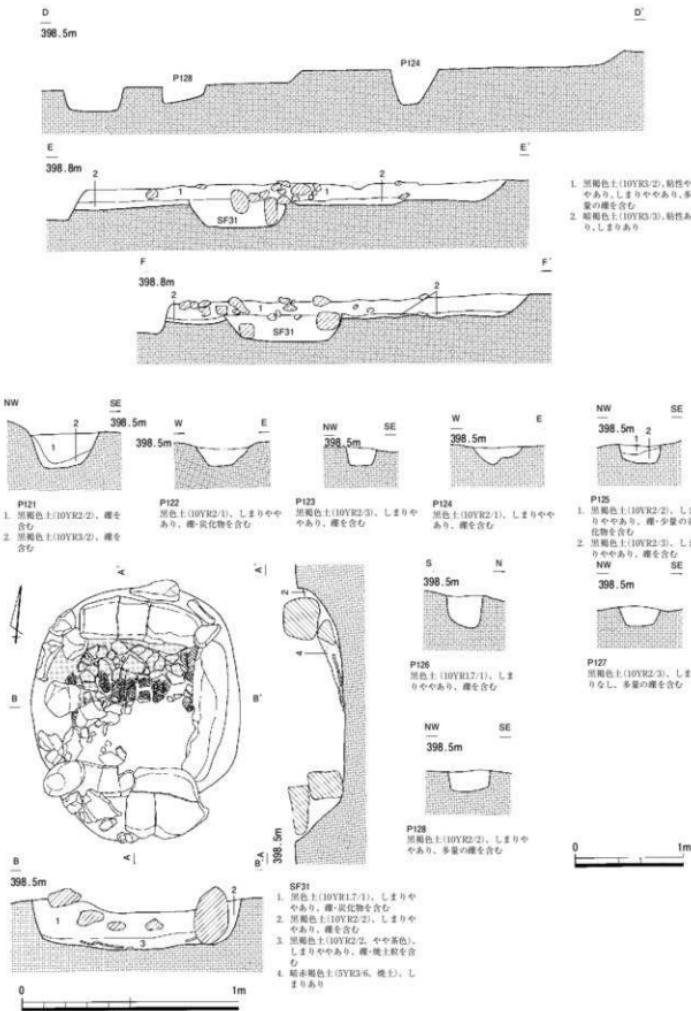


図48 SB5造構図（1）



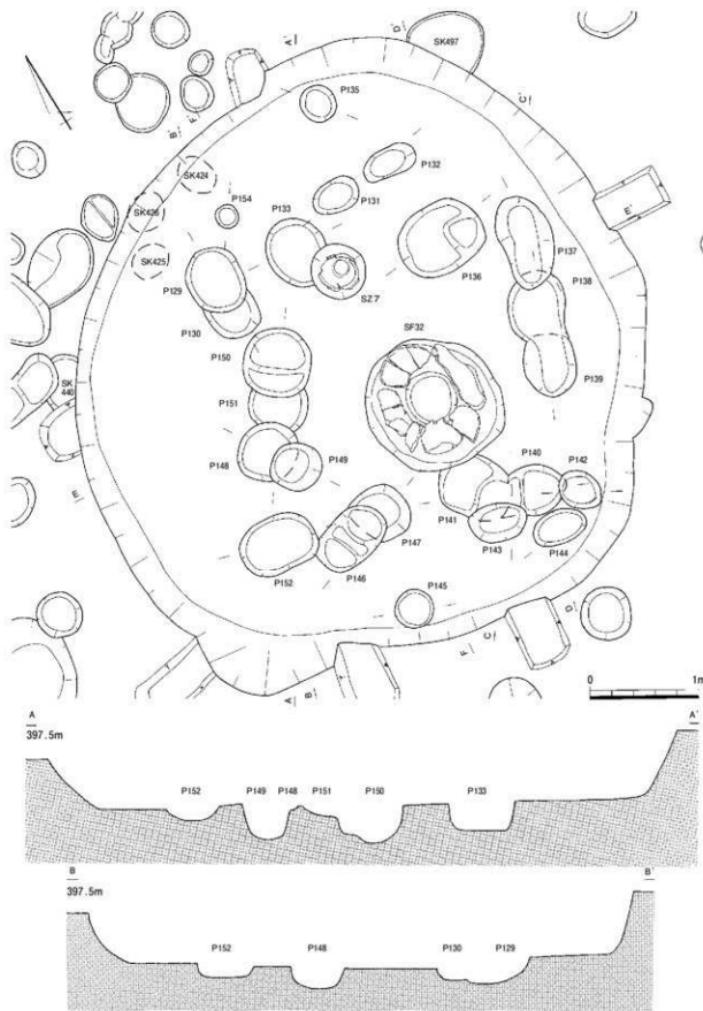


図50 SB6遺構図（1）

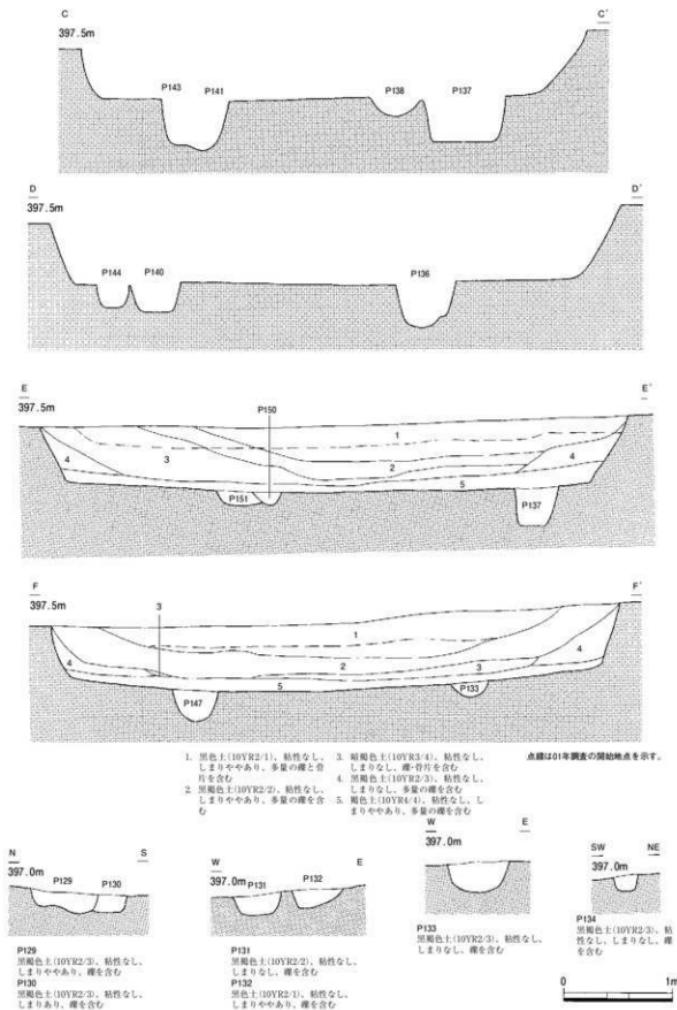


図51 S86造構図 (2)

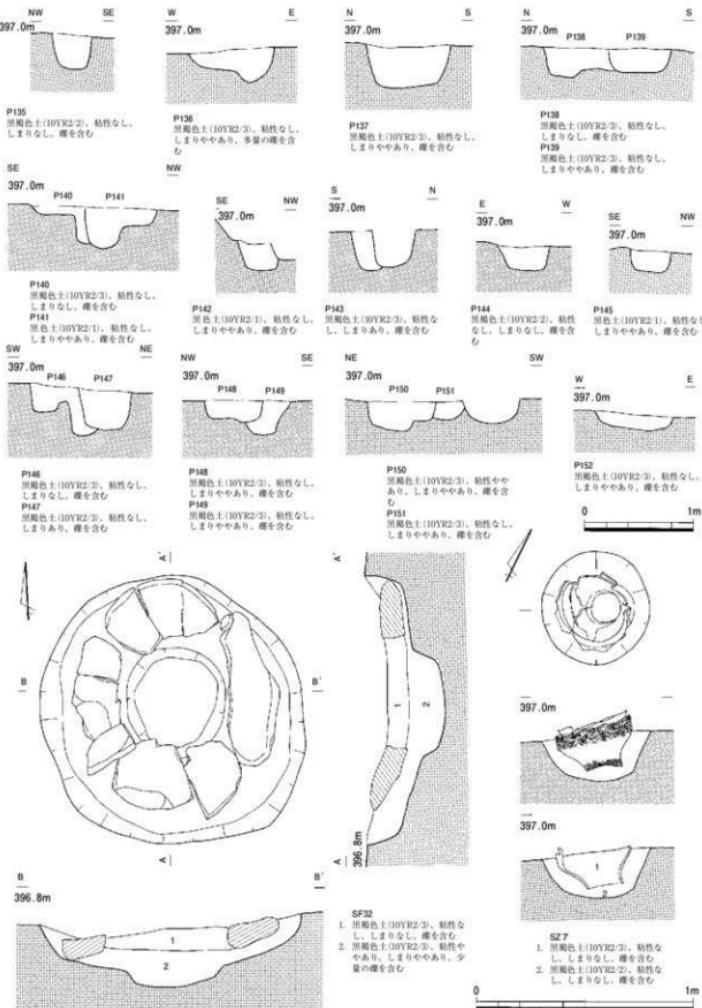
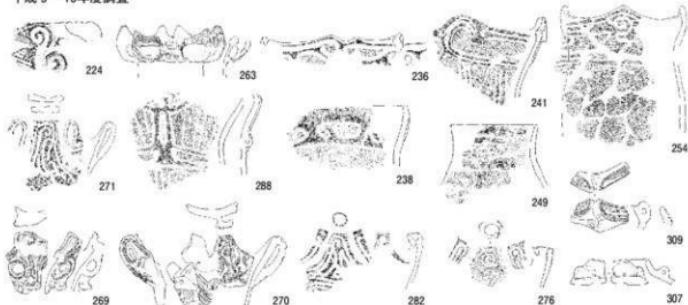
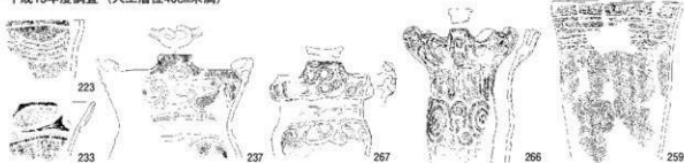


図52 SB6造構図 (3)

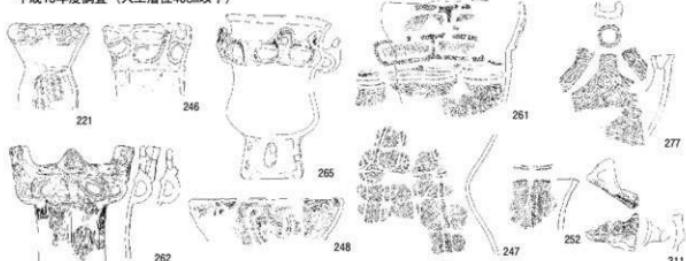
平成9・10年度調査



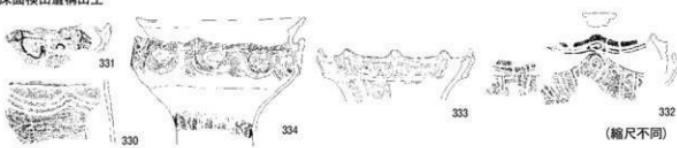
平成13年度調査（人工層位40cm未満）



平成13年度調査（人工層位40cm以下）



床面検出遺構出土



(縮尺不同)

図53 SB6の主な土器の出土状況模式図

置する。これとは別に、4基（P133・137・143・149）が想定できる（柱配置2）。P133・149とP137・143の中点を結ぶ線を軸として、P133・137とP143・149が対称に位置する。遺構の重複関係では、柱配置1の長軸上に位置するS Z 7がP133（柱配置2）を切り、P140（柱配置1）がP143（柱配置2）を切ることを確認しているため、柱配置2が柱配置1に先行することは明白である。石圓炉S F32（図52左下）は、柱配置1の長軸線から東寄りに位置する。炉石は扁平な亜円礫の平坦な面を上にして、東側に細長い礫を置いてやや小ぶりの礫で弧状に囲む。炉跡の内部には焼土が認められなかつたが、炉石の内側と底面で被熱の痕跡が認められた。炉石は底面から離れた位置に据えられてであることから、作り替えの可能性がある。埋甕S Z 7（図52右下）はP129とP136の柱間中央に位置し、胴部下半を欠いた土器が斜位に出土した。

出土遺物 窓穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が多く出土した。土器は、早期中葉（1436）から中期中葉が認められるが、主体は中期後葉であり、特に4層付近では完形に近い土器が多い（図53）。石器は、分割礫1点・石核1点・石礫24点・石礫未製品1点・石錐5点・石匙1点・搔器5点・削器1点・ヘラ形石器4点・楔形石器7点・R F35点・U F20点・打製石斧1点・磨・敲石類9点・打欠石錘6点・切目石錘27点・磨製石斧2点・石皿1点が出土した。

所属時期 S F32・P145・S Z 7出土土器（順に330・331・334）から、中期後葉（第2段階）と判断する。

S B 7（現場名S X12、図54・55、図版19）

位置 K 8・K 9・L 9グリッドに位置する。

検出状況 V b層上面で検出した。S B15に切られる。埋土は2層に分けられ、亜円礫又は亜角礫が多く含まれた。土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径4.87m・短径4.06m・床面積13.55m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約40cmを測り、壁は明瞭に立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で4基の遺構を検出した。この他に、S B15で検出したP156がある。柱穴は4基（P153・154・155・156）が想定できる。石圓炉S F33（図55下）は窓穴の長軸上に位置する。炉跡の内部にはよく焼けてしまひのある焼土が検出され、焼土上面の中央は削られてやや窪んだ形状であった。焼土の直下に、土器片（401）が内面を上にして敷かれていた。焼土の外側に焼土を切る別の掘形があることから、炉石の抜き取りの痕跡の可能性がある。

出土遺物 窓穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、早期後葉（1441）・中期中葉と、中期後葉から後期初頭までの時期幅がある。ただし主体は中期後葉である。石器は、石核4点・石礫14点・石錐3点・ノッチドスクレイバー1点・ヘラ形石器2点・楔形石器7点・R F 7点・U F 6点・打製石斧1点・磨・敲石類4点・打欠石錘9点・切目石錘34点・磨製石斧1点・石皿1点が出土した。

所属時期 S F33の土器敷き及び出土土器の主体から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B 8（現場名S X15、図56～58、図版19・20）

位置 I 20・I 21グリッドに位置する。

検出状況 V b層中で検出した。S Z 13・S K1563・1625・1712・1713に切られる。窓穴の南壁・

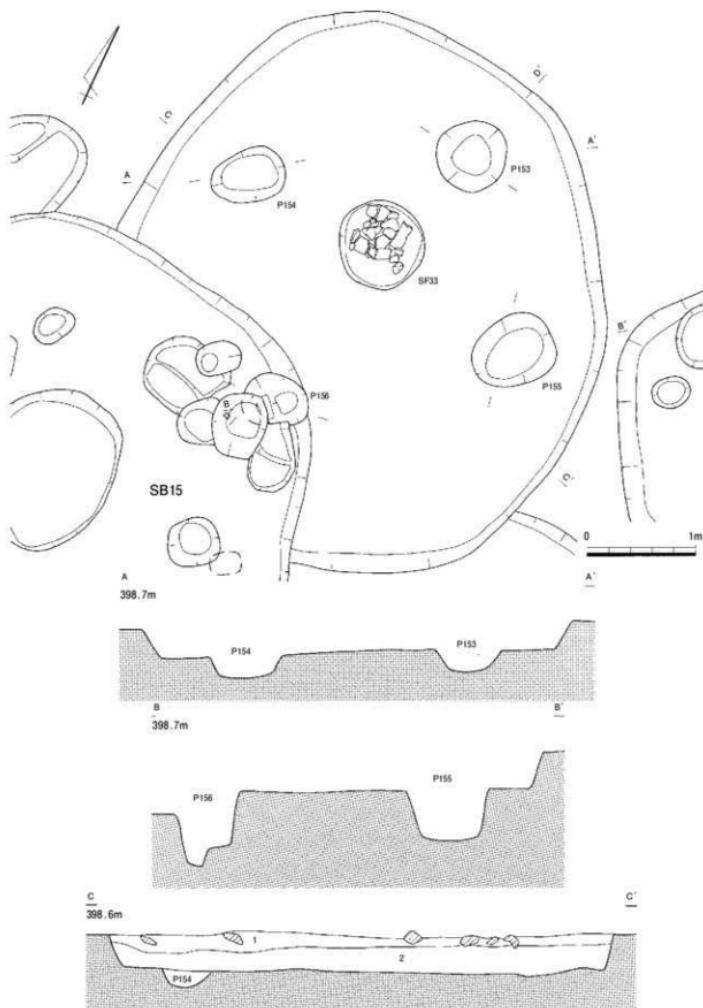


図54 SB7構造図 (1)

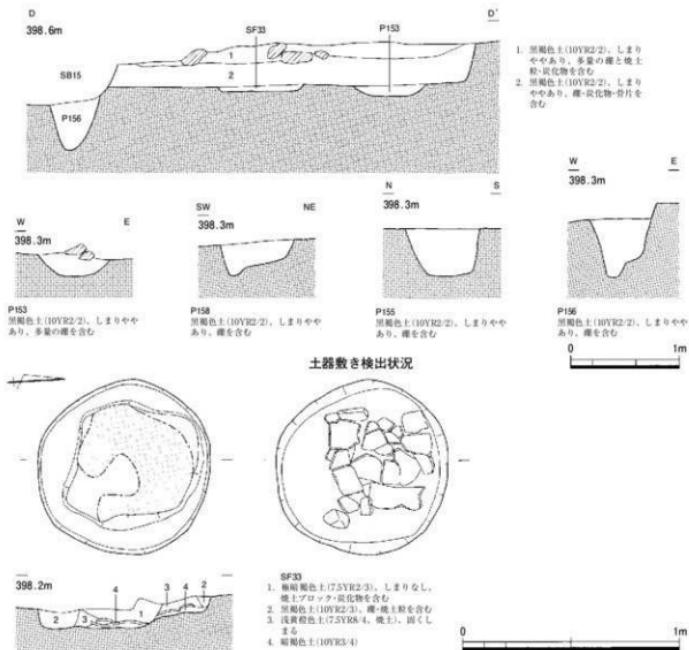


図55 SB7遺構図(2)

東壁は多数の土坑が密集するため、立ち上がりを確認することはできなかった。また本遺構は多くの遺構と重複しているが、切り合い関係のすべてを現地調査で明らかにすることはできなかった。埋土は2層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 圓丸方形と考えられる。長径4.67m・短径3.46m・床面積は測定不能である。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.42mを測り、西壁は垂直に近く立ち上がるが、北壁は比較的緩やかに傾斜する。明確な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく豊富な複数の断面に達した可能性がある。

施設 窓穴の内部で28基の遺構を検出した。柱穴は6基（P157・160・164・169・175・181）が想定できる（柱配置1）。P175・181とP160・164の中点を結ぶ線を軸とし、P157・160・181とP164・169・175は左右対称に位置する。これとは別に、4基（P158・163・165・174）も想定できる（柱配置2）。S.F35炉石の北隅を中心とした、同心円状の配置となる。現地調査では、P174（柱配置2）がP175（柱配置1）を切ることを確認したため、柱配置1が柱配置2に先行する。炉跡は石開

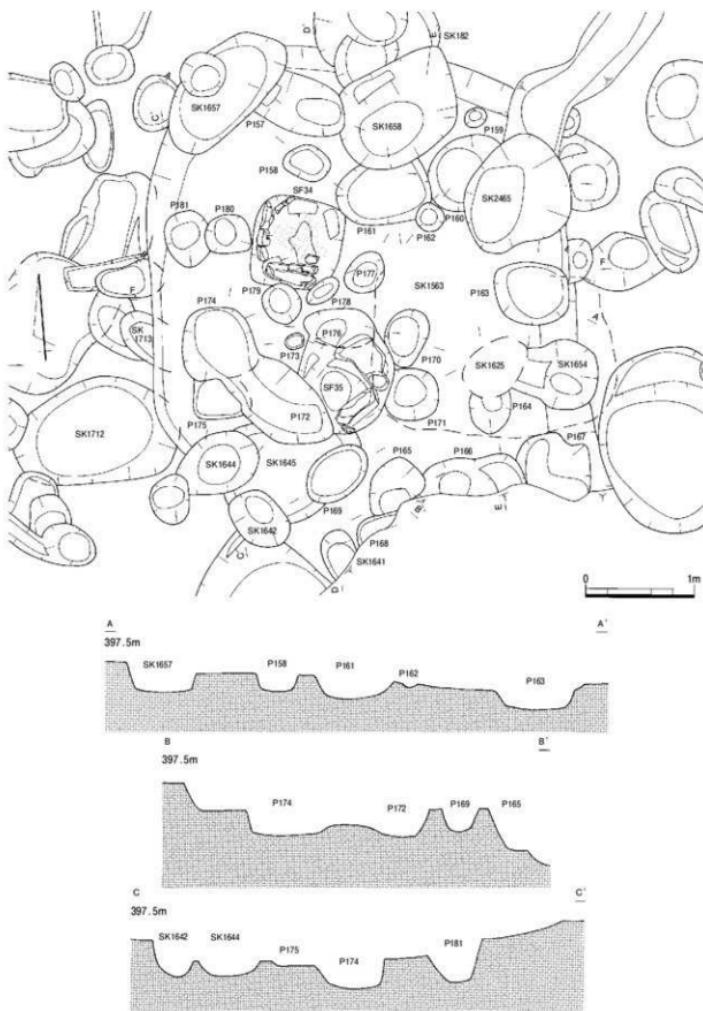


図56 SB 8 遺構図（1）

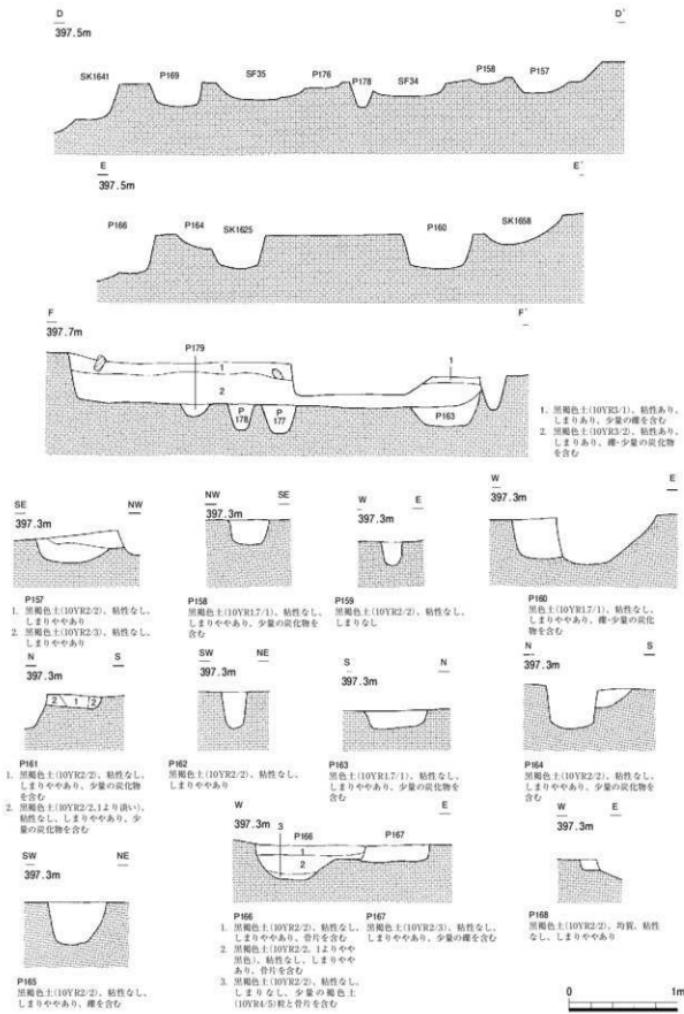


図57 SB8 造構図 (2)

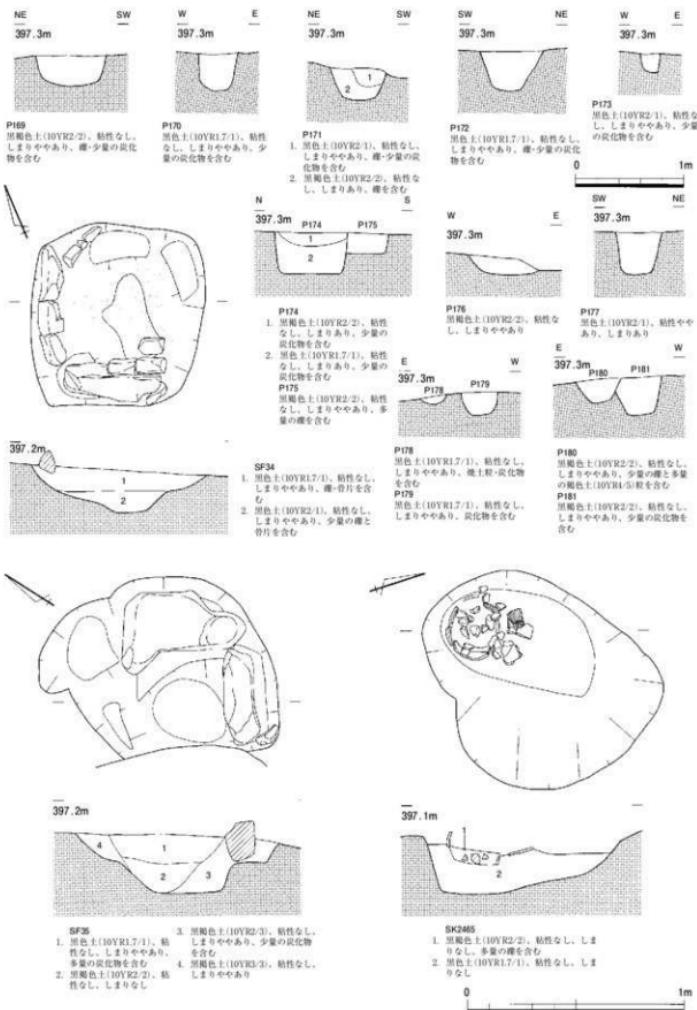


図58 SB 8 遺構図 (3)

炉が2基検出され、柱穴との位置関係から、S F 34が柱配置1、S F 35が柱配置2に伴うと考えられる。S F 34（図58左上）では、南・西辺の炉石は細長い亜円礫を用いて囲み、北・東辺の炉石は抜き取られていた。炉の内部では焼土が検出されず、底面と炉石の内側に被熱の痕跡が認められた。一方のS F 35（図58左下）では、北東と南東の炉石は細長い亜円礫を用い、北東の炉石は平坦面を上に向けて水平に据えられており、北西・南西の炉石は抜き取られていた。炉の内部では焼土が検出されず、炉石の内側にのみ被熱の痕跡が認められた。なお竪穴の東端で検出した土坑S K2465（図58右下）は、埋土上部で口縁部と胴部下半を欠く土器が逆位で出土した（土坑C 1類）。現地調査では竪穴との切り合い関係が不明であったが、P 160（柱配置2）を切ることからS B 8廃絶後の遺構である可能性が高い。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期後葉がほとんどで、後期後葉が少量認められる。石器は、石錐未製品1点・R F 2点・磨・敲石類2点・切目石錐1点・石皿1点が出土した。

所属時期 柱穴P 157・174・石圓炉S F 34・35出土土器（順に410・409・411・412）から、中期後葉（第2段階）と判断する。竪穴埋没の上限はS K2465出土土器（413）の時期である。

S B 9（現場名S X19、図59・60、図版20）

位置 I 10・I 11・J 10・J 11グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。S K785・810に切られ、S K745・820・822を切る。他にも竪穴と多くの土坑が重複しているが、すべてを調査段階で明らかにすることはできなかった。埋土は土層断面図を示すことができないものの、全部で3層に分けられ、長径30cm以下の亜円礫が多く含まれた。壁際には三角堆積が認められ、土層は水平に堆積する。なお、埋土上部で検出された遺物集積S U 3は、絵画土器1個体（469）の破片が重なって出土したものである。

形状と規模 平面形は椭円形である。長径4.17m・短径3.96m・床面積推定10.33m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.14mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できずIX a層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性もある。

施設 竪穴の内部で22基の遺構を検出した。これらの中には必ずしもS B 9に伴わない後出の遺構も含まれている。例えばS F 36を切るS K2461は、S B 9廃絶後の土坑と考えられる遺構である。土坑長軸に沿って亜円礫を並べて、底部を穿孔した深鉢1個体（466）を横位に寝かせ、その内部から拳大の円礫1個が出土した。またこの深鉢の直下からは、さらに別個体の深鉢片（467）が三重に積まれていた（土坑E類）。またP 200では、土坑中央に亜円礫1個（径6cm・長さ24cm）を長手立てとする（土坑D 2 c類）。柱穴としては、土層堆積状況からP 183と、S F 36を挟んで対称の位置にあるP 191が想定できるが、他は不明である。炉は、竪穴中央で検出された地床炉S F 36が該当する。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は少量の中期後葉と、後期初頭から前葉まで認められる。石器は、石錐5点・石錐3点・搔器1点・削器4点・ヘラ形石器1点・楔形石器4点・R F 5点・U F 3点・打製石斧2点・磨・敲石類4点・切目石錐13点・磨製石斧1点が出土した。

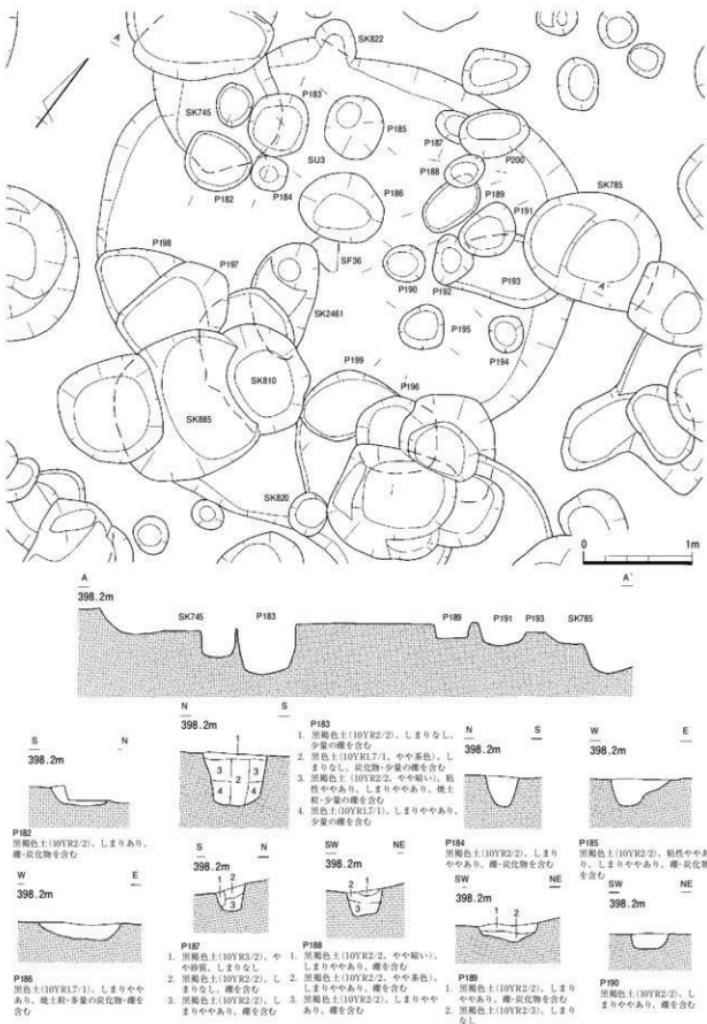


図59 SB 9 造構図 (1)

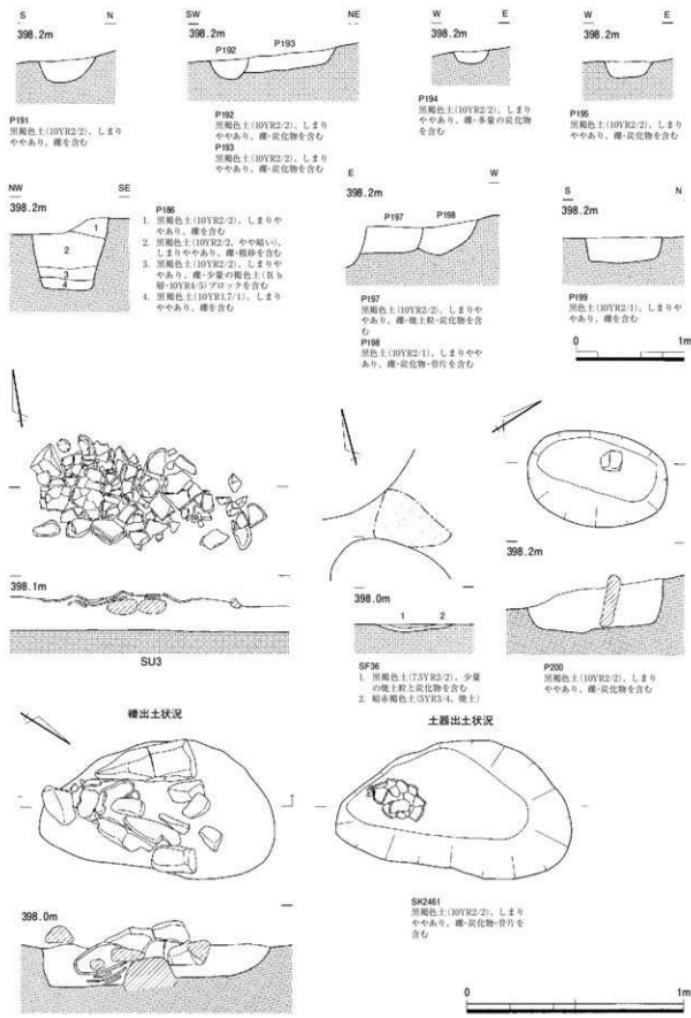


図60 SB 9 遺構図 (2)

所属時期 柱穴P183出土土器（464・465）は、埋土出土土器との時期が大きく異なるので混入とみなし、埋土出土土器の主体から、後期前葉四ツ池式併行と判断する。なお廃絶の上限はSK2461出土土器（466・467）の時期である。

S B 10（現場名S X25、図61、図版20）

位置 H10・H11・I10グリッドに位置する。

検出状況 Vb層底面で検出した。SK706に切られる。当初4m程度の円形の竪穴を想定したが、多数の土坑の重複と判断して掘削を進めたため、最終的に竪穴の掘形を検出することができなかった。

形状と規模 共に不明である。

壁・床面の状況 明確な貼床や硬化面は確認できず、IXa層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性がある。

施設 竪穴は4基（SK704・741・755・851）が想定でき、柱配置は不規則である。地床炉SF38はSK706に切られ、炉跡の内部には焼土ブロック混じりの暗褐色土が堆積していたが、被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 竪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期後葉から後期前葉まで認められる。石器は、石核1点・石錐4点・石錐未製品1点・石錐1点・搔器2点・削器1点・RF2点・打製石斧1点・磨・敲石類3点・打欠石錐1点・切目石錐7点・磨製石斧1点が出士した。なお、これらは竪穴の検出当初に取り上げた遺物を含む。

所属時期 竪穴SK704の出土土器（426）及び埋土出土土器の時期幅を勘案し、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B 11（現場名S X29・30、図62～64、図版21・22）

位置 M13・M14・N13・N14グリッドに位置する。

検出状況 Vb層中で検出した。SK158・577・583に切られる。土層断面図中の5層は別遺構の掘り込みのように見えるが、平面精査では検出できなかった。埋土は9層に分けられ、長径15cm以下の亜円碟が多く含まれた。土層は北西側に偏った堆積である。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径5.59m・短径4.50m・床面積18.30m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.34mを測り、壁は全般に比較的緩やかに傾斜する。明確な硬化面ではなく、竪穴の中央及び南東部に焼土ブロックが認められ、貼床の可能性がある。床面は西にやや傾斜する。

施設 床面で17基の遺構を検出した。このうち、柱穴は6基（SK202・203・204・209・211・214）が想定できる。P203・214の中点とP208を結ぶ線を軸として、P211・214とP203・204が左右対称に位置する。石開炉SF39（図64）は、南辺の炉石が長軸線上に位置する。炉石は東西辺を角碟の平坦な面を上にし、北辺は亜円碟を二重に立てている。南辺の炉石は廃絶時に抜き取られたと考えられる。炉跡の内部には焼土が認められ、炉石の内側で被熱の痕跡が認められた。埋甕SZ8（図63右下）は柱穴P211に隣接し、胴部下半を欠いた土器が逆位で出土した。

出土遺物 竪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、少量の早期後葉・中期前葉及び中葉と、中期後葉から後期前葉まで認められるが、主体は中期後葉である。石器は、分割碟1点・石核8点・石錐13点・石錐未製品2点・石錐3点・搔器8点・ヘラ形石器1点

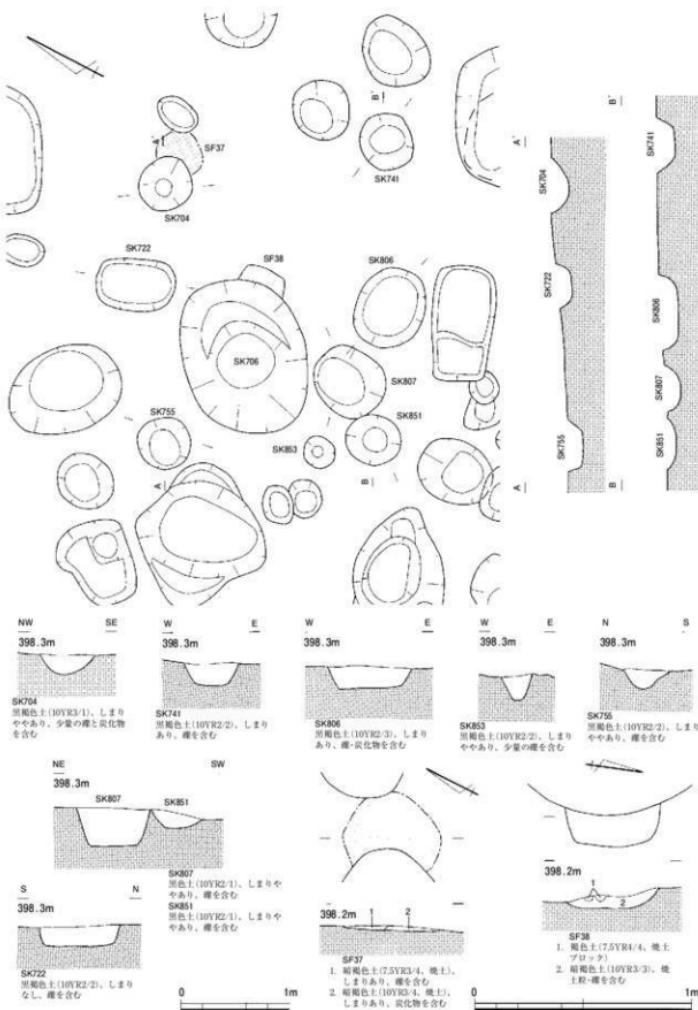


図61 SB10造構図

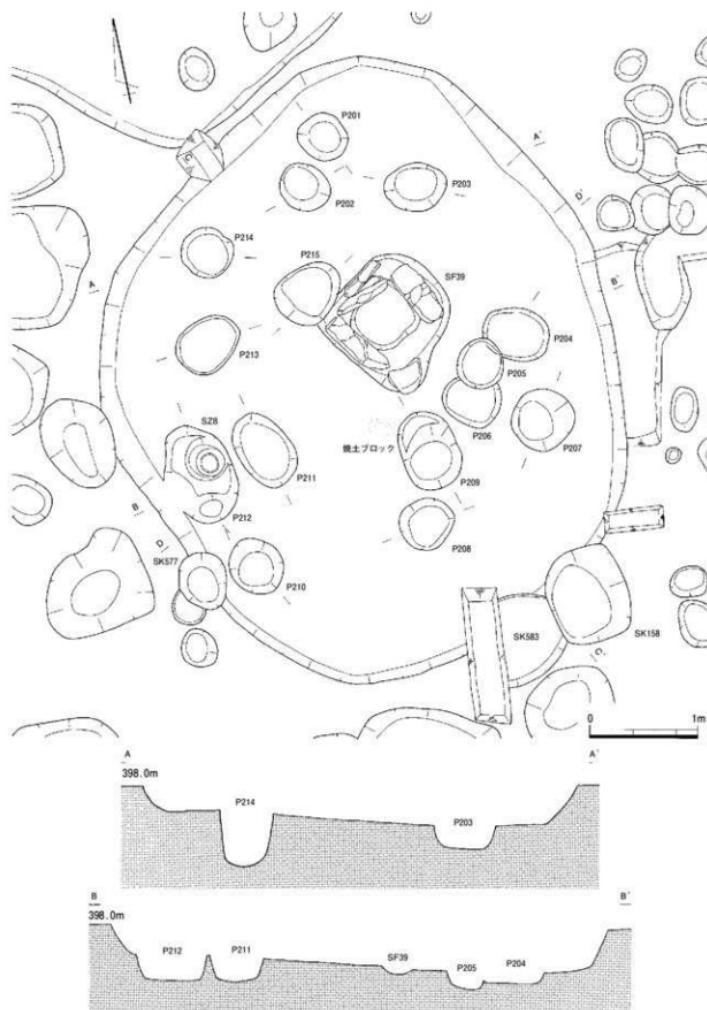


図62 SB11遺構図(1)

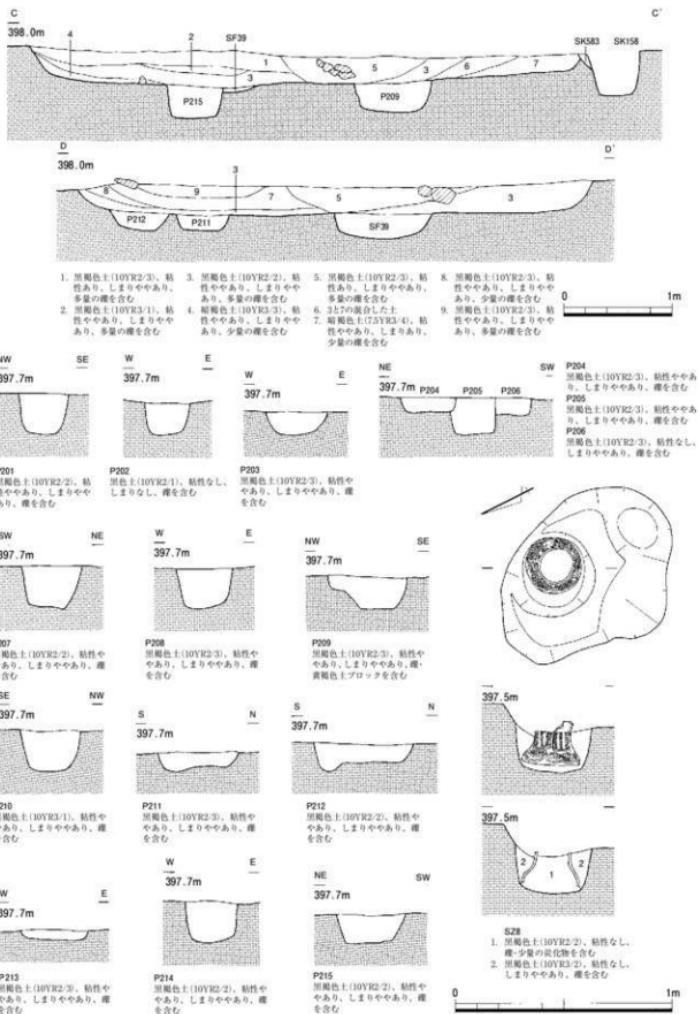


図63 SB11遺構図（2）

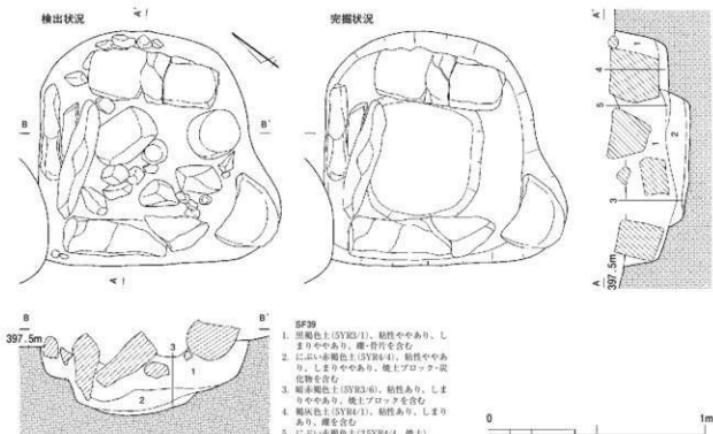


図64 S B 11遺構図（3）

・楔形石器1点・R F21点・U F7点・打製石斧4点・磨・敲石類15点・打欠石錘20点・切目石錘45点・磨製石斧3点・石皿2点が出土した。

所属時期 S Z 8・S F 39出土土器（549～551）から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B 12（現場名S X32、図65～67、図版22）

位置 J 11・K 11グリッドに位置する。

検出状況 V b 層上面で検出した。試掘坑T P 27北壁で堅穴の立ち上がりが認められたものの、周辺に多数の土坑が密集しており、結果的には堅穴のプランを検出することはできなかった。密集する土坑の中には、埋土上部の壁際に亜円窓を配置するS K1092（図67左下・土坑B 2類）がある。

形状と規模 共に不明である。

壁・床面の状況 床面の状況については、明確な貼床や硬化面は確認できずIX a 層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく堅穴に達した可能性がある。

施設 柱穴はS K1093・1199・2459が想定でき、南西端の柱穴がS K1077・1088によって失われたとすれば、柱配置は4基で構成すると考えられる。これとは別に、柱配置はS K817・820・1199・2459の4基も想定できるが、柱間がやや離れすぎる嫌いがある。炉は長軸上に位置する石函炉S F40（図67右下）で、遺存する堅穴埋土を除去した後、検出することができた。ただしS K1121・1220によって切られるため、平面形は不明である。北・東側の炉石が遺存し、被熱により表面が劣化している。炉の内部では、焼土や被熱の痕跡は認められなかった。

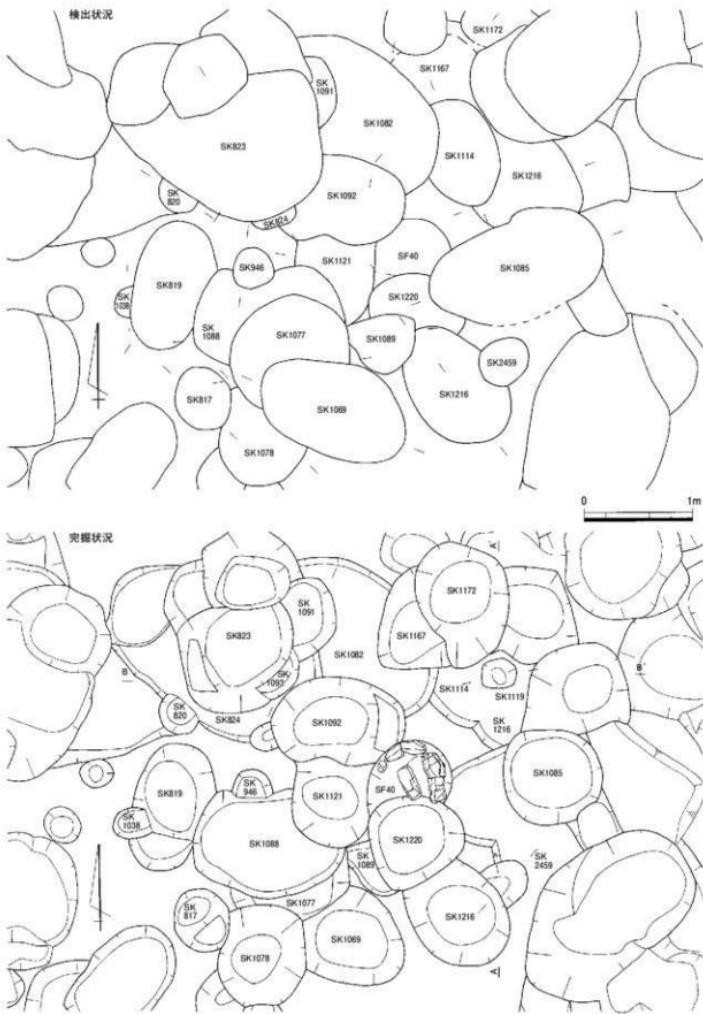


図65 SB12遺構図（1）

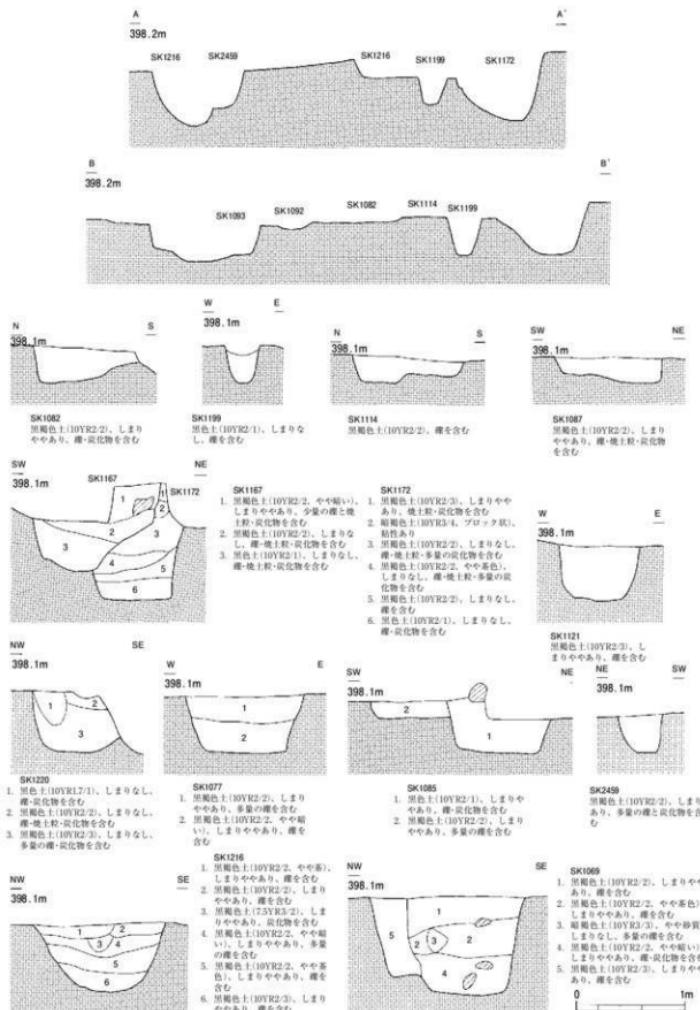


図66 SB12遺構図（2）

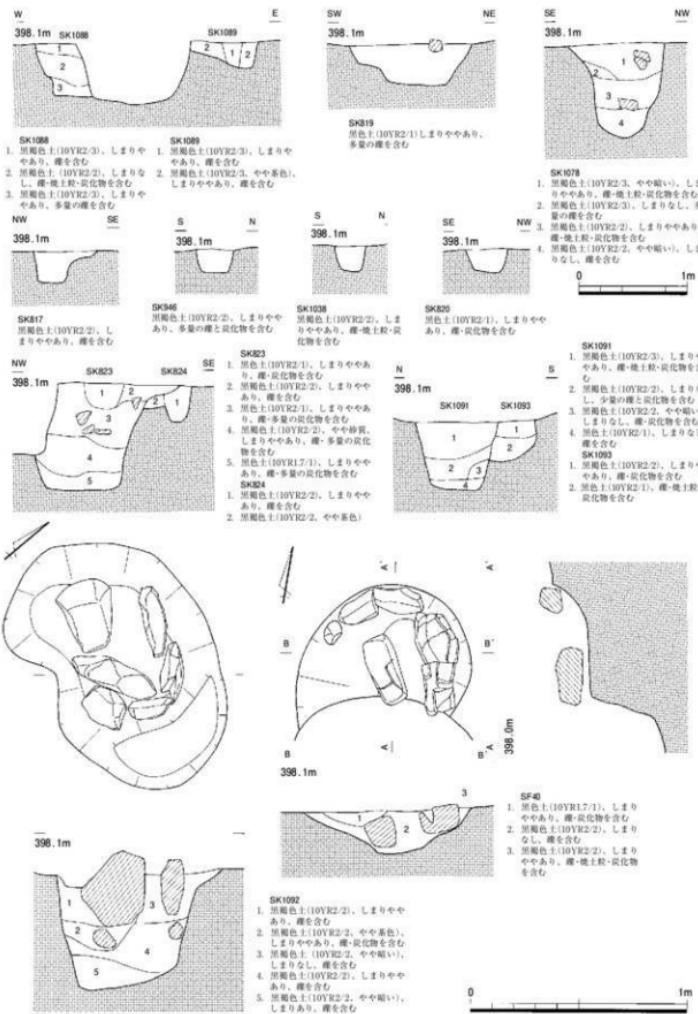


図67 SB12遺構図(3)

出土遺物 堪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期後葉から後期前葉（1727）まで認められるが、主体は中期後葉である。石器は、石鏃1点・石錐未製品1点・R F 1点・U F 1点・磨・敲石類1点・切目石錐1点が出土した。

所属時期 S F 40出土土器（556）及び埋土出土土器から、中期後葉（第2段階）と判断する。

S B 13（現場名S X41、図68～70、図版23）

位置 M 8・M 9・N 8・N 9グリッドに位置する。

検出状況 V b層中で検出した。S K295・296に切られる。埋土は4層に分けられ、長径10cm以下の亜角蝶・角蝶が多く含まれた。土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径5.19m・短径4.52m・床面積16.33m²以上を測る。ただし柱穴配置から、堪穴の重複が推測される。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.28mを測り、わずかに立ち上がる。明確な貼床・硬化面は確認できなかったが、S F 42を検出した時点で床面に到達したと判断した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で38基の遺構を検出した。柱穴は5基（P 219・223・227・232・244）が想定できる。P 219とP 244の中点とP 227を結ぶ線を軸にして、P 219・223とP 232・244が左右対称に位置する（柱配置1）。これとは別に、4基（P 216・228・239・249）も想定できる（柱配置2）。P 216・228の中点とP 239・249の中点を結ぶ線を軸にして、P 216・249とP 228・239が左右対称に位置する。両柱配置において遺構の重複は認められないが、堪穴埋土の分層が適切ならば柱配置1が柱配置2に先行すると考えられる。焼土遺構S F 41（図70右下）は、柱配置2の短軸上に位置する。底面に被熱の痕跡がなく、埋土中に焼土ブロックを含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。焼土遺構S F 42（図70中央右）も同様であるが、柱配置1・2のいずれに伴うのか不明である。P 251（図70左下）は埋土上部に少量の亜角蝶が浮上し（土坑D 1 b類）、堪穴廃絶後の所産の可能性がある。

出土遺物 堪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に、床面直上でも少量の縄文土器（618）と石器が出土した。土器は、中期中葉から後葉まで認められる。石器は、石核1点・石錐2点・石錐1点・石匙1点（2133）・搔器1点・削器1点・R F 10点・U F 1点・磨・敲石類1点・打欠石錐3点・切目石錐8点・石皿1点（2321）が出土した。

所属時期 柱配置1は、P 223出土土器（591・595）から中期後葉（第1段階）と判断する。また、柱配置2は中期後葉（第4段階）と判断する。

S B 14（現場名S X44、図71・72、図版24）

位置 M12・M13・N12・N13グリッドに位置する。

検出状況 V b層中で検出した。S K1257を切り、S K1279・1280・1285に切られる。埋土は9層に分けられ、中央がU字状に凹み、壁際では三角堆積が認められた。

形状と規模 平面形は五角形である。長径3.55m・短径2.94m・床面積8.70m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.18mを測り、北壁は明瞭に立ち上がるが、南壁は緩やかである。明確な硬化面は確認できなかったが、S F 43の周辺に貼床が認められた。床面はほぼ水平である。

施設 床面で10基の遺構を検出した。柱穴は4基（P 252・253・255・256）が想定でき、柱配置は

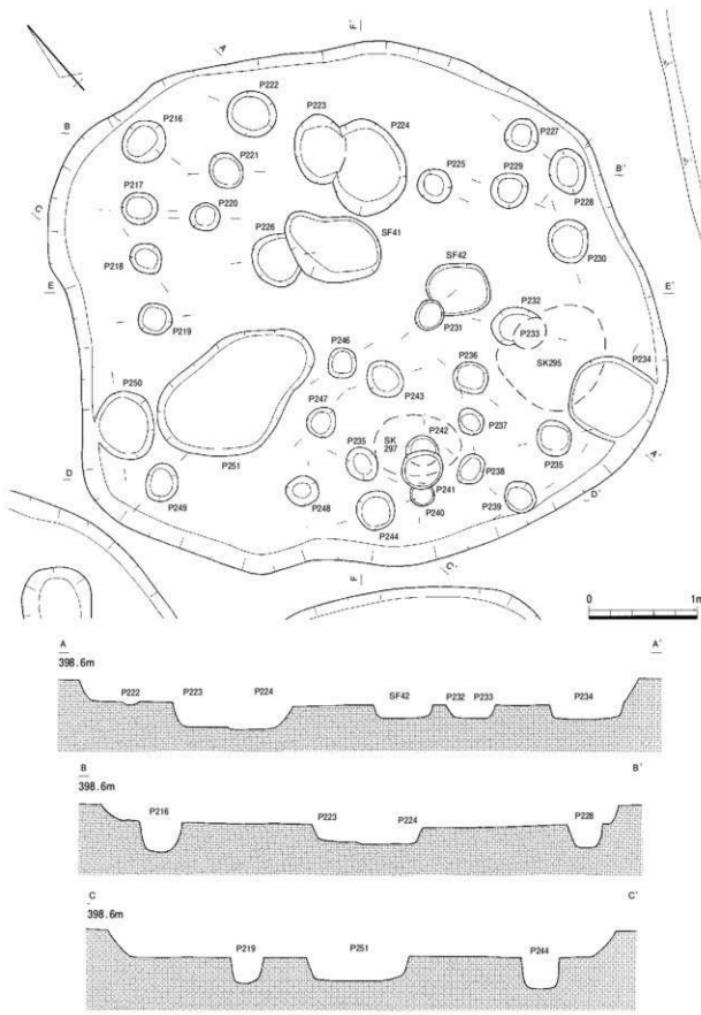
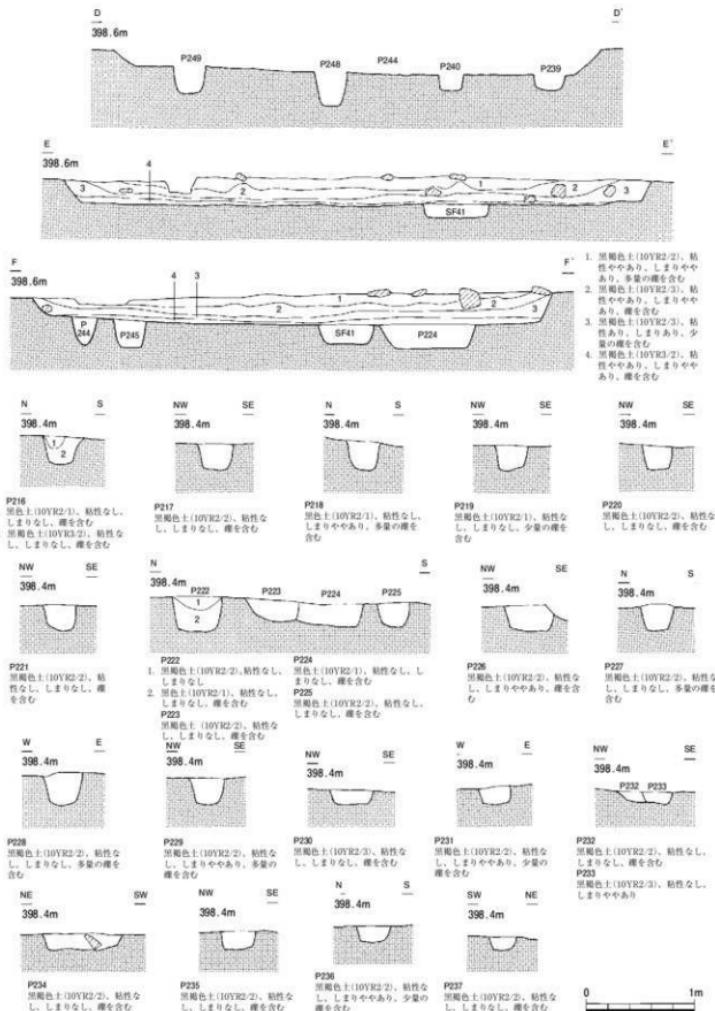


図68 SB13遺構（1）



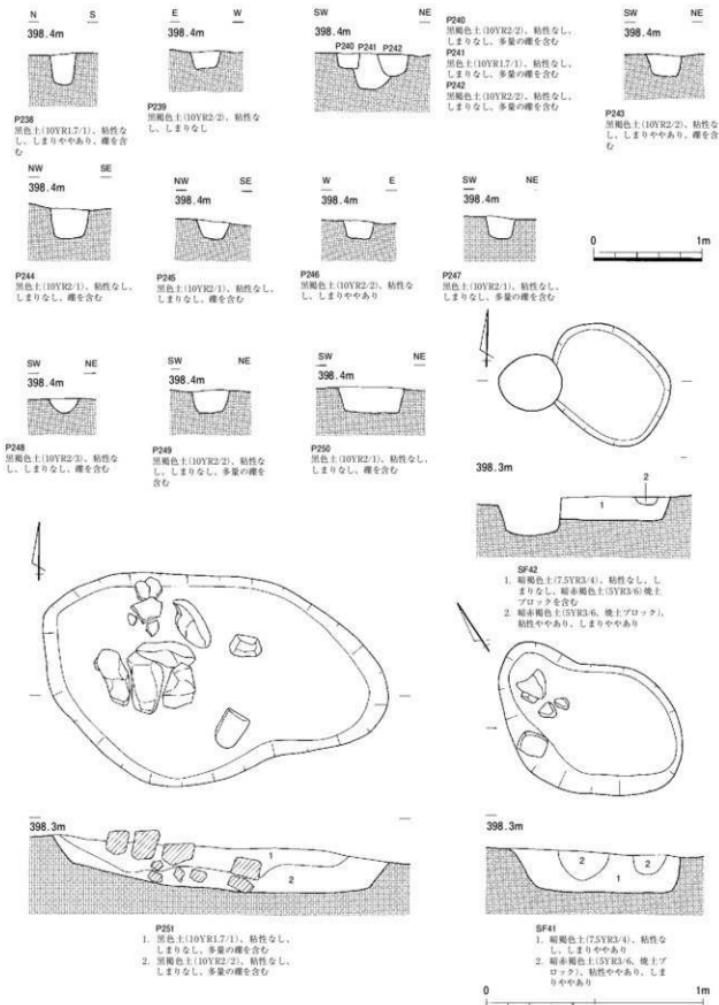


図70 SB13遺構図 (3)

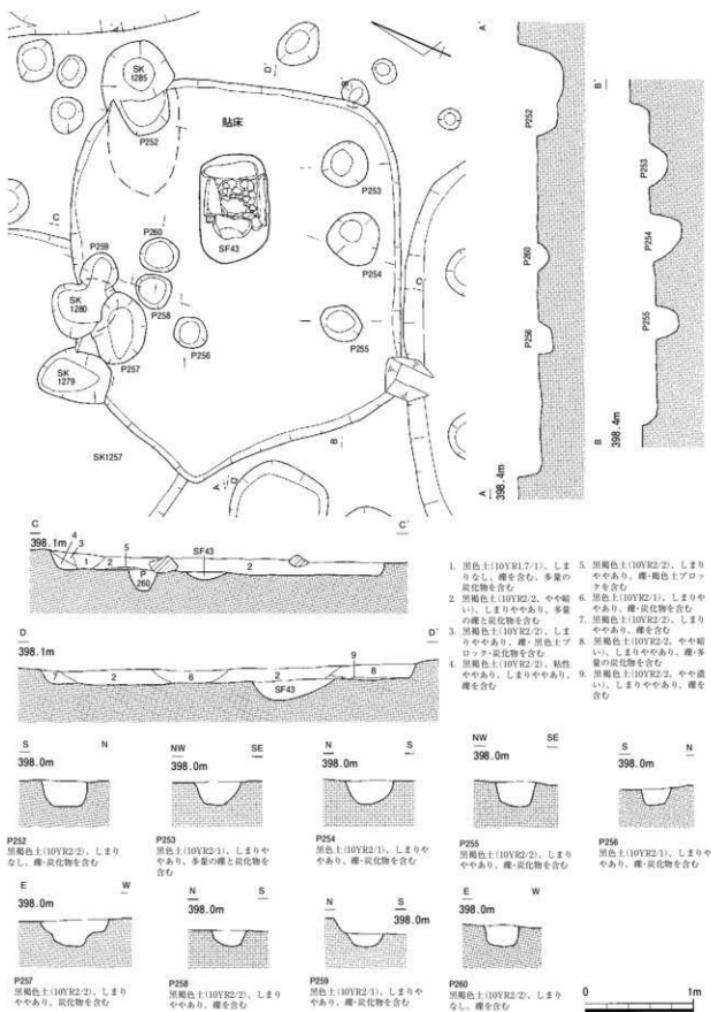


図71 SB14構造図（1）

不規則である。石圓炉 S F43 (図72) は、長軸上に位置する。南辺を除く3辺では細長い円窪で囲むが、南辺では扁平な円窪の平坦面を上に向けて水平に据えられていた。炉跡の内部は扁平な円窪が敷かれ、その上下に土器片が敷かれていた。敷石と上部の土器敷き (628)、下部の土器敷き (627) の被熱の度合いは弱い。炉跡の内部では焼土は検出されなかった。

出土遺物 窪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。床面直上でも少量の縄文土器 (618) と石器が出土した。土器は、中期中葉から後期前葉と少量の後期前葉が認められる。石器は、石錐1点・石錐3点・削器1点・石窓1点・R F7点・U F10点・打欠石錐4点・切目石錐8点が出土した。

所属時期 S F43土器敷きの土器から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B15 (現場名 S X50、図73・74、国版25)

位置 K 9・K 10・L 9・L 10グリッドに位置する。

検出状況 V b層中で検出した。S K942・944・1079・2457・2458・P 156に切られ、S B7・S K1090・1157・1168・1202・1215・1221・1233を切る。埋土は全部で6層に分けられ、長径20cm以下の亜円窪が多く含まれた。土層の中央がU字状に凹み、西壁の近くには三角堆積が認められた。

形状と規模 楕円形と考えられる。長径4.72m・短径4.08m・床面積19.38m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面からの最大の深さは約36cmを測り、壁は明確に立ち上がる。明確な硬化面は認められないが、S F44の周辺で貼床が検出された。北西部ではⅧ層又はⅨ層上面に達しており、一部窪穴の掘形に達した可能性もあるが、土層断面図を見る限り床面はほぼ水平である。

施設 床面で15基の遺構を検出した。柱穴は4基（P 261・264・270・273）が想定できる。S F44の南辺の炉石を中心とした、同心円状の配置となる。石圓炉 S F44 (図74左下) は窪穴の中央に位置する。炉石は4辺とも遺存していた。いずれも円窪又は亜円窪が用いられ、南辺の扁平円窪は平坦

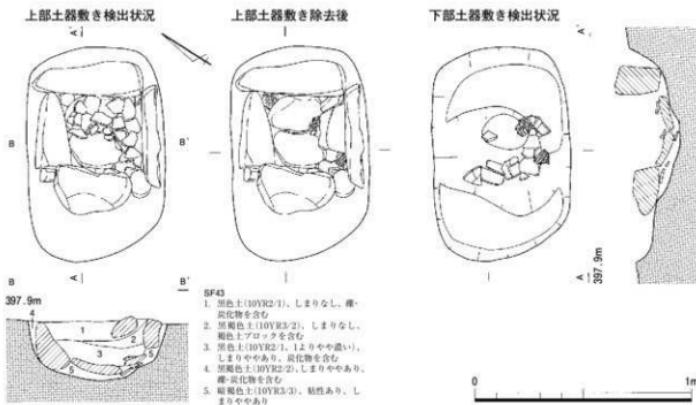


図72 S B14遺構図 (2)

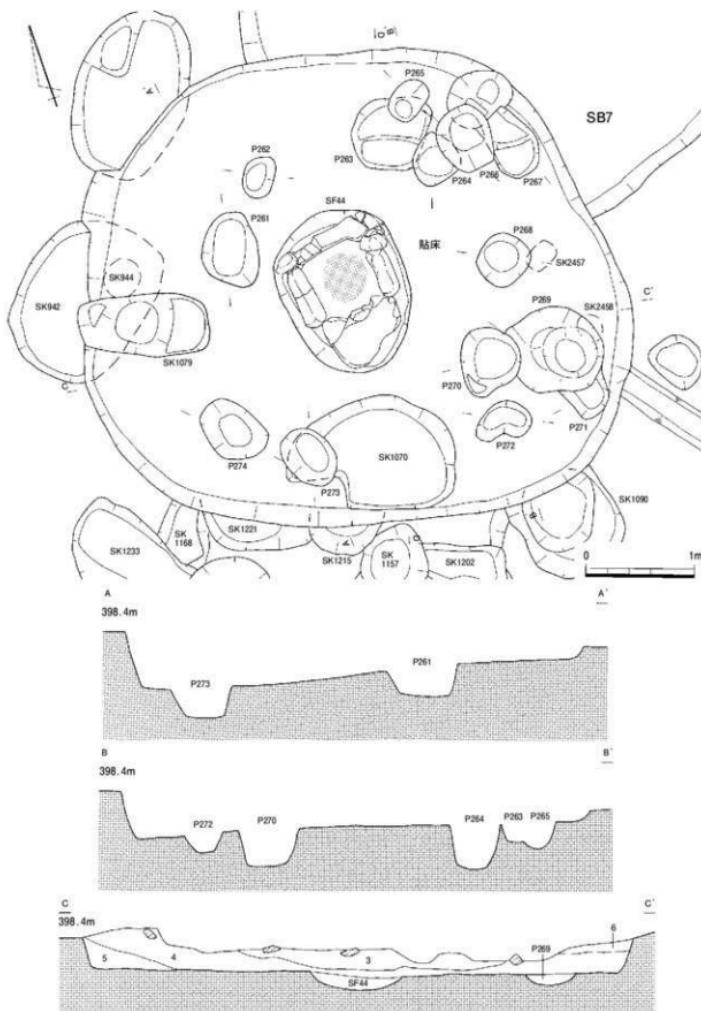


図73 SB15遺構図（1）

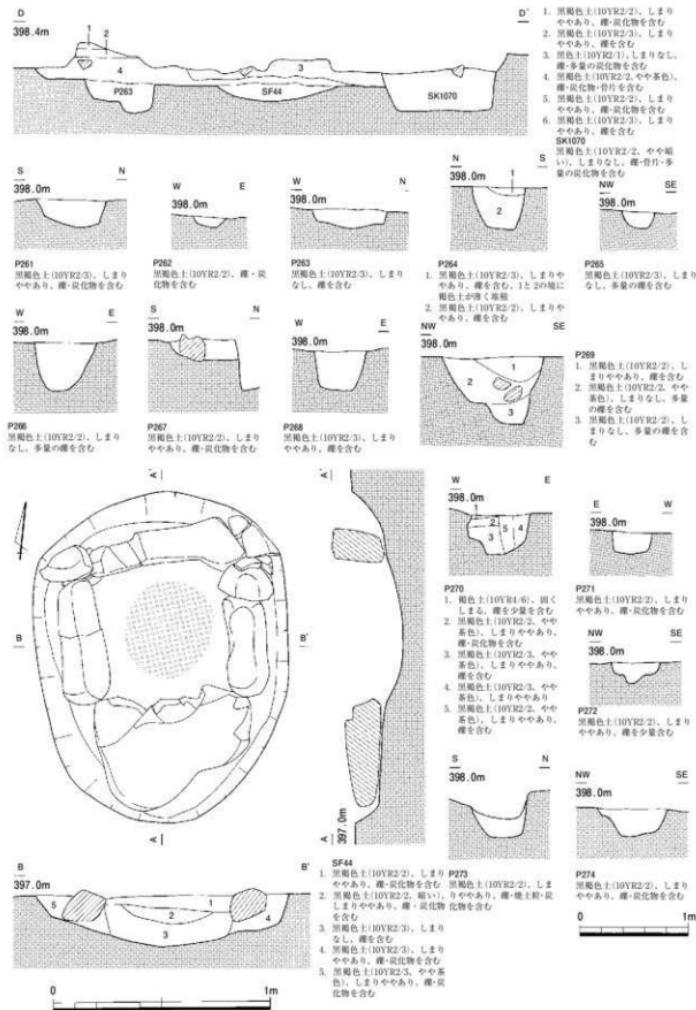


図74 SB15遺構図(2)

面を上に向けて水平に据えられており、他の3辺は細長い亜円礫で囲み、北東・北西隅はやや小ぶりの亜円礫を配置していた。炉跡の内部では焼土が検出されず、底面と炉石の内側に被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 壺穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後期前葉まで認められるが、主体は中期後葉である。石器は、石核3点・石礫13点・石錐3点・石匙2点・搔器1点・削器1点・複合スクレイバー1点・ヘラ形石器1点・R F 22点・U F 11点・打製石斧1点・磨・敲石類8点・打欠石錘3点・切目石錘26点・磨製石斧2点・石皿1点・石棒1点(2330)が出土した。

所属時期 S F 44出土土器(692・693)から、中期後葉(第3段階)と判断する。

S B 16(現場名S X51、図75~77、図版26)

位置 N15・N16・O15・O16グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。S K132・156・407・447・448・536・537・540・2417~2419・2463に切られる。この他に、S K159・2427・S I 12は壺穴発掘後の遺構の可能性が高い。S K159(図76左下)は一見石圓炉に類似するが、礫・埋土・底面共に被熱の痕跡は認められない。土坑の埋土上部の中央に亜円礫2個を長手立てとし、周囲を亜円礫で囲む(土坑B2類)。礫はS B16の床面から約15cm露出していた。S K2427は床面で検出した遺構であるが、S I 12と位置が一致することから、配石遺構の下部土坑と考えられる(図33)。壺穴の埋土は3層に分けられ、土層は中央がU字状に凹み、壁際に三角堆積が認められた。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径4.91m・短径4.81m・床面積19.38m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.30mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な硬化面は確認できなかったが、焼土(後述するS B16床下遺構)が面的に広がったため、床面に到達したと判断した。しかし焼土面の検出に努めた結果、焼土面が及ばない壺穴の壁周辺では、焼土面の縁辺部よりやや下がることになった。一方、焼土面の検出高は縁辺部が高くて中央は低く、壺穴中央のS F 45炉石が焼土面から4cm程度露出しているため、少なくとも本来の床面は焼土面の縁辺部と同じレベルか上位であったと言える。

施設 壺穴の内部で22基の遺構を検出した。柱穴は5基(P 276・279・283・288・294)が想定できる。P 294とP 288の中点とP 279を結ぶ線を軸にして、P 276・294とP 283・288が左右対称に位置する。石圓炉S F 45(図77)は長軸上に位置する。いずれも円礫又は亜円礫が用いられ、西辺の炉石に接する扁平円礫は、平坦面を上に向けて水平に据えられていた。炉跡の内部の平坦面を上にして敷かれた扁平円礫の下から焼土層を検出した。東西辺の炉石も平坦面を上にして置かれていた。北辺の炉石は抜き取られていた。なお炉石の内側と敷かれた礫の上面には、被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 壺穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後期前葉まで認められるが、主体は中期後葉から後期初頭である。石器は、分割礫1点・石核1点・石礫18点・石錐8点・削器1点・複合スクレイバー1点・ヘラ形石器2点・楔形石器3点・R F 33点・U F 12点・打製石斧4点・磨・敲石類11点・打欠石錘6点・切目石錘21点・磨製石斧1点・石皿1点・块状垂飾1点(2339)が出土した。

所属時期 S F 45出土土器(739~742)から、中期後葉(第4段階)と判断する。

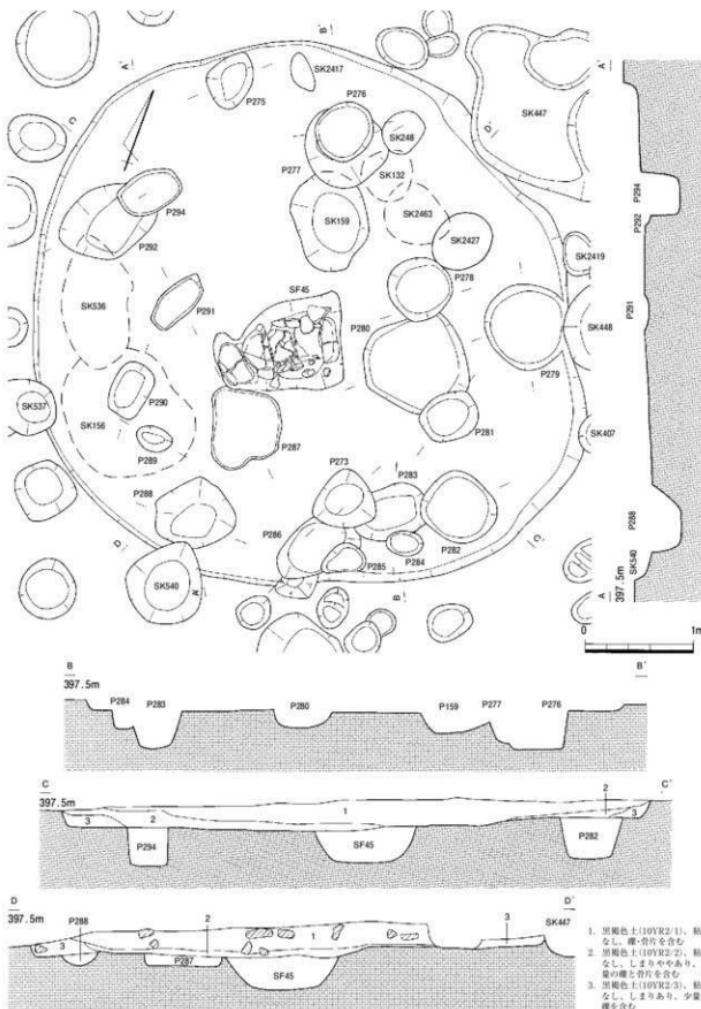


図75 SB16遺構図（1）

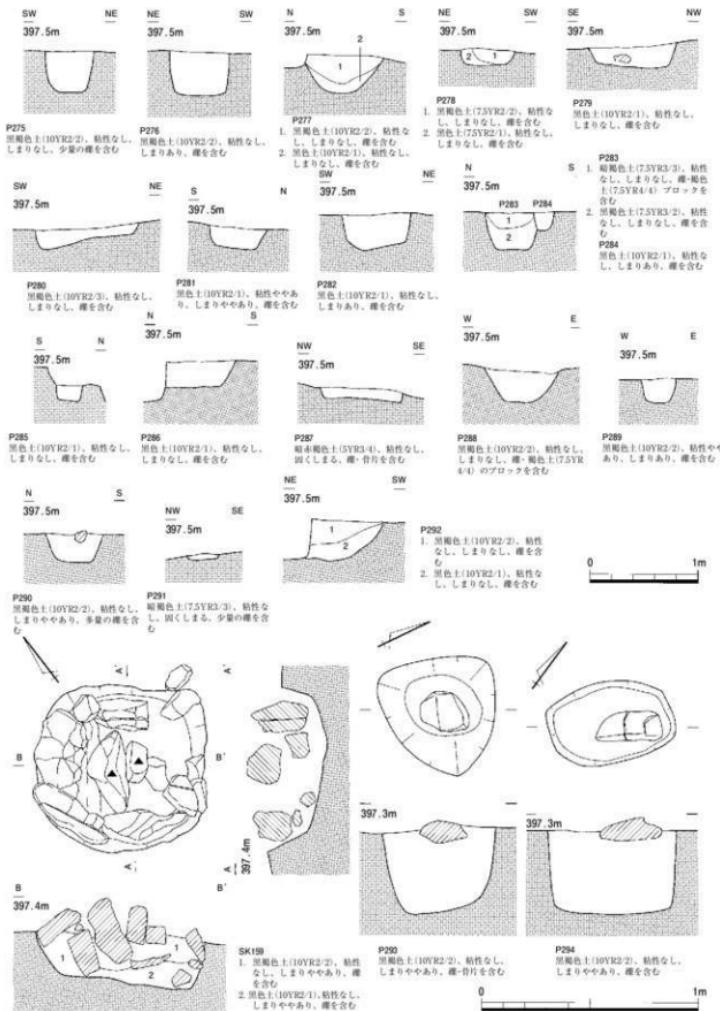


図76 SB16遺構図（2）

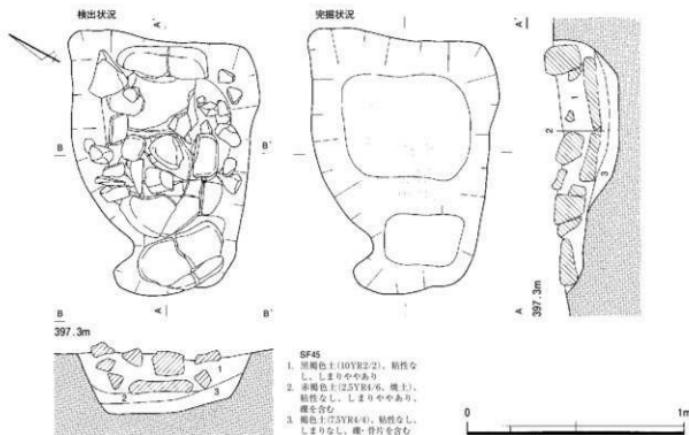


図77 SB16遺構図（3）

S B16床下遺構（図78、図版26）

位置 S B16内に位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。最大幅約3.0mを測る。

検出状況 S B16床面で検出した。S B16の豊穴内部で検出した遺構に切られる。焼土を断ち割ったところ、焼土の下に被熱の痕跡が認められない土層（5層）があり、土坑状の明瞭な立ち上がりが認められた（S K3624）。焼土の広がりは土坑の平面位置とほぼ重なることから、土坑埋土上部に焼土が位置することになる。焼土面の検出状況はS B16で説明したとおり、中央が窪み縁辺部がやや高い。焼土面上では炭化材の出土や炭化物の集積は認められなかった。土層のうち1～4層は最大で9cmを測り、礫や遺物を含まない均質なシルト質土である。5層は最大で13cmを測り、礫や少量の炭化物・遺物を含む粘土である。よって両者は土質が大きく異なる。このうち1・2・4層は明らかに被熱しており、特に1層は色調の様子から最も高温で被熱したことが伺われる。3層は前後の土層と土質が類似しており、有機質の腐植や炭化物の集積とは考えられない。1～4層はほぼ水平な堆積状況であり、各層の広がりについては1層が西に偏って部分的に検出され、外側に行くに従って同心円状に下位の土層が現れることから、焼土面の中央が削られて断面がU字状に窪んだ形状になったと推測できる。ただし、焼土面には乾燥による亀裂が多数存在していることから、削平の規模は小さい可能性が高い。

遺構の検討 調査所見と、1～4層全体が一連の被熱によるものであり、1～4層は他からの搬入により敷設した可能性が高いとする指摘（第6章第2節参照）から、次の点を述べることができる。第一に、S B16のS B45灰石の外側が被熱していないことと、被熱範囲は他から搬入したシルト質土の範囲と一致し壁際に及ばないことと、焼土ブロックがなく均質で焼土の層厚が極めて厚いことと、炭化材が出土しないことから、焼失家屋と考えることはできない。第二に、焼成粘土塊や未焼成土器な

ビ土器焼成に直接関連する遺物が多数出土しておらず、ただちに土器焼成遺構と結論づけることもできない。第三に、地理的環境による防湿処置のために貼床及び火付けを行ったとみると、あまりに大規模で他の竪穴住居跡で同様の遺構は確認されておらず、疑問も残る。しかし本遺構のみの検討ではいずれも推測の域を出ないため、今後、類例と共に検討する必要がある。

出土遺物 なし。

所属時期 S B16とS B16下部遺構の所属時期の引き算、S K3624とS F45出土炭化物の年代測定の結果（第6章第6・7節）から、中期後葉（第2～3段階）と判断する。

S B16下部遺構（図79、図版26）

位置 S B16内に位置する。

検出状況 S K3624の完掘後、土坑の底面から壁面にかけて遺構（S K2428～2432・2434～2439）が検出された。このため、土坑周辺のS B16床面をやや下げて再精査したところ、S B16に伴う遺構に切られる形でS K2440・2443が検出されたが、竪穴は検出されなかった。結果的に、S B16床下遺構の外側に位置する遺構は、S B16と本遺構の両方に伴うことになる。そこで遺構の重複関係により、いずれかの帰属を判断した。重複のないP 275・279・285・286については不明であるため、ひとまずS B16に含めた。以上の経緯により、13基の遺構を認定した。これらのうち、S K2428・2430・2433・2440は柱穴の可能性もあるが、明確な貼床又は硬化面、炉跡等が検出されなかつたため、竪穴住居跡と断定できる根拠が少ない。

出土遺物 土器は、中期中葉から後葉まで認められる。

所属時期 遺構埋土出土土器には時間幅があるが、S K3624出土炭化物の年代測定の結果（第6章第6節）も勘案し、中期後葉（第2段階）と判断する。

S B17（現場名S BB4、図80、図版27）

位置 H 9・I 10グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。竪穴のプランは検出されなかつたが、遺構検出時に黒色土が薄く楕円形に残った。この黒色土の範囲は後述する柱配置と密接なことから、埋土の一部と判断できる。

形状と規模 平面形は不明である。長径4.21m以上・短径3.24m以上、床面積は計測不能である。

壁・床面の状況 明確な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構を検出したため検出面は凹凸が著しく、竪穴の掘形に達した可能性がある。

施設 柱穴はS K733・734・2449・2451・2454の5本が想定でき、S F46の南端を中心とした同心円状の配置となる。石畳炉S F46（図80左下）は4辺とも遺存しており、いずれも円窓又は亞円窓が用いられている。炉跡の内部では焼土検出されなかつたが、炉石の内側と底面に被熱の痕跡が認められた。底面には小窓が散在しており、人為的に敷かれた可能性もある。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期後葉で占められる。

所属時期 S F46出土土器（754・755）から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B18（現場名S X33・S BB5、図80・81、図版27）

位置 G 11・G 12・H 11・H 12グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。S K705・708・709・P 308に切られる。当初、一辺3.8m程度の隅丸方形の竪穴を想定したが、最終的に竪穴のプランを確定することはできなかつた。

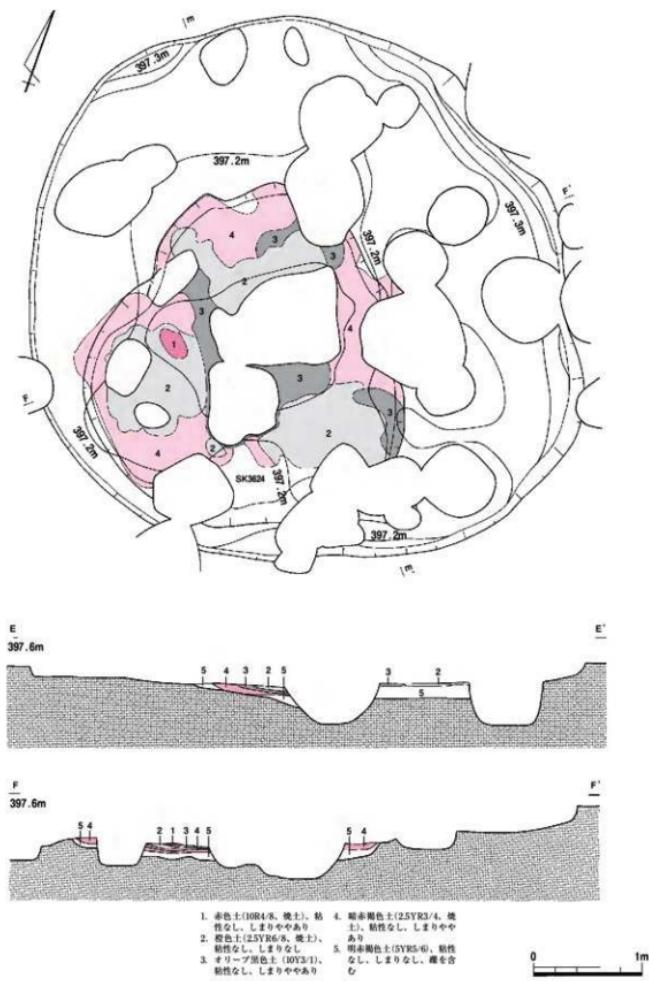


図78 SB16床下道構図

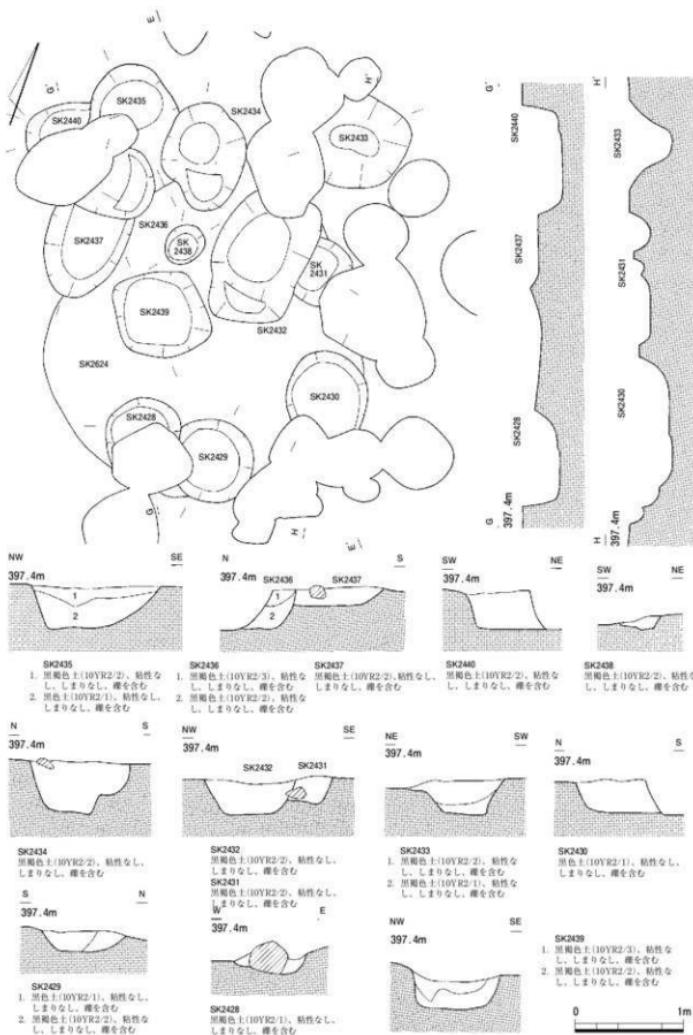


図79 SB16下部構造図

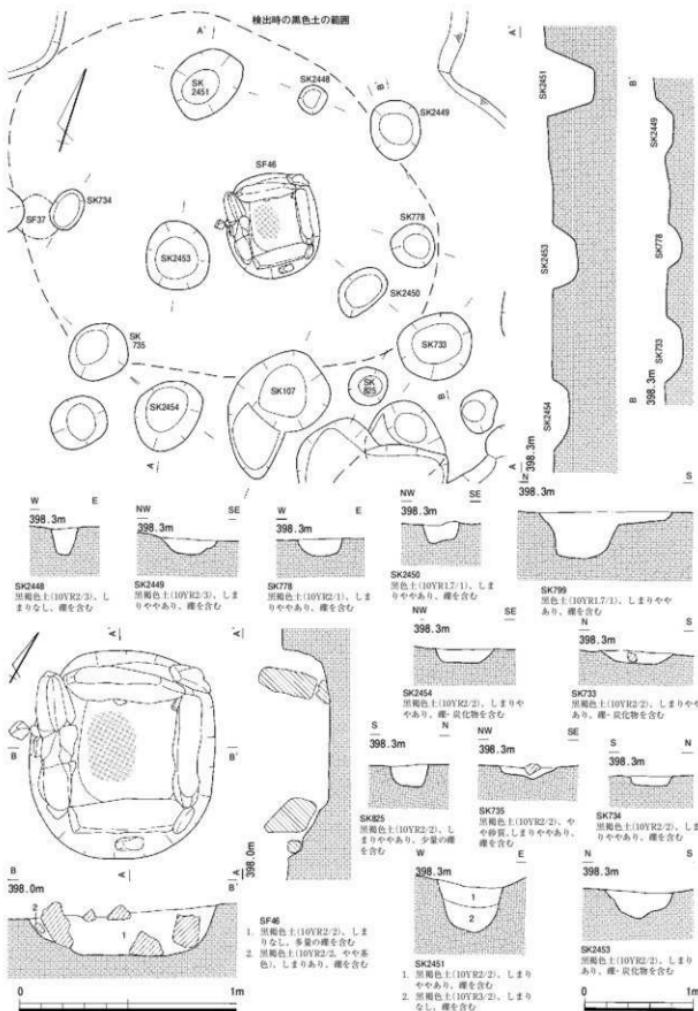


図80 SB17遺構図

形状と規模 共に不明である。

壁・床面の状況 S F47の周辺に部分的な貼床を検出したが、硬化面は認められなかった。

施設 明らかに後出の遺構を除くと、当初検出した竪穴の内部で23基の遺構を検出した。柱穴は4基（P 297・304・310・314）が想定でき、S F47の南端を中心とした同心円状の配置となる。P 299・308も柱配置の短軸に左右対称に位置するが、どのような性格の柱穴であるか不明である。石圓炉S F47（図82左下）も短軸上に位置する。炉石はいずれも円窓又は亜円窓が用いられている。西辺は抜き取られているが、他の3辺は遺存していた。S F47に北接するS K985では、被熱した円窓が二つに割られ、うち一つを長手立てとする。ただし、S K985はS F47完掘後に検出したものの、両者の重複関係は明らかにできなかった。しかし、北辺の炉石の食い違いと密接な関連があると考えられる。炉跡の内部では、厚さ8cmの固く締まった焼土層が認められた。

出土遺物 竪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後期初頭まで認められる。石器は、石核1点・石錐16点・石錐未製品1点・石錐4点・搔器1点・ヘラ形石器2点・楔形石器4点・R F 6点・磨・敲石類3点・打欠石錐2点・切目石錐15点・磨製石斧1点・石皿4点が出土した。

所属時期 S F47炉石の裏込め土出土土器（785・786）から、中期後葉（第4段階）から後期初頭と判断する。

S B19（現場名S B B 6、図82・83、図版27）

位置 G11・G12・H11・H12グリッドに位置する。

検出状況 V b 層基底面で検出した。S K766・S Z11に切られ、S K769・912を切る。他にも竪穴と多数の土坑が重複しているが、すべてを現地調査で明らかにすることはできなかった。埋土は5層に分けられ、径20cm以下の亜円窓が多く含まれた。土層は中央がU字状に凹む堆積状況である。埋土中で配石遺構S I 35（図84左下）が検出された。径8～25cm程度の円窓又は亜円窓が無造作に集積されており、掻形及び下部土坑は検出されなかった。

形状と規模 竪穴の北半の形状から、隅丸方形と考えられる。長径3.47m・短径3.31m・床面積推定9.60m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.30mを測り、壁は全般に比較的緩やかに傾斜する。明確な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構を検出したため検出面は凸凹が著しく、竪穴の掘形に達した可能性もある。

施設 竪穴の内部で5基の遺構を検出した。このうちP 316は北壁に接し、竪穴との重複は不明である。柱穴は4基（P 317・318・319・320）が想定でき、不規則な柱配置をとる。石圓炉S F48（図84右下）は竪穴中央に位置する。炉石は径10～36cmの円窓又は亜円窓が用いられ、廃絶時の抜き取りは認められなかった。一部の窓には内傾するものがあり、原位置を保っていない可能性もある。炉跡の内部では、埋土中央の最上部に亜円窓2個が置かれていた。焼土は検出されなかったが、炉石の内側と底面で被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 窪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後期前葉まで認められるが、主体は後期前葉四ツ池式併行である。石器は、分割窓1点・石核2点・石錐33点・石錐未製品6点・石錐9点・搔器6点・削器6点・ノッチドスクレイバー3点・ヘ

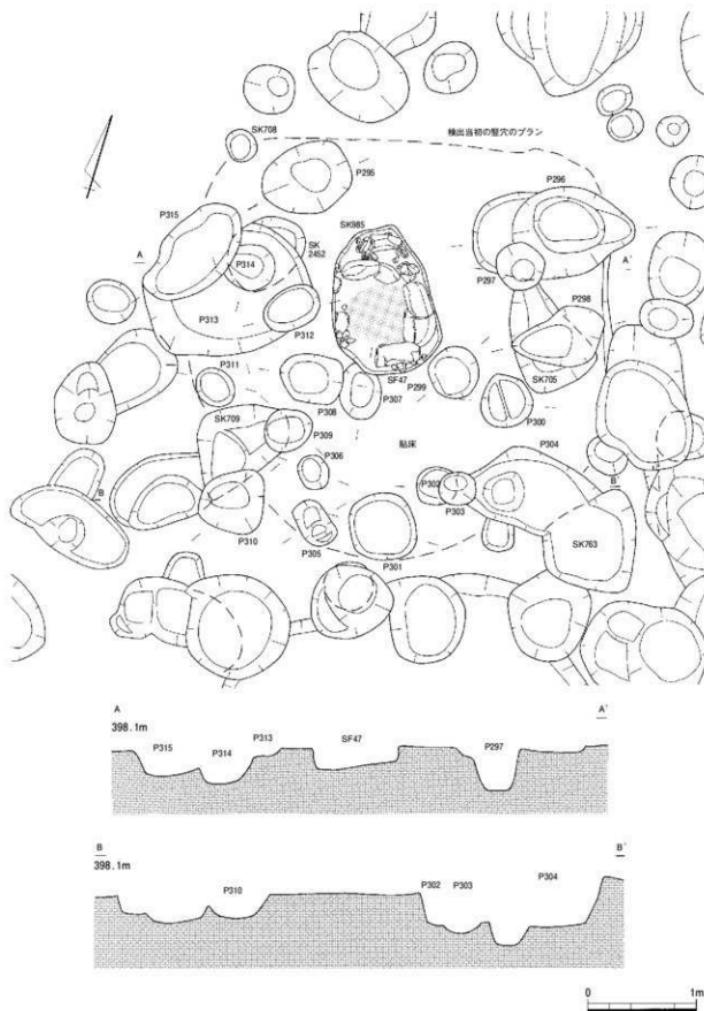


図81 SB18遺構図（1）

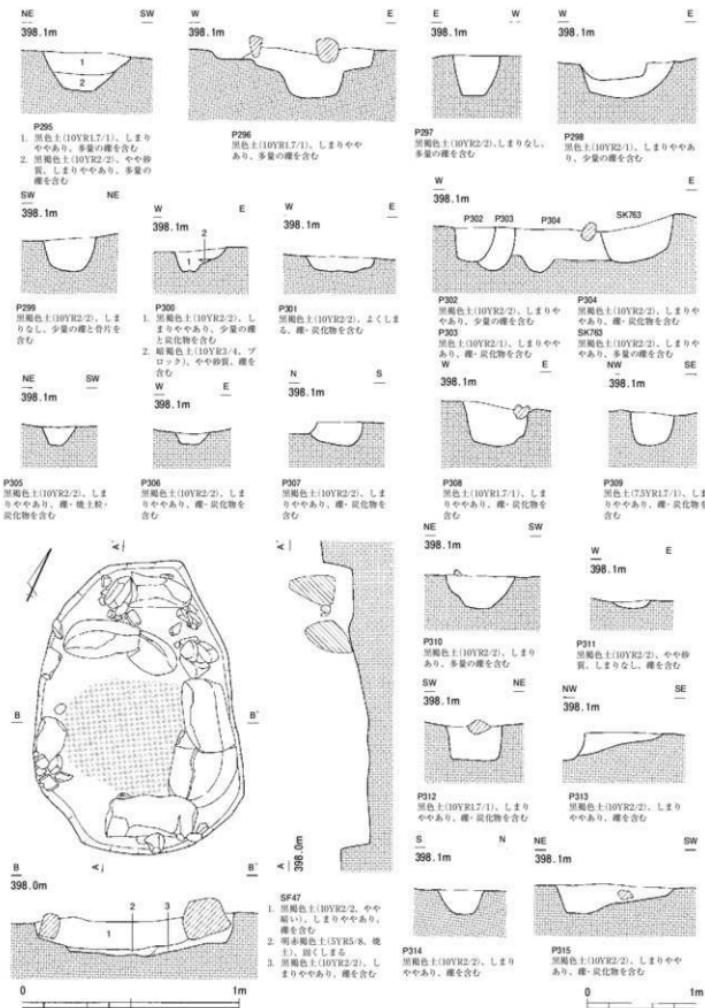


図82 SB18遺構図（2）

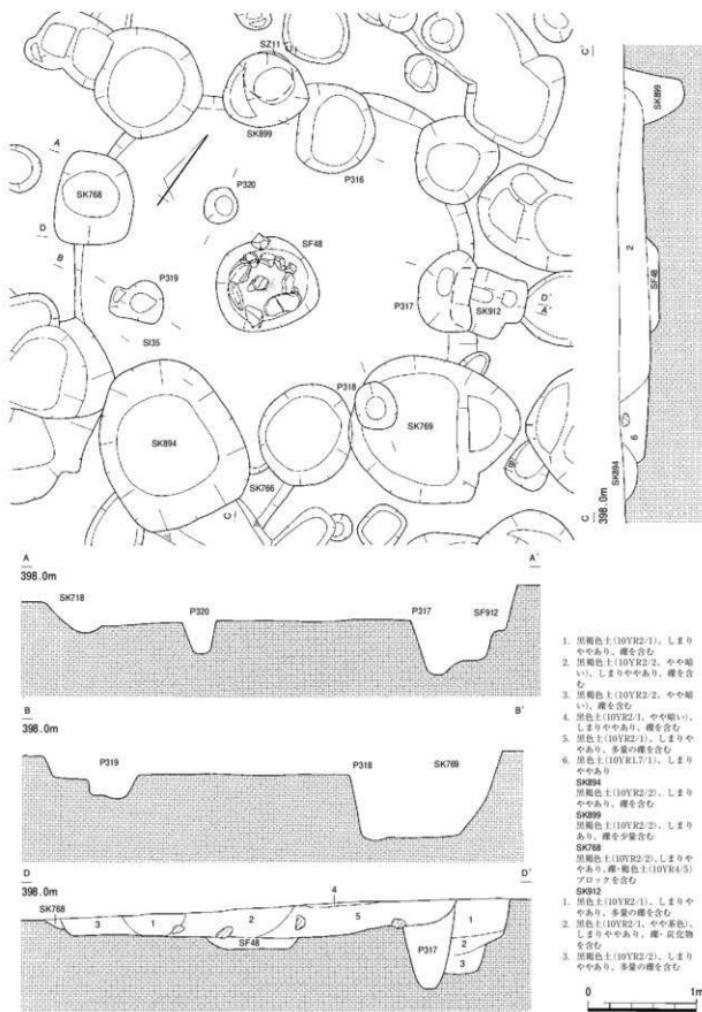


図83 SB19遺構図(1)

ラ形石器2点・楔形石器14点・R F39点・U F15点・打製石斧5点・磨・敲石類2点・打欠石錐5点・切目石錐40点が出土した。

所属時期 柱穴P317・318出土土器（順に841・842）は、埋土出土土器と時期が大きく異なるので混入とみなし、出土土器の主体から、後期前葉四ツ池式併行と判断する。

S B20（現場名S B B 7、図85・86、図版27・28）

位置 H11・I 11グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。当初長径4.5m・短径3.4m程度の楕円形の竪穴（現場名S X26）を想定したが、大型土坑と判断して掘削を進めたところ、中央で石圓炉が検出された。このため、最終的に竪穴のプランを確定することができなかった。周辺に多数の土坑が密集しており、それらの中には、埋土の全体から亜円窓が出土したS K878（図86右下、土坑D 1 a類）がある。

形状と規模 共に不明である。

壁・床面の状況 壁については不明である。明確な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構検出したため、検出面は凹凸が著しく、竪穴の掘形に達した可能性もある。

施設 柱穴はS K815・854・2456が想定でき、北西の柱穴がS K882によって失われたとすれば、

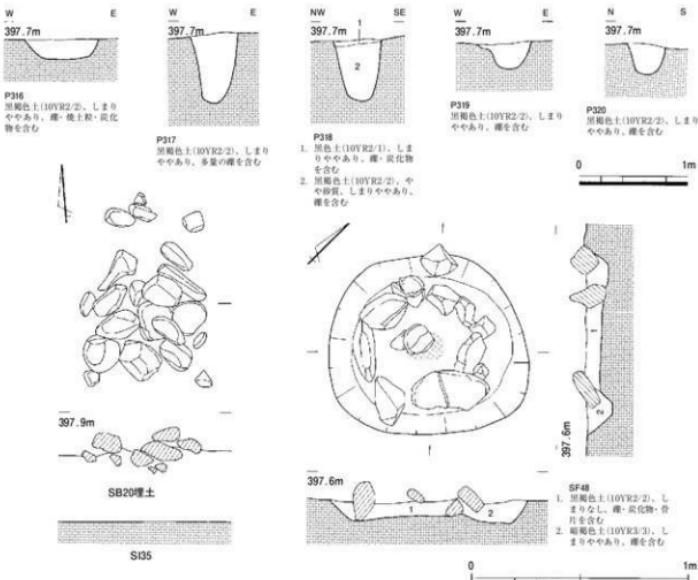
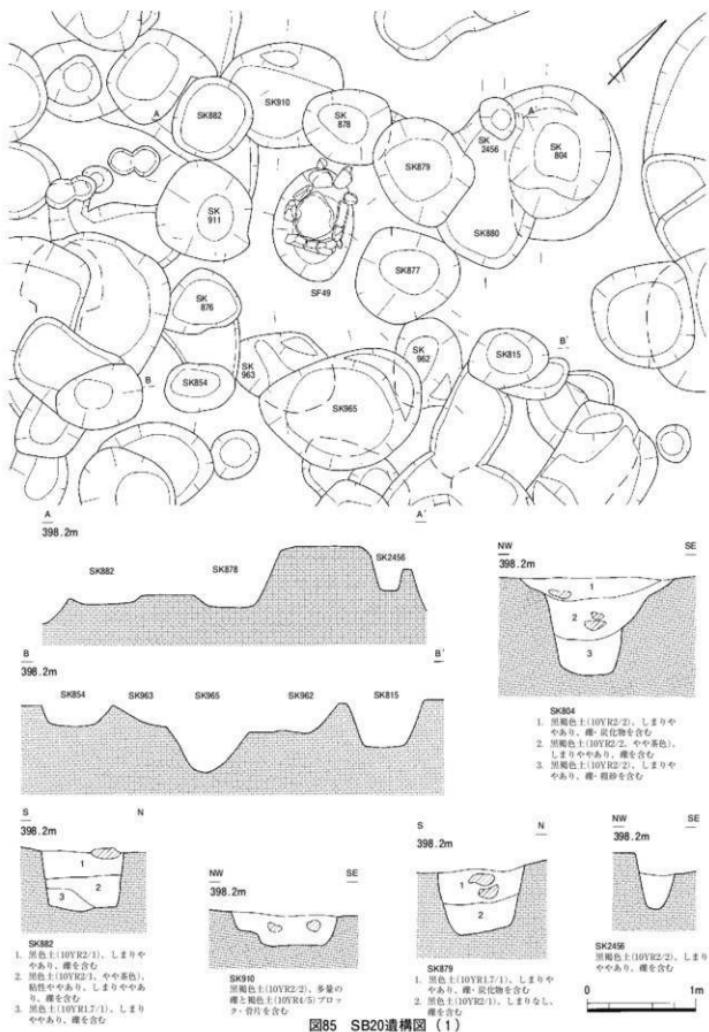


図84 S B 19遺構図（2）



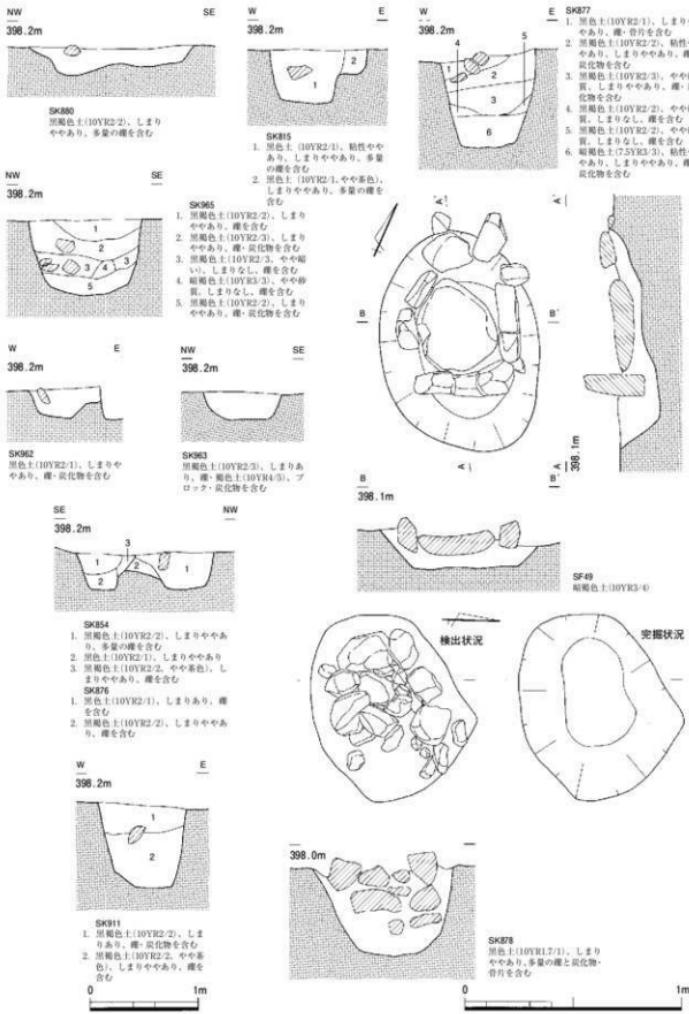


図86 SB20遺構図（2）

柱配置は4本で構成すると考えられる。石匂炉S F 49（図86中央右）は、柱配置の短軸から西に寄る。炉石は東・南側がL字に立てられているが、北側はやや小ぶりの亜円窓が散在しており、廃絶時に抜き取られて原位置を保っていない可能性もある。炉跡の内部は、中央の埋土最上部において、扁平円窓1個が平らな面を上にして置かれていた。この窓に被熱の痕跡はなく、底面と炉石の内側に被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後期前葉まで認められるが、主体は後期前葉である。石器は、楔形石器2点・R F 2点・U F 1点・S K 878からR F 1点・切目石錘1点（2274）が出土した。

所属時期 埋土出土土器の主体から、後期前葉四ツ池式併行と判断する。

S B21（現場名S X17・S B B 8、図87・88、図版29）

位置 M10・M11・N10・N11グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。竪穴の中央東よりにAトレンチが継続する。S K 1025・1313・1314を切り、S K 1024・1033に切られる。S B22との重複関係は、調査段階で明らかにすることはできなかった。埋土は7層に分けられ、土層は中央がU字状に凹み、東壁の近くには三角堆積が認められた。

形状と規模 西側がやや直線的ではあるが、全体としては楕円形である。長径3.93m・短径3.66m・床面積推定11.60m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.40mを測り、壁は南・東側が垂直に近い立ち上がりである。明確な貼床や硬化面は認められなかつた。床面は水平である。

施設 床面で5基の遺構を検出した。柱穴は深さの浅いP 324を除くP 321・322・323で、南東の柱穴がAトレンチによって失われたとすれば、柱配置は4本で構成すると考えられる。楕円形の石匂炉S F 50（図88左）は、竪穴中央より西寄りに位置する。南辺を除く3辺で細長い円窓で囲み、このうちの東辺は二重に立てる特徴がある。南辺は扁平な円窓を用い、平坦面を上に向けて水平に据えられていた。炉跡の内部には焼土ではなく、炉石の内側と底面に被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期中葉から後葉まで認められるが、主体は中期後葉である。石器は、石核1点・石錐14点・石錐3点・搔器1点・削器2点・ノッチドスクレイバー1点・ヘラ形石器2点・楔形石器3点・R F 21点・U F 6点・打製石斧1点・磨・敲石類3点・打欠石錐6点・切目石錘19点が出土した。

所属時期 S F 50出土土器（890）と埋土出土土器の主体から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B22（現場名S B B 9、図89、図版30）

位置 L 9・L 10・M 9・M 10グリッドに位置する。

検出状況 V b層基底面で検出した。埋土上面からS K 943・1015～1018・1020・1031、竪穴の南北をS B 7・S B 21に切られる。ただし、このうちのS K 1020を除く土坑と本遺構の出土土器には時期差がなく、竪穴の埋土の違いを遺構として認識した可能性もある。埋土は、西壁の近くで三角堆積が認められるものの、全体的には单層である。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径4.54m・短径3.65m・床面積推定11.90m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.20mを測り、東西の壁は垂直に近い立ち

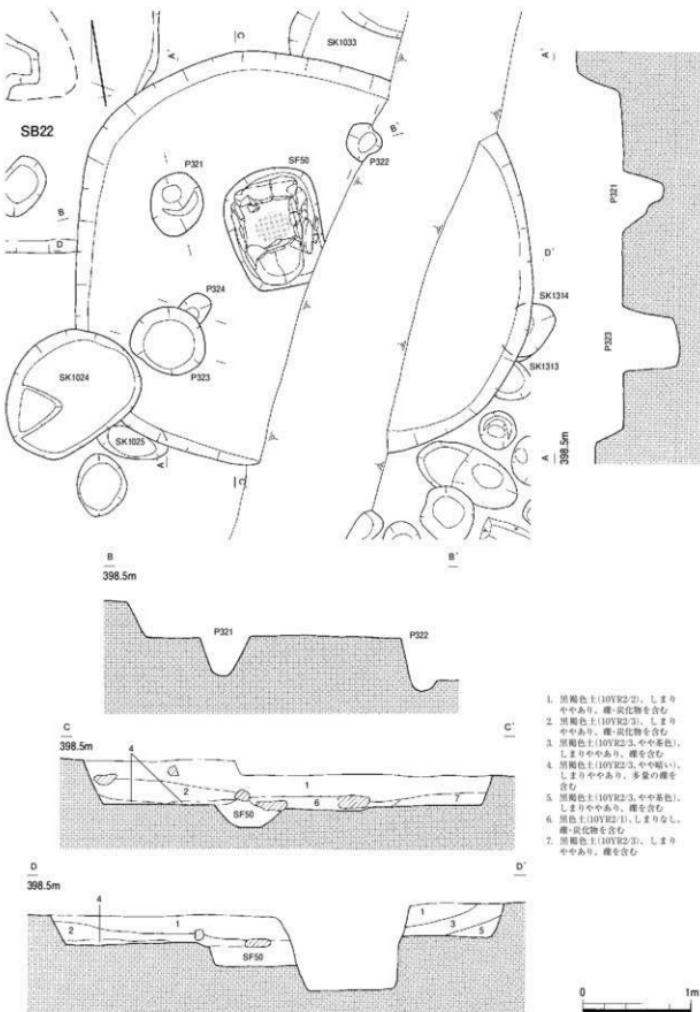


図87 SB21遺構図（1）

上がりである。明確な貼床や硬化面は認められなかった。床面は全体的には水平であるが、南西部がやや傾斜する。

施設 床面で4基の遺構（P 325・326・327・328）を検出した。このうちのP 325・328が柱穴と想定でき、柱配置は4本で構成すると考えられる。地床がSF51は、竪穴の中央に位置する。SK1016により破壊される。焼土の厚さは3cmと浅い。

出土遺物 竪穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期初頭から中期後葉まで認められるが、主体は中期中葉である。石器は石核1点・石鏃1点・楔形石器1点・RF9点・UF1点・磨・敲石類2点・打欠石錐1点・切目石錐5点が出土した。

所属時期 出出土器の主体から、中期中葉船元II式併行と判断する。

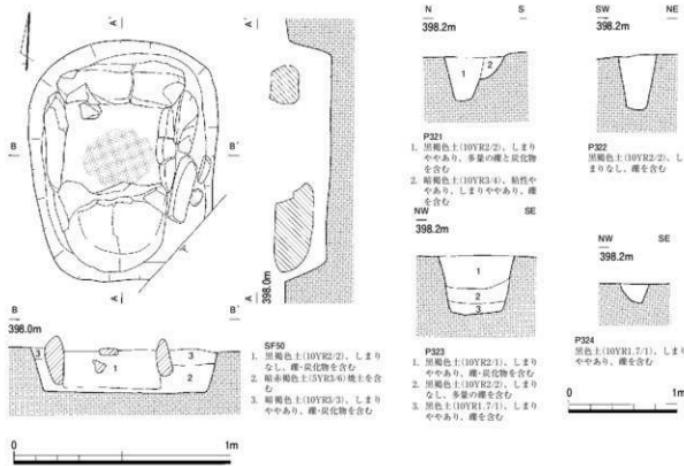
S B23 (現場名S BB10、図90、図版30)

位置 N11・N12・O11・O12グリッドに位置する。

検出状況 Vb層基底面で検出した。SK1312・1318を切り、SK1299・1300に切られる。埋土は16層に分けられ、径30cm以下の亜円礫が多く含まれた。土層は南に偏った堆積状況である。上面から土坑状の立ち上がり（土層断面図の1・9・17）が認められるが、平面精査では検出されなかった。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径2.99m・短径2.77m・床面積推定7.15m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.48mを測る。壁については、北西端と南東端に幅18cm以下の平坦面がある箇所では緩やかに傾斜し、平坦面がない箇所ではほぼ垂直に立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められずIXa層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達している可能性がある。



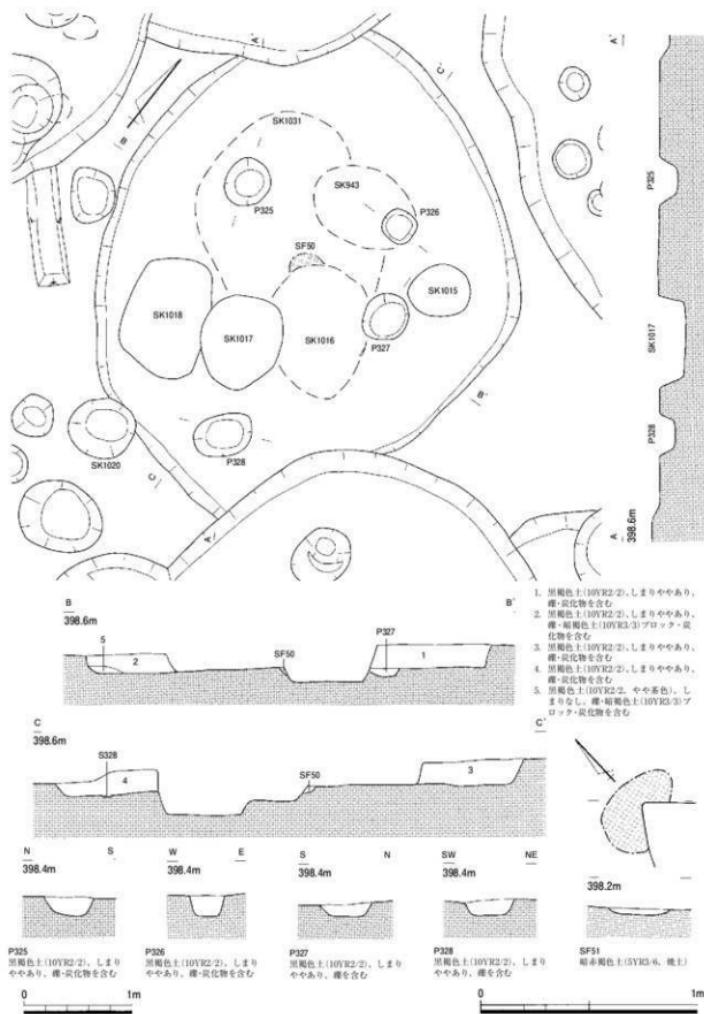


図89 SB22構造図

施設 床面で2基（P329・330）の遺構を検出した。いずれも柱穴と考えられ、2基で構成される柱配置となる。炉跡は検出されなかった。

出土遺物 壓穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、中期後葉から後期前葉まで認められる。石器は、石核2点・石錐1点・石錐2点・搔器1点・楔形石器1点・RF3点・UF2点・磨・敲石類1点・打欠石錐2点・切目石錐5点が出土した。

所属時期 柱穴P330出土土器（919）から、中期後葉（第4段階）と判断する。

S B24（現場名S BB11、図91・92、図版31）

位置 N10・N11・O10・O11グリッドに位置する。

検出状況 Vb層基底面で検出した。SK1316・1317・1320・1817・2508に切られる。埋土は10層に分けられ、全体的に水平に堆積する。

形状と規模 四角長方形である。長径3.78m・短径3.21m・床面積10.74m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.75mを測り、南壁は幅12cm以下の平坦面があつて緩やかに傾斜するが、北壁は垂直に近く立ち上がる。明確な硬化面は認められなかつたが、SF52の周辺で貼床が認められた。

施設 床面で10基の遺構を検出した。柱穴は4基（P331・332・336・337）が想定できる。P331・337とP336・332は、竪穴の短軸を挟んでほぼ左右対称に位置する。石圓炉ⁱ SF52（図92下）は竪穴の長軸上に位置する。南辺では扁平な円碟を用い、平坦面を上に向けて水平に据えられていた。東西辺では細長い円碟、北側ではやや小ぶりの碟4個で弧状に囲む。炉跡内部では厚さ7cmの焼土と、炉石の内側に被熱の痕跡が認められた。SF52の炉石を取り除くと異なる掘形が検出された（以下、SF52下部遺構とする）。SF52下部遺構は、不整円形の石圓炉と考えられる。東辺の一部は遺存し、南辺は二段に積み、かつ二重に立てているが、他は抜き取られた可能性がある。炉跡の内部では、底面に被熱の痕跡が認められた。この他にSF52に切られる地床炉SF53があり、厚さ8cmの固く締まりのある焼土が観察された。検出された柱穴数と炉跡数が対応しないことと、炉跡の種類の違いから、SF53はSB24に先行する竪穴住居跡SB28に伴うと考えられる。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期前葉から後期初頭まで認められるが、主体は中期後葉である。石器は、石核2点・石錐6点・石錐未製品1点・石錐3点・搔器1点・削器2点・楔形石器3点・RF13点・UF9点・打製石斧1点・磨・敲石類3点・打欠石錐5点・切目石錐16点・磨製石斧2点・块状垂飾1点（2400）が出土した。

所属時期 埋土出土土器の主体から、中期後葉（第3段階）と判断する。

S B25（現場名S BC1、図93～95、図版31・32）

位置 F19・F20・G19・G20グリッドに位置する。

検出状況 Vb層基底面で検出した。ただし調査区西壁の分層の結果、竪穴の埋土は単層で、本来の遺構検出面はVb層上面の可能性がある。平面精査で検出した遺構では、SK150・223・156Iに切られる。当初、4m程度の円形の竪穴を想定したが、最終的に竪穴のプランを確定することができなかつた。

形状と規模 平面形は不明である。調査区西壁の観察結果と埋甕SZ9の位置からみて、SB25の平面規模は幅3.9m以上を測る。

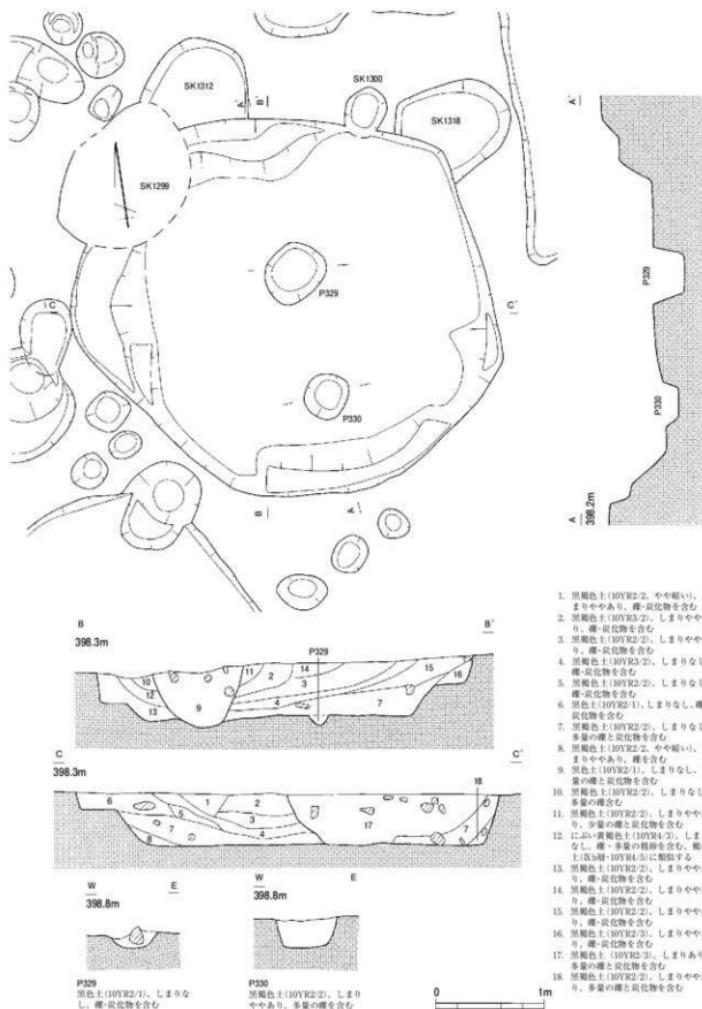


図90 SB23遺構図

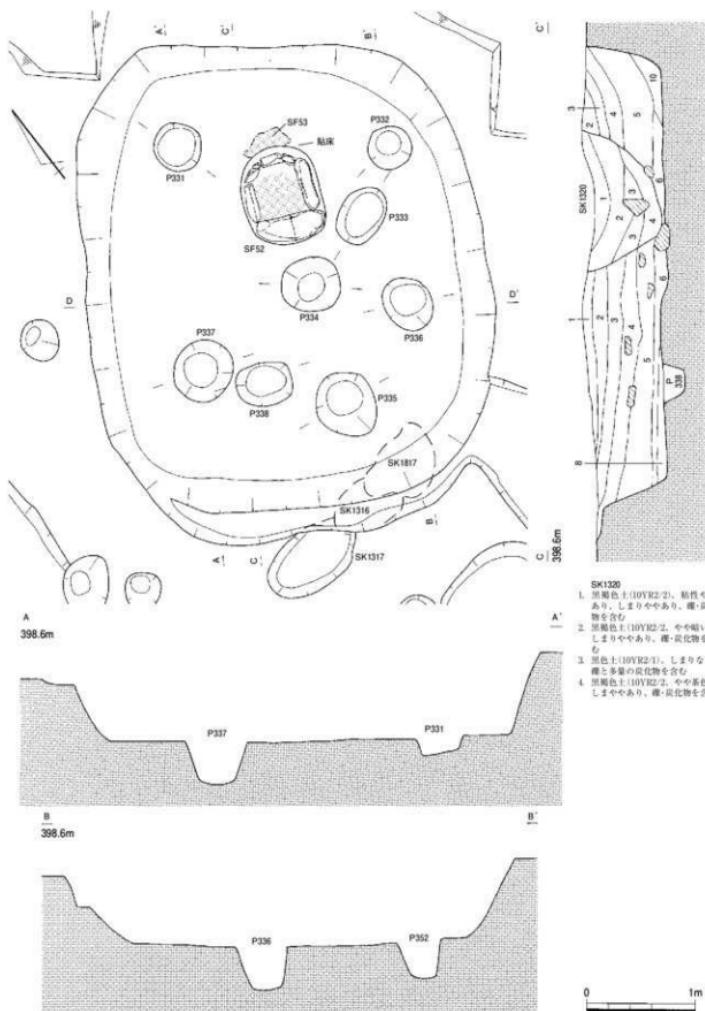


図91 SB24遺構図（1）

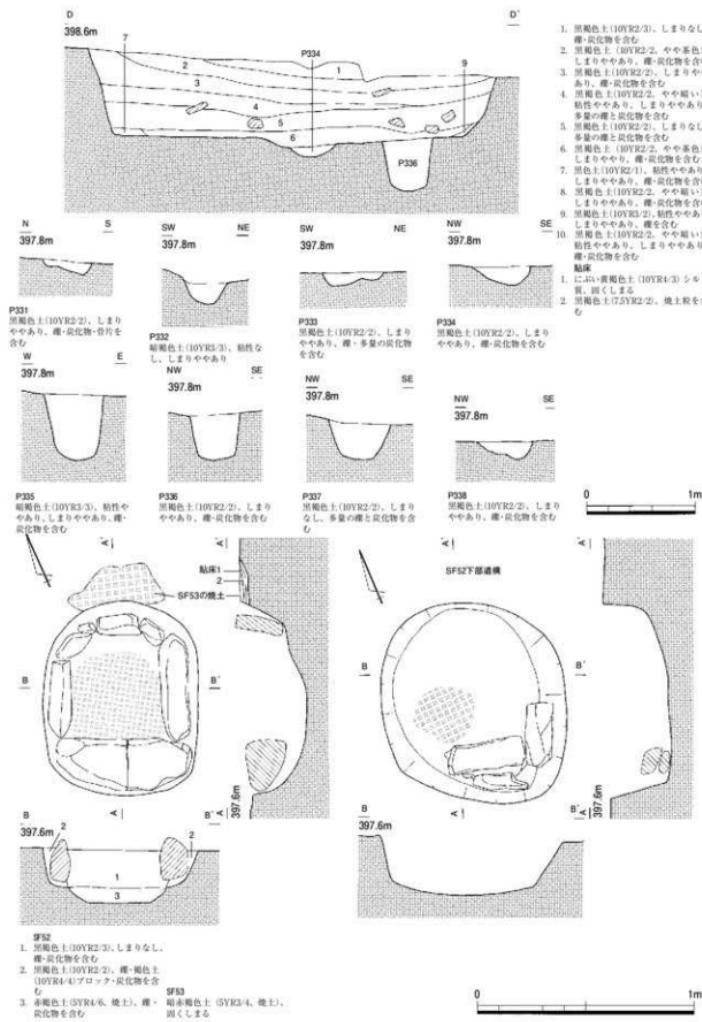


図92 SB24遺構図（2）

壁・床面の状況 明確な貼床や硬化面は確認できず、IX b層上面で遺構を検出したため、竪穴の掘形に達した可能性もある。床面は土層断面図を見る限り、やや南に傾斜する。

施設 周辺で炉跡2基・埋甕1基があり、これらを含めて柱配置を検討したところ、柱穴はSK149・1514・1517・1530・1564の5本が想定できる。その柱配置はSK1530とSK1564の中点とSK1517を結ぶ線を軸に、SK1514・1530とSK149・1564が左右対称に位置する。この柱配置に伴う炉跡としては、柱配置の短軸上に位置するSF55が該当すると考えられる。石圍炉SF55(図95左下)は、北・西辺では人頭大の円礫・亜円礫を用いて囲み、南・東辺の炉石は抜き取られていた。北西隅の円礫は、立石状に立てられたものである。炉の内部では、底面に焼土層が検出された。SF55に切られるS54(図95右上)は、西側で炉石の抜き取りの痕跡とみられる立ち上がりが認められることから、SB25に先行する楕円形の石围炉である。ただし竪穴住居跡に伴うのか、屋外炉なのかは判断できない。先の柱配置の短軸より、やや北に位置する埋甕SZ9(図95右下)は、口縁部を欠く土器が正位で出土した。その土器の内部から石礫1点(2064)が出土した。柱穴で囲まれた内部で検出した遺構のうち、SK1526(図94右下)は埋土中の北側に亜円礫を重ねて配置した土坑である(土坑D1a類)。SK1536(図95左上、土坑A類)は形状から貯蔵穴の可能性が想定されたため、最下層の土壤を採取し、その一部を水洗選別した(第6章第3節参照)。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、中期後葉で占められる。石器は、切目石錐1点が出土した。

所属時期 SF55・SZ9出土土器(1001~1004)から、中期後葉(第4段階)と判断する。

S B26 (現場名SB D1、図96・97、図版32)

位置 W25・W26・X25・X26グリッドに位置する。

検出状況 Vb層基底面で検出した。ただしVb層掘削時に遺物が周辺よりも多く出土しており、本来の検出面はVb層以上の可能性もある。SK2169・2170に切られる。竪穴埋土の土色が周辺と類似していたため、竪穴のプランを確定するのが困難であった。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径5.12m・短径4.08m・床面積17.44m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.10mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められず、床面はほぼ水平である。

施設 床面では、23基の遺構を検出した。このうち柱穴はP340・346・351・353の4本で、竪穴の中央やや西寄りを中心とした同心円状の配置をとる。地床炉SF56(図97右下)はP340・353の柱穴間に位置する。炉跡の内部では、厚さ10cmの焼土層(2層)が認められた。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器については、後期後葉から末まで認められる。石器については、石核1点・石錐1点・石錐2点・RF1点・UF1点が出土した。

所属時期 第2調査面の竪穴住居跡(後期中葉から後葉)の検出地点と大きく離れており、同時期の所産は考えにくいため、後期末八日市新保式と判断する。

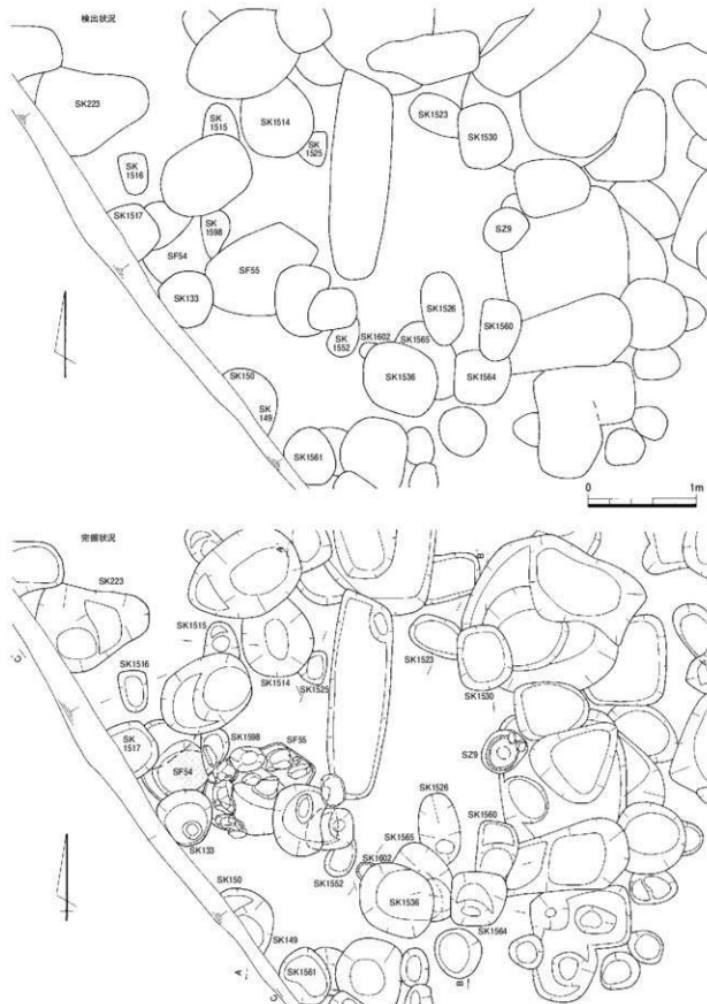


図93 SB25遺構図（1）

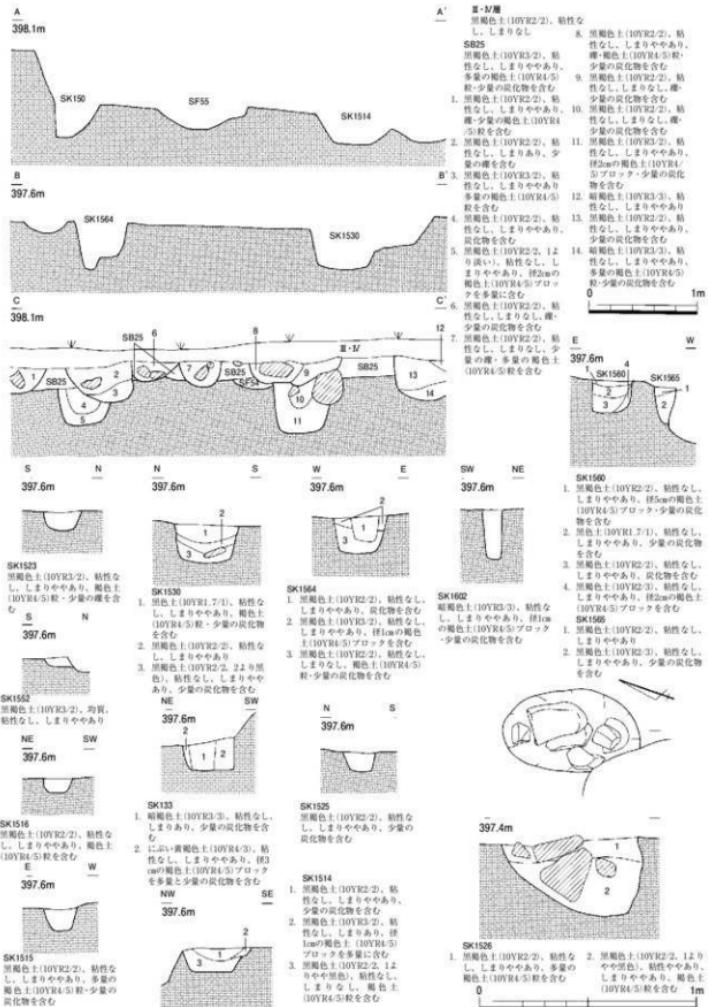


図94 SB25遺構図（2）

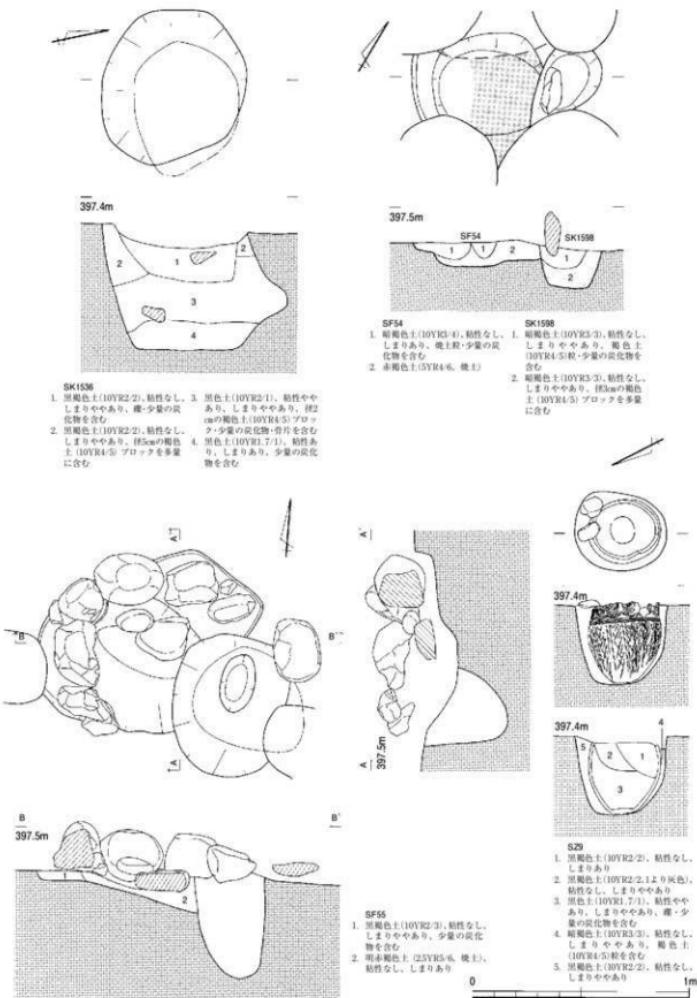


図95 SB25遺構図（3）

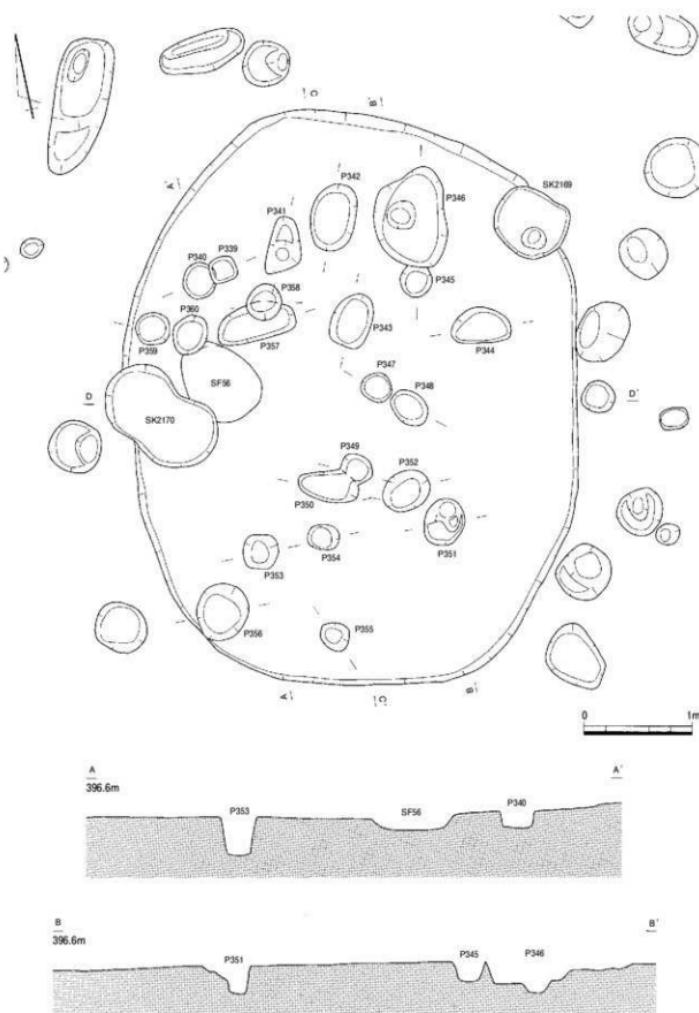


図96 SB26遺構図（1）

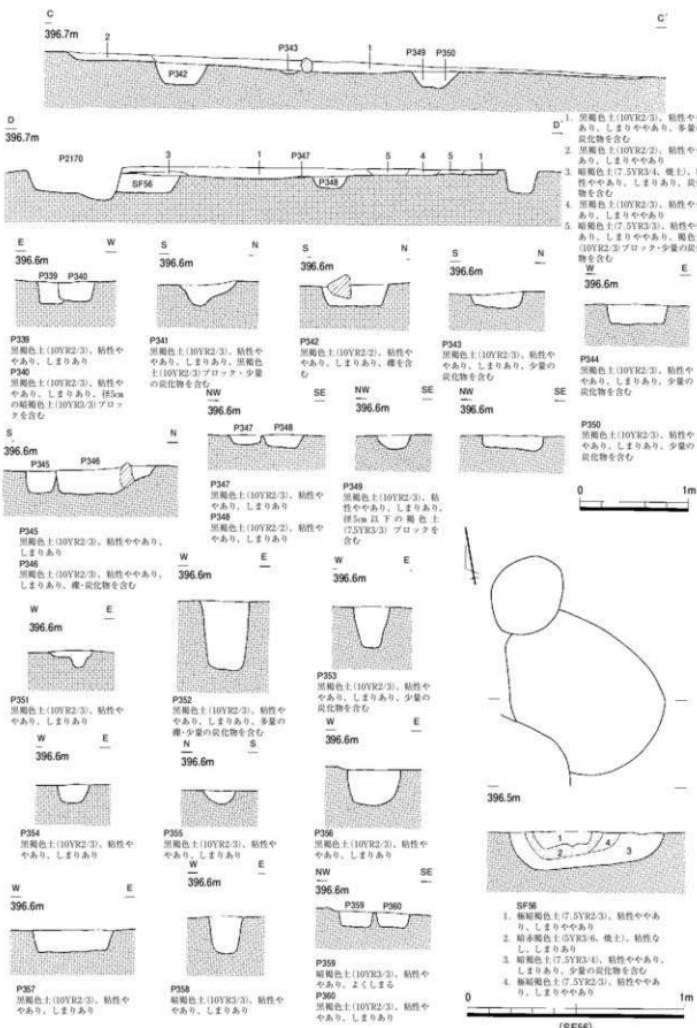


図97 SB26遺構図（2）

2 挖立柱建物跡

S H 1 (図 98・99、図版 32)

位置 L19・M18・M19・N19 グリッドに位置する。

検出状況 V b 層基底面で検出した。現地調査では土坑として認識していたが、調査終了後に空中写真の観察により、比較的規模の大きな 6 基の土坑が規則的に並ぶ様子から、掘立柱建物跡として認定するに至った。遺構の検出面では明確な貼床や硬化面は認められず、ほぼ水平である。

形状と規模 平面形は長方形である。柱真々で長辺約 4.36 m (SK 2262・2288 間)・短辺 2.95 m (SK 2251・2262 間)、面積 12.65 m² を測る。

柱穴の状況 柱穴は 6 基 (SK 2251・2262・2275・2288・2391・2393) で構成される。ただし SK 2275 は平面形態・底面の様子と土層堆積状況から、2 基の遺構の重複の可能性がある。いずれの柱穴も根固めの縦・土層における柱痕状の堆積、底面の柱痕跡は認められなかった。各柱穴の特徴をみると、平面形は楕円形又は楕円に近い不整円形である。断面形は壁が垂直な面だけではなく、SK 2251 の南壁・SK 2392 の南西壁・SK 2288 の南東壁・SK 2275 の南西壁・SK 2262 の北東壁で傾斜面が認められ、柱の挿入又は抜き取り箇所とみられる。底面の標高は、北側の隅柱 (SK 2288・2393) が約 396.30 ~ 396.38 m、南側の隅柱 (SK 2251・2262) が約 396.26 ~ 396.30 m、柱筋中央の柱 (SK 2275・2391) が約 396.26 ~ 396.43 m で、北側の隅柱の底面のレベルが南側よりもやや高い。検出面から底面までの深さは、最大で 0.59 m (SK 2251) を測る。

出土遺物 柱穴埋土から繩文土器・炭化物が散在的に出土した。土器は、大きく中期後葉と後期後葉の 2 時期に分けられる。

所属時期 中期後葉の竪穴住居跡が環状に分布しその空白域で検出されていること、遺構の長軸方位が S H 2 (後期前葉) の方位とほぼ一致する点から、後期後葉の遺物は混入とみなし、中期後葉 (第 2 段階) と判断する。

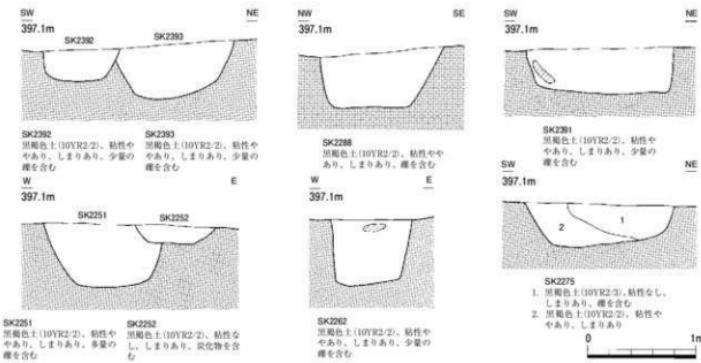


図98 SH1遺構図 (1)

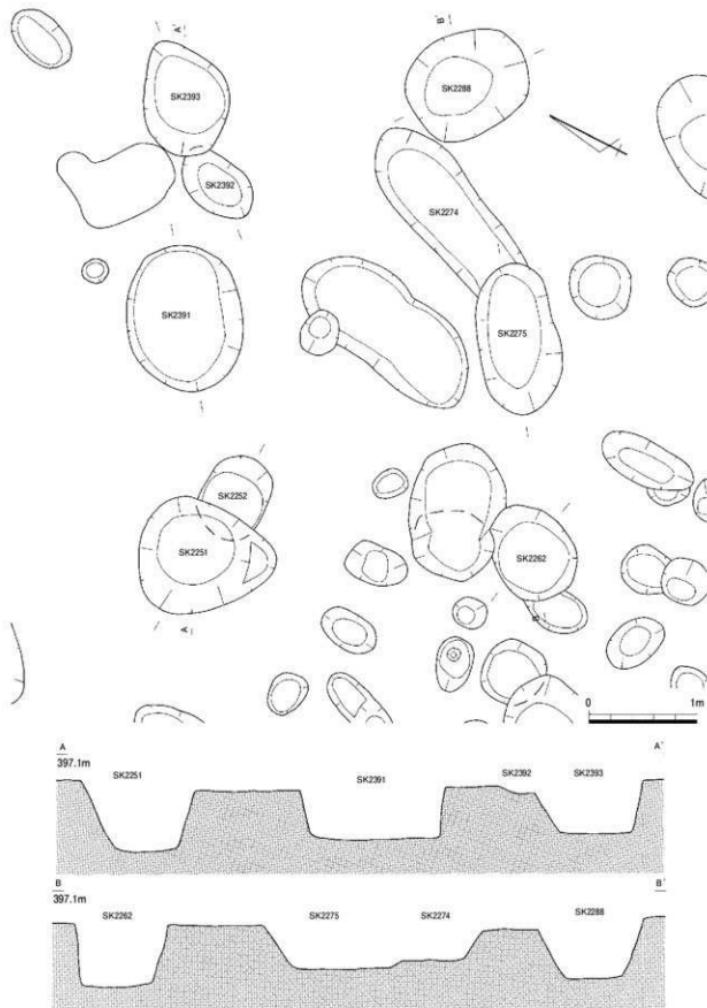


図99 SH1遺構図（2）

3. 炉跡・焼土遺構

竪穴住居跡内で検出した炉跡・焼土遺構16基以外に、15基の炉跡（S F57・60・62～64・66～71・75～78）と、7基の焼土遺構（S F58・59・61・65・72～74）を検出した。焼土遺構は、いずれも掘形を持ち、埋土に不均質な焼土が粒状に点在する。礫及び砾の抜き取り痕跡はなく、周辺に柱穴は確認されなかった。

S F57 (図100)

位置 W23グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。上端長径0.42m・上端短径0.35m・深さ0.09mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複遺構はない。強く被熱して硬化した均質な焼土が、面的に検出された。

出土遺物 なし。

S F60 (図100、図版33)

位置 P16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整長方形である。長径0.70m・短径0.44m・深さ0.30mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複遺構はない。炉石は4辺とも遺存し、いずれも亜円礫が用いられていた。南端の礫のみ水平に置かれており、竪穴住居跡内の炉跡と類似する。炉跡の内部では焼土層は検出されなかったが、炉石の下部土層（7層）は焼土ブロックを多数含み、北西端で石圓^イの石材と考えられる礫が少量出土した。このことから、この炉跡は作り替えが行われた可能性が高い。

出土遺物 烧土から中期後葉の土器（1020）、埋土1層から骨片が出土した。

S F62 (図100、図版33)

位置 Q17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.77m・短径0.60m・深さ0.32mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複遺構はない。焼土粒を多数含む1層を取り除くと、硬化してはいないものの、強く被熱した均質な焼土層（2・3・4層）が面的に検出された。この焼土面の下部土層（5層）と共に、掘形の底面でも被熱痕跡は認められなかった。

出土遺物 烧土から、中期後葉の土器が出土した。

S F63 (図100、図版33)

位置 N14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.75m・短径0.33m・深さ0.17mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複遺構はない。炉石は4辺とも遺存し、いずれも扁平亜円礫が用いられていた。炉跡の内部では焼土は検出されなかったが、一部の炉石の内側で被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 烧土から、切目石錘1点が出土した。

S F64 (図100)

位置 E18グリッドの西壁沿いに位置する。

形状と規模 平面形は不明である。長径0.70m以上・短径0.34m以上・深さ0.20mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1323などに切られる。焼土粒又はブロックを含まない土層

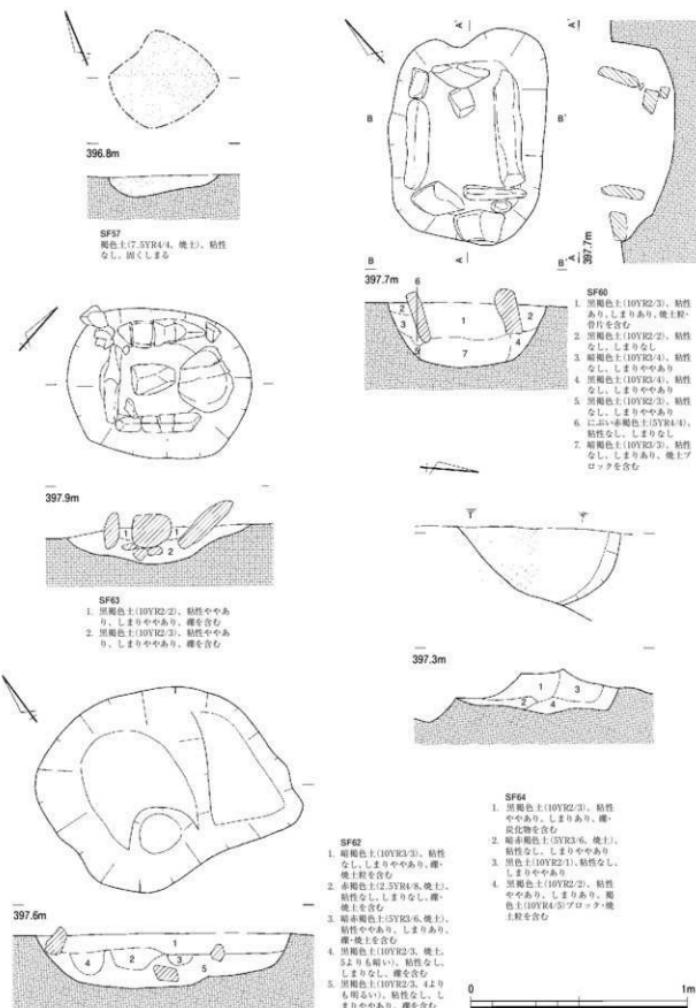


図100 第3B調査面検出構造図 (1)

(1・3層)を取り除くと、強く被熱した均質な焼土層(2層)が面的に検出され、掘形の底面でも被熱痕跡が認められた。

出土遺物 なし。

S F66 (図101、図版33)

位置 G17・G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.49m・短径0.38m・深さ0.22mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。竪穴住居跡S B 4(第2調査面)の南西端に位置していることから、S B 4に先行するとみられ、S F67に切られる。焼土粒を含む土層(1・2層)を取り除くと、強く被熱した均質な焼土層(5層)が面的に検出された。掘形の周辺のIx a層に含まれる礫にも被熱痕跡が認められた。なお、焼土の外側に焼土を切る別の掘形があったことから、炉石を抜き取った痕跡の可能性がある。

出土遺物 なし。

S F67 (図101、図版33)

位置 G17・G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.33m・短径0.25m・深さ0.15mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S F66を切る。埋土中に焼土ブロックと共に長径10~33cmの多量の礫が検出された。礫の円磨度は角礫又は亜角礫で占められ、ほぼすべての礫と掘形の周辺のIx a層に含まれる礫の一部でも被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 なし。

S F68 (図101、図版33)

位置 G20・G21・H20・H21グリッドの南斜面に位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.60m以上・短径0.43m・深さ0.22mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1499に切られる。埋土のうち2層と5層は強く被熱した均質な焼土層で、面的に検出された。他の土層(1・3・4層)には、焼土粒とIx b層ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。なお掘形の底面・壁面では、被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 なし。

S F69 (図102、図版33)

位置 H21グリッドの南斜面に位置する。

形状と規模 平面形は不整規円形である。長径1.24m・短径0.75m・深さ0.18mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1557に切られる。炉石は東西辺の一部が抜き取られており、いずれも亜円礫又は角礫が用いられている。一部の炉石の内側で被熱の痕跡が認められた。炉跡の内部ではごく一部に焼土層が検出され、掘形底面の中央に窪みがあることから、搔き出されたと想定できる。なお底面は南斜面と同様に傾斜しており、周辺に柱穴がないことから、屋外炉の可能性が高い。

出土遺物 埋土から、R F 1点が出土した。

S F70 (図101)

位置 X26グリッドに位置する。

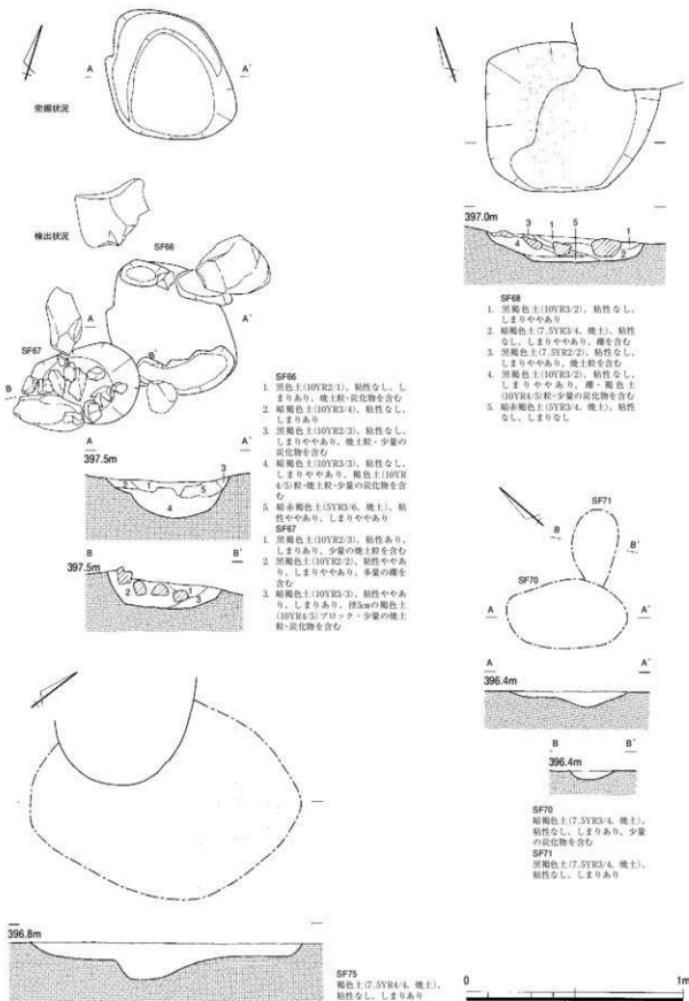


図101 第3B調査面突出構造図（2）

形状と規模 平面形は楕円形である。上端長径0.45m・上端短径0.30m・深さ0.10mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S F71・S K2131・2132を切る。被熱して縮まりのある均質な焼土が、面的に検出された。

出土遺物 なし。

S F71 (図101)

位置 X26グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。上端長径0.36m以上・上端短径0.22m・深さ0.04mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S F70に切られる。被熱して縮まりのある均質な焼土が、面的に検出された。

出土遺物 なし。

S F75 (図101)

位置 Y23・Y24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。上端長径1.25m・上端短径0.90m以上・深さ0.17mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S F74に切られる。被熱して縮まりのある均質な焼土が、面的に検出された。

出土遺物 なし。

S F76 (図103、図版34)

位置 F18・F19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.64m・短径0.54m・深さ0.28mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。炉石は北西部を除く3辺が遺存し、いずれも亜円礫が用いられていた。東西辺の炉石は細長い亜円礫を壁に沿って置くが、南辺の礫は斜位に立ち、南西隅には亜円礫1個を立石状に配置していた。炉跡の内部では焼土は検出されなかったが、最下層で焼土粒、底面で被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 墓土から、後期前葉の土器(1023)・石核1点(2055)・切目石錘1点(2281)が出土した。

S F77 (図103、図版34)

位置 G19・H19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は長方形である。長径1.18m・短径0.94m・深さ0.14mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1579・1593・1596・1597・1647を切る。炉石は南東辺が遺存するが、他は礫の下面のレベルが高く原位置を保っていない可能性がある。いずれも扁平円礫又は亜円礫が用いられていた。炉跡の内部では焼土は検出されなかったが、一部の炉石と掘形の底面で被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 墓土から後期前葉の土器(1025)・石錘3点(2090・2119・2121)・搔器1点(2137)・楔形石器1点(2168)・UF1点・RF1点・切目石錘3点(2277~2279)・石皿片1点が出土した。

S F78 (図102、図版34)

位置 G19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.56m以上・短径0.56m・深さ0.23mを測る。

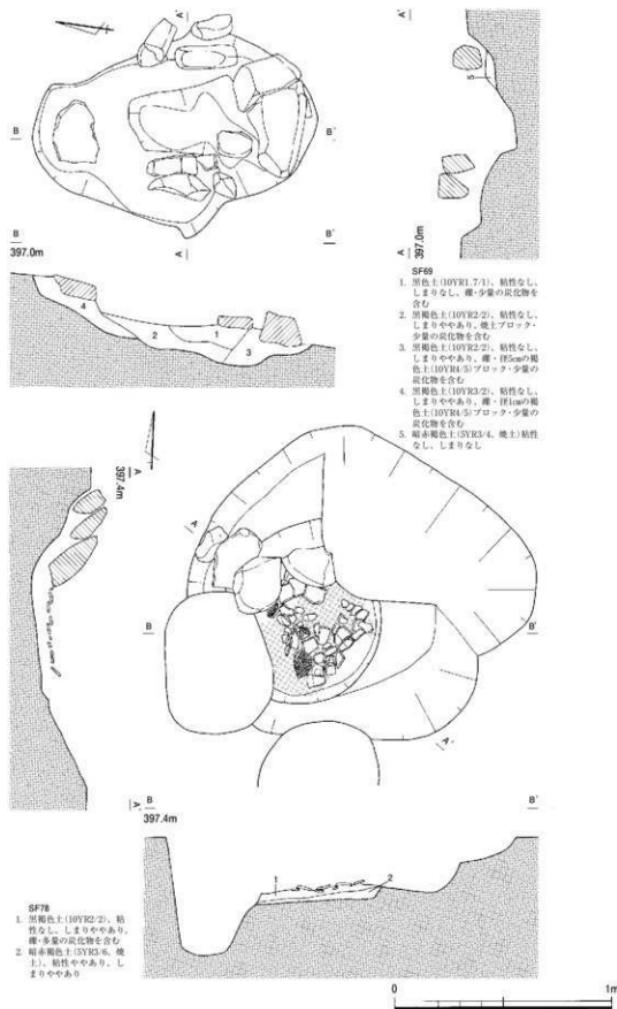


図102 第3B調査面検出遺構図（3）

概要 V b 層基底面で検出した。SK1531を切り、SK1527・1529・1530に切られる。SK1529を完掘した時点で土器片が面的に広がり、間層（1層）を挟んで、被熱して縮まりのある均質な焼土層（2層）が認められたため、別遺構として認定した。掘形の周辺のIX b 層中の礫にも、被熱の痕跡が認められた。なお土器片と同一レベルで、円礫及び亜円礫3個が重なるように出土した。

出土遺物 烧土から、中期後葉の土器（1021・1022・1027）・石錐1点・石錐未製品1点が出土した。

4 配石遺構

S I 36・S K2401（図103、図版34）

位置 H21グリッドの南斜面に位置する。

上面配石 V b 層基底面で検出した。平面形は遺構の南西側を欠くため不明である。長径15~46cmの礫を平置きとし、囲まれた内部の中央東寄りで土器底部（1031）が逆位で出土した（配石1類）。礫の円度は円礫又は扁平円礫で占められ、一部の礫に被熱の痕跡が認められた。

土坑 重複遺構はない。上面配石除去後の平面精査により検出した。平面形は不定形である。長径0.59m以上・短径0.25m以上・深さ0.25mを測る。なお底面で、弱い被熱の痕跡が認められた。

出土遺物 上面配石から中期後葉の土器（1029~1031）が出土した。

S I 37・S K1344（図114、図版38）

位置 E18グリッドに位置する。

上面配石 V b 層基底面で検出した。長径25~35cmの亜円礫2個を長手置きとし（配石2類）、東側の礫はSK1347に跨る。

土坑 平面形は不整円形を呈し、長径0.32m・短径0.29m・深さ0.42mを測る。SK1347を切る。上面配石除去後の平面精査により検出した。掘形の位置は、上面配石の範囲からやや南西にずれる（土坑A類）。

出土遺物 土坑埋土からRF1点・切目石錐1点・骨片が出土した。

S I 37・S K1347（図114、図版38）

位置 E18・F18グリッドに位置する。

上面配石 V b 層基底面で検出した。長径27cmの亜円礫1個を平置きとする（配石2類）。

土坑 平面形は不整円形を呈し、長径0.47m・短径0.38m・深さ0.28mを測る。SK1323・1344に切れ、SK1373を切る。上面配石除去後の平面精査により検出した。掘形の位置は、上面配石の範囲から東にずれる（土坑A類）。

出土遺物 なし。

5 立石遺構

S R 1（図124、図版43）

位置 H17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径0.24m・短径0.20m・深さ0.13mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。SK1776を切る。土坑中央の埋土上部に亜円礫（長径36cm・短径20cm・厚さ13cm）1個を長手立てとし、礫の下端は土坑底面とほぼ接する。

出土遺物 なし。

S R 2（図124、図版43）

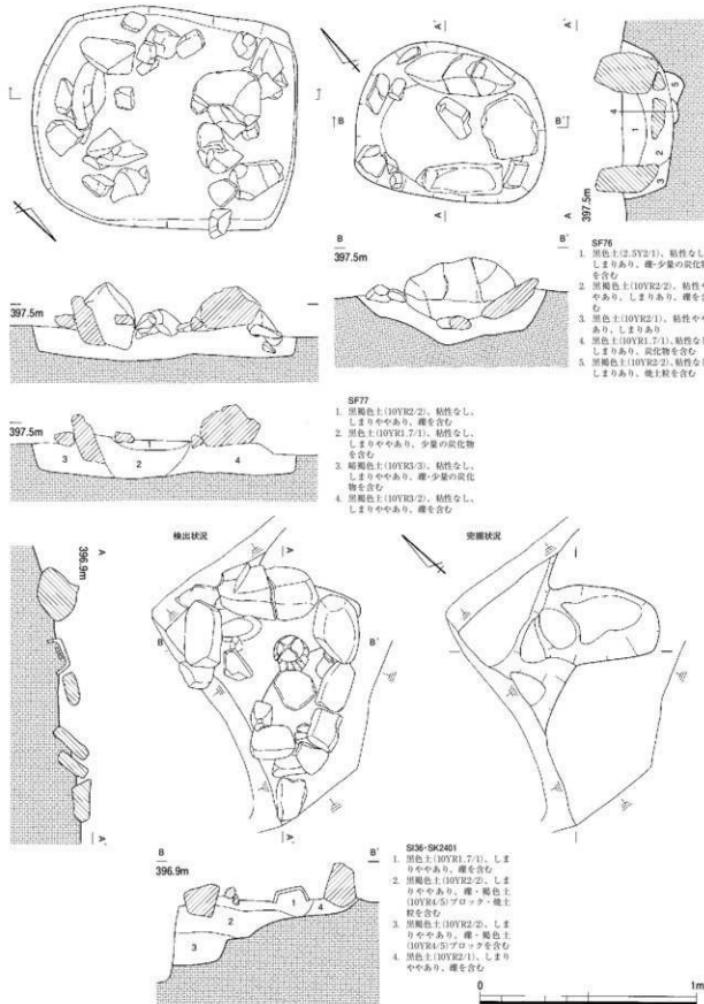


図103 第3B調査面検出造構図(4)

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.53m・短径0.32m以上・深さ0.08mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1818に切られS K1816を切る。土坑中央に亜円碟（長径34cm・短径30cm・厚さ14cm）1個を小口立てとし、碟の下端は土坑底面と接する。

出土遺物 なし。

6 土坑

S K156 (図104)

位置 I16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.96m・短径0.80m・深さ0.15mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K536に切られ、S B16を切る。埋土上部で、長径7~35cmの多数の碟が浮上する（土坑D 1 b類）。このうち中央北には、碟（長径21cm以上・短径10cm・厚さ8cm）を長手立てとする。碟の円磨度は大半が亜円碟で、少量角碟を伴う。なお埋土2層中の焼土ブロックは、S B16下部遺構を掘削した土を埋め戻した結果と考えられ、S B16豊穴内部検出のP289・290が本遺構の底面に属する可能性がある。

出土遺物 埋土から時期不明の繩文土器（1028）・搔器1点（2153）・打欠石錐1点（2257）が出土した。

S K157 (図104、図版34)

位置 N17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.30m・短径0.92m・深さ0.19mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K679を切る。埋土上部で、長径7~27cmの多数の碟が浮上する（土坑D 1 b類）。碟の円磨度は大半が亜円碟で、少量の角碟を伴う。碟及び土坑の壁面や底面で、被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 なし。

S K158 (図104、図版34)

位置 N14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.65m・短径0.43m・深さ0.49mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S B11・S K583を切る。埋土上部で、亜円碟（長径40cm・短径26cm・厚さ14cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1032~1034）・R F 1点・切目石錐1点が出土した。

S K160 (図105、図版34)

位置 N17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.70m・短径0.38m・深さ0.21mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、円碟（長径25・短径21・厚さ7cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K161 (図105、図版34)

位置 N18グリッドに位置する。

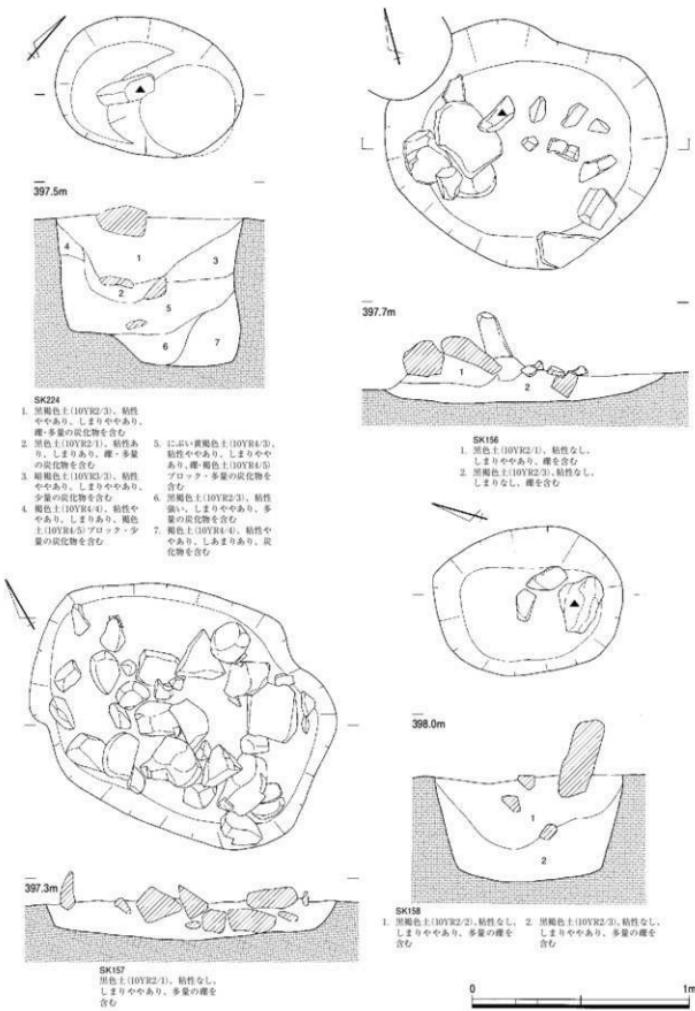


図104 第3B調査面検出造構図(5)

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.43m・短径0.40m・深さ0.58mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部に、長径7~30cmの多量の縹が浮上する（土坑D1b類）。これらのうち小型の縹は混入とみられ、それらを除くと縹の円磨度は円縹と亜円縹で占められる。

出土遺物 埋土から後期中葉の土器（1035・1036）・RF2点・骨片が出土した。

S K162（図105、図版35）

位置 M16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.44m・短径0.40m・深さ0.30mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、亜円縹（長径50cm・短径40cm・厚さ14cm）1個を長手立てとする（土坑D2c類）。

出土遺物 埋土から骨片が出土した。

S K163（図106、図版35）

位置 b25グリッドに位置する。

形状と規模 Cトレーニに切られるため平面形は不明である。長径0.50m・短径0.20m以上・深さ0.25mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部に、長径10cm以下の多量の縹が浮上する（土坑D1b類）。縹の円磨度は大半が亜角縹であるが、被熱していない。

出土遺物 なし。

S K172（図106、図版35）

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径0.65m・短径0.53m・深さ0.35mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。SK1490に切られ、SK1462を切る。埋土上部で、長径9~50cmの多数の縹が浮上する（土坑D1b類）。縹の円磨度は大半が亜円縹で、少量の亜角縹を伴う。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1037）・石鎚2点・石鎚未製品1点・楔形石器2点・RF2点・石皿1点、1層から骨片が出土した。

S K173（図105）

位置 I19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径1.72m・短径1.50m・深さ0.64mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。SK1662・1663・1702・1705を切る。埋土中に、長径6~32cmの多数の縹が浮上する（土坑D1b類）。縹の円磨度は、大半が亜角縹である。

出土遺物 埋土から、後期中葉から後葉の土器（1038~1040）・RF1点・UF1点・切目石錐2点、埋土の1・2層から骨片が出土した。

S K174（図106、図版35）

位置 G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径0.32m・短径0.30m・深さ0.39mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。SK2460・1464・1548を切る。埋土上部で、完形の石皿（2325）1個を長手立てとする（土坑D2c類）。

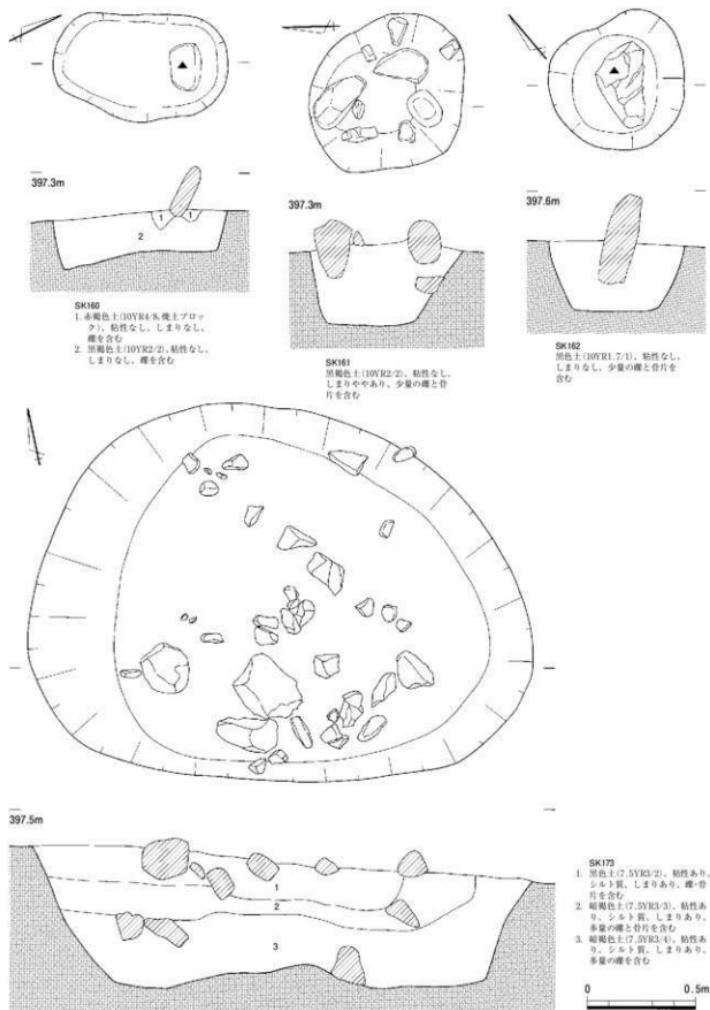


図105 第3B調査面検出造構図(6)

出土遺物 墓土から後期中葉の土器（1041）、墓土の5層から骨片が出土した。

S K182（図106）

位置 I 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.82m・短径0.70m以上・深さ0.46mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1658に切られる。平面形と底面の様子から、複数の土坑の重複が想定される。土坑底面の西壁沿いに亜円碟3個が配置されており、中央の碟（長径37cm・短径30cm・厚さ30cm）は長手立ての可能性がある（土坑B 2類）。

出土遺物 墓土から、後期後葉の土器（1042）が出土した。

S K185（図106、図版35）

位置 H 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径1.00m・短径0.56m・深さ0.27mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K186に切られ、S K1528・1575・1622を切る。土坑東側の亜円碟（長径50cm・短径48cm・厚さ17cm）を長手立てとみると、周辺の亜角碟はこの碟を固定するための根石（長径10cm～23cm）の可能性がある（土坑D 2 c類）。

出土遺物 墓土から、後期中葉の土器（1043・1044）・石錐1点・石錐1点・R F 1点が出土した。

S K201（図107、図版35）

位置 I 16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径0.66m・短径0.49m・深さ0.40mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1731に切られる。埋土上部で長径9～17cmの多数の碟、下部で長径26cmと45cmの碟2個が浮上する（土坑D 2 b類）。碟の円磨度は、大半が亜円碟である。

出土遺物 なし。

S K212（図107、図版35）

位置 K 11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径0.90m・短径0.48m・深さ0.42mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1159・1160・1166・1173・1201を切る。埋土上部で、長径7～38cmの多数の碟が浮上する（土坑D 1 b類）。碟の円磨度は、亜円碟で占められる。

出土遺物 墓土から中期後葉から後期初頭にかけての土器（1045）・フレイク4点が出土した。

S K219（図107）

位置 H 3グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整長方形である。長径1.44m・短径0.62m・深さ0.12mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。重複造構はない。埋土上部南側では、亜円碟（長径30cm・短径21cm・厚さ7cm、長径30cm・短径19cm・厚さ9cm）2個を小口立てとし、北側では長径29cmの亜角碟1個を平置きとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 墓土から石錐2点・UF 1点が出土した。

S K221（図108）

位置 J 3グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.90m・短径0.75m・深さ0.20mを測る。

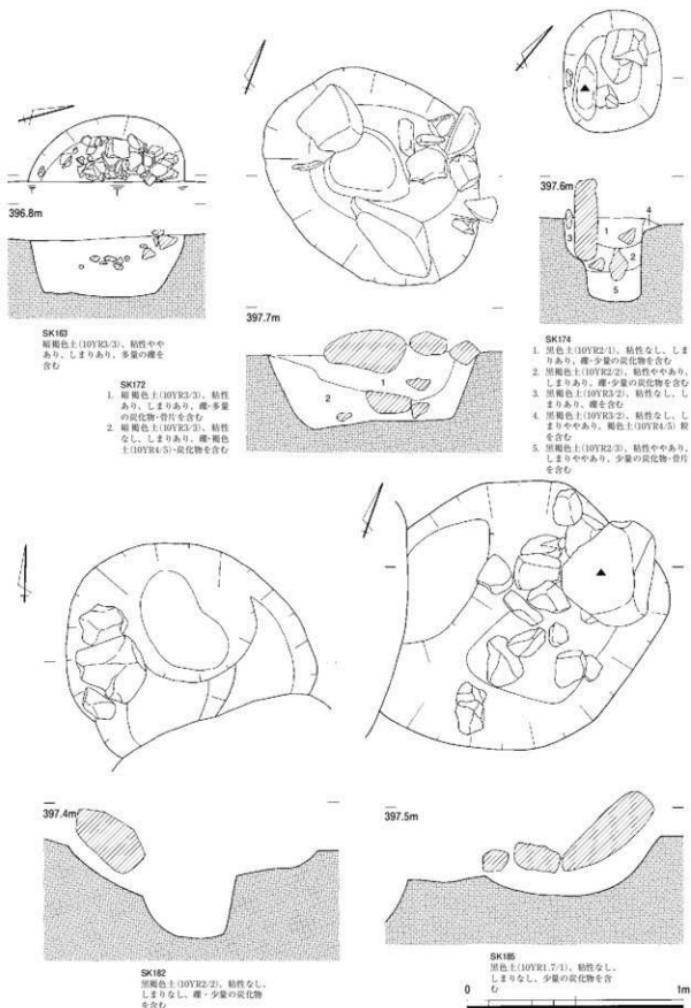


図106 第3B調査面検出遺構図（7）

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部の土坑北側で、亜円碟（長径36cm・短径27cm・厚さ13cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K 222 (図108)

位置 J 4・J 5グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径 0.80m・短径 0.52m・深さ 0.30mを測る。

概要 IX a 層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、角碟（長径 37cm・短径 22cm・厚さ 21cm）1個を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K 224 (図104)

位置 F 19 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径 0.75m・短径 0.43m・深さ 0.70mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K 1515・1562・1598を切る。埋土上部に亜角碟（長径不明・短径 28cm・厚さ 10cm）1個を長手立てとし、少量の円碟・亜円碟が浮上する（土坑D 2 c類）。埋土のうち、土層 6 層に多量の炭化物が出土したため土壌を採取し、うち湿重約 170 g を水洗選別した。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1046・1047）・RF 1点が出土した。埋土 1 層等から骨片・埋土 6 層の水洗選別により少量の碎片・炭化種子を検出した（第6章3節参照）。

S K 259 (図109、図版35)

位置 L 3・M 3 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径 1.78m・短径 0.68m・深さ 0.45mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑の長軸方向に平行する壁際に、長径 18～33 cm の亜円碟を配置する。碟は概ね中央に向かって下がっており、小口立てであった可能性が高い（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から搔器 1 点・UF 1 点が出土した。

S K 268 (図107)

位置 G 6・G 7 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径 0.65m・短径 0.54m・深さ 0.42mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部で、長径 36cm の亜円碟 1 個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 なし。

S K 296 (図107)

位置 M 9 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径 0.70m・短径 0.52m・深さ 0.23mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S B 13を切る。土坑南東端の埋土上部で、長径 31cm の亜円碟 1 個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から中期中葉の土器（1056）・石鎚 2 点・打欠石錘 1 点が出土した。

S K 344 (図108)

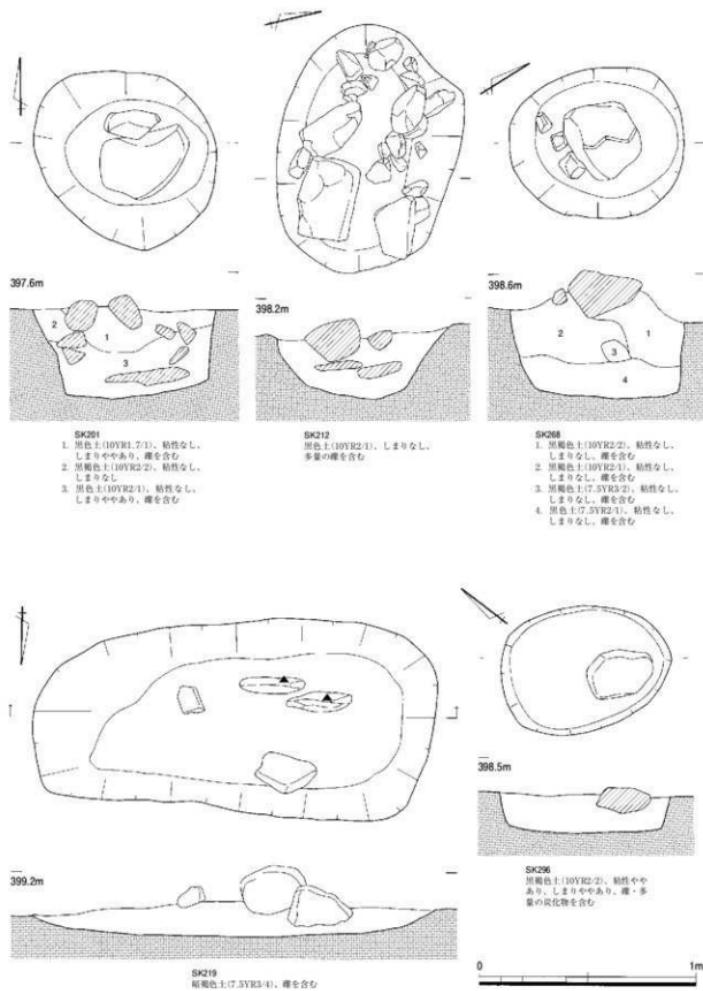


図107 第3B調査面検出造構図 (8)

位置 O 11・O 12・P 11・P 12 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.60m・短径0.41m以上・深さ0.19mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K 343と倒木痕に切られる。土坑南東端の埋土上部で、長径30cmの亜円碟1個が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 なし。

S K 388（図版36）

位置 Q 14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.77m・短径1.28m・深さ0.38mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K 389を切る。土坑中央の埋土上部で、長径10~20cm程度の角碟又は亜角碟が多数浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器（1064~1066）、磨・敲石類1点（2197）、打欠石錐1点（2224）、切目石錐1点（2272）が出土した。

S K 486（図108）

位置 Q 16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.37m・短径0.27m・深さ0.15mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複造構はない。土坑中央の埋土上部で、長径29cmの亜円碟1個が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 なし。

S K 492（図108）

位置 Q 16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。直径0.45m・深さ0.20mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複造構はない。土坑中央の埋土上部で、長径16cmの円碟と長径32cmの亜円碟が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 なし。

S K 495（図109）

位置 Q 16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.45m・短径0.37m・深さ0.19mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複造構はない。土坑中央の埋土上部で、長径25cmの亜円碟1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 なし。

S K 496（図109）

位置 Q 16グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.37m・短径0.35m・深さ0.08mを測る。

検出状況 V b 層基底面で検出した。S F 61を切る。埋土上部で、長径25cmの亜円碟1個が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 なし。

S K 497（図109、図版36）

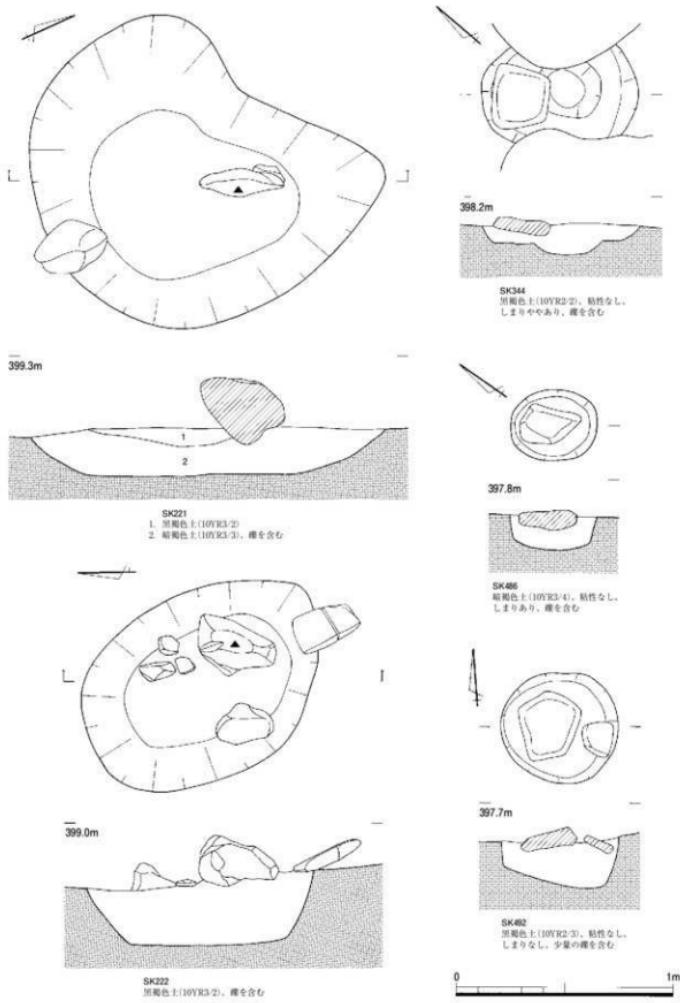


図108 第3B調査面検出遺構図（9）

位置 Q16・Q17グリッドに位置する。

形状と規模 S B 6 に切られ、平面形は不明である。長径0.50m以上・短径0.65m・深さ0.18mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部で、長径16~30cmの亜角礫3個が浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 なし。

S K503 (図109)

位置 Q18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。直径0.52m・深さ0.12mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部で、長径31cmの亜円礫1個が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 なし。

S K510 (図109、図版36)

位置 Q18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.34m・短径0.24m・深さ0.19mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑西側で、亜円礫（長径23cm・短径19cm・厚さ8cm）1個を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器が出土した。

S K592 (図版36)

位置 M13グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.93m・短径0.63m・深さ0.45mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部で、長径5~20cm程度の亜角礫が多数浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から打欠石錘（2255）1点が出土した。

S K601 (図110、図版36)

位置 M13グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径0.47m・短径0.17m・深さ0.84mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S B11・P210に切られる。土坑東端の埋土上部で、亜角礫（長径35cm・短径12cm・厚さ計測不能）1個が浮上する。土坑中央に向かって傾斜することから、長手立ての可能性がある（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土からR F 1点・切目石錘1点が出土した。

S K608 (図109、図版36)

位置 N17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径0.49m・短径0.35m・深さ0.30mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑西側で、亜円礫（長径35cm・短径19cm・厚さ9cm）1個を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

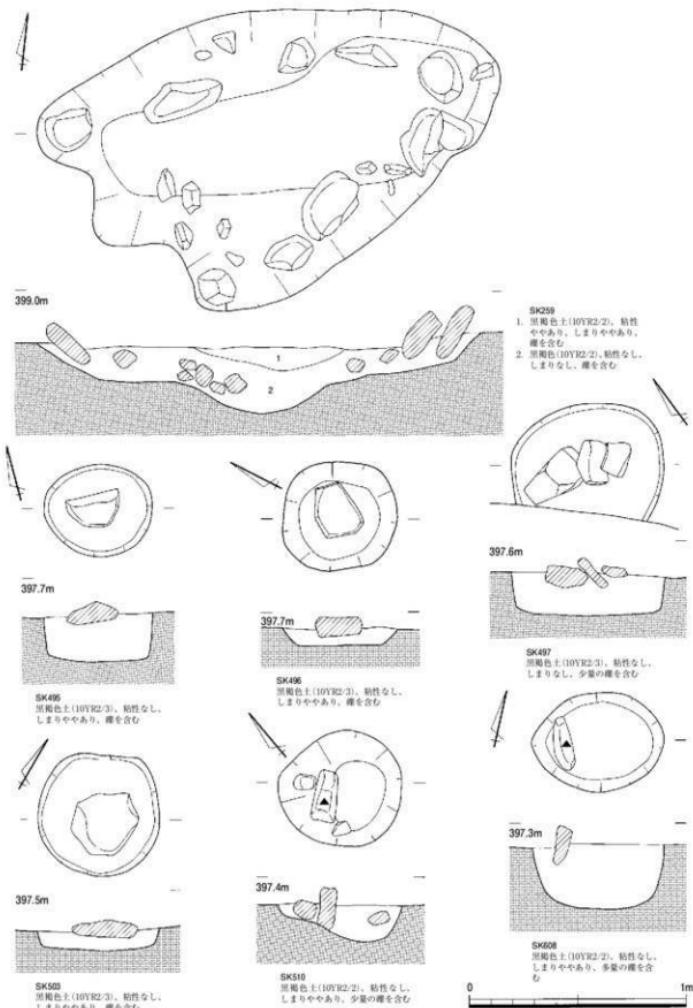


図109 第3B調査面検出構造図(10)

S K611 (図110)

位置 M14グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.40m・短径0.26m・深さ0.24mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部で、長径17cmの亜円蝶1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 なし。

S K705 (図110、図版36)

位置 H11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.77m・短径0.50m・深さ0.17mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S B18・P 297・298を切る。土坑北端で、円蝶（長径27cm・短径23cm・幅5cm）1個と被熱痕のある亜円蝶（長径22cm・短径20cm・厚さ10cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1076～1078）・石錐1点・R F 1点が出土した。

S K714 (図110、図版36)

位置 G10・H10グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.88m・短径0.57m・深さ0.25mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土の全体に、長径5～25cmの多数の蝶が浮上する（土坑D 1 b類）。蝶の円磨度は亜円蝶で占められ、少量の被熱した蝶を含む。

出土遺物 埋土から、中期後葉から後期初頭にかけての土器（1081～1083）が出土した。

S K756 (図111、図版37)

位置 H10・H11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は長方形である。長径0.99m・短径0.47m・深さ0.23mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K757を切る。土坑中央の埋土上部で、大型の土器片（1085）が浮上する（土坑C 2類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1085）・打欠石錐1点が出土した。

S K759 (図111、図版37)

位置 H11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.67m・短径0.50m・深さ0.59mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K803に切られ、S K760・761・762・848・881・901を切る。土坑南東端の埋土上部で、亜円蝶（長径39cm・短径33cm・厚さ14cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器（1087・1088）・石錐1点・楔形石器3点・R F 2点・切目石錐3点が出土した。

S K774 (図110、図版37)

位置 H12・I 12グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.74m・短径0.57m・深さ0.51mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K773を切る。埋土の全体に、長径4～27cmの多数の蝶が浮上

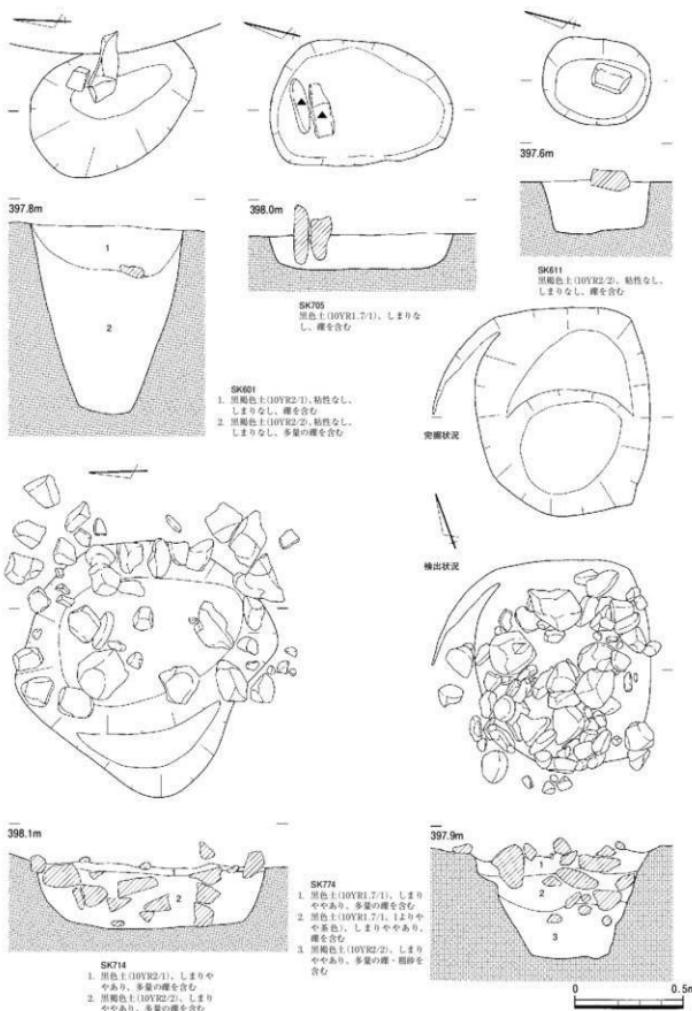


図110 第3B調査面検出遺構図(11)

する（土坑D1b類）。縄の円磨度は亜円縄が主体で少量の亜角縄が伴い、被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 墓土から後期前葉の土器（1089）が出土した。

S K782（図111、図版37）

位置 J 9・J 10グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.80m・短径0.63m・深さ0.39mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K936を切る。土坑北東端の埋土上部で、亜円縄（長径34cm・短径17cm・厚さ10cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 墓土から中期後葉の土器・UF 1点が出土した。

S K855（図111）

位置 I 12グリッドに位置する。

形状と規模 S K787に切られるため、平面形は不明である。長径0.48m以上・短径0.33m以上・深さ0.13mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。底面に長径10cm程度の亜角縄を置き、その上に細長い縄の破片（長径21cm・短径16cm・厚さ19cm）の1個を小口立てとする（土坑D 1 b類）。

出土遺物 なし。

S K885（図版37）

位置 J 11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径1.11m・短径0.75m以上・深さ0.76mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K810に切られ、S K886・P 197を切る。土坑北西端の埋土上部で完形の石皿2個が並んで浮上した（土坑D 2 b類）。

出土遺物 土器は、中期後葉から後期前葉の土器（1098・1099）が出土した。石器は、埋土中の石皿より上位から石礫2点（2071・2074）・ヘラ形石器1点・RF 3点・UF 2点、下位から搔器1点（2145）・UF 1点・打欠石錐1点（2259）・切目石錐1点（2273）が出土した。

S K937（図112、図版37）

位置 K 10グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.46m・短径0.37m・深さ0.45mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K785に切られ、S K1094を切る。土坑中央の埋土上部で、長径25cmの亜角縄1個が浮上し、その南側に亜円縄1個（長径27cm・短径18cm・厚さ9cm）を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 墓土から後期前葉の土器（1110）・搔器1点・切目石錐4点が出土した。

S K1018（図112、図版37）

位置 L 10・M 10グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.06m・短径0.76m・深さ0.24mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1017に切られ、S K1031・S B22を切る。土坑南西端の埋土上部で、大型の土器片（1107）が浮上する（土坑C 2類）。

出土遺物 墓土から中期中葉の土器（1106～1109）が出土した。

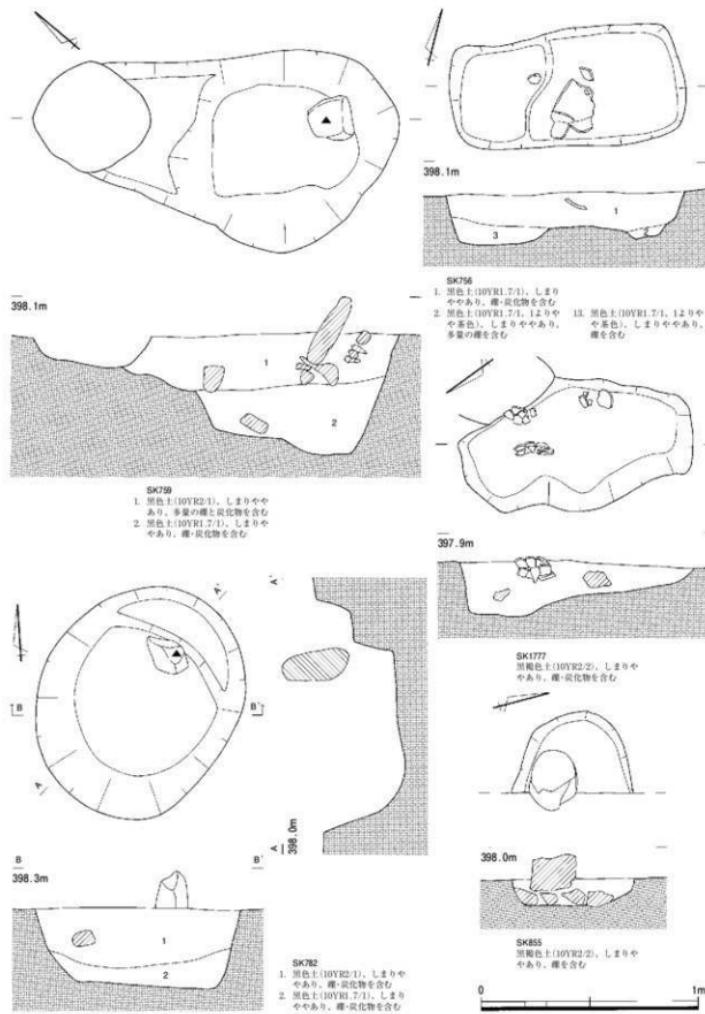


図111 第3B調査面検出構造図(12)

S K1109 (図112、図版37)

位置 K14・K15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.95m・短径0.59m・深さ0.23mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1142を切る。土坑北東端の埋土上部で、石皿片（長径37cm・短径31cm・厚さ13cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1130）・石皿1点が出土した。

S K1122 (図112、図版38)

位置 J12・K12グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.39m・短径0.32m・深さ0.29mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1123・1193を切る。埋土上部で、長径14~22cmの亜角碟2個（うち北側の碟は石皿片）が浮上する（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器（1134）・RF1点・石皿1点が出土した。

S K1160 (図113、図版38)

位置 K11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.67m・短径0.60m・深さ0.87mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K212・1081・1159に切られ、S K1161・1162・1201を切る。埋土中から、碟は出土しなかった（土坑A類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1136）・石錐1点（2087）・打欠石錐22点（2216~2222・2240~2254）・切目石錐26点（2263・2267~2269・2282~2303）が出土した。石錐は1層、多くの石錐は3~4層からの出土である。

S K1161 (図112、図版38)

位置 K11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.85m以上・短径0.55m・深さ0.30mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1084・1159・1160に切られる。底面からやや上の壁際に、長径11~37cmの碟を立て、一周させる（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から削器1点・切目石錐1点が出土した。

S K1238 (図112、図版38)

位置 L11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.70m・短径0.58m・深さ0.59mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1084に切られ、S K1237を切る。底面からやや上の壁間に碟を立てて配置する（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土からRF1点・磨・截石類1点・切目石錐2点・骨片が出土した。

S K1249 (図113、図版38)

位置 L11・L12グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.80m以上・短径0.70m以上・深さ0.32mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。S K1250に切られ、S K1253・1295を切る。土坑北西側の埋土上部で、被熱した角碟（長径31cm・短径26cm・厚さ7cm）1個を長手立てとし、中央の埋土上部で長径22

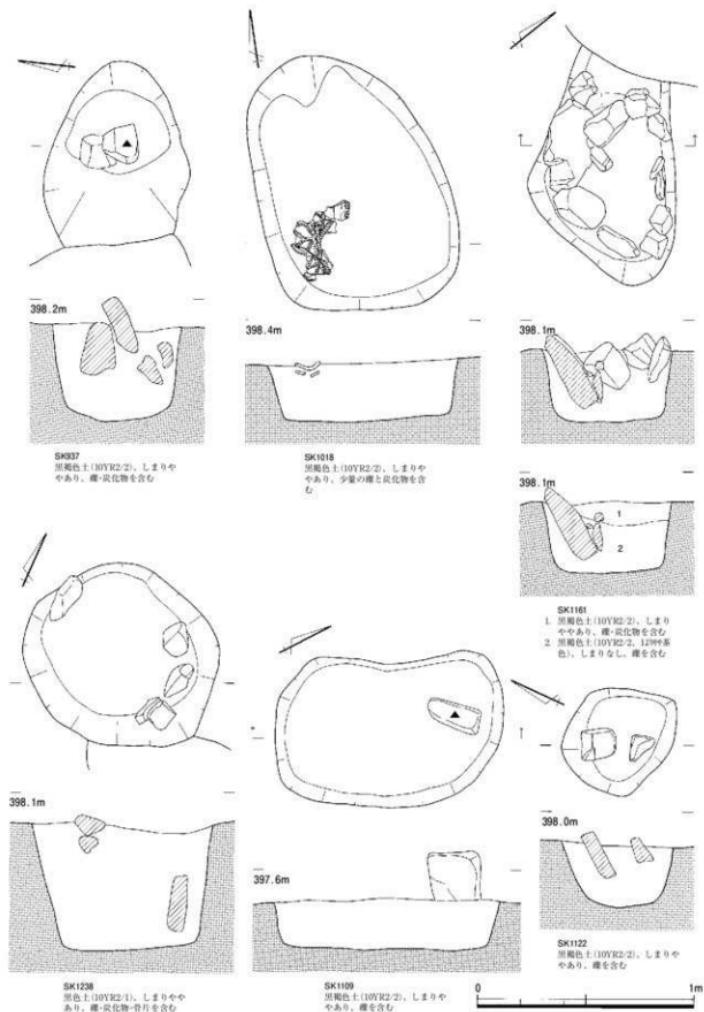


図112 第3B調査面検出構造図(13)

cmの亜円碟 1 個が浮上する（土坑D 2 c 類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器が出土した。

S K1273（図113、図版38）

位置 M12グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.80m・短径0.62m・深さ0.37mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1257・1276を切る。土坑西側の埋土上部で、亜円碟（長径48cm・短径26cm・厚さ12cm）1 個を長手立てとする（土坑D 2 c 類）。

出土遺物 埋土からU F 1 点・切目石錐1点が出土した。

S K1323（図114、図版38）

位置 E 18・F 18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.64m・短径0.48m・深さ0.67mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1347・1373を切る。埋土上部で、長径6～43cmの多数の碟が浮上し、土坑北西端の埋土最上部に長径50cmの亜円碟を置く（土坑D 1 b 類）。碟の円磨度は亜円碟で占められる。

出土遺物 埋土から中期後葉～後期初頭の土器（1157～1159）・石錐1点・石錐1点・R F 1 点・打製石斧2点・磨・敲石類1点、埋土1層などから骨片が出土した。

S K1328（図113、図版38）

位置 F 18・F 19グリッドに位置する。

形状と規模 S K1324・1325を切る。平面形は不整長方形である。長径0.58m・短径0.48m・深さ0.65mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土下部で、長径7～25cmの多数の碟が浮上する（土坑D 1 b 類）。碟の円磨度は亜角碟が主体で、少量の亜円碟を伴う。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器が出土した。

S K1335（図115、図版39）

位置 F 18グリッドに位置する。

形状と規模 S K1334・1375を切る。平面形は不整円形である。長径0.50m・短径0.38m・深さ0.21mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部で、長径25cmと39cmの亜円碟2個を芯石とし、西端・南西端に扁平円碟（長径19cm・短径16cm・厚さ5cm、長径31cm・短径19cm・厚さ10cm）2個を小口立てにより開いた石とする。なお芯石の上に載る最上部の亜円碟は、開いた石が内側に倒れたものと解釈する。碟除去後に、中期後葉の土器（1160）が正位で出土した（土坑E 類）。

出土遺物 土器（1160）のみが出土した。

S K1353（図115、図版39）

位置 G 15グリッドに位置する。

形状と規模 S K140・1367を切る。平面形は不整楕円形である。長径0.91m・短径0.76m・深さ0.31mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部で、長径7～24cmの多数の亜角碟が浮上する（土坑D 1

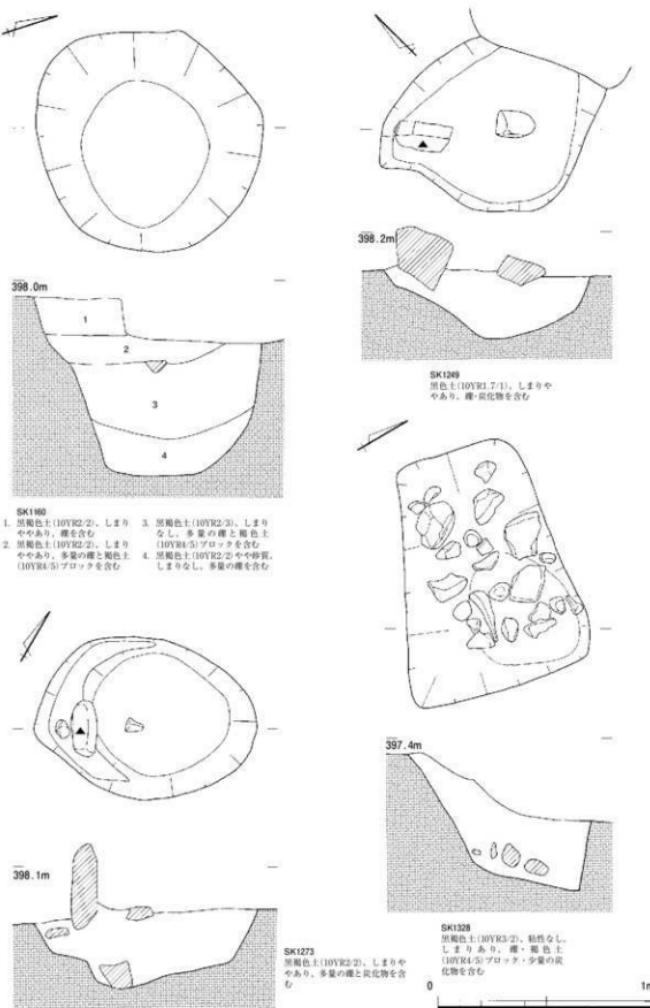


図113 第3B調査面検出造構図 (14)

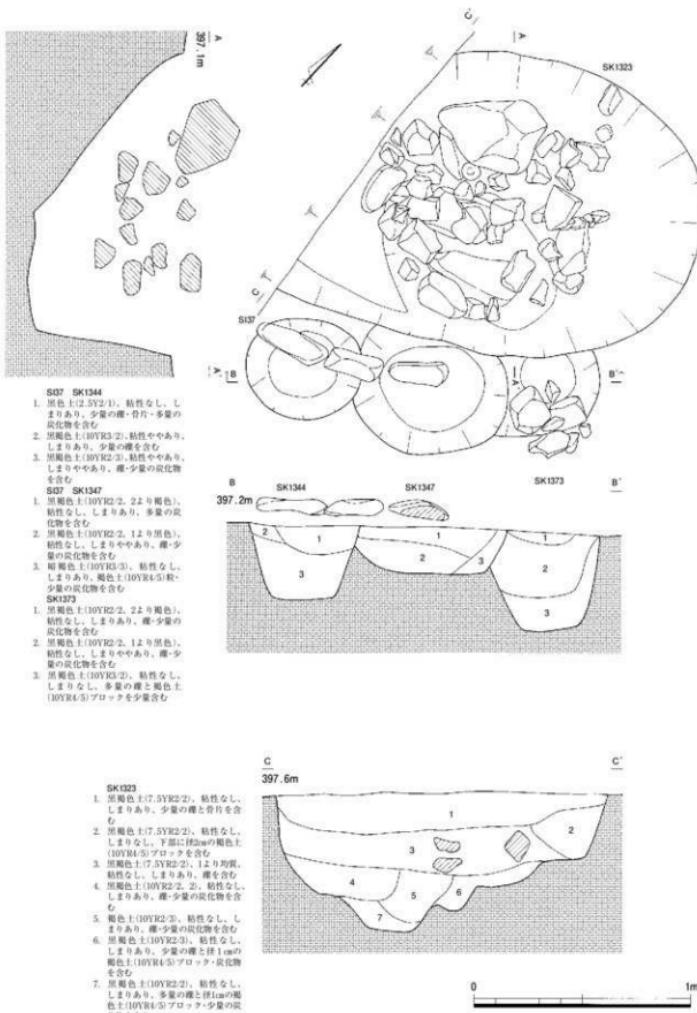


図114 第3B調査面検出遺構図（15）

b類)。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器が出土した。

S K 1356 (図115)

位置 F15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径0.95m・短径0.32m・深さ0.20mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複造構はない。土坑中央の埋土上部で、長径38cmの亜角碟1個が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 なし。

S K 1362 (図115、図版39)

位置 G15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.32m・短径0.30m・深さ0.38mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複造構はない。土坑中央や西側の埋土上部で、長径29cmの亜円碟1個が浮上する（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K 1373 (図114)

位置 E18グリッドに位置する。

形状と規模 S K 1323・1347に切られるため、平面形は不明である。長径0.24m・短径0.20m以上・深さ0.51mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部で、長径7~19cmの多数の碟が浮上する（土坑D 1 b類）。

碟の円磨度は亜角碟で占められ、IX a層に含まれる碟の混入の可能性もある。

出土遺物 なし。

S K 1440 (図115、図版39)

位置 F17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径0.53m・短径0.48m・深さ0.35mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複関係は不明である。埋土上部で、長径17~33cmの少量の亜円碟、亜角碟が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から、後期中葉の土器（1161）が出土した。

S K 1455 (図116、図版39)

位置 G17・H17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径0.58m・短径0.36m・深さ0.13mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。P94・S K 1459・1460・1461を切る。埋土中で、長径14~38cmの亜円碟3個が浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 なし。

S K 1456 (図115、図版39)

位置 G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径0.80m・短径0.45m・深さ0.35mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K 1467・1470を切る。埋土上部で長径10~33cmの多量の碟が浮

上する。ただし、このうちの北端・南端の礫を立石と解釈すれば、上面配石の可能性もある。礫の円度は亜角礫が主体で、石皿片（南端の礫2個）を含む（土坑D 1 b類）。

出土遺物 墓土から石皿1点・骨片が出土した。

S K1463（図116）

位置 G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.43m・短径0.38m・深さ0.13mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K70に切られ、S K1464を切る。墓土中で、長径44cmの亜角礫1個が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 なし。

S K1471（図116、図版39）

位置 G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.70m・短径0.55m・深さ0.80mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1470を切る。IX層中に含まれる大型の礫のために、土坑東側の上部は開くものの、壁は垂直又は一部オーバーハング気味に立ち上がる（土坑A類）。断面形状から貯蔵穴の可能性が想定され、重複遺構からの遺物の混入の恐れが少ないとから、埋土のうち土層5層の土壤を探取し、その一部を水洗選別した。

出土遺物 切目石錘2点が出土し、水洗選別により多量の碎片、少量の炭化種子・炭化材を検出した（第6章第3節参照）。

S K1478（図116、図版40）

位置 H20グリッドに位置する。

形状と規模 S K1567・1570・1714を切る。平面形は楕円形を呈し、長径1.20m・短径0.90m・深さ0.28mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。埋土上部で、長径10~27cmの多数の亜円礫が浮上する。その配置は長方形を指向しているとみられ、南東辺・北西辺を欠く。また、中央北西寄りで長径49cmの扁平円礫1個が浮上し、その上面は南東に傾斜する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 墓土からR F 1点・骨片が出土した。

S K1490（図117、図版40）

位置 H17・18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.64m・短径0.60m・深さ0.46mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K172・1461を切る。埋土上部に、長径6~38cmの亜角礫が浮上し、北端よりに亜円礫（長径23cm・短径18cm・厚さ11cm）1個を長手立てとする（土坑D 1 b類）。

出土遺物 墓土から時期不明の土器・骨片が出土した。

S K1511（図117、図版40）

位置 F19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.70m・短径0.66m・深さ0.24mを測る。重複遺構はない。

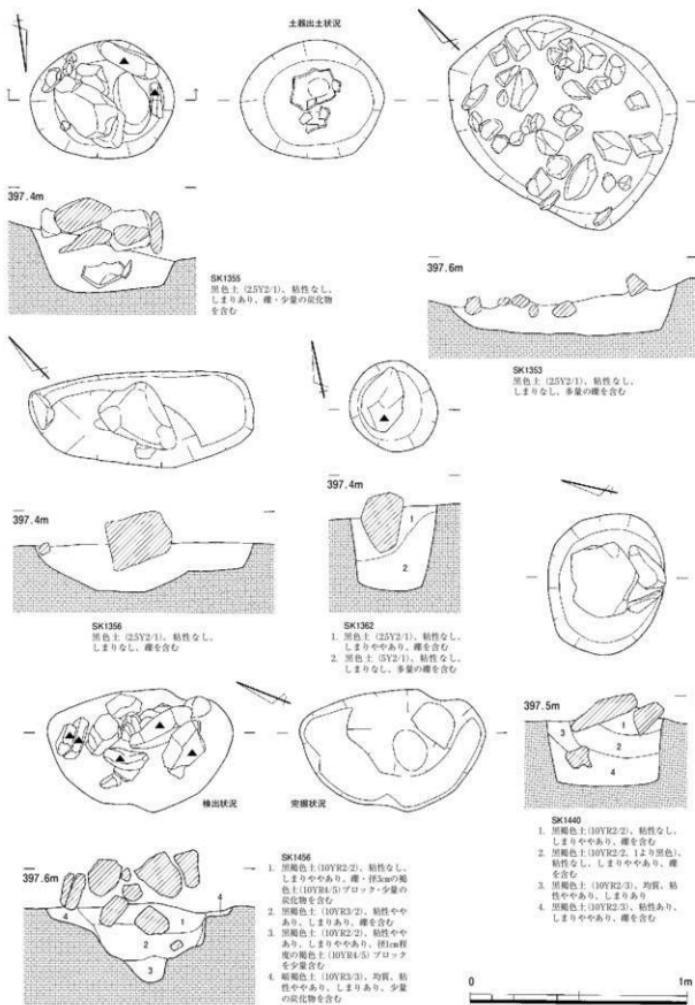


図115 第3B調査面検出遺構図 (16)

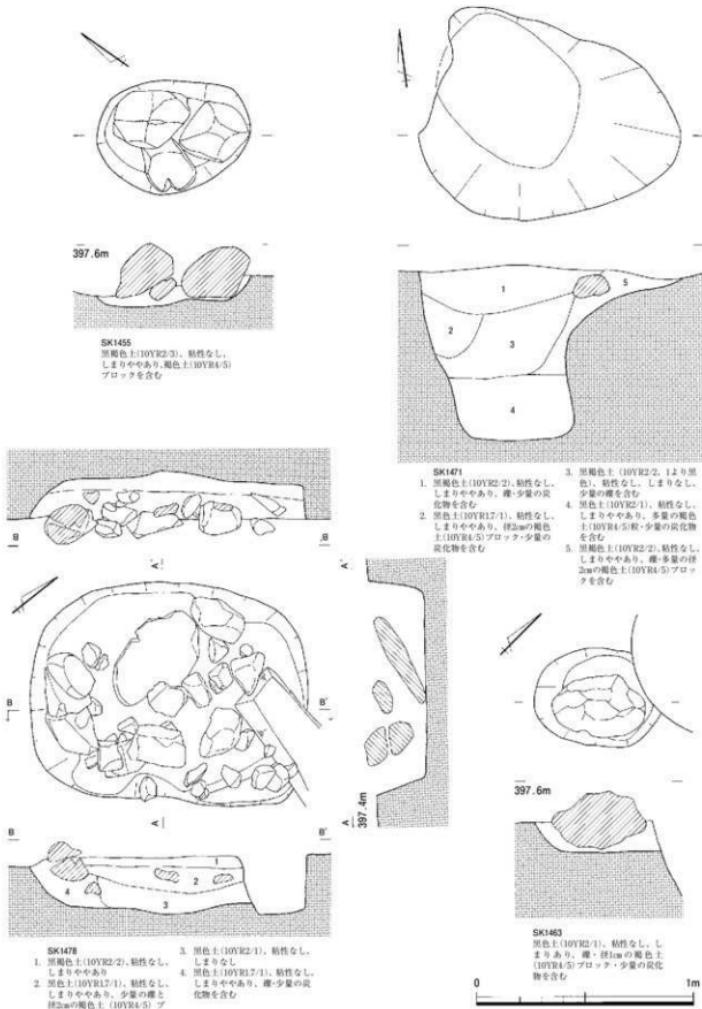


図116 第3B 調査面検出遺構図 (17)

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部の壁際に、長径20~49cmの扁平円碟を小口立てとする（土坑B 2類）。その平面形は方形を指向しているとみられるが、北西辺・南西辺を欠く。土層断面の観察により、この碟を据えるための複数の掘り込みを確認することができた。

出土遺物 埋土から石礫1点（2120）が出土した。

S K 1519 (図117、図版40)

位置 G19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径1.15m・短径0.77m・深さ0.32mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1520に切られ、S K1524を切る。底面の壁際に、東辺を除く三辺に長径8~35cmの亜角碟を配置する（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から後期前業の土器（1163・1164）・石礫1点・石錐1点・切目石錐1点が出土した。

S K 1521 (図118、図版40)

位置 F19・G19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径0.98m・短径0.38m・深さ0.18mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1520・1527・1626に切られ、S K1347を切る。埋土上部で、長径13~33cmの碟が浮上し、碟は北側の面を揃えて配置される（土坑D 1 b類）。碟の円磨度は大半が亜円碟で、少量の亜角碟を伴う。

出土遺物 埋土から中期後業の土器（1165~1167）・切目石錐1点が出土した。

S K 1527 (図118、図版40)

位置 G19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径1.27m・短径0.51m・深さ0.30mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1529・1530・1601・1626に切られ、S K1521を切る。埋土上部に、長径10~36cmの多数の碟が浮上する（土坑D 2 b類）。碟の円磨度は亜円碟で占められる。土層断面を観察すると、碟の一部は埋土上面からの掘り込みに伴うことがわかる。

出土遺物 埋土から後期前業の土器（1168）・石礫1点・石錐2点・切目石錐1点が出土した。

S K 1529 (図118、図版40)

位置 G19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.95m・短径0.80m・深さ0.65mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1530・1531・1626に切られ、S K1527を切る。埋土上部に、長径11~30cmの多数の亜円碟が浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器・石核1点・石錐2点・R F 4点・切目石錐1点・骨片が出土した。

S K 1533 (図118、図版40)

位置 G19・G20グリッドに位置する。

形状と規模 本遺構はS K1541に切られ、さらに、土層断面と底面の様子から複数の土坑の重複とみられるが、重複関係は不明である。平面形は不明である。長径1.10m以上・短径1.07m・深さ0.50mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。土坑西端の埋土上部に、長径16~31cmの多数の亜円碟が浮上する

(土坑D 1 b類)。ただし、底面で縄の集中する範囲とはほぼ同じ規模の小穴を検出したことから、これら縄は小穴に伴う可能性がある。

出土遺物 埋土から石錐1点・RF 6点・切目石錐1点が出土した。

S K1541 (図119、図版41)

位置 G20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.94m以上・短径0.46m・深さ0.59mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1560・1564に切られ、S K1532・1533・1549を切る。土坑中央の埋土上部に、長径11~39cmの多数の縄が浮上する(土坑D 1 b類)。縄の円磨度は多様(円縄・亜円縄・角縄)である。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K1547 (図117)

位置 F19・F20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。直径0.31m・深さ0.66mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1552・1553を切る。埋土上部で長径21cmと長径29cmの亜円縄2個が重なるように並び、うち南側の縄の上面は土坑中央に向かって下がる(土坑D 2 d類)。底面は西側が深く、埋土2層のうち目視の届かない最深部は、土層観察による分層ができなかった。

出土遺物 埋土から切目石錐1点(2280)が出土した。

S K1556 (図120、図版41)

位置 F20・G20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.34m・短径0.31m・深さ0.36mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1537・1538に切られ、S K1539・1540を切る。埋土上部に、長径12~24cmの多数の亜円縄が浮上する(土坑D 1 b類)。

出土遺物 埋土から石錐1点(2072)・磨・敲石類2点が出土した。

S K1563 (図119、図版41)

位置 I20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整長方形である。長径2.16m・短径1.39m以上・深さ0.19mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S Z13に切られ、SB 8を切る。土坑中央で、埋土掘削中に検出したS K1625の縄の上部は本遺構の底面よりも高く、中央に位置していることから、両遺構は同一遺構の可能性もある。埋土上部に、長径18~40cmの多数の縄が浮上(土坑D 1 b類)し、縄の円磨度は亜円縄で占められる。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器(1169)・石核1点(2043)・石錐3点(2061・2088・2105)・打欠石錐1点(2258)・切目石錐2点(2275・2305)・骨片が出土した。

S K1583 (図120、図版41)

位置 G18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.04m・短径0.76m・深さ0.75mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1582・1584を切る。壁は垂直又は一部オーバーハング気味に立ち上がる(土坑A類)。断面形状から貯蔵穴の可能性が想定され、重複遺構からの遺物の混入の恐

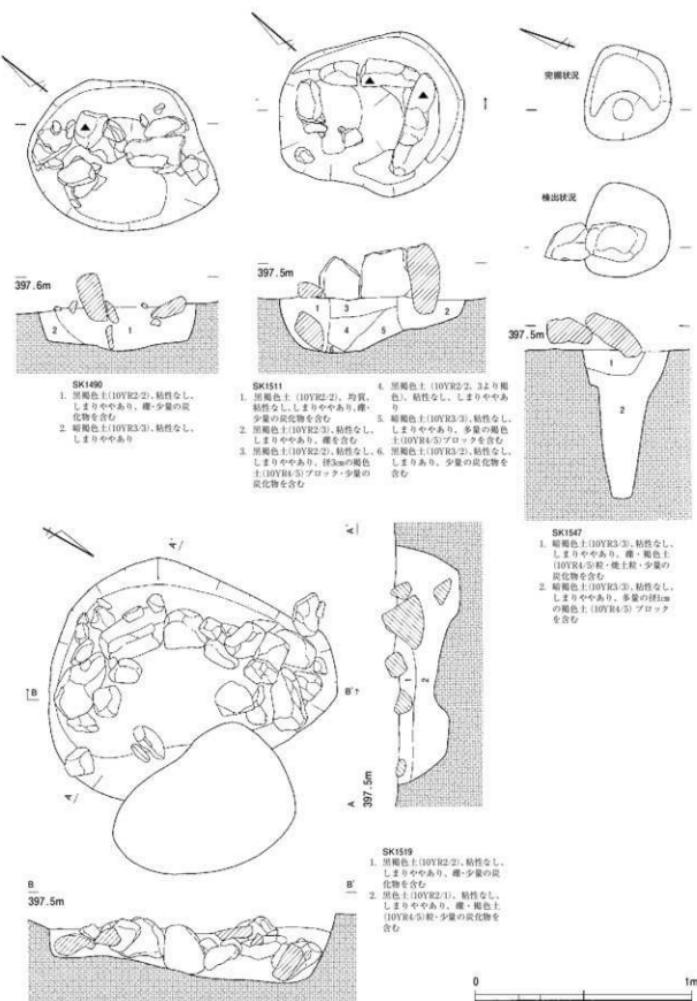


図117 第3B調査面検出構造図 (18)

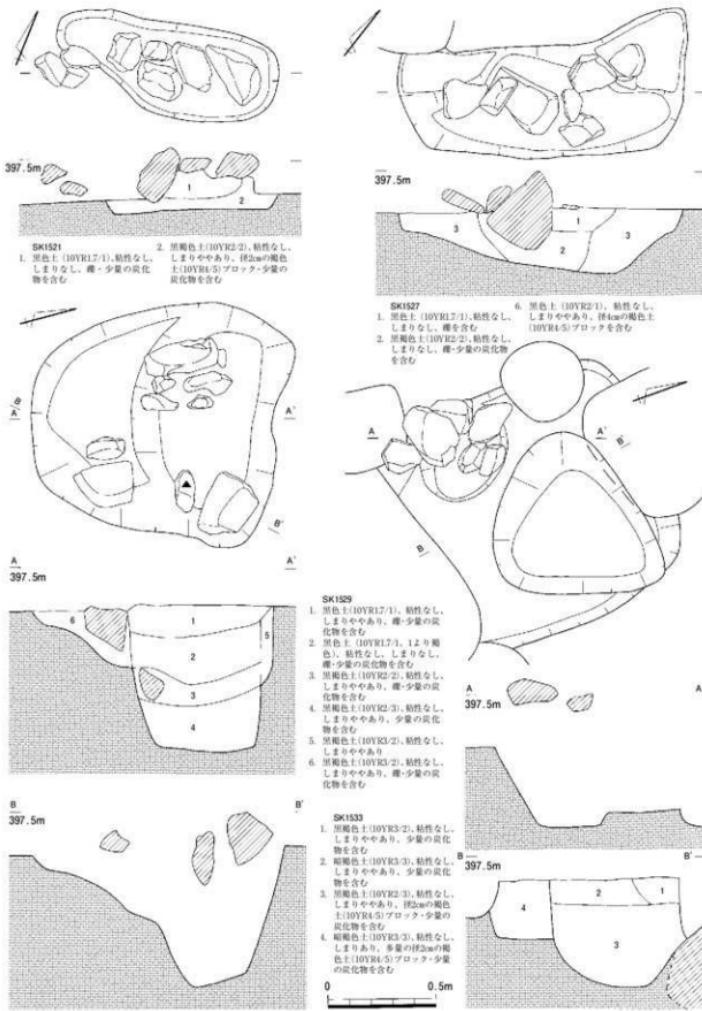


図118 第3B調査面検出造構図 (19)

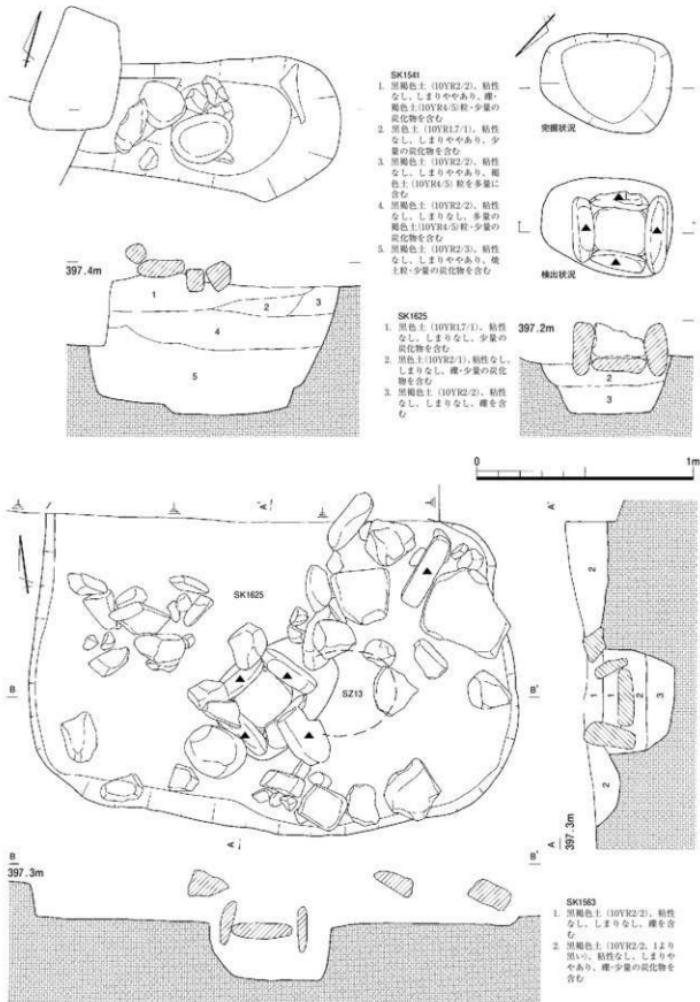


図119 第3B調査面検出遺構図 (20)

れが少ないとから、埋土のうち上層3・5・6層の土壤を一括採取し、その一部を水洗選別した。

出土遺物 埋土から後期中葉の土器（1171）・石核1点・石鏃6点・R F 1点・磨・敲石類2点・切目石錐2点・ヘラ形石器1点が出土し、水洗選別により少量の碎片・炭化種子・炭化材を検出した（第6章第3節参照）。

S K1589（図120、図版41）

位置 G19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.53m・短径0.48m・深さ0.25mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1533・1626を切る。土坑西端の底面で、口縁部と底部を欠損する土器（1172）が正位で出土した。土坑中央及び土器、内部の埋土上面には、長径18cmと長径21cmの亜角縛が浮上する（土坑E類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1172）が出土した。

S K1604（図121、図版42）

位置 H18・19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.02m・短径0.70m・深さ0.40mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1631に切られ、S K1603を切る。埋土上部に長径7～24cmの多数の亜円縛が浮上し、土坑南東端に亜円縛（長径38cm・短径20cm・厚さ12cm）を長手立てとする（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器（1175）が出土した。

S K1619（図121）

位置 I 18・I 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.20m以上・短径0.43m・深さ0.41mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1618・1620・1665に切られ、S K1621を切る。土坑中央の埋土上部に、長径21cmと長径26cmの亜角縛2個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器・切目石錐が1点出土した。

S K1621（図121）

位置 I 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.28m・短径0.22m・深さ0.35mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1611・1619・1620に切られる。土坑中央の埋土上部に、円縛（長径27cm・短径25cm・厚さ15cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器が出土した。

S K1624（図121、図版42）

位置 I 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.43m以上・短径0.37m以上・深さ0.38mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K180・1622に切られる。土坑中央の埋土上部に、円縛（長径33cm・短径22cm・厚さ10cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K1625（図119、図版41）

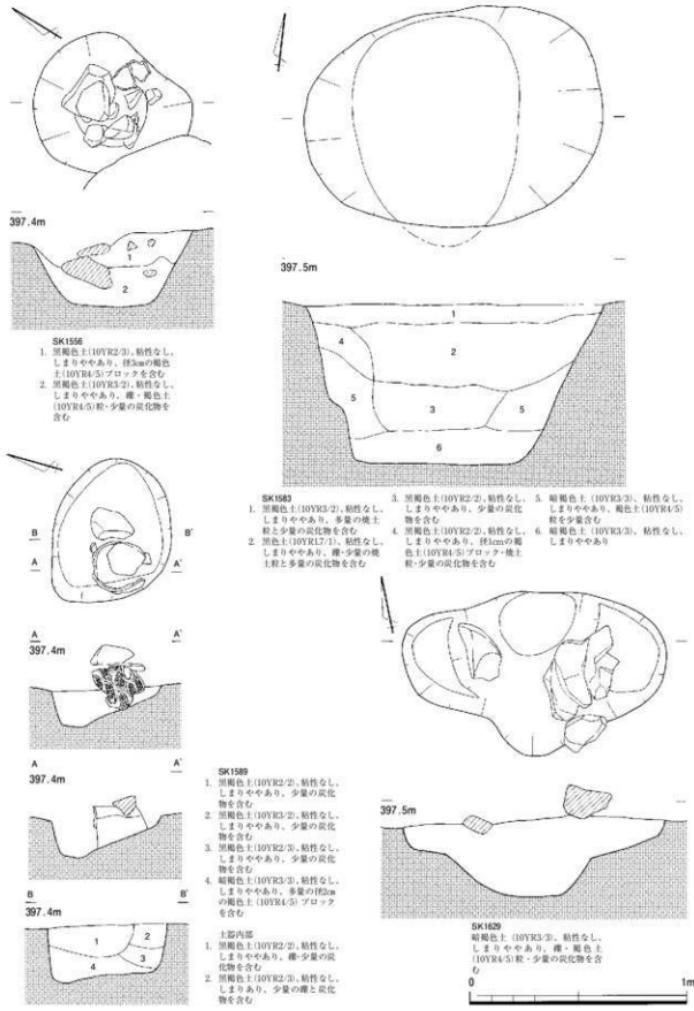


図120 第3B調査面検出構図 (21)

位置 I 20グリッド、S K1563の中央に位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.42m・短径0.37m・深さ0.32mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1654・P 164を切る。埋土上部で長径28cmの円礫を芯石とし、これとはば同じ大きさの円礫4個を用いて方形囲いとする（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から骨片が出土した。

S K1628（図122、図版42）

位置 H18・H19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.40m・短径0.88m・深さ0.29mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1603に切られる。土坑中央の埋土上部に、長径13~32cmの亜角礫5個が浮上する（土坑D 2 d類）。土層断面を観察すると、礫の一部は埋土上面からの掘り込みに伴うことがわかる。

出土遺物 埋土から、中期後葉の土器（1176）・R F 1点・U F 1点が出土した。

S K1629（図120）

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.13m・短径0.42m・深さ0.34mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1815に切られる。土坑中央の埋土上部に、長径22~39cmの亜角礫3個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器（1177）・石錐1点が出土した。

S K1632（図122、図版42）

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.61m・短径0.54m・深さ0.23mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1820・1821を切る。土坑北東端の壁際に、角礫（長径57cm・短径18cm・厚さ11cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器・R F 1点が出土した。

S K1634（図123、図版42）

位置 J 20・J 21グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.52m・短径1.07m・深さ0.90mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1563に切られ、S K1564を切る。埋土上部で長径4~32cmの多数の亜角礫が浮上し、土坑中央の埋土最上部に長径36cmの亜角礫を置く（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から後期中葉～後葉の土器（1178~1182）・U F 2点・R F 3点・切目石錐1点（2276）が出土した。

S K1655（図122、図版42）

位置 H19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.29m・短径0.25m・深さ0.30mを測る。

概要 V b層基底面で検出した。S K1781に切られる。土坑中央の埋土上部から下部にかけて、長径19~25cmの亜円礫・亜角礫3個を上下に積む（土坑D 1 a類）。

出土遺物 なし。

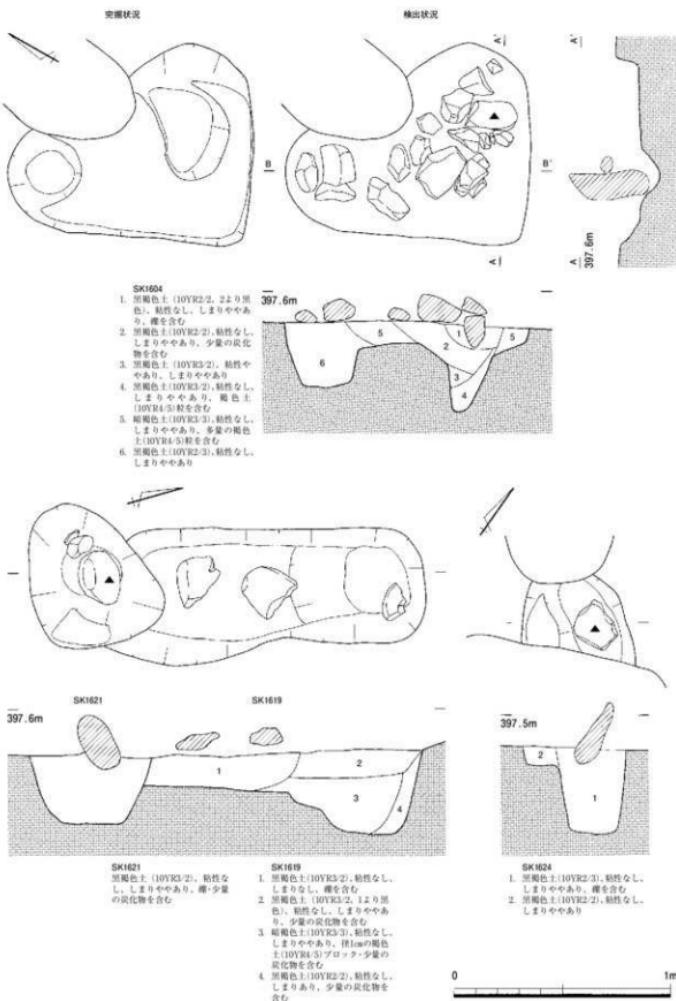


図121 第3B調査面検出遺構図 (22)

S K1657 (図122、図版42)

位置 I 19・I 20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.02m・短径0.55m・深さ0.19mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1617・P157・SB 8に切られる。土坑北西端の埋土上部に長径43cmの亜円碟1個が浮上し、碟の長軸と土坑の短軸方位が一致する（土坑D 2 c類）。なお土坑の北端では、埋土上部で亜円碟（長径28cm・短径20cm・厚さ14cm）1個を長手立てとする土坑との重複が認められるが、重複関係は不明である。

出土遺物 埋土からU F 1点が出土した。

S K1665 (図123、図版43)

位置 I 18グリッドに位置する。

形状と規模 S K1619に切られるため、平面形は不明である。長径0.18m以上・短径0.07m以上・深さ0.22mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部に、亜角碟（長径30cm・短径22cm・厚さ7cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K1681 (図123、図版43)

位置 J 19・J 20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.95m・短径0.65m以上・深さ0.17mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1698を切る。埋土上部に、長径8～35cmの多数の亜角碟が浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から後期後葉の土器（1185）・骨片が出土した。

S K1706 (図124)

位置 J 19グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.45m・短径0.44m・深さ0.33mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1708に切られる。埋土上部に、長径5～27cmの亜角碟3個が浮上する（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K1710 (図124、図版43)

位置 J 20グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.44m・短径0.18m・深さ0.27mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1680に切られ、S K1679を切る。埋土上部に、長径4～23cmの亜角碟4個が浮上する（土坑D 1 b類）。このうち南西端の碟は石皿片で小口立てとし、同一の向きで他の碟を配置している。

出土遺物 上記の石皿1点のみが出土した。

S K1777 (図111、図版43)

位置 G 11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.95m・短径0.50m・深さ0.23mを測る。

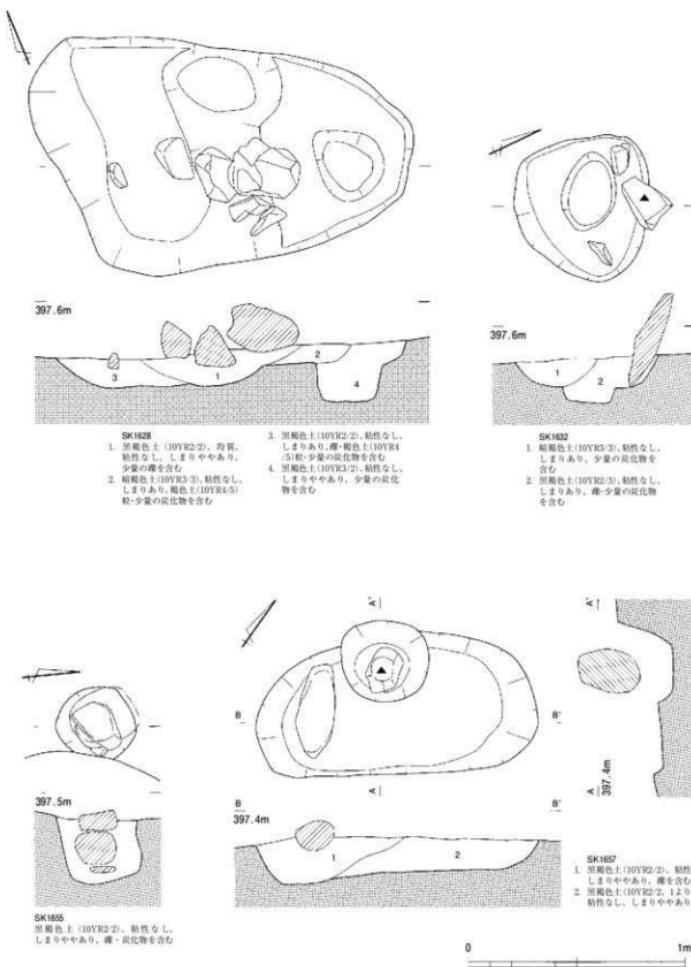


図122 第3B調査面検出遺構図 (23)

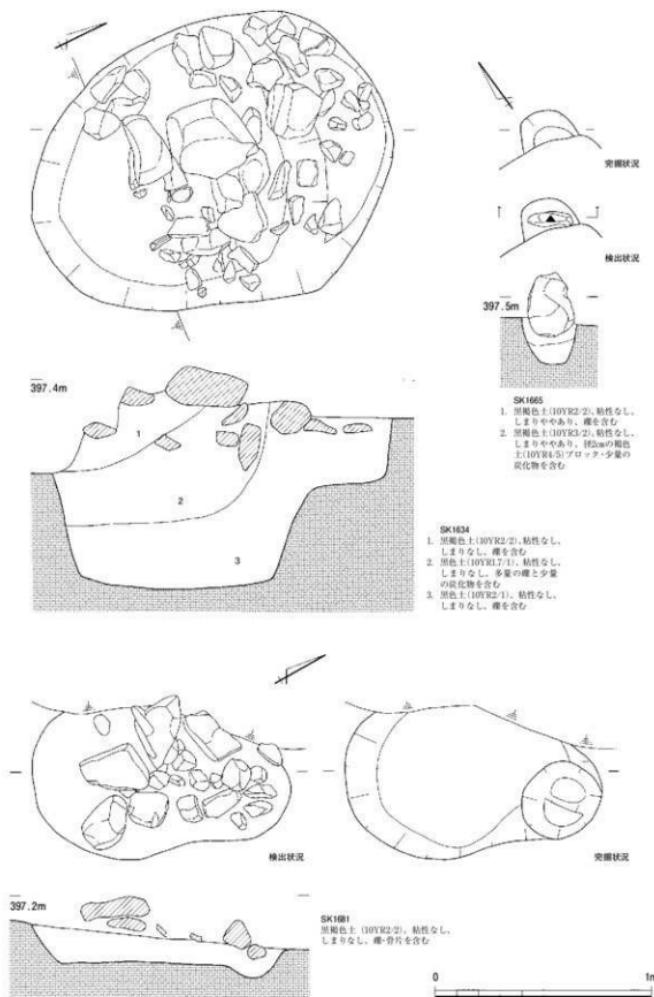


図123 第3B 調査面検出遺構図 (24)

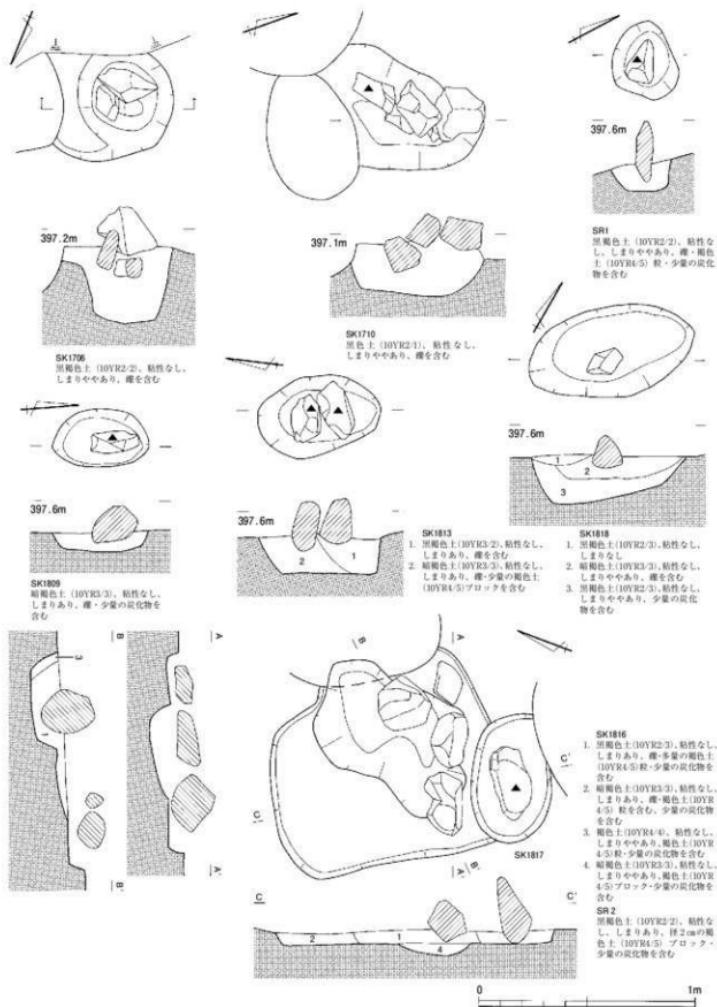


図124 第3B調査面検出遺構図 (25)

概要 V b 層基底面で検出した。S K2452に切られ、P 313・314を切る。土坑北寄りの埋土上部で、土器片（779～781）が浮上する（土坑C 2類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（779～781）・ヘラ形石器1点・R F 1点が出土した。

S K1809 (図124、図版43)

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.37m・短径0.21m・深さ0.09mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複構造はない。土坑北寄りの埋土上部に、角蹠（長径22cm・短径15cm・厚さ10cm）1個を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K1813 (図124)

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.44m・短径0.24m・深さ0.21mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1812に切られる。土坑中央の埋土上部に、亜円蹠（長径7cm・短径21cm・厚さ14cm、長径23cm・短径22cm・厚さ11cm）2個を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K1816 (図124、図版43)

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.23m・短径0.97m以上・深さ0.25mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1817・1822に切られ、S K1811を切る。土坑底面の南東壁寄りに、長径21～30cmの蹠3個を土坑の短軸方向にほぼ平行して配置する（土坑B 2類）。これとは別に、底面で検出した小穴内に長径25cmの亜角蹠が浮上する。

出土遺物 埋土から搔器1点が出土した。

S K1818 (図124)

位置 H18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.62m・短径0.28m・深さ0.26mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1817・1819を切る。土坑中央の埋土上部に、長径18cmの亜角蹠1個が浮上する（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から晚期後葉の土器（1186）・骨片が出土した。

S K1822 (図125、図版43)

位置 H18グリッドに位置する。

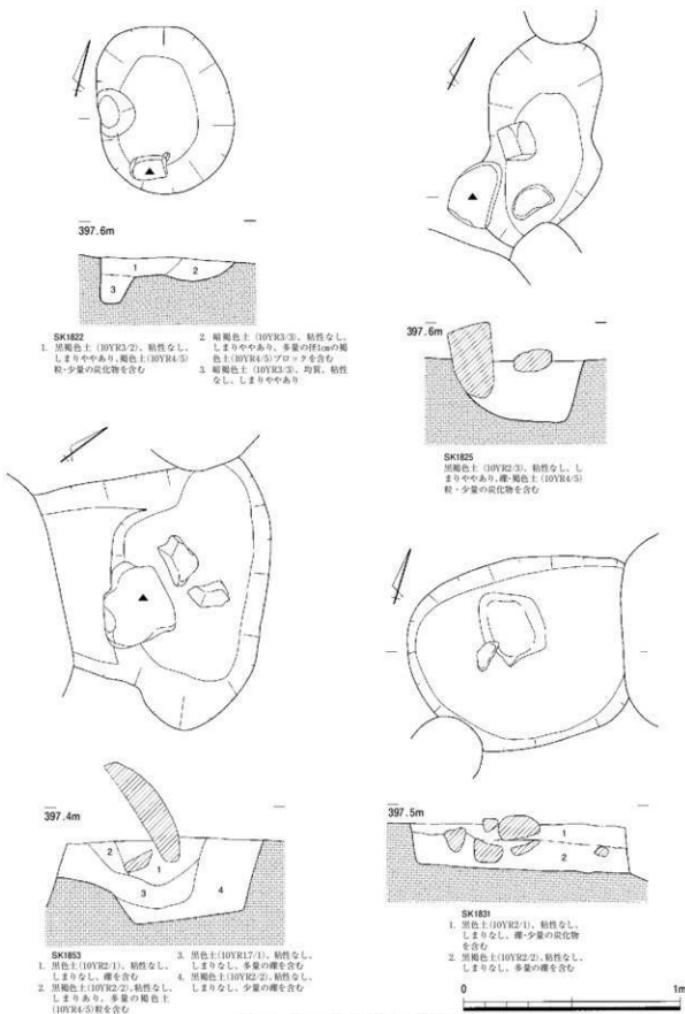
形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.50m・短径0.38m・深さ0.20mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1823に切られ、S K1816を切る。土坑南端の壁際に、亜円蹠（長径16cm・短径計測不能・厚さ11cm）1個を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器・切目石鎌1点が出土した。

S K1825 (図125、図版43)

位置 H18グリッドに位置する。



形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.64m以上・短径0.36m・深さ0.31mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。SK 1824・1826に切られ、SK 1827を切る。土坑南西端の壁際に、亜円礫（長径35cm・短径30cm・厚さ20cm）1個を小口立てとする（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K 1831 (図125)

位置 H 18・I 18 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.95m以上・短径0.74m・深さ0.23mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。SK 169・1795・1832に切られ、SK 1833を切る。土坑中央北寄りの埋土上部に、長径34cmの亜円礫1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器（1187）・切目石錘1点・骨片が出土した。

S K 1853 (図125、図版44)

位置 I 18・J 18 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.98m以上・短径0.95m以上・深さ0.40mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。SK 167・168に切られ、SK 1844を切る。土坑中央の埋土上部に、完形の石皿（2327）1点を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から石皿1点が出土した。

S K 1866 (図126、図版44)

位置 N 22・N 23 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.35m・短径0.57m・深さ0.27mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複構造はない。土坑中央及び北西端の埋土上部に、長径44～45cmの亜円礫2個が浮上する（土坑D 2 b類）。また、土坑の長軸に沿って埋土上で、長径8～28cmの多数の礫が並ぶ。

出土遺物 なし。

S K 1871 (図126)

位置 O 22 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.75m・短径0.60m・深さ0.45mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複構造はない。土坑中央及び南端の埋土上部に、長径23cmと長径24cmの円礫2個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から後期前葉の土器・石錘未製品1点・切目石錘1点が出土した。

S K 1884 (図126、図版44)

位置 P 23 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径0.37m・短径0.33m・深さ0.37mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。埋土上部で長径11～26cmの角礫を用い、北東端のみ小口立てとし他は平置きとする。平面形は方形を指向しているとみられるが、北・西辺を欠く。埋土下部に、長径15cm程度の少量の礫が浮上する（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から後期中葉の土器が出土した。

S K 1893 (図126、図版44)

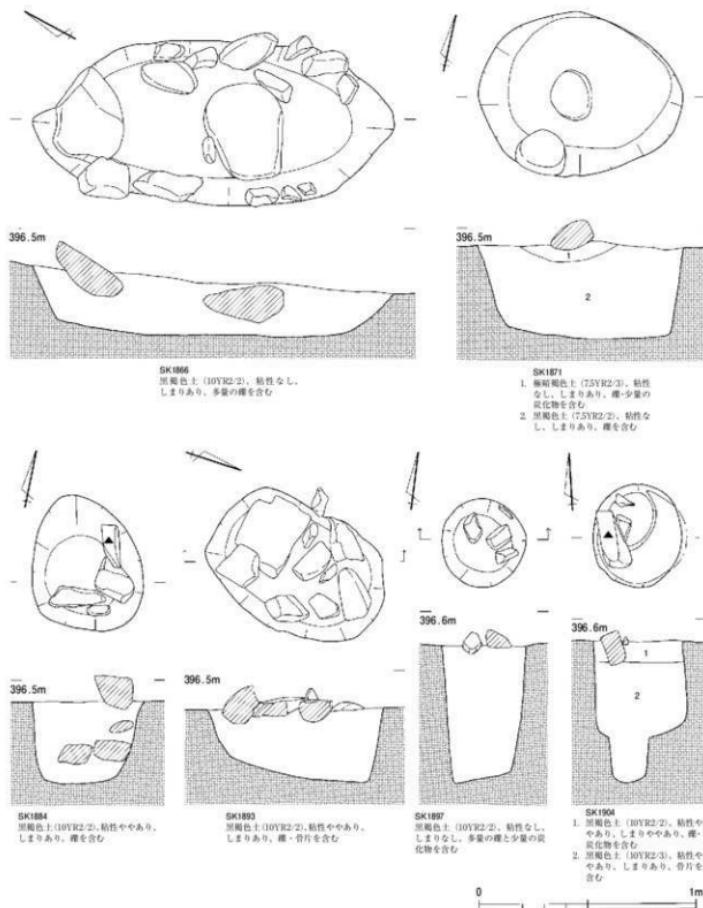


図126 第3B調査面検出遺構図 (27)

位置 O 23・P 23・P 24 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.65m・短径0.44m・深さ0.35mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部に、長径12~34cmの多量の礫が浮上する（土坑D 1 b類）。礫の円磨度は角礫・亜角礫である。

出土遺物 埋土から骨片が出土した。

S K1897 (図126)

位置 Q24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.28m・短径0.24m・深さ0.63mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部に、長径8~14cmの少量の亜角礫が浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K1904 (図126)

位置 R24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。直径0.42m・深さ0.64mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑埋土上部の西壁際に、石皿片（長径29cm・短径26cm・厚さ9cm）1点を小口立てとする（土坑D 2 c類）。なお、土坑の底面で小穴（長径0.25m・短径0.21m・深さ0.20m）を検出した。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1190）・分割礫1点・打欠石錐1点（2225）・石皿1点、2層から骨片が出土した。

S K1906 (図127、図版44)

位置 R24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.97m・短径0.48m・深さ0.46mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑北東端の埋土上部に、亜円礫（長径計測不能・短径30cm・厚さ9cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から磨・敲石類1点（2200）・石皿片2点が出土した。

S K1921 (図127)

位置 R25グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.51m・短径0.33m・深さ0.38mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1922に切られ、S K1924を切る。土坑中央の埋土上部に、長径33cmの亜円礫1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から中期中葉の土器（982）及び後期中葉の土器が出土した。

S K1933 (図127、図版44)

位置 S23・S24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.72m・短径0.49m・深さ0.29mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1934を切る。土坑西壁に沿って埋土上面で、長径20~25cmの亜角礫が浮上する（土坑B 2類）。

出土遺物 埋土から分割礫1点・石核1点・石錐1点・U F 1点・打欠石錐1点が出土した。

S K 1938 (図版44)

位置 S24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.44m・短径0.60m・深さ0.34mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑の南西壁に接するように、扁平亜円碟（長さ44cm・幅35cm・厚さ10cm）1個が斜位で立って出土した（土坑B2類）。

出土遺物 墓土から後期前業の土器・磨・敲石類1点（2199）が出土した。

S K 1939 (図127、図版44)

位置 R25・S25グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.80m・短径0.48m・深さ0.25mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑東寄りの埋土下部に、完形の石皿1点が浮上する（土坑D2b類）。

出土遺物 墓土から石皿1点・骨片が出土した。

S K 1946 (図128、図版45)

位置 R24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.30m以上・短径0.50m・深さ0.51mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。SK1945・1947に切られる。土坑北寄りの埋土上面で、亜円碟（長径46cm・短径16cm・厚さ13cm）1個を長手立てとする（土坑D2c類）。

出土遺物 墓土からR F1点・打斧石錘2点が出土した。

S K 1948 (図128、図版45)

位置 R25グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.70m・短径0.48m・深さ0.42mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。SK1947・1949を切る。土坑南端の埋土上部で、扁平円碟（長径4cm・短径41cm・厚さ14cm）1個を小口立てとする（土坑D2c類）。

出土遺物 墓土から時期不明の土器が出土した。

S K 1950 (図127)

位置 R25・S25グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.23m・短径0.14m・深さ0.25mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部で、長径15cmの亜円碟1個が浮上する（土坑D2c類）。

出土遺物 墓土から時期不明の土器・削器1点が出土した。

S K 1952 (図127、図版45)

位置 S24グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.72m・短径0.30m以上・深さ0.26mを測る。

概要 Vb層基底面で検出した。SK1937に切られる。土坑中央北西寄りの埋土上部で、亜円碟1個（長径26cm・短径25cm・厚さ計測不能）を長手立てとする（土坑D2c類）。

出土遺物 墓土から時期不明の土器が出土した。

S K 2153 (図128、図版45)

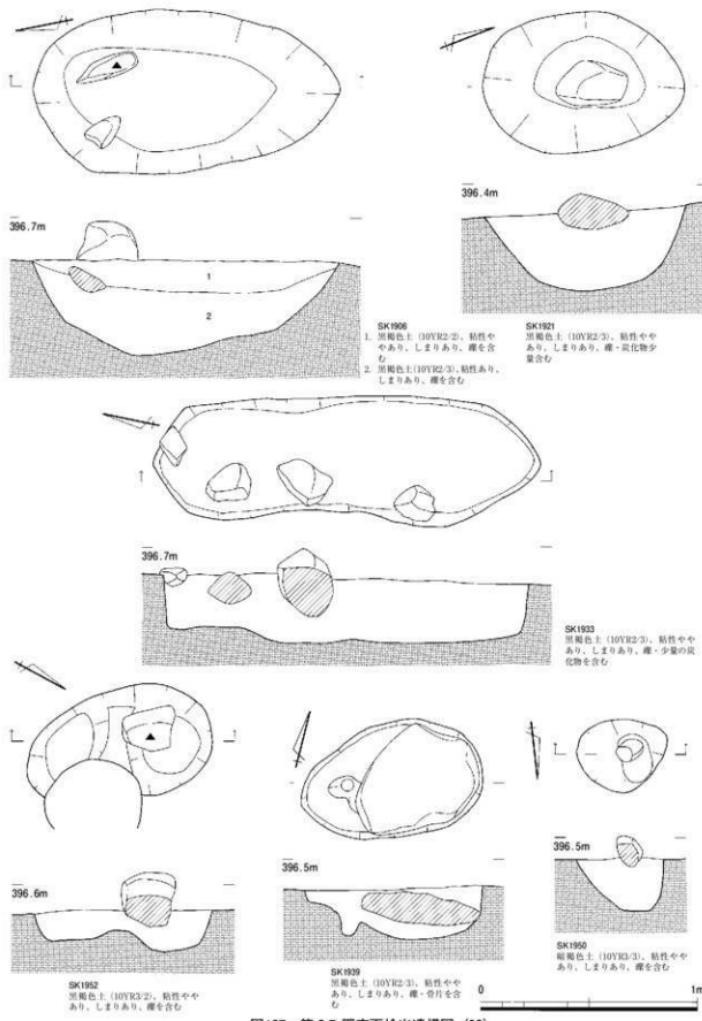


図127 第3B 調査面検出構造 (28)

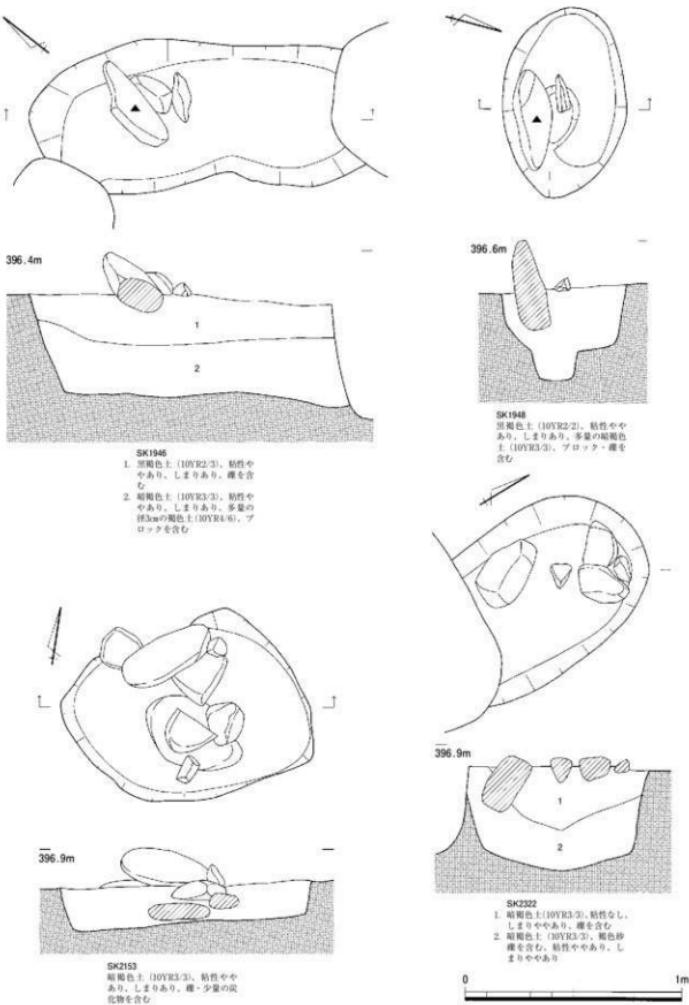


図128 第3B調査面検出遺構図 (29)

位置 Y23・Z23グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径 1.06 m・短径 0.77 m・深さ 0.20 mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部から下部にかけて、長径 12

~ 49 cmの多量の礫が浮上する（土坑D 1 b類）。礫の円磨度は亜円礫で占められる。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1194）・打欠石錐1点が出土した。

S K 2322（図128）

位置 J 21 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径 0.73 m以上・短径 0.56 m・深さ 0.48 mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K 2323 に切られる。埋土上部で、長径 12 ~ 34 cmの少量の亜円礫が浮上する（土坑D 1 b類）。

出土遺物 なし。

S K 2324（図129、図版45）

位置 K 21 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径 0.35 m・短径 0.28 m・深さ 0.30 mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部で、亜円礫1個（長径 34 cm・短径 33 cm・厚さ 15 cm）を小口立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K 2351（図129、図版45）

位置 L 16 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は梢円形である。長径 0.44 m・短径 0.34 m・深さ 0.26 mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央東寄りの埋土上部で、角礫1個（長径計測不能・短径 16 cm・厚さ 12 cm）を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K 2394（図129、図版45）

位置 M 18 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径 0.60 m・短径 0.53 m・深さ 0.24 mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑西側の埋土上部で、長径 23 ~ 30 cmの少量の亜角礫が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土から時期不明の土器が出土した。

S K 2462（図129、図版45）

位置 M 14・M 15 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。上端長径 0.73 m・上端短径 0.65 m・深さ 0.15 mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K 620・624・642 を切る。土坑中央の埋土上部で、胴部上半を欠損する後期前葉の土器（1214）が浮上する（C 2類）。

出土遺物 土器（1214）と、その下部から骨片が出土した。

7 埋設土器

S Z 12（図129、図版46）

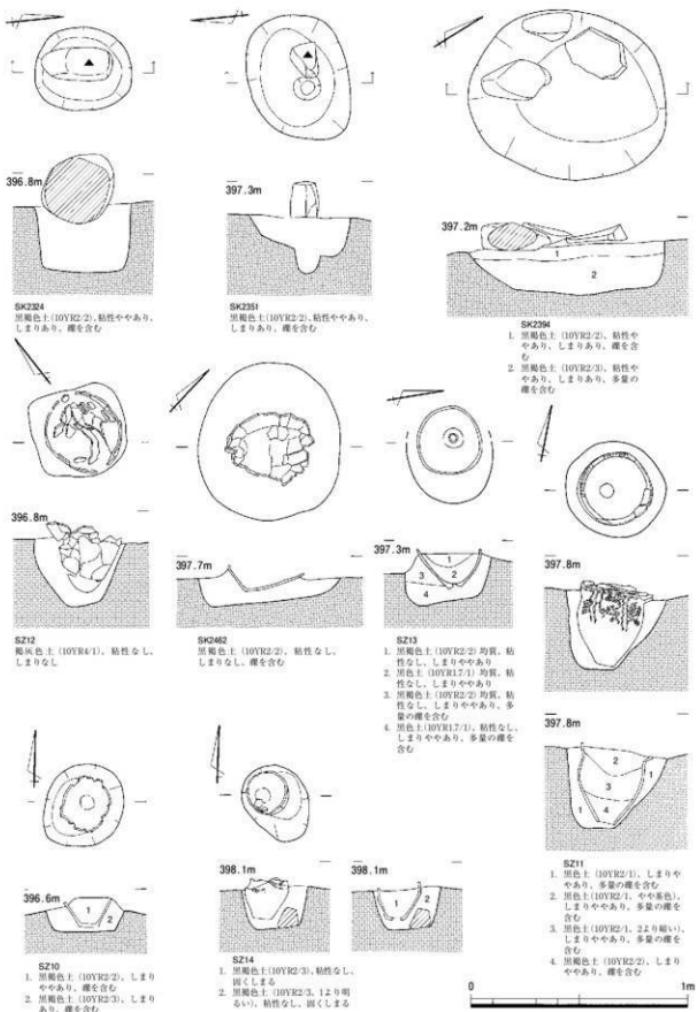


図129 第3B調査面検出構造 (30)

位置 V 23 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。上端長径0.44m・上端短径0.42m・深さ0.30mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。胴部上半を欠損する後期後葉から晩期初頭にかけての土器（1218）が正位に置かれ、土器の内部から同一個体を含む胴部片（1216・1217）が重なるよう出土した。

出土遺物 土器（1216）～（1218）が出土した。

S Z13 (図129、図版46)

位置 I 20 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径計測不能・短径0.38m・深さ0.22mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K1563を切る。胴部上半を欠損し底部を穿孔する、後期後葉の土器（1215）が正位で出土した。

出土遺物 土器（1215）のみが出土した。

S Z10 (図129、図版46)

位置 H 11 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径0.25m・短径0.23m・深さ0.15mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。S K797を切る。胴部上半を欠損し底部を穿孔する、後期前葉の土器（1222）が正位で出土した。

出土遺物 土器（1222）のみが出土した。

S Z11 (図129、図版46)

位置 G 12 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.14m・短径0.10m・深さ0.36mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。SB18・19・S K899を切る。底部を欠損する後期前葉の土器（1221）が正位で出土した。

出土遺物 土器（1221）と、検出及び埋土の半割中に石礫1点（2075）・R F 1点、土器内部の土層から削器1点（2155）・R F 1点・骨片が出土した。

S Z14 (図129、図版46)

位置 M 20 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。直径0.20m・深さ0.19mを測る。

概要 V b 層基底面で検出した。重複遺構はない。胴部上半を欠損する土器（1220）が正位で出土した。

出土遺物 土器（1219）・（1220）と土器内部の埋土から骨片が出土した。

8 段丘斜面 (図130、図版46)

調査区の西端（D15・E15～19・F 8～19グリッド）と南西端（G20・G21・H20・H21・I 21グリッド）で段丘の斜面を検出した。以下、西端を「西斜面」、南西端を「南斜面」と呼称し、西斜面のうち15列以北を「西斜面1」、16～19列を「西斜面2」と細分する。

西斜面1は急傾斜（約34度）であり、下端の標高は約395.9mを測る。遺構は検出されなかったが出土遺物数が多く、遺存状況も良い。出土遺物には土器・石器がある。土器は、中期中葉から晩期

中葉までの時期幅がある。石器は、石核7点・石鏃11点・石錐未製品1点・石錐5点・搔器3点・ノッチドスクレイバー1点・ヘラ形石器1点・楔形石器6点・RF9点・UF6点・打製石斧5点・磨・敲石類20点・切目石錐6点・石棒1点が出土した。

西斜面2は、第3B調査面（標高約397.3m）から約0.2m下がってほぼ平坦面となる。埋土を除去し、IXb層上面で炉跡1基・土坑28基を検出した。壁面の観察結果では、埋土上面から掘削される土坑が多数認められることから、この地区は土坑が著しく重複した様相を呈している可能性がある。出土遺物には、土器・石器・骨片・炭化物がある。土器は、中期後葉から後期中葉までの時期幅がある。石器は、石核3点・石錐6点・楔形石器1点・搔器2点・削器2点・RF18点・UF3点・打製石斧1点・磨・敲石類3点・打欠石錐4点・切目石錐15点・磨製石斧1点・石皿1点が出土した。

一方、南斜面は北斜面よりも緩やか（約10度）で、最南端では第3B調査面から約0.9m下がってほぼ平坦面となり、揖斐川に向かって急に落ち込む。埋土を除去し、IXb層上面で炉跡2基・土坑23基（うち1基は上面配石を伴う）・溝1条を検出した。斜面上部の溝SD1は、急斜面上に位置する炉跡SF68・69等を保護するための排水施設と考えられ、土地利用のあり方を考える上で興味深い。出土遺物は、土器・石器・骨片・炭化物がある。土器は、中期中葉から後期後葉までの時期幅がある。石器は、石錐12点・石錐1点・ヘラ形石器1点・打欠石錐1点・磨製石斧5点・石棒2点が出土した。

各斜面における出土土器の傾向としては、上限の時期は西斜面1と南斜面では中期前葉に遡るが、西斜面2では中期後葉で、やや遅れる。下限の時期は西斜面1・2が後期中葉であるのに対し、南斜面は後期後葉でやや遅れる。この間、いずれの地点でも中期後葉の土器が多いが、南斜面では後期初頭～後期中葉の土器がほとんど出土していない。

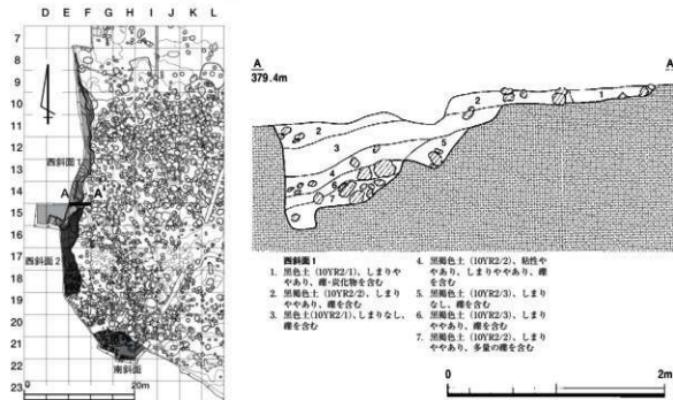


図130 段丘斜面位置・断面図

第6節 第4調査面

第4調査面1区では、概ねVI b層基底面で遺構を検出した。土層はO10グリッドとS20グリッドを結ぶラインから東側にはVI c層、西側にはVII a層→VII b層の順に堆積しており、特に後者の上面において遺構の検出は困難であった。標高ではM6グリッドが最も高く（約398.4m）、R20グリッドが最も低い（約396.8m）。調査区全体としては、南に向かって緩やかに傾斜する。

一方第4調査面2区では、VI c層が全面に広がる。標高ではh32グリッドが最も高く（約394.8m）、e34グリッドが最も低い（約394.1m）。北東隅から南西隅に向かって傾斜する。

1 竪穴住居跡

S B27（現場名SBE 2、図132、図版48）

位置 N11・N12・O11・O12グリッドに位置する。

検出状況 VI b層基底面で検出した。竪穴の北端をSB35・S K2494南半分を調査溝（Aトレンチ）に切られるが、南端はわずかに遺存する。埋土は2層に分けられた。

形状と規模 平面形は楕円形と考えられる。長径5.52m・短径2.57m以上・床面積は計測不能である。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは北東部で約0.14mを測り、壁は垂直に近く立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められず、VII a層上面に達して遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で8基の遺構を検出した。このうちP363は断面の形状と規模から柱穴の可能性があり、1基又は2基で構成される柱配置が想定できる。なお、軌跡は検出されなかった。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は中期後葉で占められる。石器は、打欠石錐1点・切目石錐4点が出土した。

所属時期 竪穴出土土器の主体から中期後葉（第1段階）と判断する。

S B28（図133・134、図版49）

位置 N10・N11・O10・O11グリッドに位置する。

検出状況 VI b層基底面で検出した。S B24に切られ、S B29・S K2508・2552・2862・P 382を切る。

埋土は第3B調査面検出の竪穴住居跡の埋土と類似し、北側の土層観察用ベルトでは6層、東側では3層に分けられた。

形状と規模 平面形は隅丸方形と考えられる。長径4.08m・短径3.89m・床面積474m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.46mを測り、壁は垂直に近く立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められずVII b層又はIX a層上面に達したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達している可能性がある。なお、S B24床下の遺構検出も行った。

施設 竪穴内部で14基の遺構を検出した。柱穴は4基（P374・376・378・379）が想定できる。P374・379の中点とP376・378の中点を結ぶ線を軸にして、P378・379とP374・376は左右対称に位置する。この軸線上にはS B24の調査で検出したS F53（図92左下）も位置することから、本遺構に伴うと考えられる。埋糞SZ15（図134右下）も同じ軸線上にあり、底部を欠損した深鉢が逆位で出土した。土器内部からは、石錐未製品1点（2096）が出土している。

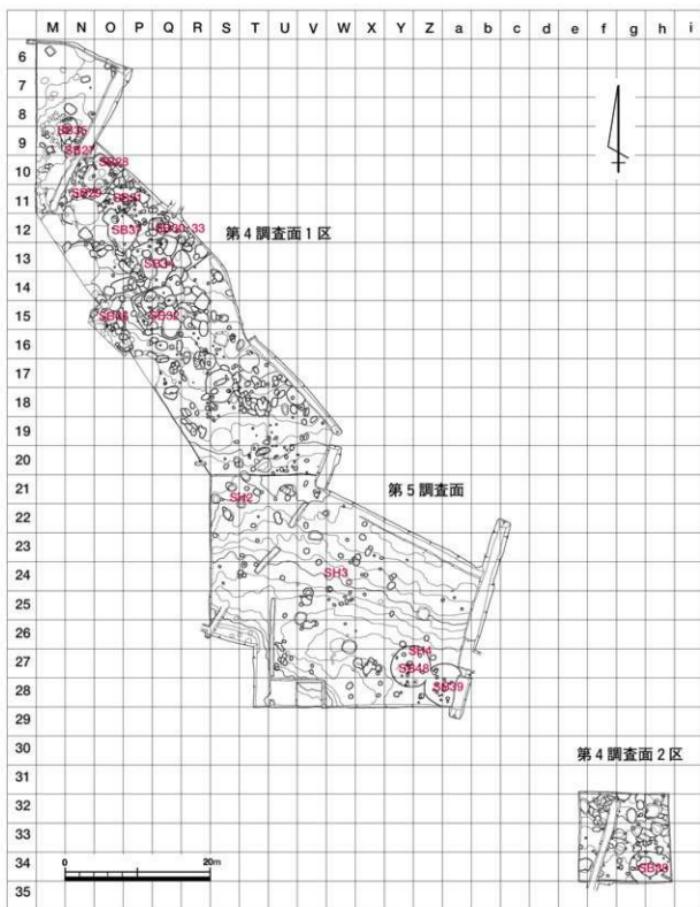


図131 第4・第5調査面全体図

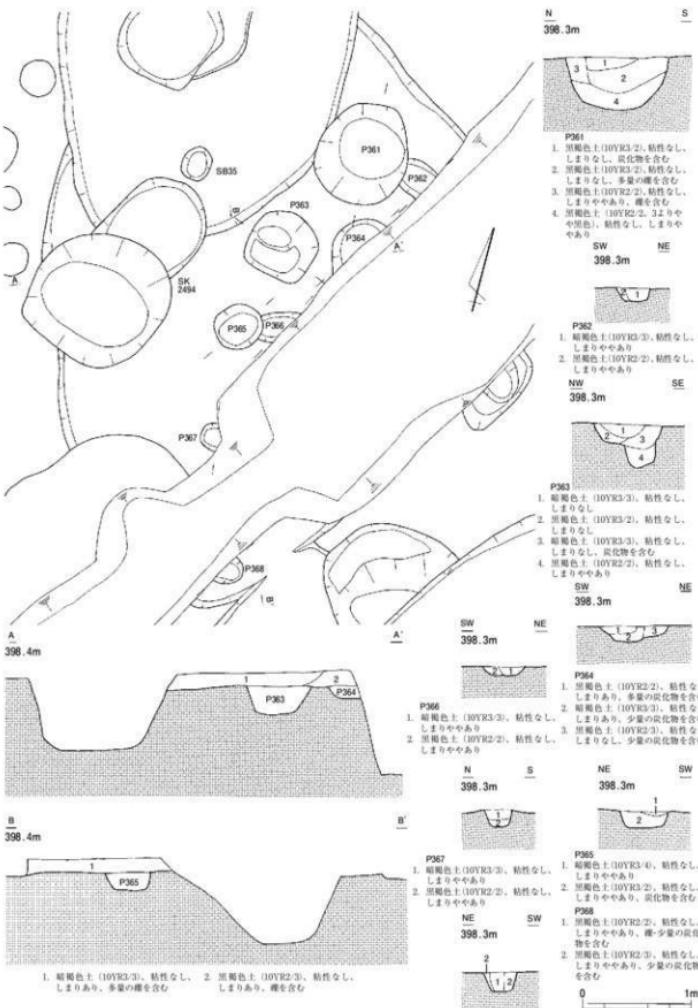


図132 SB27遺構図

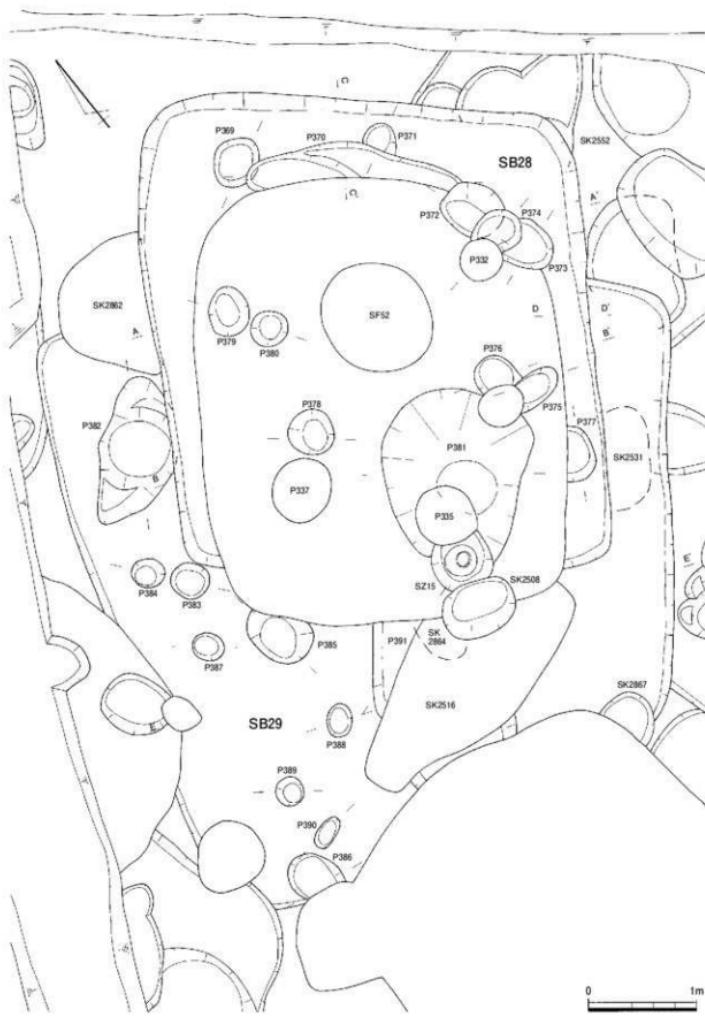


図133 SB28・29遺構図(1)

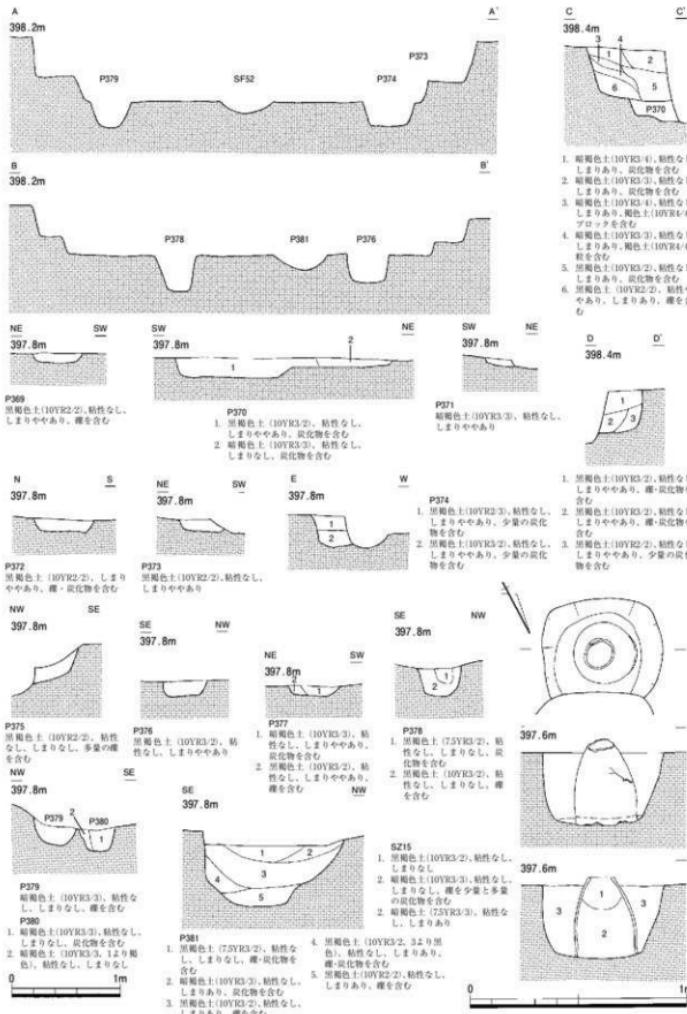


図134 SB28・29遺構図（2）

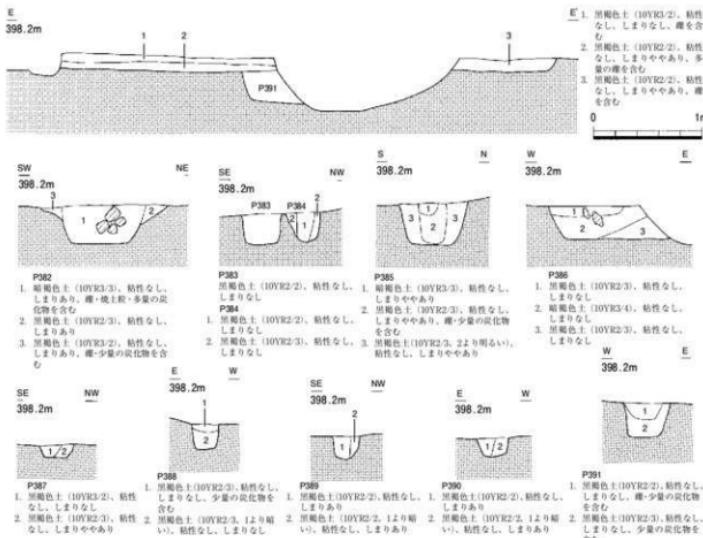


図135 SB28・29構造図 (3)

出土遺物 壺穴の埋土から、繩文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は中期中葉から中期後葉が認められるが、主体は中期後葉である。石器は、石鏃3点・石錐1点・ヘラ形石器1点、RF 2点、UF 1点・打斧石錐4点・切目石錐4点が出土した。

所属時期 壺穴埋土の様子やS F53の検出状況から、SB24との時期差はほとんどないと考えられ、中期後葉（第3段階）と判断する。

S B29（現場名SBE 5、図133・135、図版49）

位置 N10・N11・O10・O11グリッドに位置する。

検出状況 VI b層基底面で検出した。SB21・23・24・27・28・SK2508・2531・2862・2864・2867・P384に切られ、SB31・SK2552を切る。埋土は2層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は隅丸方形と考えられる。長径5.69m・短径5.56m・床面積12.38m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.14mを測り、わずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められず、VI b層上面に達して遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で10基の遺構を検出した。P384・385・389は柱痕状の堆積が認められるものの、全体

の柱配置が不明であるため、柱穴として認定することができない。

出土遺物 壁穴の埋土から、石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。石器は、石鏃1点・ヘラ形石器1点・楔形石器1点・RF 2点・UF 1点・切目石錐1点が出土した。

所属時期 SB 27・28・31との重複関係から、中期中葉船元II式併行～後葉（第3段階）と判断する。

S B30（現場名 SBE 3、図136・137、図版49）

位置 P11・P12・P13・Q11・Q12・Q13グリッドに位置する。

検出状況 VI b 層基底面で検出した。S K2501・2502・2503・2528・2529・2608に切られ、SB 33・34・S K2600を切る。なお整理作業の段階で、当遺構がSB 37に切られることが判明した。土層観察用アゼでは埋土は5層に分けられたが、調査区の北東壁では3層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は隅丸方形と考えられる。長径6.42m・短径5.91m・床面積27.86m²以上を測る。

壁・床面の状況 調査区の北東壁の観察では、検出面から床面までの最大の深さは約0.40mを測り、壁は明確に立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められなかったが、掘削する土色が明確に変化した時点で床面と判断した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で15基の遺構を検出した。平面的位置から柱穴はP393・398が想定できるが、他は不明である。なお、炉跡は確認されなかった。

出土遺物 壁穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は早期後葉と、中期中葉から中期後葉が認められる。石器は、石鏃1点・搔器2点・削器2点・楔形石器2点・RF 4点・UF 5点・磨・敲石類3点・打欠石錐1点・切目石錐1点が出土した。

所属時期 SB 33よりも後出することから中期後葉（第1段階）と判断する。

S B31（現場名 SBE 4、図138・139、図版49）

位置 O11・O12・P11・P12グリッドに位置する。

検出状況 VI b 層基底面で検出した。S K2498・2499・2511・2527・2552・2571・2612・2863・2866に切られ、S B21を切る。このうちのS K2571は調査当初、当遺構に切られる可能性があると判断していた。しかし埋土が第3B調査面の遺構埋土と類似することと、整理作業の段階でS K2571に切られるSB 37が中期後葉の所産であることが判明したことから、本遺構はS K2571に切られる可能性が高い。埋土は3層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は不明である。長径6.18m以上・短径3.75m以上・床面積16.28m²以上を測る。

壁・床面の状況 調査区の北東壁の観察では、検出面から床面までの最大の深さは約0.30mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められず、Ⅷ a 層に達して遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で33基の遺構を検出した。柱穴は4基（P 409・416・427・431）を想定できる。P 409・431の中点とP 416・427の中点を結ぶ線を軸にして、P 409・416とP 427・431が左右対称に位置する。なお、炉跡は検出されなかった。

出土遺物 壁穴の埋土から、縄文土器と石器が散在的に出土した。土器は、早期後葉と中期中葉が認められる。石器は、石鏃1点・石錐1点・搔器1点・楔形石器1点・RF 4点・UF 1点・磨・敲石類4点・切目石錐1点が出土した。

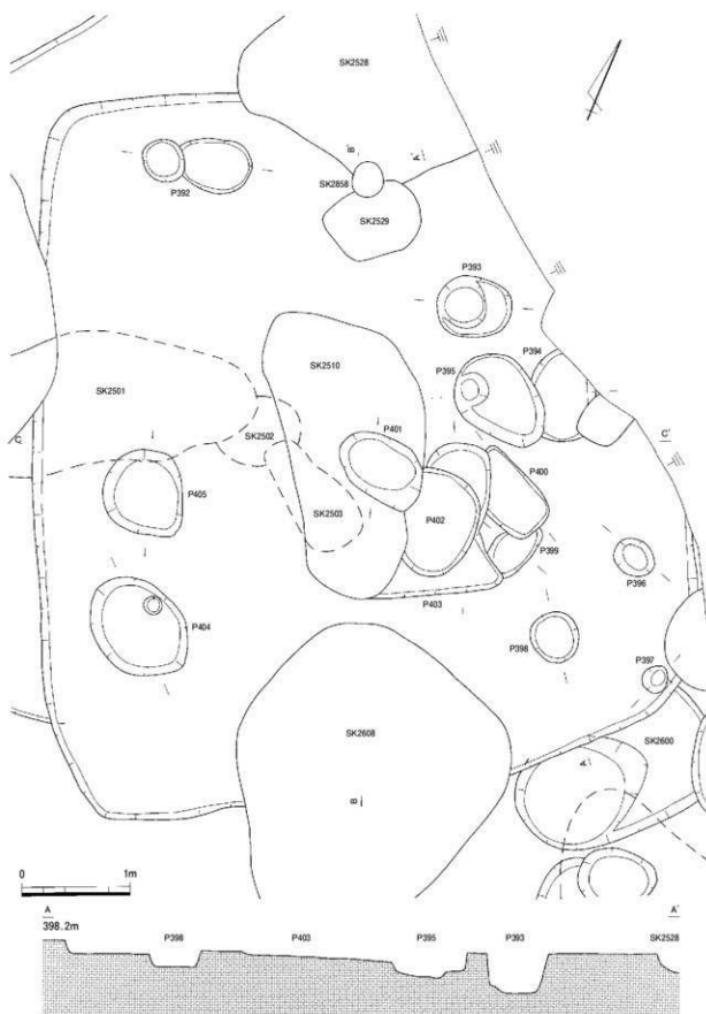


図136 SB30遺構図（1）

398.4m

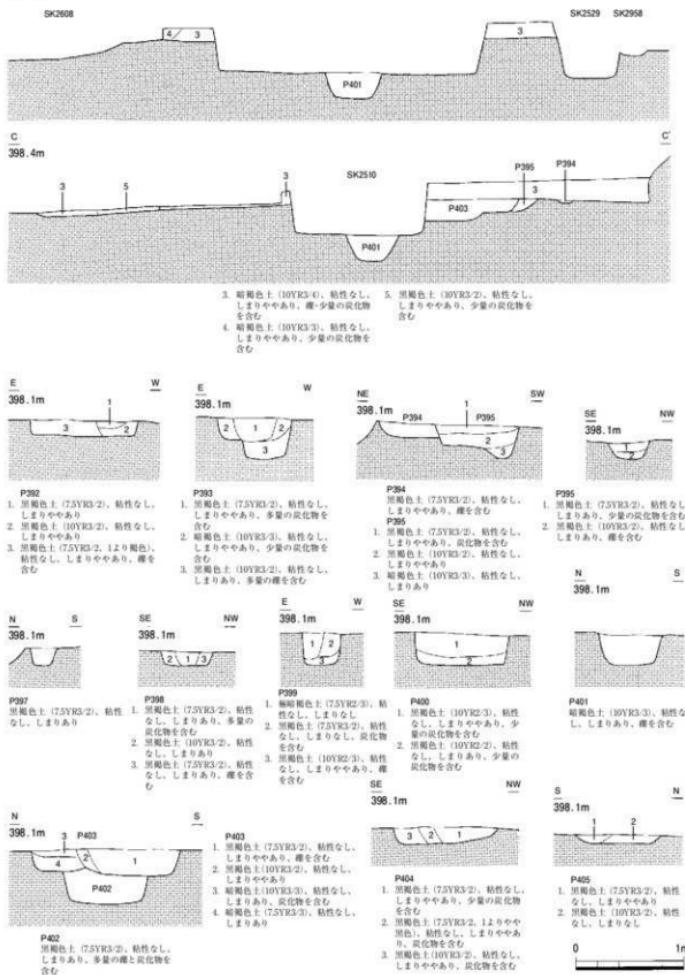


図137 SB30遺構図（2）

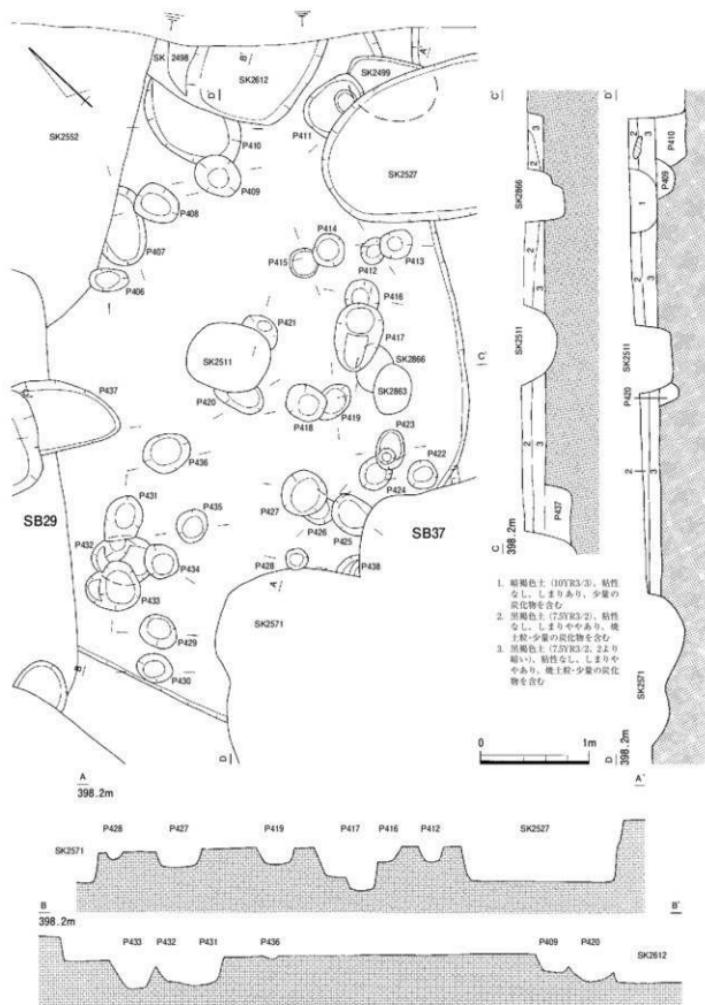


図138 SB31遺構図（1）

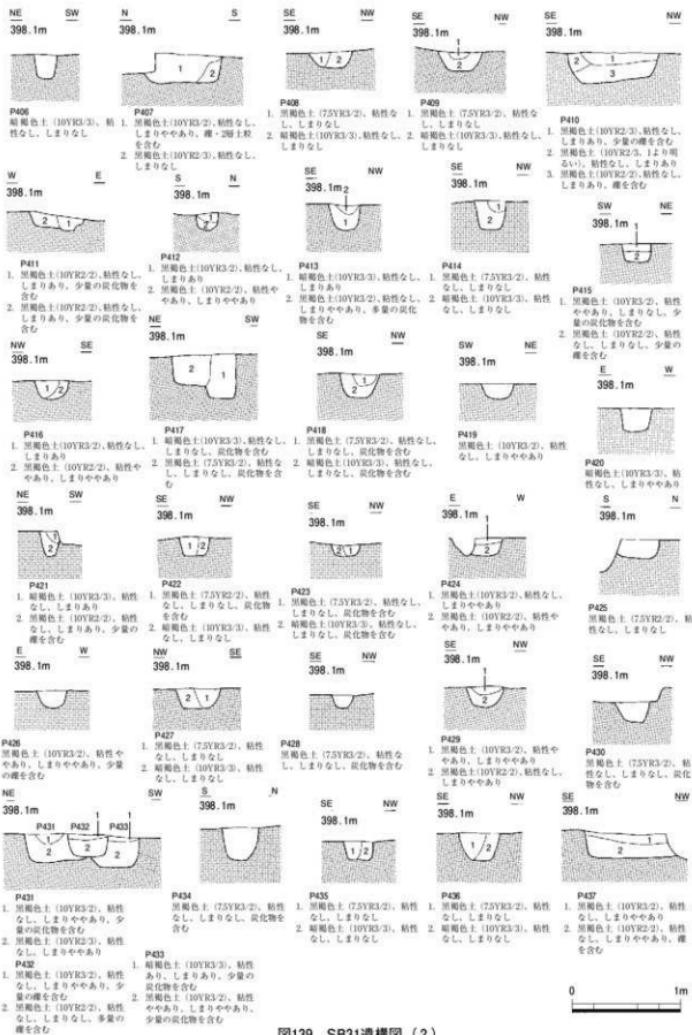


図139 SB31道構図（2）

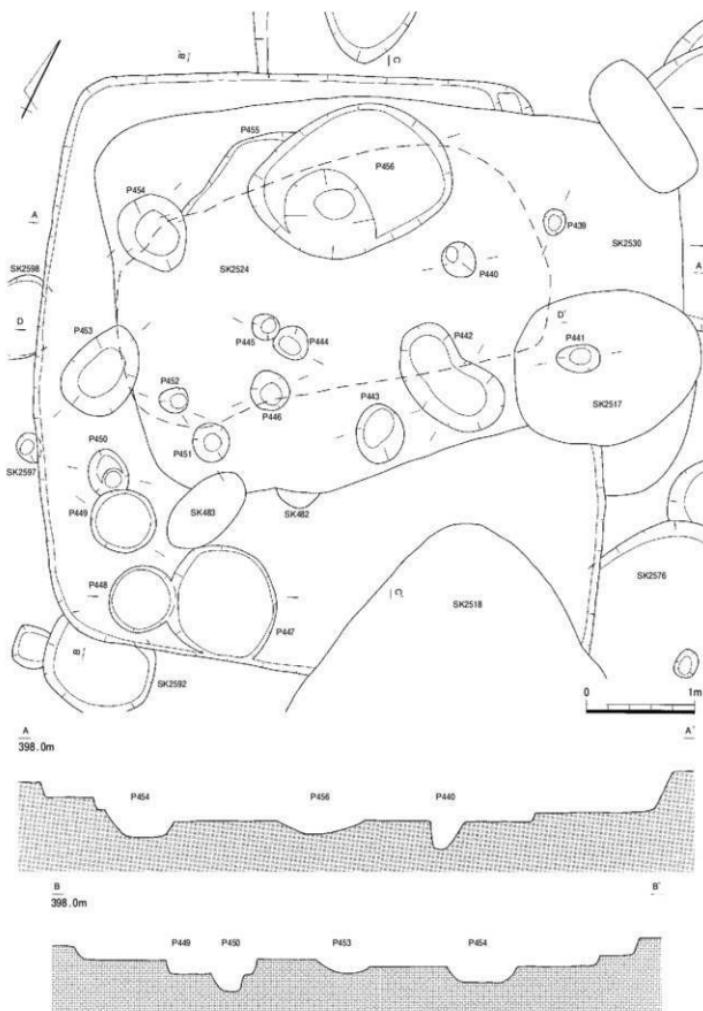


図140 SB32遺構図(1)

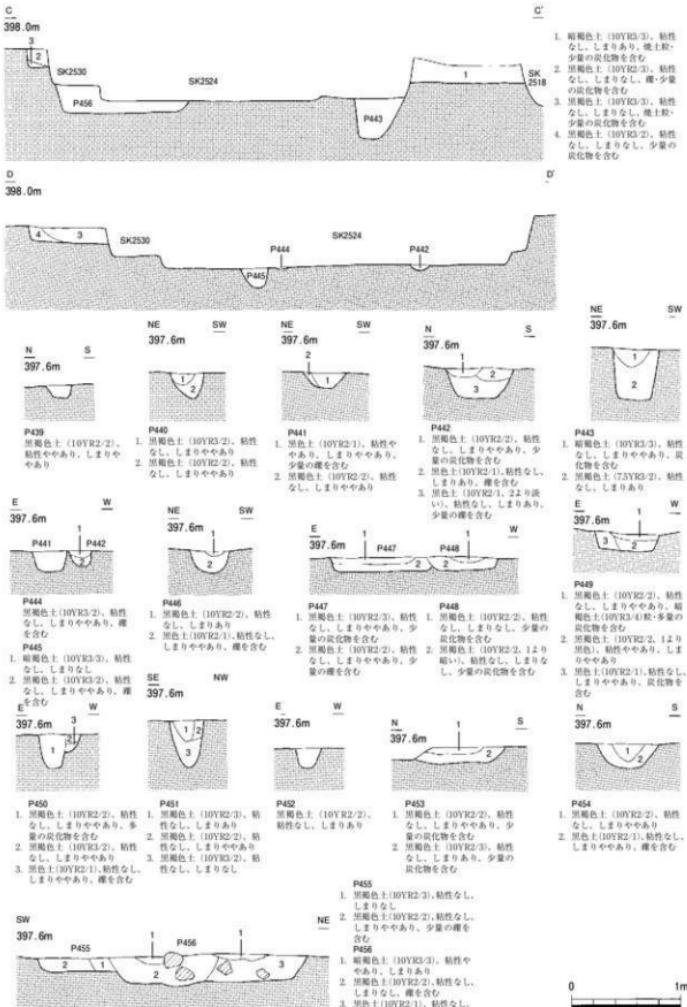


図141 SB32遺構図（2）

所属時期 竪穴出土土器から中期中葉船元II式併行と判断する。

S B32 (現場名 SBE 6、図140・141、図版50)

位置 P 14・P 15・Q 14・Q 15グリッドに位置する。

検出状況 VI b 層基底面で検出した。S K 2517・2518・2524・2530に切られ、S K 2576・2592・2597・2598を切る。埋土は4層に分けられる。

形状と規模 隅丸方形と考えられる。長径5.39m・短径5.11m・床面積推定18.70m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.23mを測り、壁は明確に立ち上がる。竪穴の埋土を掘削中に、土色が明確に変化した時点で床面と判断した。床面の南側では不明瞭ながら広い範囲で硬化面が認められたが、明確な貼床は認められなかった。床面はほぼ水平である。

施設 床面で18基の遺構を検出した。柱穴はP 440・450・454で、南東の隅柱がS K 2518によって失われたとすれば、4基で構成する柱配置となる。炉跡は検出されなかった。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は少量の早期後葉と、中期中葉が認められる。石器は、石礫1点・搔器1点・削器3点・楔形石器1点・R F 5点・U F 5点・磨・敲石類4点・打矢石錘1点・切目石錘4点が出土した。

所属時期 竪穴埋土出土土器の主体から中期中葉船元II式併行と判断する。

S B33 (現場名 SBE 8、図142・143、図版50)

位置 O 13・O 14グリッドに位置する。

検出状況 S B30の床下で検出した。S B30で調査した遺構に切られ、S B34・S K 2600を切る。埋土は4層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形と規模からみて、複数の遺構が重複している可能性もあり得るが、平面形としては隅丸方形を指向していると考えられる。長径7.52m・短径6.37m以上・床面積37.90m²以上を測る。

壁・床面の状況 調査区の北東壁の観察では、検出面から床面までの最大の深さは約0.61mを測り、壁は垂直に近く立ち上がる。明確な貼床や硬化面は認められなかったが、Ⅶ層及び当遺構に切られるS B34のプランが現れた時点での床面と判断した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で16基の遺構を検出した。P 470・471は柱痕状の堆積が認められるものの全体の柱配置が不明であるため、柱穴として認定することができない。炉跡は確認されなかった。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は、早期後葉・中期前葉又は中葉・中期後葉が認められる。石器は、石核2点・石礫1点・R F 2点・U F 1点・磨・敲石類3点が出土した。

所属時期 S B34よりも後出することから中期後葉（第1段階）と判断する。

S B34 (現場名 SBE11、図144~146、図版50)

位置 P 13・P 14・Q 13・Q 14グリッドに位置する。

検出状況 VI b 層基底面で検出した。S B32・S K 2512・2513・2515・2523・2525・2526・2530・2538・2557・2564・2565・2566・2569・2570・2573・2574・2608・P 404に切られ、S B32・S K 2603を切る。埋土は4層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は長方形と考えられる。長径6.32m以上・短径5.58m以上・床面積31.51m²以上を測る。

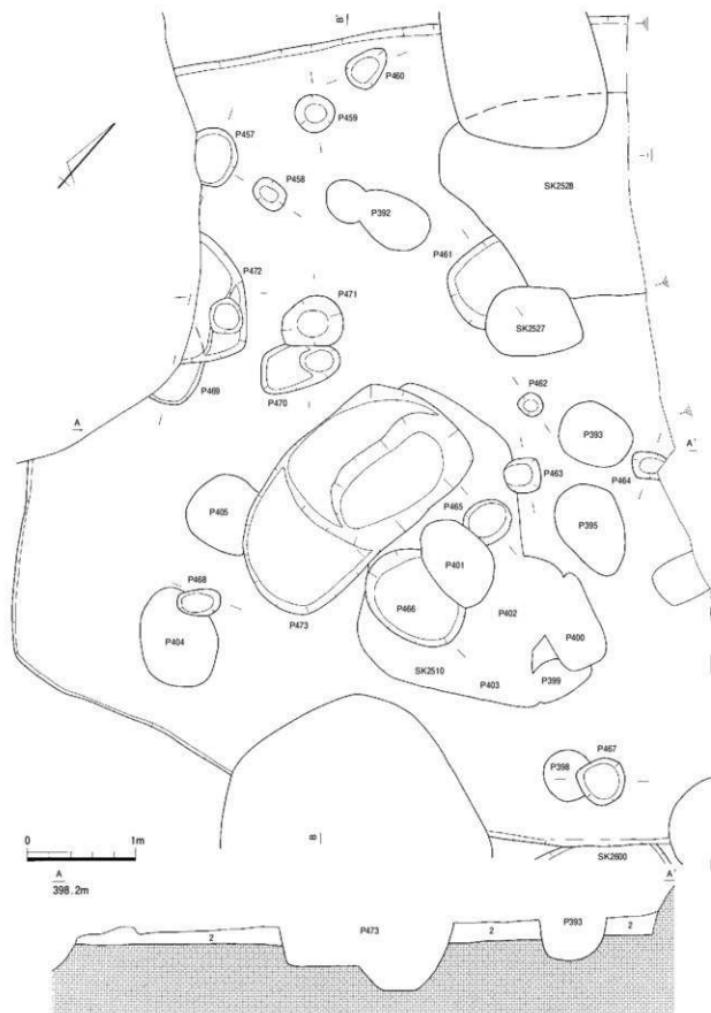


図142 SB33遺構図（1）

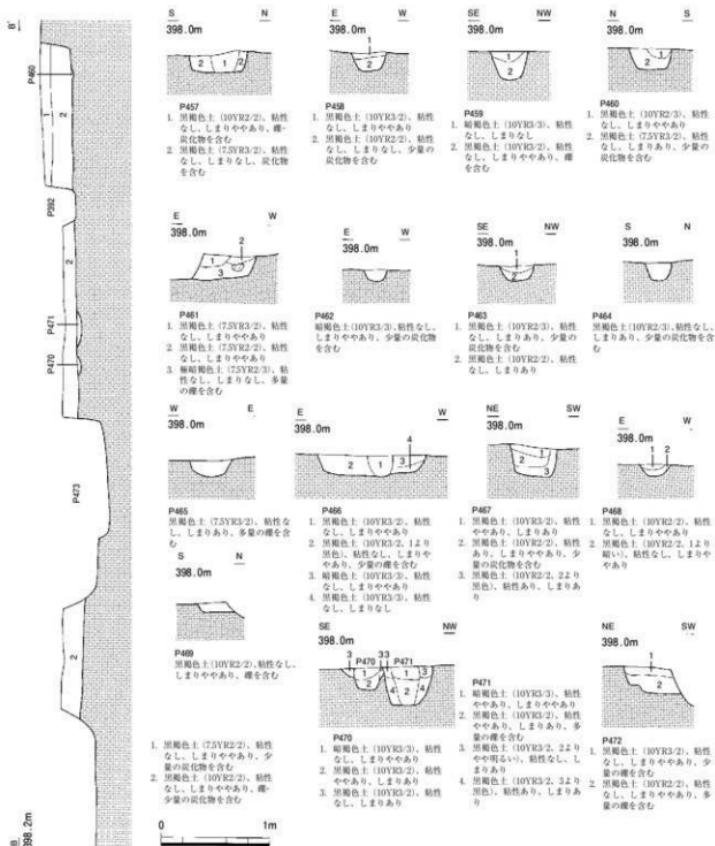


図143 SB33構造図（2）

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.32mを測り、壁は明確に立ち上がる。S F79の西側で部分的な硬化面が認められ、S F79・80の周辺で部分的な貼床が認められた。床面はほぼ水平である。

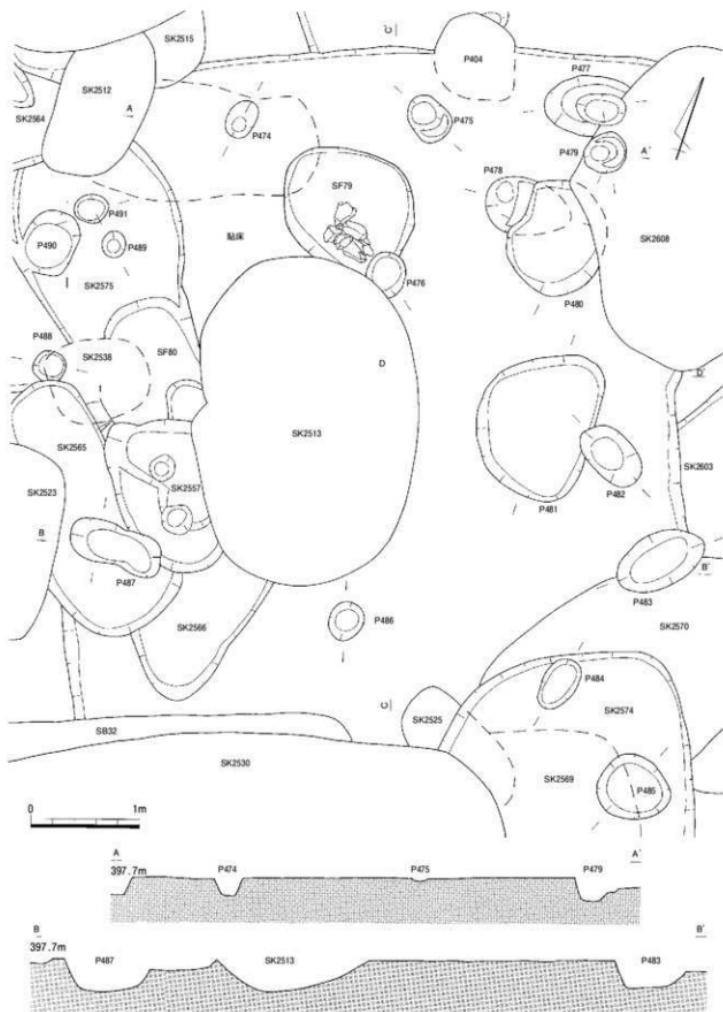


図144 SB34遺構図（1）

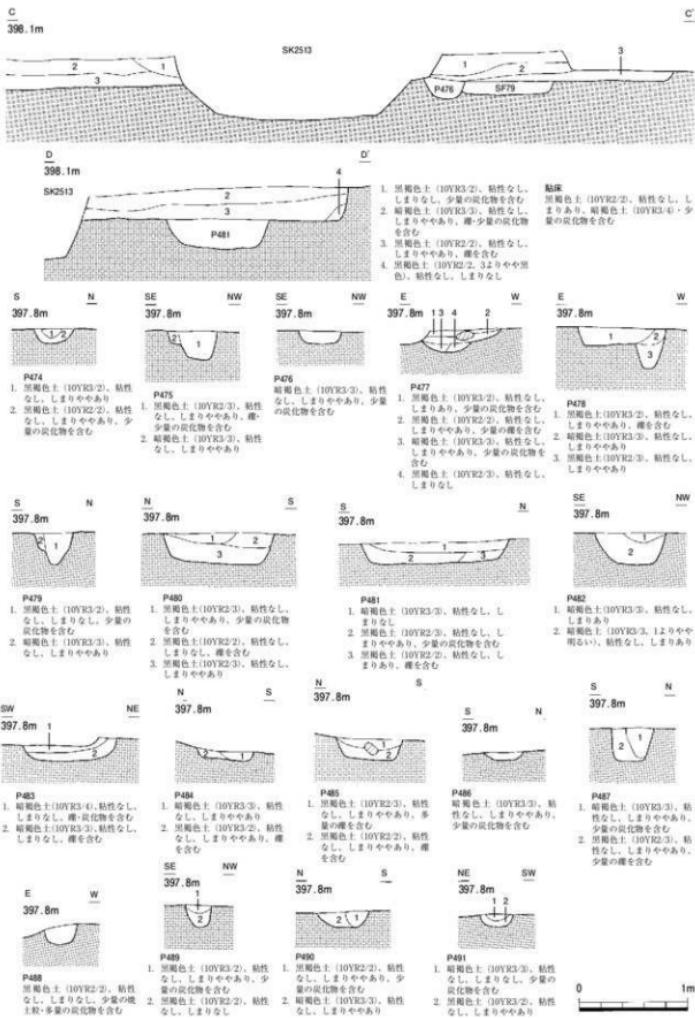


図145 SB34遺構図（2）

施設 床面で18基の遺構を検出した。柱穴はP475とP486を結ぶ線を軸として、P474・487と479・483がおよそ左右対称に位置する。焼土遺構S F79（図146右）は、柱配置の長軸からやや西に寄る。炉跡の内部には焼土層がなく、底面で被熱の痕跡も認められないが、底面直上で被熱した環2個を含む計6個が南側に集中して出土した。これとは別に、焼土遺構S F80（図146左）が竪穴の短軸上に位置する。SK2538・2573・2565に切られるため、部分的に遺存する程度であったが、焼土が2箇所で確認されたことから、重複遺構の可能性がある。底面には被熱の痕跡は認められず、埋土中に焼土粒が散在していることが観察された。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器と石器が散在的に出土した。土器は、早期後葉と中期中葉が認められる。石器は、石鏃1点・石錐1点・搔器1点・削器2点・RF3点・UF2点・打欠石錐1点・切目石錐2点が出土した。

所属時期 竪穴埋土出土土器の主体から中期中葉船元II式併行と判断する。

S B35（現場名S KE26、図147、図版48）

位置 M8・M9・N8・N9グリッドに位置する。

検出状況 VI b層基底面で検出した。SK249に切られ、S B27を切る。検出当初は平面規模から土坑を想定したが、底面で柱穴と炉跡を検出したことから竪穴住居跡の可能性が高まった。埋土は2層に分けられ、土層は中央が僅かに堆積である。

形状と規模 平面形は楕円形と考えられる。長径3.61m・短径2.61m・床面積推定7.23m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.15mを測り、壁はわずかに立ち上がる。竪穴の埋土を掘削後に、S F81が現れたため床面と判断した。床面は全体としては水平であるが、やや北に傾斜する。S F81の西側では不明瞭ながら部分的な硬化面が認められたが、明確な貼床は認められなかった。

施設 床面で6基の遺構を検出した。柱穴はP494・496が想定できる。竪穴の長軸上に位置し、2基で構成する柱配置となる。地床炉S F81は、竪穴の長軸から西に寄る。焼土層や底面の被熱の痕跡は認められなかつたが、埋土中に焼土ブロックが点在していた。

出土遺物 竪穴の埋土から縄文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は中期後葉で占められる。石器は、石錐1点・磨・敲石類1点・打欠石錐2点・切目石錐2点が出土した。

所属時期 当遺構の所属時期の上限はS B27、下限はS B13（第3B遺構面）の所属時期と考えられ、埋土出土土器の主体から中期後葉（第1段階）と判断する。

S B36（現場名S KE63、図148、図版50）

位置 N15・O15・O16・P15・P16に位置する。

検出状況 VI b層基底面で検出した。S B16・SK2540（第3B調査面）に切られる。またSK2537は埋土上部に亜角環1個を立石状に配置する土坑で、環の上面のレベルからみて、竪穴埋土上から切る遺構の可能性が高い。埋土は3層に分けられたが、全体の堆積状況は不明である。

形状と規模 共に不明である。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは東部で約0.27mを測り、壁は垂直に立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性もある。床面はほぼ水平である。

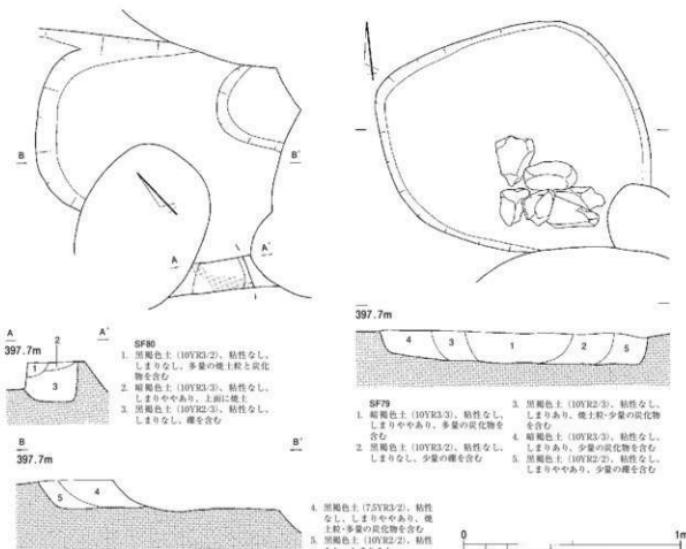


図146 SB34遺構図（3）

施設 堪穴内部で12基の遺構を検出した。柱穴は堪穴中央のP501・507が想定でき、2基で構成する柱配置となる可能性があるが、判然としない。炉跡は検出されなかった。

出土遺物 堪穴の埋土から縄文土器と石器が散在的に出土した。土器は、少量ながら中期後葉で占められる。石器は、石鏃1点・打欠石鍬1点・切目石鍬1点が出土した。

所属時期 堪穴出土土器（第1段階）と判断する。

S B37 (現場名S KE112、図149・150、図版51)

位置 O12・O13・P12・P13グリッドに位置する。

検出状況 VI b層底面で検出した。S K2512・2514・2515・2540・2571に切られる。当初S B31・33の床面で検出し、平面規模から土坑を想定していた。しかし埋土が第3B調査面の遺構埋土と類似することと、出土土器の時期から、当遺構はS B30・31・33を切る遺構であり、底面で柱穴が規則的に検出されたことにより、堪穴住居である可能性が高まった。埋土は11層に分けられたが、各土層はブロック状に堆積していることから、人為的な埋め戻しの可能性がある。

形状と規模 平面形は楕円形と考えられる。長径5.17m・短径4.08m・床面積推定14.30m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.46mを測り、北・西壁では垂直に立ち上がる。南西端では幅31cm以下の平坦面が認められ、堪穴の出入り口と解釈することができる。明確

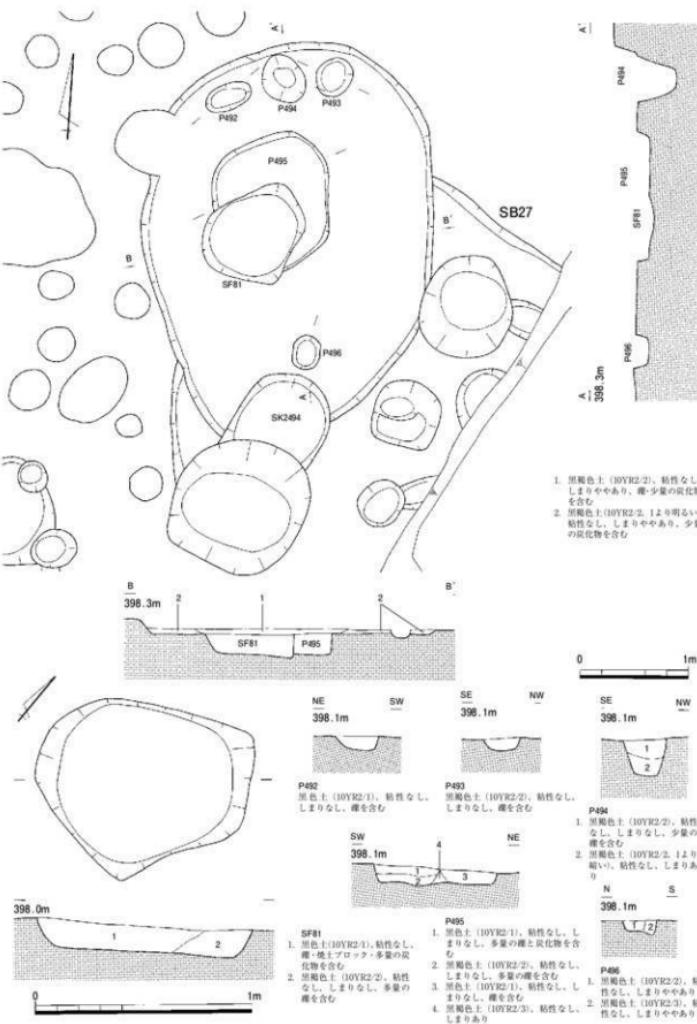


図147 SB35遺構

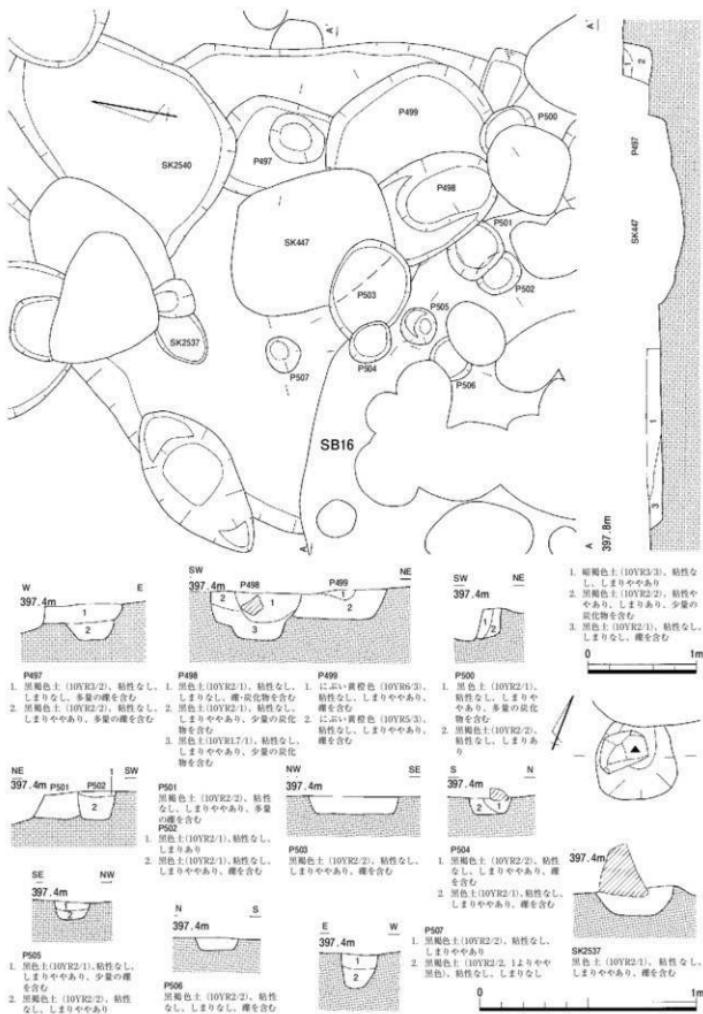


図148 SB36構造図

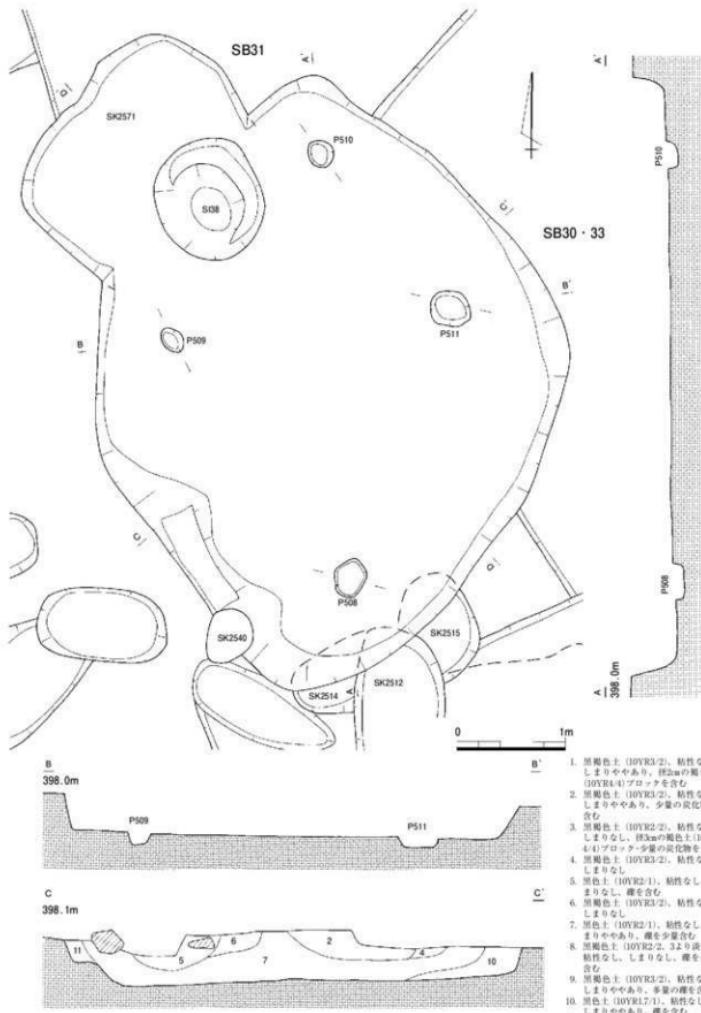


図149 SB37遺構図（1）

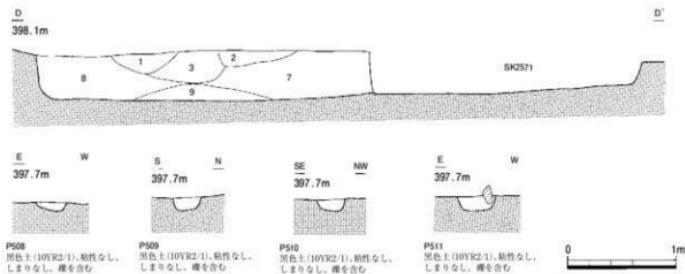


図150 S B37遺構図（2）

な貼床や硬化面は確認できず、IX a層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性もあるが、土層断面図を見る限り床面はほぼ水平である。

施設 竪穴内部で5基の遺構を検出した。柱穴は4基（P508・509・510・511）が想定でき、P508・510とP509・511の柱筋が直交する。S I 38は底面で検出された遺構であるが、竪穴床下の早期後葉の焼窯集積遺構である。炉跡は検出されなかった。

出土遺物 竪穴の埋土から、縄文土器と石器が散在的に出土した。土器は、少量ながら中期後葉で占められる。石器は、R F 1点・磨・敲石類1点・打斧石錘3点が出土した。

所属時期 竪穴出土土器から中期後葉（第3又は4段階）と判断する。

S B38（現場名S B G 1、図151・152、図版52）

位置 g33・g34・g35・h33・h34・h35グリッドに位置する。

検出状況 VI c層上面で検出した。S F 82・S K 2832・2833に切られる。当初楕円形の竪穴を想定していたが、南東部の土層観察用ベルトを検討した結果、竪穴の立ち上がりが確認された。このことから複数の竪穴住居跡が重複している可能性がある。埋土は3層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は不整円形と考えられる。長径4.64m以上・短径4.59m・床面積21.04m²以上を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.2mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できず、VI c層で遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で15基の遺構を検出した。柱穴は5基（P512・515・518・519・521）が想定できる。P512・515とP519・521は、P512・521の中点とP518を結ぶ線を軸に、左右対称に位置する。P524（図152中央右、土坑D 2 d類）とP525（図152下、土坑D 1 b類）は共に床面で検出したが、埋土上部に亜円窓又は亜角窓を含む土坑であり、本遺構廃絶後の遺構の可能性もある。S U 5（図152中央）は中期後葉の土器（1327）の破片を環状に組み合わせ、その内部から磨・敲石類1点（2204）が置かれた状態で出土し、直下からは種実（第6章第3節参照）が検出された。ただし掘形が検出されなかったため、遺物集積と判断した。

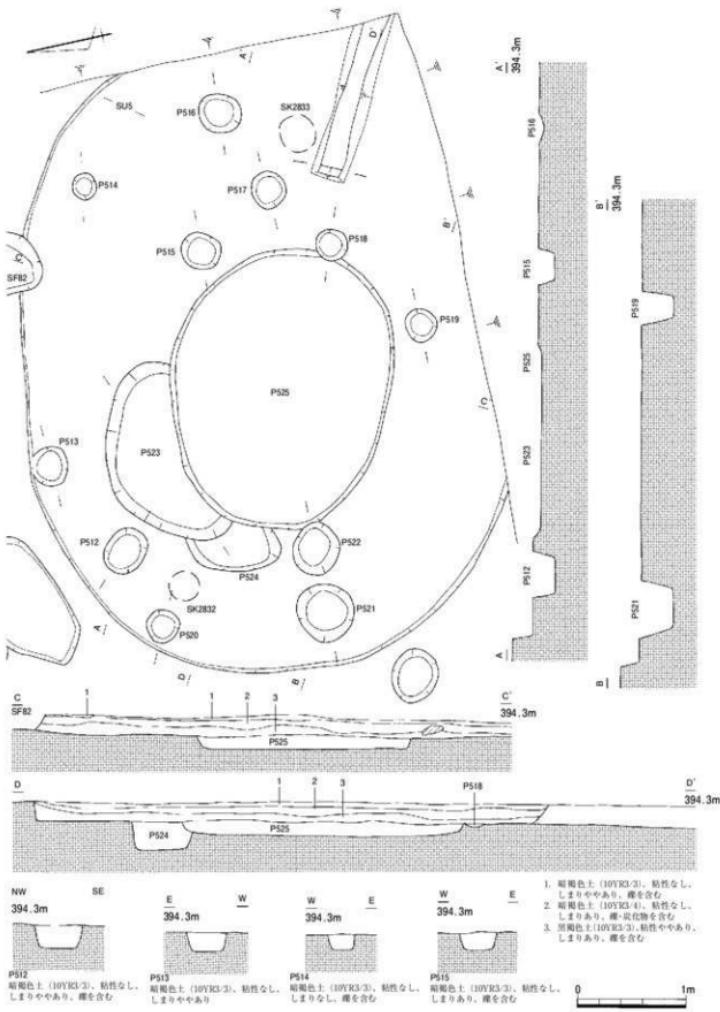


図151 SB38遺構図（1）

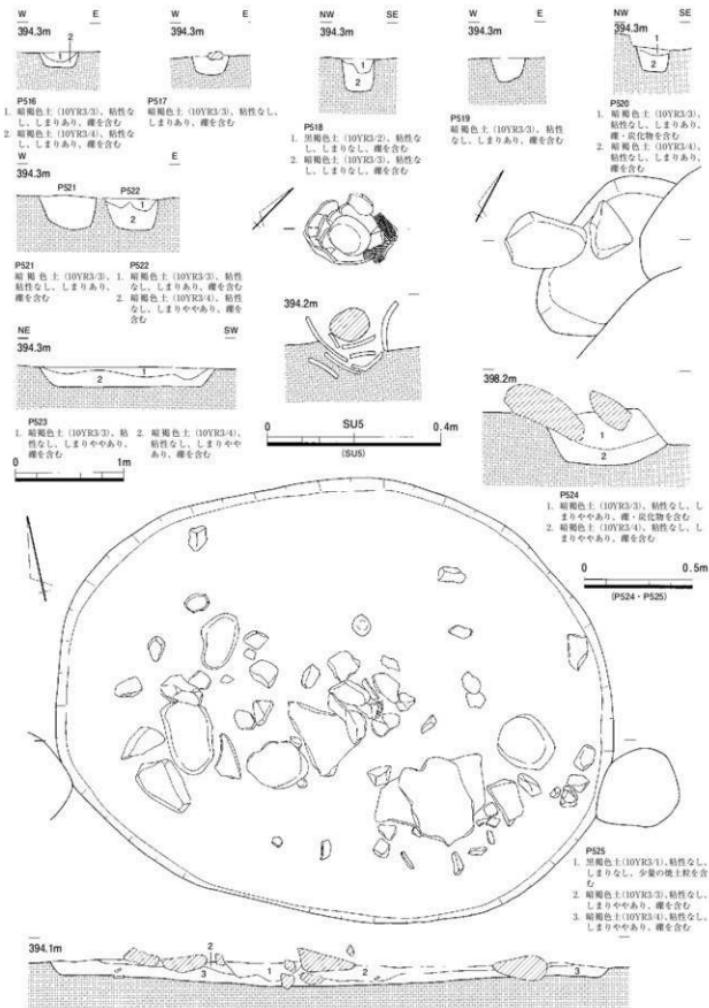


図152 SB38造構図（2）

出土遺物 堪穴の埋土から繩文土器・石器・炭化物が散在的に出土した。土器は中期前葉から中期中葉まで認められるが、主体は中期前葉である。石器は、石核1点・石鏃1点・石錐3点・搔器1点・RF2点・UF1点・磨・敲石類2点・打欠石錐15点・切目石錐3点・石皿1点が出土した。なおP525から、石鏃1点(2123)・搔器1点(2141)・打欠石錐9点(2211~2214・2235~2239)・切目石錐1点(2262)・石皿1点が出土した。

所属時期 堪穴出土土器の主体から中期前葉船元I式併行と判断する。

2 挖立柱建物跡

S H 2 (図153・154、図版56)

位置 S21・S22・T20・T21・T22グリッドに位置する。

検出状況 VI b 層基底面で検出した。現地調査では土坑として認識していたが、調査終了後に空中写真の観察により、比較的規模の大きな6基の土坑が規則的に並ぶ様子から、掘立柱建物跡として認定するに至った。遺構の検出面では、明確な貼床や硬化面は認められず、ほぼ水平である。

形状と規模 平面形は長方形である。柱真々で長辺約5.16m (SK2878・2881間)・短辺約2.69m (SK2881・2905間)、面積は13.88m²を測る。

柱穴の状況 柱穴は6基 (SK2875・2878・2881・2905・2907・3004) で構成される。いずれも根固めの礫、土層における柱痕状の堆積、底面の柱痕跡は認められなかった。ただしSK3004では比較的大型の礫を含む土層が南東に偏り、SK2905では土層に垂直な立ち上がりが認められることから、人為的な埋め戻しか柱の抜き取りを示すと考えることができる。また各柱穴の特徴をみると、平面形は円形や楕円形である。断面形は壁が垂直な面だけではなくSK2875の北西壁・SK2881の西壁・SK2878の東壁・SK2907の東壁で傾斜面が認められ、柱の挿入又は抜き取り箇所とみられる。底面の標高は隅柱 (SK2878・2881・2905・3004) が395.695~395.911m、柱筋中央の柱 (SK2875・2907) が395.836~395.878mで、隅柱間のレベル差が大きい。検出面から底面までの深さは、最大で約0.95m (SK3004) を測る。

出土遺物 柱穴の埋土から繩文土器・炭化物が散在的に出土した。土器は前期前葉～後期前葉まで認められるが、主体は後期前葉である。

所属時期 墓土出土土器の主体から後期前葉中津II式併行と判断する。

3 炉跡・焼土遺構

2基の炉跡 (SF82・85) と、3基の焼土遺構 (SF83・84・86) を検出した。炉跡は後述する。焼土遺構はいずれも掘形を持ち、埋土に不均質で粒状又はブロック状の焼土が粒状に点在する。礫及び礫の抜き取り痕跡はなく、周辺に柱穴は確認されなかった。

S F82 (図155)

位置 h33・h34グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径0.98m・短径0.68m・深さ0.68mを測る。

概要 VI c 層上面で検出した。SB38を切る。焼土粒又はブロックを含まない土層 (1・2層) を取り除くと、硬化してはいないものの強く被熱した均質な焼土層 (3層) が、面的に検出された。この焼土面の下部土層 (4層) と共に、掘形の底面でも被熱痕跡は認められなかった。

出土遺物 墓土から、UF1点が出土した。

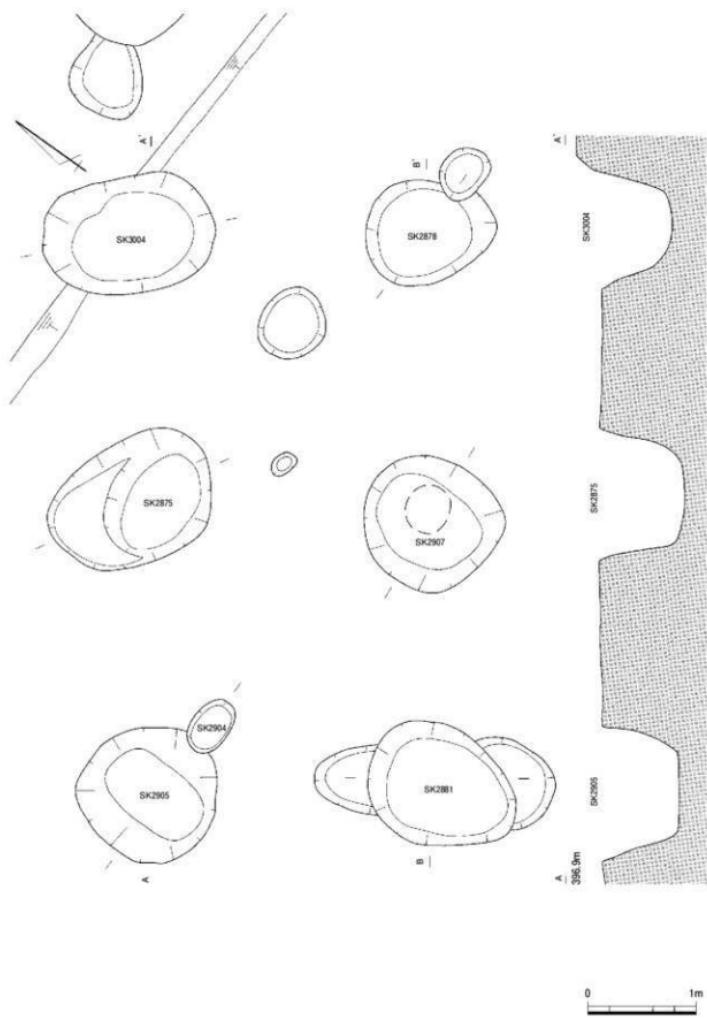


図153 SH2遺構図(1)

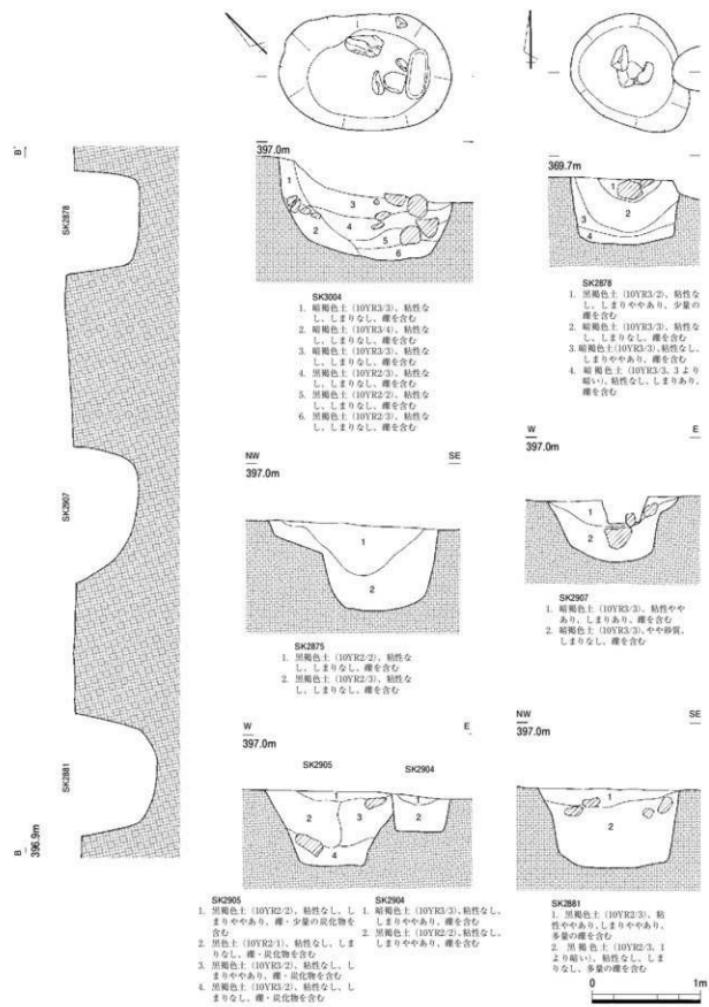


図154 SH2遺構図 (2)

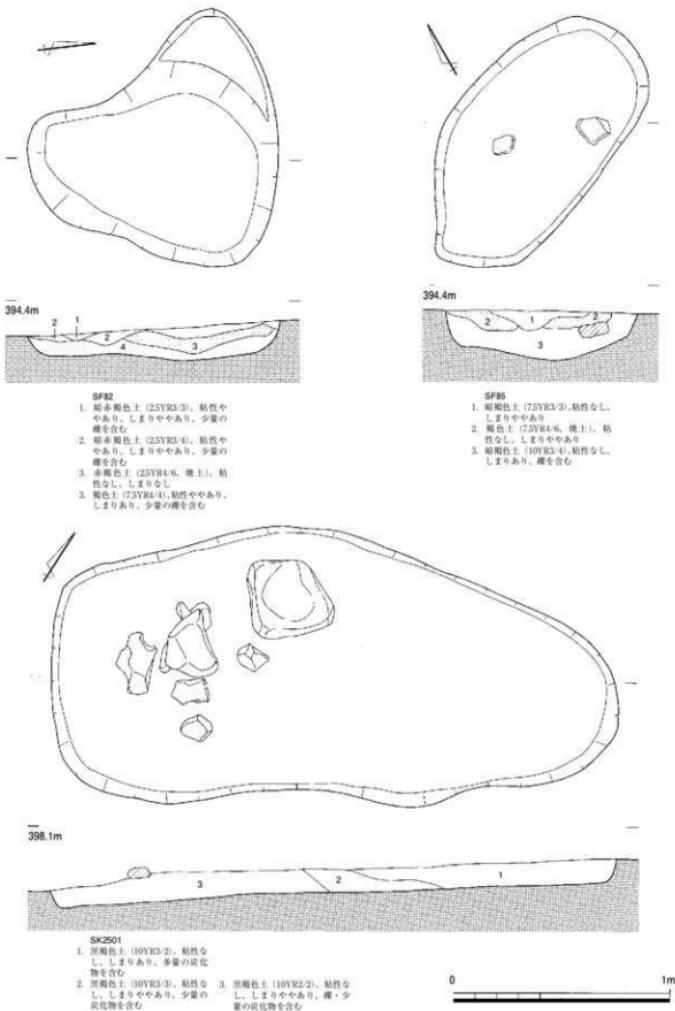


図155 第4調査面検出構造図（1）

S F 85 (図155)

位置 g 33・g 34グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.22m・短径0.64m・深さ0.24mを測る。

概要 VI c 層上面で検出した。S F 86を切る。焼土粒又はブロックを含まない土層（1層）を取り除くと、硬化してはいないものの強く被熱した均質な焼土層（2層）が、面的に検出された。この焼土面の下部土層（3層）と共に、掘形の底面でも被熱痕跡は認められなかった。

出土遺物 烧土から中期後葉の土器・打欠石錘10点（2208～2210・2228～2234）が出土した。

4 焼砾集積遺構**S I 38 (図156、図版53)**

位置 O 12グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径0.95m・短径0.60m・深さ0.30mを測る。

概要 IX a 層上面で検出した。S B 37・S K 2571に切られる。埋土上部で長径5～28cmの多量の礫が浮上する。礫の円磨度は亜角礫が主体で少量の亜円礫を伴い、大半の礫に被熱の痕跡が認められた。礫が集中する埋土1層の下部には粘性の強い黒色土（3層）が堆積し、西壁面で被熱の痕跡が認められた。ただし焼土は検出されなかった。のことから当遺構はいわゆる「被覆型集石遺構」である。

出土遺物 烧土から早期後葉の土器（1285）・炭化物が少量出土した。

5 土坑**S K2469 (図161、図版53)**

位置 f 33・g 33グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径1.45m・短径0.72m・深さ0.48mを測る。

概要 VI c 層上面で検出した。S K 2822・2823・2824に切られる。土坑中央の埋土上部に、長径6～41cmの多量の礫が浮上する（土坑D 1 b類）。礫は3段に積まれており、最上部に長径40cmの円礫1個を置く。礫の上面は、土坑中央に向かって傾斜するものが多い。礫の円磨度は円礫が大半で、少量の扁平円礫を含む。

出土遺物 烧土から、磨・敲石類1点（2205）・打欠石錘1点（2227）が出土した。

S K2470 (図160、図版53)

位置 f 33・f 34・g 33・g 34グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整椭円形である。長径1.25m・短径1.08m・深さ0.34mを測る。

概要 VI c 層上面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土上部に、少量の亜円礫又は亜角礫が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 烧土からR F 1点・打欠石錘2点が出土した。

S K 2473 (図156)

位置 O 6・O 7グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は椭円形である。長径0.65 m以上・短径0.65 m・深さ0.32 mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K 2474を切る。土坑中央東寄りの埋土上面には、長径30 cmの亜円礫1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 なし。

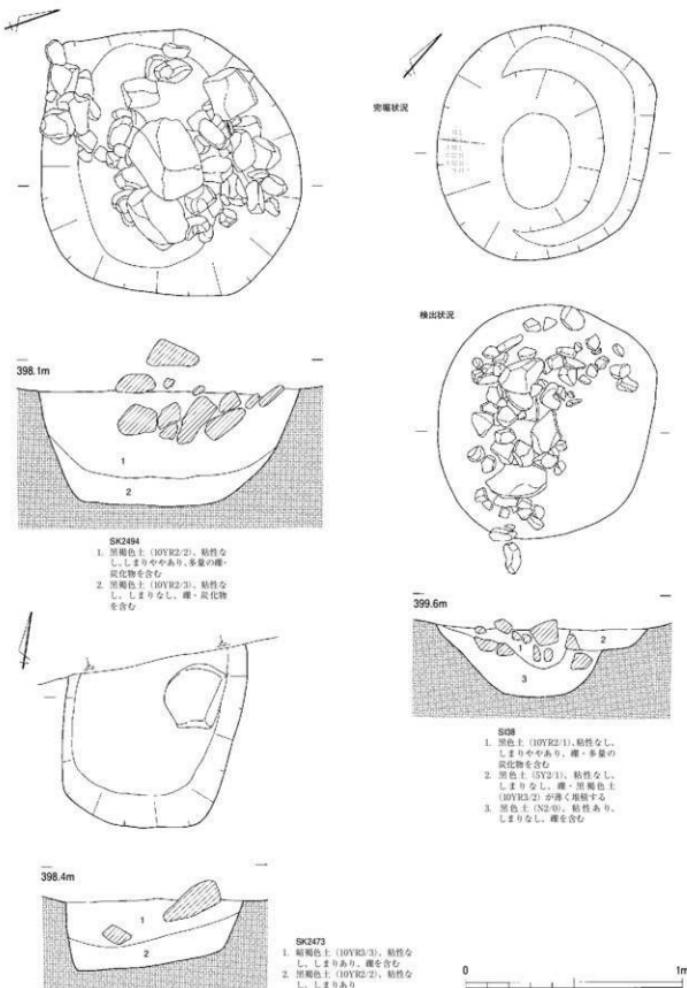


図156 第4調査面検出遺構図（2）

S K2483 (図157)

位置 M 9 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.83m・短径0.80m・深さ0.31mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K2484・2485に切られる。土坑中央の埋土上部には、長径23cmの角礫1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土からフレイク2点が出土した。

S K2494 (図156、図版53)

位置 M 9・N 9 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.03m・短径0.70m・深さ0.73mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S B27・35を切る。土層堆積状況から2基の土坑の重複であることが判明したため、ここでは後出の1基を掲載した。埋土上部で長径6~23cmの多数の礫が浮上し、土坑中央の埋土最上部に長径32cmと37cmの礫2個を置く（土坑D 1 b類）。礫の円磨度は亜角礫で占められる。

出土遺物 埋土からR F 2点・U F 1点・打欠石錐1点（2223）が出土した。

S K2501 (図155、図版53)

位置 P 12 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径2.55m・短径1.14m・深さ0.16mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S B30・37・S K2502を切る。土坑南西部の埋土下部には、長径13~35cmの少量の礫が浮上する（土坑D 2 d類）。礫の円磨度は亜角礫が主体で、少量の亜円礫を伴う。

出土遺物 埋土から石錐1点が出土した。

S K2518 (図157、図版53)

位置 Q 15・Q 16 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径2.88m・短径2.36m・深さ0.38mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S B32・S K2576を切る。埋土上部に、長径10~45cmの多量の礫が浮上する（土坑D 1 b類）。礫の円磨度は亜円礫が主体で、少量の亜角礫を伴う。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1287）・石錐1点・石匙1点・搔器1点・R F 3点・U F 1点・磨・敲石類5点が出土した。

S K2523 (図157、図版53)

位置 O 14・P 14 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径3.41m・短径1.72m・深さ0.25mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K2532・2533・2534・2535を切る。土坑東壁沿いの埋土上部で、長径20~36cmの礫をL字形に配置する（B 2類）。礫の円磨度は亜円礫が主体で、少量の亜角礫を伴う。

出土遺物 埋土から中期前葉～後葉の土器（1288~1291）・土器片円板1点（2015）・石錐1点・U F 1点が出土した。

S K2526 (図158、図版54)

位置 P 13 グリッドに位置する。

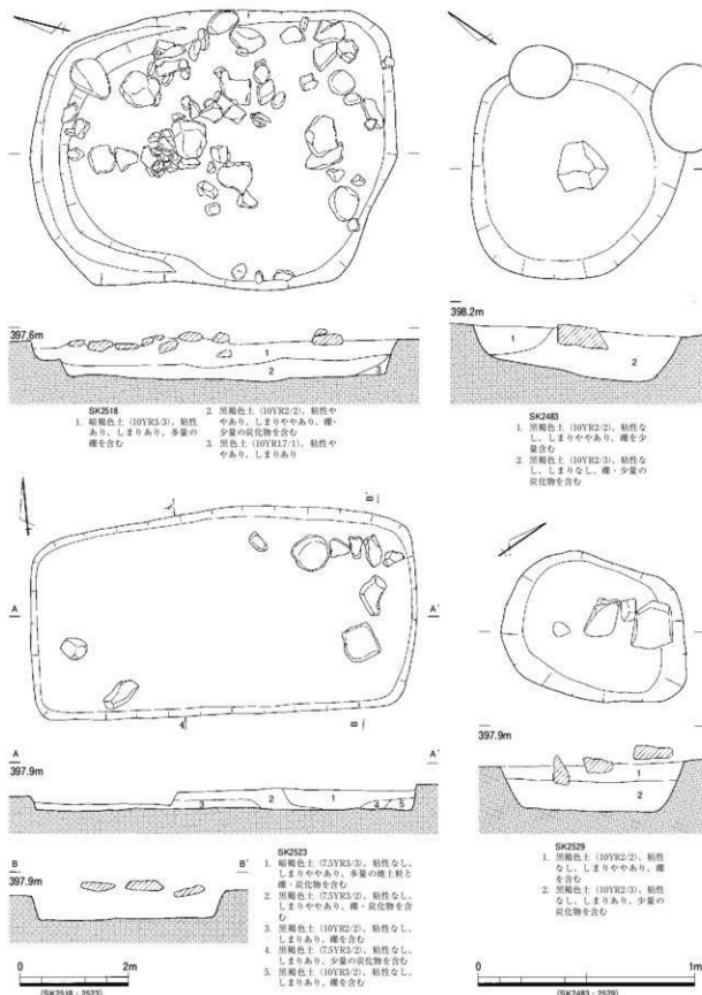


図157 第4調査面検出構造図 (3)

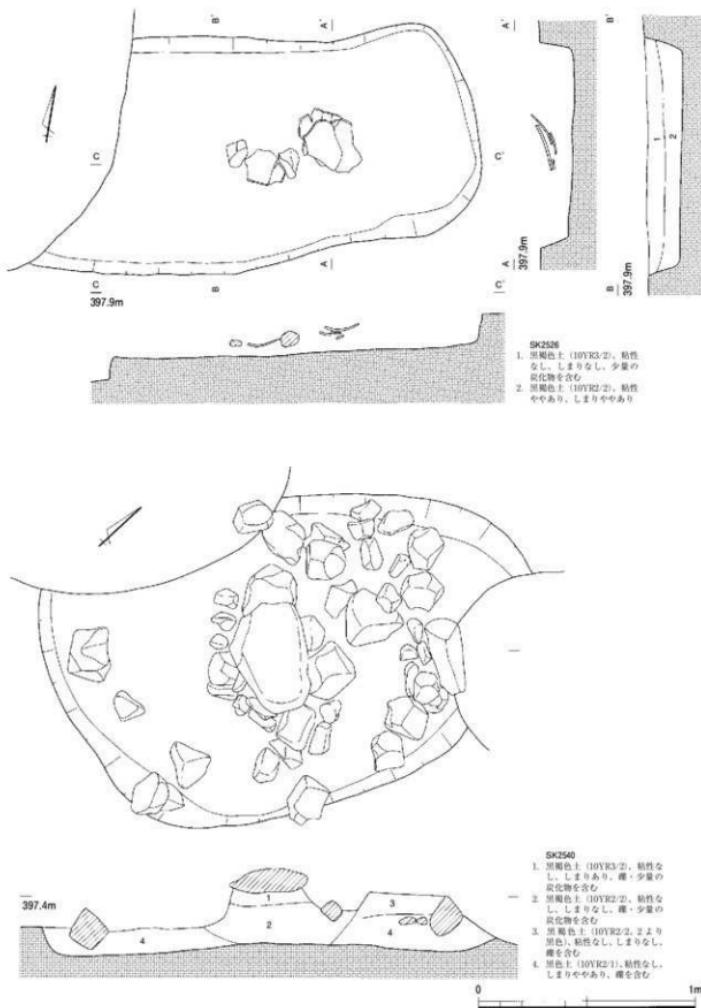


図158 第4調査面検出遺構図 (4)

形状と規模 平面形は不整長方形である。長径1.96m以上・短径0.95m・深さ0.18mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。SK2512に切られ、SB34・SK2573を切る。土坑中央東寄りで、土器片(826)と少量の縁が浮上する。土器片はすべて内面を上に向け、一部は複数の土器を重ねていた(土坑C 2類)。

出土遺物 埋土から中期中葉の土器(1297~1299)・土器片円板1点(2016)・石鏸2点(2077・2122)・楔形石器1点(2170)・石匙1点(2135)・RF1点・UF3点・打欠石錐1点・切目石錐1点(2271)が出土した。

SK2529 (図157、図版54)

位置 P11・Q11グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径0.65m・短径0.53m・深さ0.29mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。SK2528を切る。土坑中央東寄りの埋土上部に、長径8~22cmの少量の亜角縁が浮上する(土坑D 2 d類)。

出土遺物 なし。

SK2540 (図158、図版54)

位置 O14・O15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径2.15m・短径1.30m・深さ0.25mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。SK2536に切られS B36・P497を切る。埋土下部で長径8~36cmの多数の角縁が浮上し、土坑中央の埋土最上部に長径50cmの扁平円縁1個を置く(土坑D 1 b類)。ただし土層を観察したところ、土坑中央で立ち上がりが認められることから、複数の土坑が重複している可能性がある。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器(1300)が出土した。

S K2558 (図159)

位置 Q13グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径1.30m・短径0.65m・深さ0.20mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。SK2603に切られる。土坑北寄りの埋土上部で、長径11cmと20cmの亜円縁2個が浮上する(土坑D 2 d類)。なお土層を観察したところ、土坑内部で立ち上がりが認められることから、複数の土坑が重複している可能性がある。

出土遺物 埋土から打欠石錐1点が出土した。

S K2578 (図159)

位置 R15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径1.25m以上・短径0.87m・深さ0.42mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。SK2618に切られ、SK2579・2594を切る。土坑北西端の埋土上部に、長径25cmと43cmの円縁・亜円縁2個が浮上する(土坑D 2 d類)。

出土遺物 埋土から石核1点・搔器1点が出土した。

S K2632 (図160)

位置 R16・R17グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形である。長径1.53m・短径0.82m・深さ0.37mを測る。

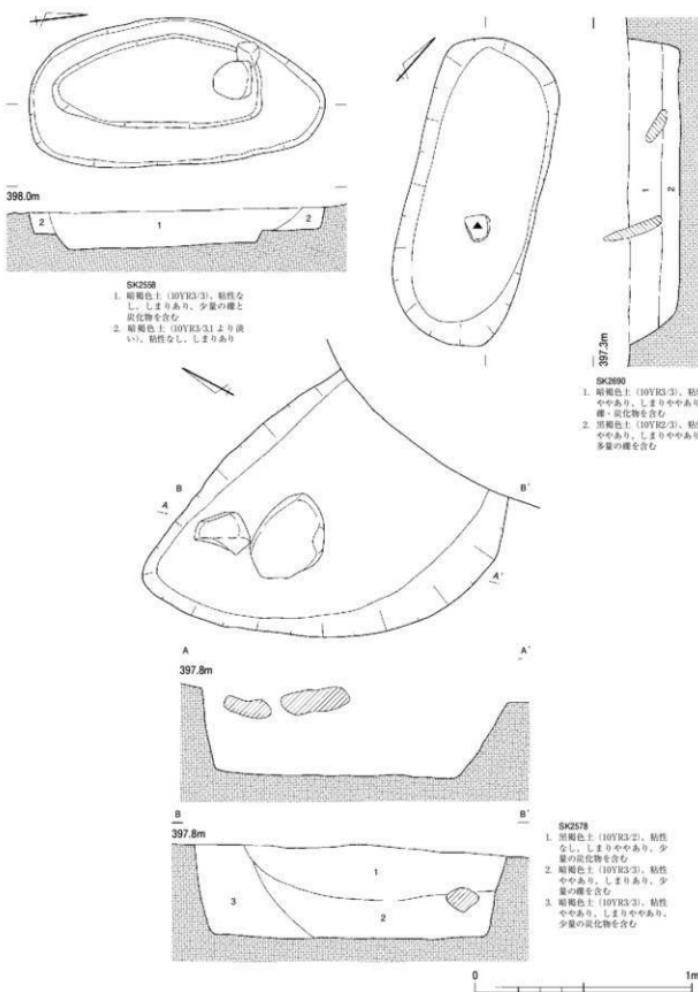


図159 第4調査面検出遺構団（5）

概要 VI b 層基底面で検出した。重複遺構はない。土坑中央北寄りの埋土上部に、石皿1個が浮上する（土坑D 2 d類）。

出土遺物 埋土からR F 1点・磨・敲石類1点・石皿1点が出土した。

S K2690 (図版54)

位置 R 18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.27m・短径0.50m・深さ0.23mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K2689に切られる。土坑中央南東寄りの埋土上部に、亜角碟（長径28cm・短径14cm・厚さ5cm）1個を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K2756 (図版54)

位置 U 17・V 18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径2.61m・短径1.74m・深さ0.32mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K2760・2775を切る。土坑中央の埋土上部に、亜円碟が数個浮上した（土坑D 2 b類）。

出土遺物 埋土から中期中葉と後葉の土器（1305・1306）、石錐1点（2127）・U F 1点・磨製石斧1点（2307）・打欠石錐1点（2215）・切目石錐1点（2266）が出土した。

S K2767 (図版54)

位置 T 18・U 18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径1.25m以上・短径0.70m以上・深さ0.23mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K2667・2766に切られ、S K2768・2772を切る。土坑中央南寄りで、土器片（1307）がまとまって浮上する（土坑C 2類）。

出土遺物 上記の中期中葉の土器（1307）のみが出土した。

S K2778 (図版54)

位置 S 15グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.12m・短径0.85m・深さ0.32mを測る。

概要 VI b 層基底面で検出した。S K2777を切る。土坑南西端の底面に、長径34cmの亜円碟1個が置かれていた（土坑D 2 a類）。

出土遺物 なし。

S K2801 (図版54)

位置 g 32・g 33グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径1.79m・短径1.09m・深さ0.32mを測る。

概要 VI c 層上面で検出した。重複遺構はない。土坑中央の埋土下部に、少量の亜角碟が浮上する（土坑D 2 b類）。

出土遺物 埋土から切目石錐1点（2270）が出土した。

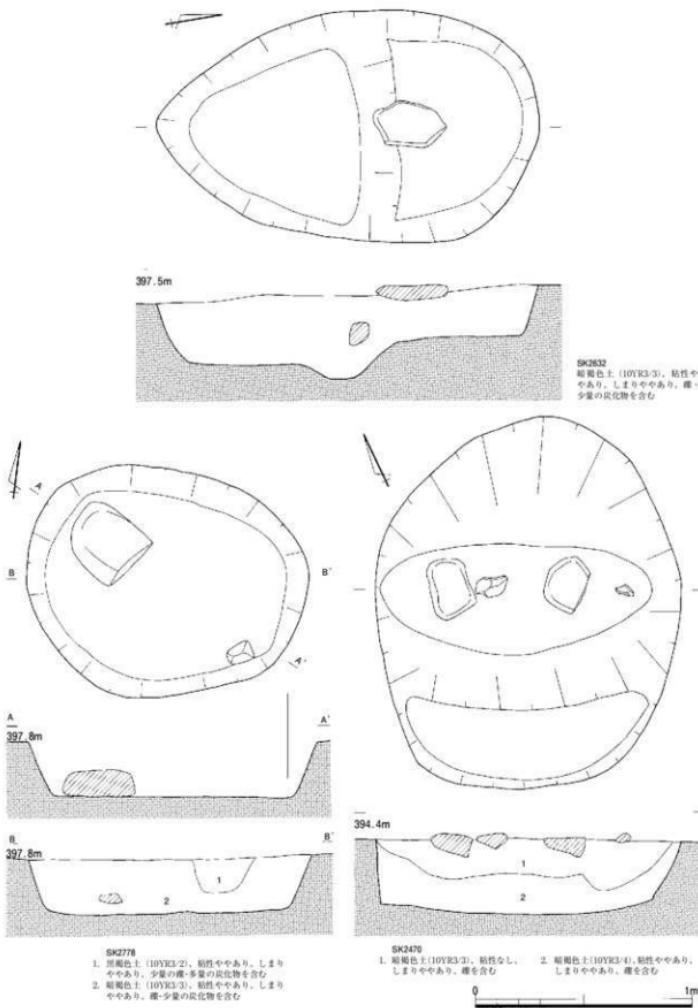


図160 第4調査面検出遺構図（6）

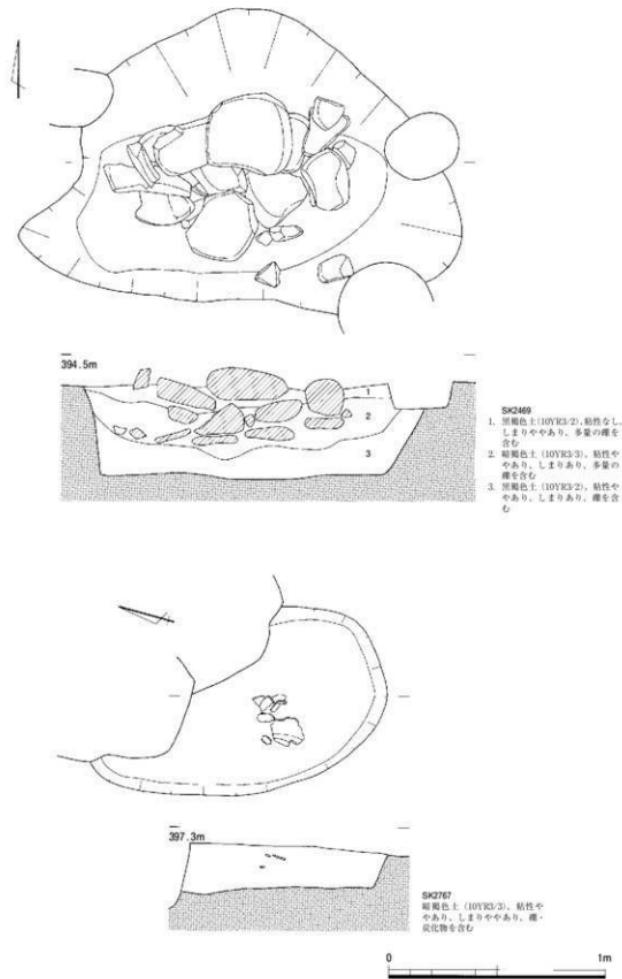


図161 第4調査面検出構造図 (7)

第7節 第5調査面

第5調査面では、VI c 層基底面で遺構を検出した。地点によって検出面の土層が異なり、W24グリッドとa25グリッドを結ぶラインより北側にはⅦ b層、S21グリッド及びV26グリッドとW28グリッドを結ぶラインから西側にはⅨ b層、S22グリッドからU23グリッドにかけてV27グリッド周辺にはⅩ a層、それを除いた大部分はⅧ a層が分布する。標高ではS21グリッド（約396.7m）とa24グリッド（約396.3m）を結ぶラインと、S26グリッド（約396.3m）とW28グリッド（約396.1m）を結ぶラインとの間に浅い凹地（底面約395.6m）が認められ、後述する第6調査面の形状と類似する。

1 壓穴住居跡

S B39（現場名S B F 1、図162・163、図版55・56）

位置 Z27・Z28・a27・a28グリッドに位置する。

検出状況 調査区南の南壁の観察によれば、検出面はV b層基底面である。堅穴の南東部を調査溝（Cトレンチ）に切られる。また検出当初、本遺構がS B40を切るとみられたが、重複の範囲が狭いため判然としない。埋土は5層に分けられたが、全体の堆積状況は不明である。

形状と規模 平面形は不整楕円形と考えられる。長径5.75m・短径4.14m以上・床面積20.81m²以上を測る。

壁・床面の状況 調査区の南壁の観察では、検出面から床面までの最大の深さは約0.41mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できず、Ⅸ b層上面に達して遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で17基の遺構を検出した。柱穴はP529・537を想定できるが、東側の柱穴2基がAトレンチによって失われたとすれば、4基で構成する柱配置となる。埋甕S Z16（図163右下）は堅穴の南側に位置し、胴部下半を欠いた土器（1331）を逆位に収める。軌跡は検出されなかった。

出土遺物 埋土から土器、石器、炭化物が散在的に出土した。図示できる遺物はないが、土器は、前期前葉から中期前葉と、中期後葉が認められる（床面検出遺構を含む）。石器は石核1点が出土した。
所属時期 S Z16出土土器から、中期後葉（第1段階）と判断する。

S B40（現場名S B F 2、図164・165、図版55）

位置 Y26・Y27・Y28・Z27・Z28グリッドに位置する。

検出状況 Ⅶ層上面で検出した。ただしS B39の経緯から、検出面はV b層基底面である可能性もある。S K2964（SH 4の柱穴）・S K2320・2960・2961・2963・2967・2993・2994に切られる。また検出当初、本遺構がS B40を切るとみられたが、重複の範囲が狭いため判然としない。埋土は4層に分けられ、土層は水平に堆積し、壁際には三角堆積が認められた。

形状と規模 平面形は円形である。長径5.63m・短径5.42m・床面積推定24.10m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.16mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できず、VI c層基底面で遺構を検出した。床面はほぼ水平である。

施設 床面で13基の遺構を検出した。柱穴は4基（P543・544・546・550）を想定でき、柱配置は不規則である。

出土遺物 埋土から土器と石器が散在的に出土した。図示できる遺物はないが、土器は早期後葉から

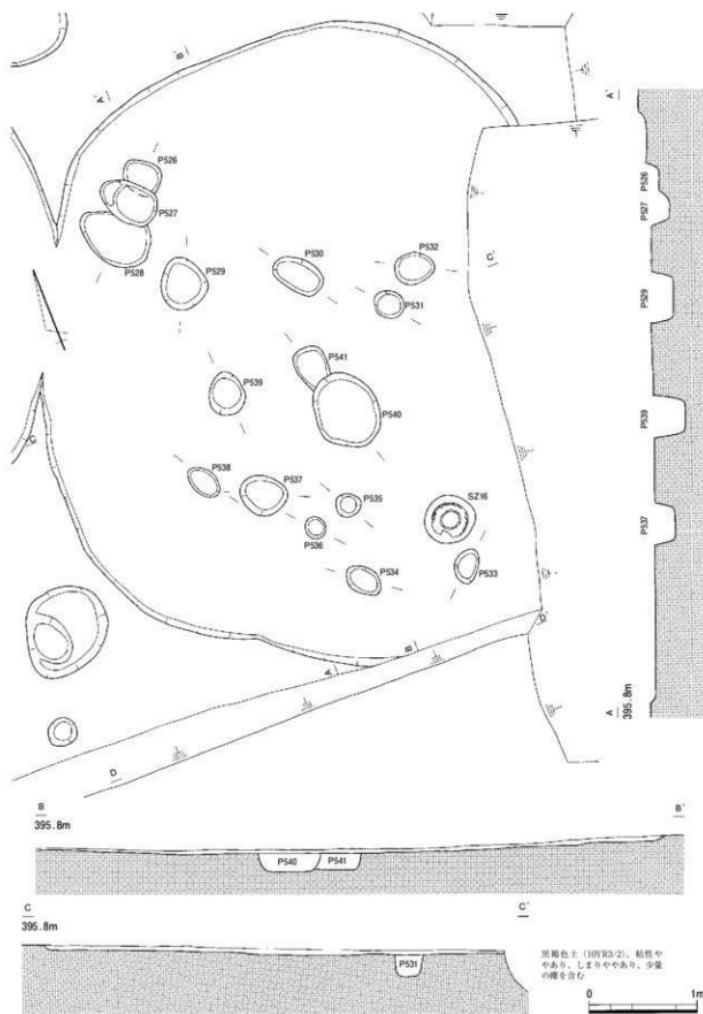


図162 SB39構造図（1）

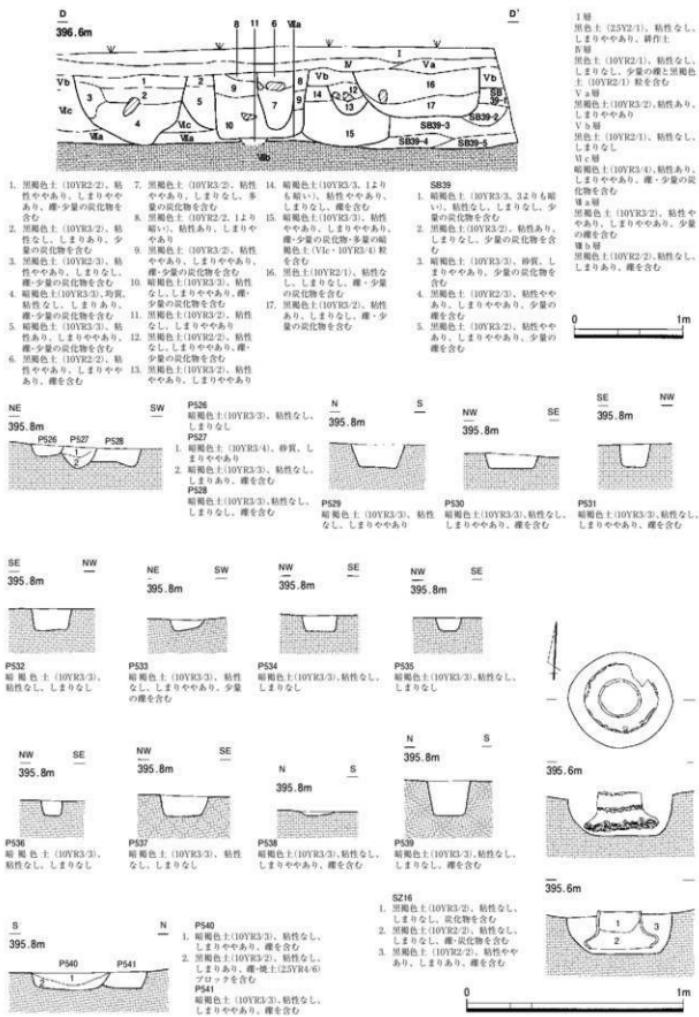


図163 SB39遺構図（2）

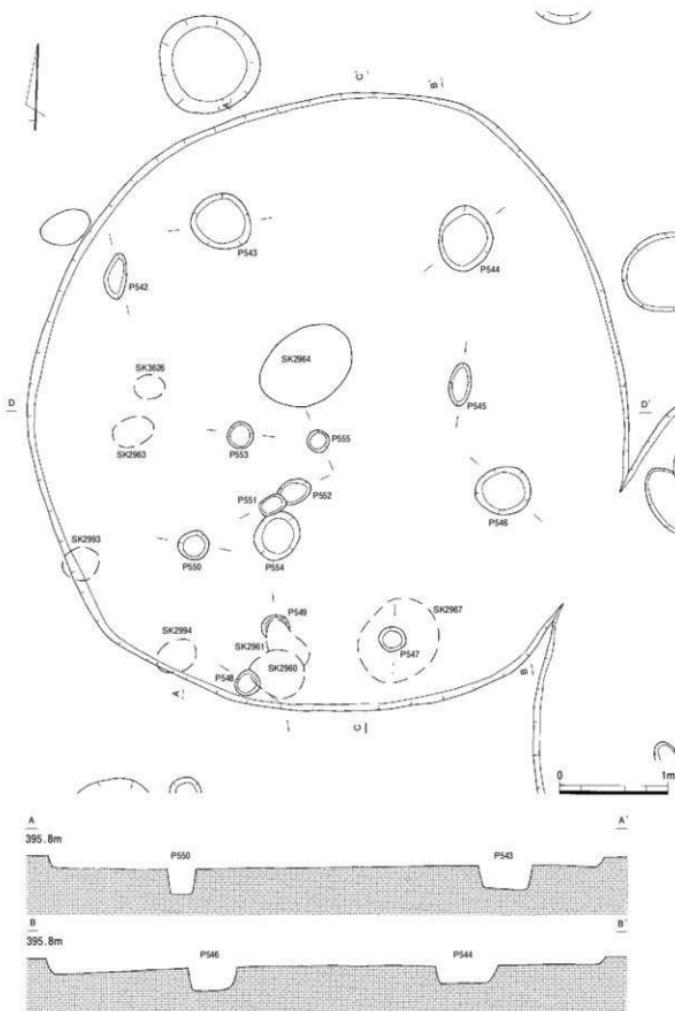


図164 SB40構造図（1）

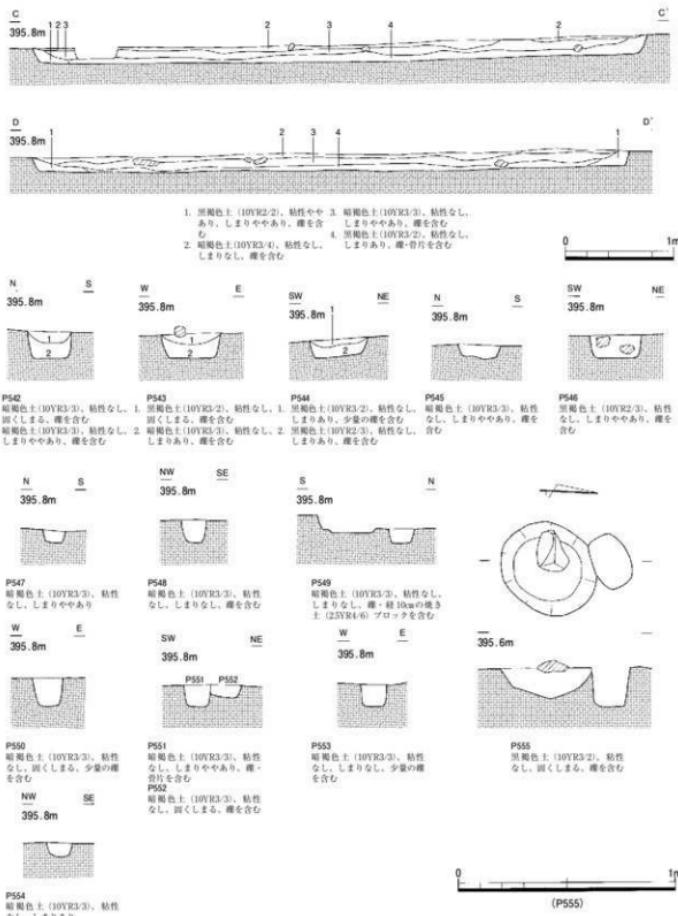


図165 SB40遺構図（2）

前期前葉と、前期後葉が認められる（床面検出遺構を含む）。石器は、石鎌1点・石錐1点が出土した。

所属時期 S B39に前後する時期と判断する。

2. 挖立柱建物跡

S H 3 (図166、図版56)

位置 V23・V24・W23・W24グリッドに位置する。

検出状況 VI c 層基底面で検出した。調査段階では土坑として認識していたが、現地調査終了後に空中写真的観察により、比較的規模の大きな4基の土坑が規則的に並ぶ様子から、掘立柱建物跡として認定するに至った。S K2957がS K2921に切られる。遺構の検出面では明確な貼床や硬化面は認められず、南西に傾斜する。

形状と規模 平面形は長方形である。柱穴の真々で短辺約3.2m (S K2916・2920間)・長辺約3.9m (S K2916・2918間)、面積12.48m²を測る。

柱穴の状況 柱穴は4基 (S K2916・2918・2920・2957) で構成される。いずれも根固めの礫、土層における柱痕状の堆積、底面の柱痕跡は認められなかった。各柱穴の特徴をみると、いずれも平面形は不整円形又は不整格円形であり、断面形は垂直に近く立ち上がる。底面の標高は、北側の土坑が約395.65～395.71m、南側の土坑が約395.53～395.66mで、北側の柱穴の底面のレベルが南側よりもやや高い。検出面から底面までの深さは、最大で約0.51m (S K2916) を測る。

出土遺物 柱穴の埋土からは、土器・炭化物・骨片が散在的に出土した。土器は、所属時期が不明である。

所属時期 S H 4との共通点が多いことからほぼ同時期と考えられ、後期中葉と判断する。

S H 4 (図167、図版56)

位置 Y26・Y27・Z26・Z27グリッドに位置する。

検出状況 VI c 層基底面で検出した。現地調査では土坑として認識していたが、調査終了後に空中写真的観察により、比較的規模の大きな4基の遺構が規則的に並ぶ様子から、掘立柱建物跡として認定するに至った。遺構の検出面では明確な貼床や硬化面は認められず、南西に傾斜する。

形状と規模 平面形は長方形である。真々で長辺3.5m (S K2964・2974間)、短辺2.9m (S K2962・2964間)、面積10.15m²を測る。

柱穴の状況 柱穴は4基 (S K2962・2964・2974・2984) で構成される。いずれの柱穴も根固めの礫、底面の柱痕跡は認められなかった。各柱穴の特徴をみると、平面形は円形又は橢円形であり、断面形は垂直に近く立ち上がる。底面の標高は北側の土坑が約395.37～395.39m、南側の柱穴が約395.13～395.17mで、北側の柱穴の底面のレベルが南側よりもやや高い。検出面から底面までの深さは、最大で約0.57m (S K2974) を測る。

出土遺物 埋土からは、土器と炭化物が散在的に出土した。土器は早期末～前期初頭、後期中葉(1337)が認められる。

所属時期 後期中葉元住吉山I式併行と判断する。

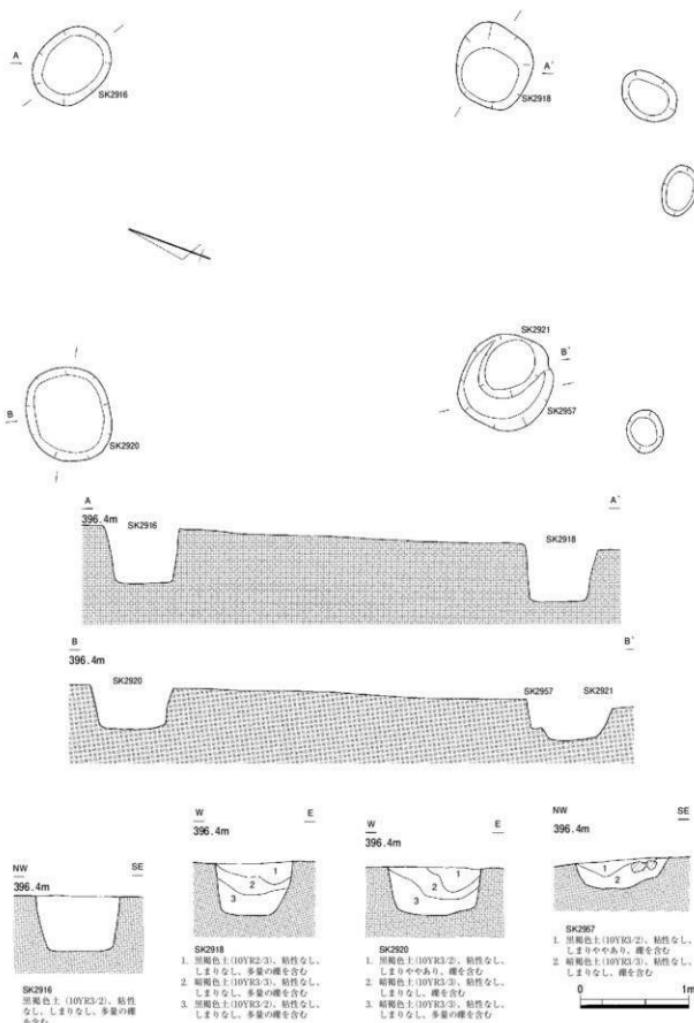


図166 SH 3遺構図

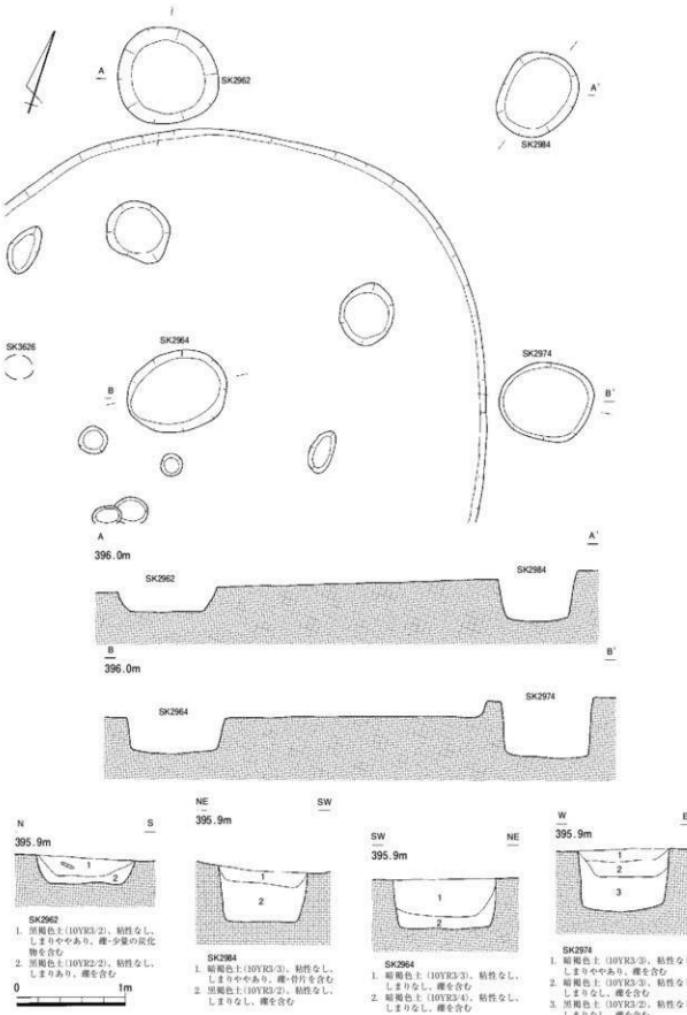


図167 SH 4構造図

3 焼礫集積遺構

S I 39 (図168、図版56)

位置 W26・W27・X26・X27グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径2.00m・短径1.42m・深さ0.40mを測る。

概要 VI c 層基底面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、長径6~48cmの多量の礫が検出された。礫の円磨度は角礫又は亜角礫で占められ、大半の礫に被熱の痕跡が認められた。ただし土坑内壁面に、被熱の痕跡や焼土は認められなかった。礫を除去し、埋土5層上面で、土坑中央南寄りに原型を留めた炭化材を含む炭化物の集積が認められた。このことから、当遺構はいわゆる「被覆型集石遺構」である。炭化材が原位置を保つ可能性が高く、また出土土器がないため、放射性炭素年代測定を行い、併せて採取した炭化物の一部を水洗選別した（第6章第3・7節参照）。

出土遺物 多量の炭化材が出土した。

S I 40 (図169、図版40)

位置 U25・U26・V25・V26グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径1.50m・短径1.30m・深さ0.30mを測る。

概要 VI c 層基底面で検出した。S K2985を切る。埋土上部で、長径3~41cmの多量の礫が検出された。礫の円磨度は角礫又は亜角礫で占められ、大半の礫に被熱の痕跡が認められた。ただし土坑内壁面に、被熱の痕跡や焼土は認められなかった。なお掘形北端の埋土上面に、円礫1個が平置きで出土したが、使用痕・被熱痕共に認められなかった。このことから、当遺構はいわゆる「被覆型集石遺構」である。

出土遺物 埋土からR F 1点・磨・敲石類1点(2203)・少量の炭化物、1層から骨片が出土した。

4 土坑

S K2973 (図169)

位置 X27グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.71m・短径0.35m・深さ0.11mを測る。

概要 VI c 層基底面で検出した。S K2997・2999を切る。土坑中央南寄りの埋土上部に、長径10cmと26cmの亜角礫1個が浮上する。(土坑D 2 d類)

出土遺物 なし。

S K2987 (図169)

位置 V26グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は楕円形である。長径0.42m以上・短径0.32m・深さ0.23mを測る。

概要 VI c 層基底面で検出した。S K2985に切られる。土坑中央の埋土上部に、長径25cmの亜円礫1個が浮上する(土坑D 2 d類)。

出土遺物 なし。

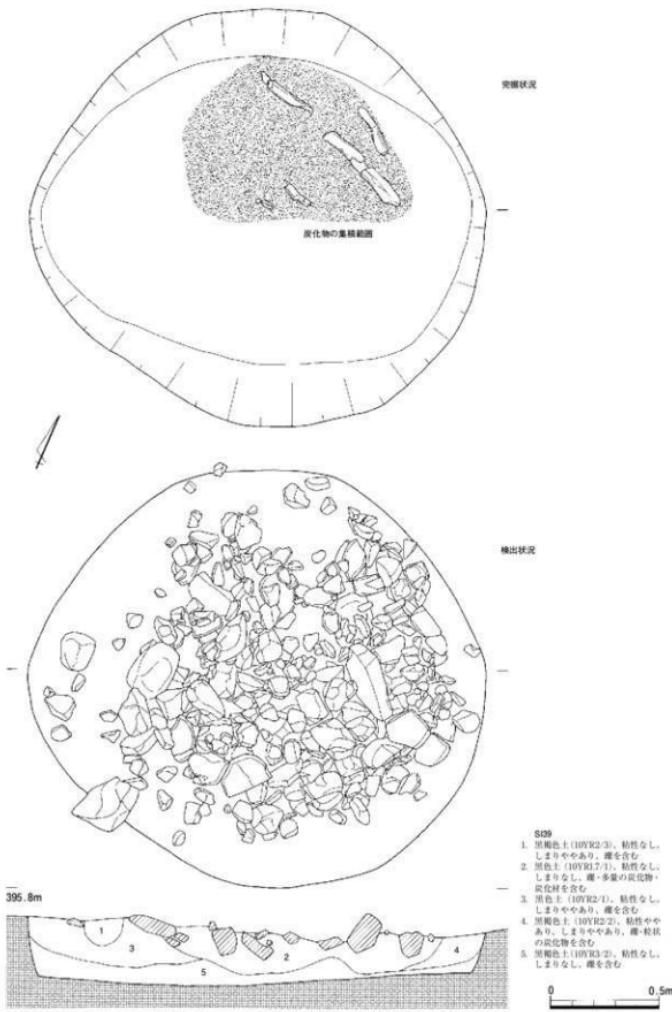


図168 第5調査面検出遺構図（1）

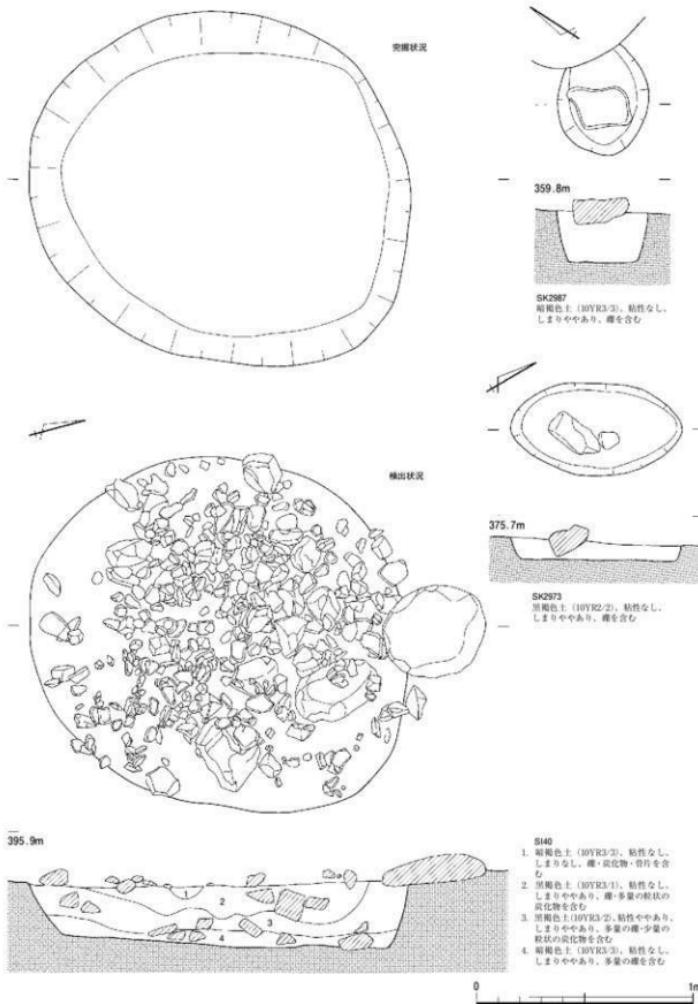


図169 第5調査面検出遺構図（2）

第8節 第6調査面

第6調査面では、IX a層が全面に広がる。標高ではL3グリッドが最も高く（約398.7m）、南に向かって傾斜する。R21グリッド（約396.6m）とa25グリッド（約395.9m）を結ぶラインと、T27グリッド（約396.0m）とW28グリッド（約395.7m）を結ぶラインとの間には、溝状の凹地（底面約

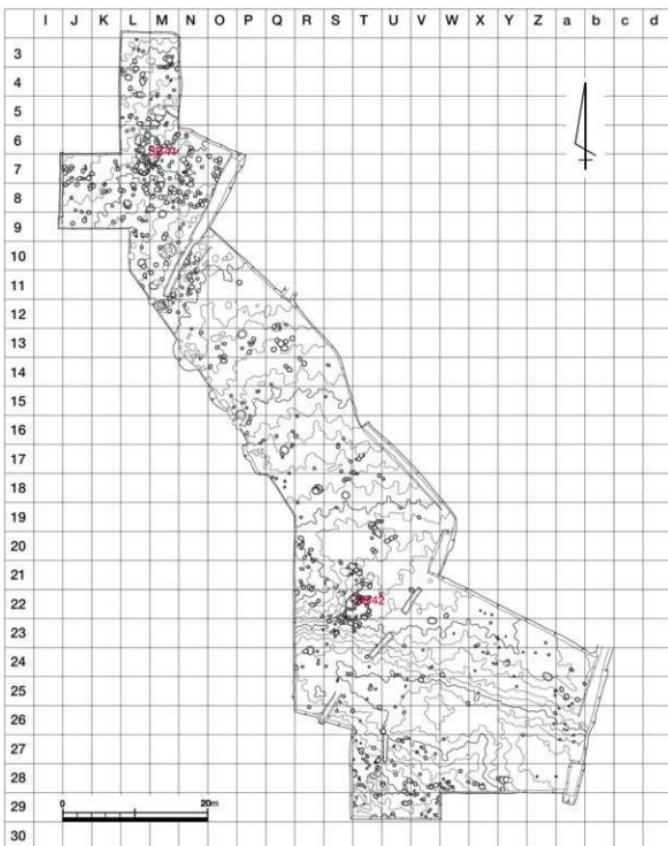


図 170 第6調査面全体図

395.3m) が認められた(第3章第2節参照)。

1 竪穴住居跡

S B41 (現場名 S B H 1、図版171・172、図版57)

位置 L 6・L 7・M 7 グリッドに位置する。

検出状況 IX a 層上面で検出した。S K3623を切り、S K3110・3112・3250・3299に切られる。埋土は2層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径4.02m・短径3.03m・床面積推定9.52m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約0.12mを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できずIX a 層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性がある。床面は中央がやや窪む。

施設 竪穴内部では、19基の遺構を検出した。柱穴は4基(P 559・564・565・570)を想定でき、P 568を中心にして同心円状に配置する(柱配置1)。これとは別に4基(P 556・564・566・571)も想定でき、中心がやや南に下がり同心円状に配置する(柱配置2)。遺構の重複関係では、P 566(柱配置2)がP 565(柱配置1)を切り、またP 571(柱配置2)がP 570(柱配置1)を切ることから、柱配置1が柱配置2に先行する。炉跡は検出されなかったが、P 224の埋土中に焼土ブロックが観察された。

出土遺物 埋土から中期中葉の土器が少量出土した。

所属時期 P 556出土土器(1340)及び出土土器の主体から、中期中葉船元Ⅱ式期と判断する。

S B42 (現場名 S B H 2、図版173・174、図版57)

位置 S 22・S 23・T 22・T 23 グリッドに位置する。

検出状況 IX a 層上面で検出した。S K3363・3367を切り、S K3365・3369に切られる。埋土は3層に分けられ、土層は水平に堆積する。

形状と規模 平面形は不整楕円形である。長径3.58m・短径2.91m・床面積推定8.16m²を測る。

壁・床面の状況 検出面から床面までの最大の深さは約15cmを測り、壁はわずかに立ち上がる。明確な貼床や硬化面は確認できずIX a 層上面で遺構を検出したため、検出面は凹凸が著しく竪穴の掘形に達した可能性がある。床面は中央がやや窪む。

施設 竪穴内部では、22基の遺構を検出した。柱穴は6基(P 579・580・581・585・589・593)が想定できる。P 585・589とP 579・580の中線を軸に、P 579・589・593とP 580・581・585が左右対称に位置する。なお、炉跡は検出されなかった。

出土遺物 埋土から中期中葉の土器が少量出土した。

所属時期 出土土器(1341)から、中期中葉船元Ⅲ式期と判断する。

2 炉跡

S F87 (図版57)

位置 T 28 グリッドに位置する。

形状と規模 S K3587を切る。平面形・規模共に不明である。

概要 IX a 層上面で検出した。遺構の東側半分程度を検出し、残る西側半分は調査区外に続くものの、調査区周辺に影響が及ぶため、完掘することができなかった。中央に扁平亜円錐を芯石とし、北東及

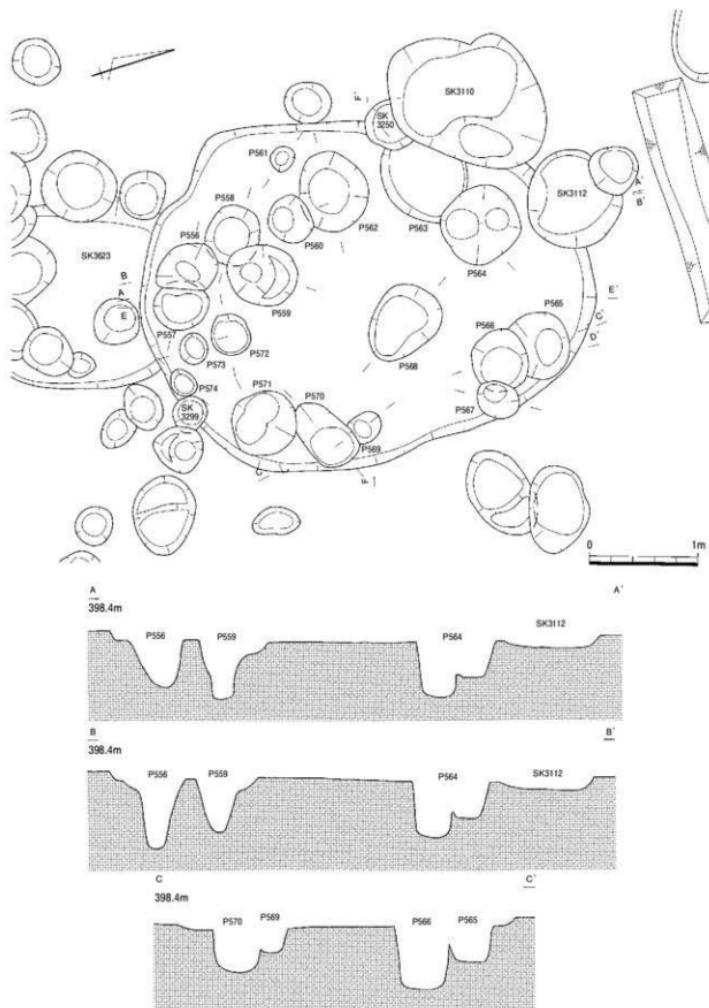


図171 SB41遺構図（1）

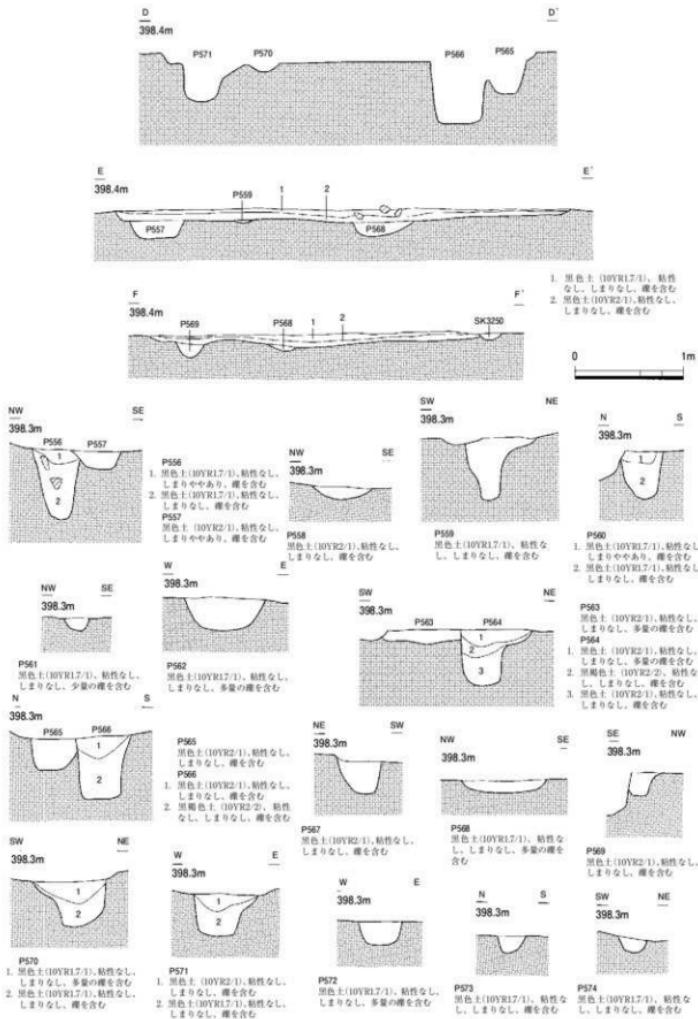


図172 SB41遺構図（2）

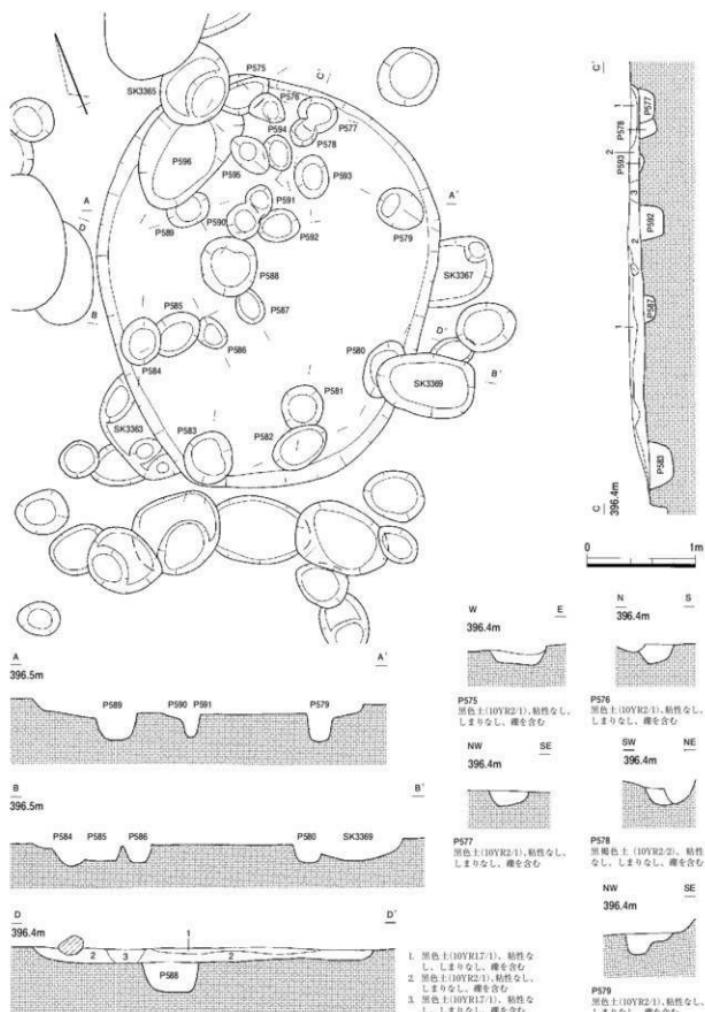


図173 SB42構造図（1）

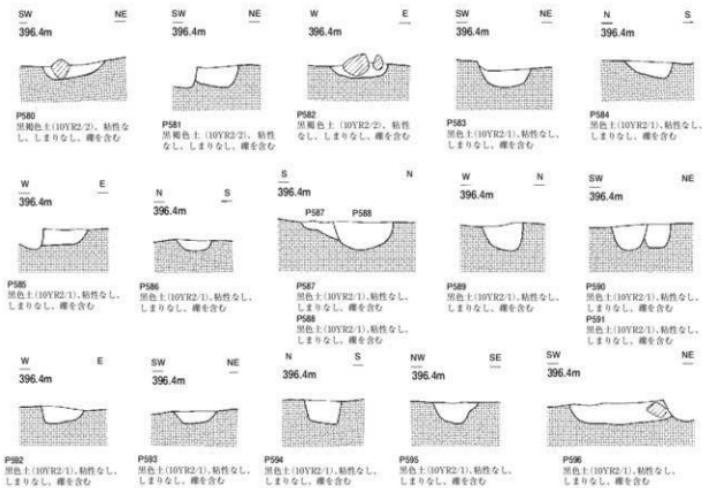


図174 SB42遺構図（2）

び南東に扁平亜円礫を小口立てとし、閉む。掘形内の埋め戻し土には、やや小振りな亜角礫を多数充填し、炉石を固定している。

出土遺物 墓土から石皿1点が出土した。

3 燃焼集積遺構

S 141 (図175、図版57)

位置 M10に位置する。

形状と規模 平面形は楕円形を呈し、長径2.05m・短径1.50m・深さ0.53mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。S K3187を切る。埋土2層で長径3~19cmの多量の角礫又は亜円礫が浮上し、掘形の中央北寄りの埋土1層で黒色土を主体として長径8~37cmの多数の円礫又は亜円礫が出土した。2層の礫にはその多くに被熱の痕跡が認められたが、1層の礫では認められなかった。掘形中央の底面で窪みが検出され、この窪みの内部では礫をほとんど含まない黒褐色土が堆積し、壁面で被熱の痕跡が認められた。のことから、当遺構はいわゆる「被覆型集石遺構」である。

出土遺物 墓土から炭化物が少量出土した。土器が出土しなかったため、2層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（第2分冊第6章第7節参照）を行った。

S 142 (図177、図版58)

位置 R18に位置する。

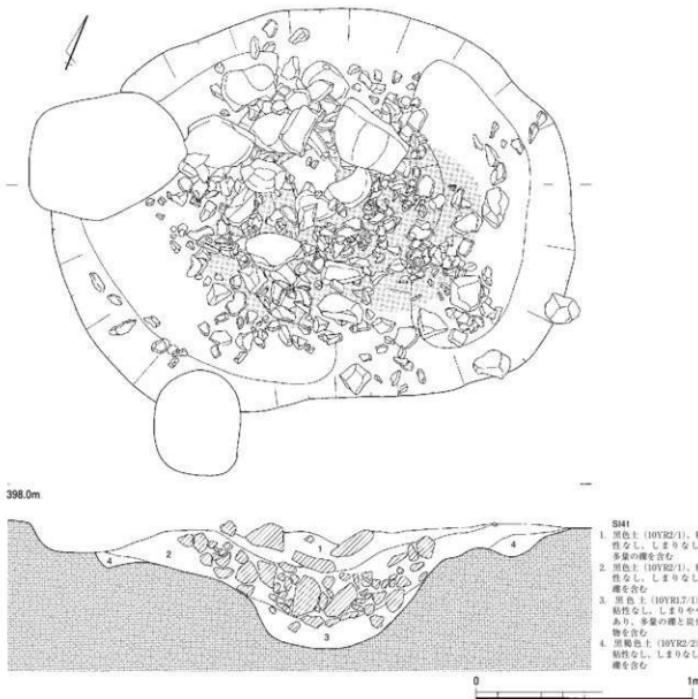


図175 SI41遺構図

形状と規模 平面形は不整梢円形を呈し、長径1.41m・短径1.15m・深さ0.45mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、長径2~16cmの多数の亜角礫が浮上する。ただし礫の密度は比較的少ない。多くの礫に被熱の痕跡が認められたが、土坑内壁面に被熱の痕跡や焼土は認められなかった。このことから、当遺構はいわゆる「被覆型集石遺構」である。

出土遺物 埋土からR F 1点・少量の炭化物が出土した。

4 土坑

S K 3005 (図176、図版58)

位置 L 8 グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整梢円形を呈し、長径1.08m・短径0.87m・深さ0.3mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。重複遺構はない。埋土下部で長径1~18cmの多量の角礫又は亜角礫が

浮上し、埋土の最上部で長径8~40cmの多数の円碟又は亜円碟を置く（土坑D 1 b類）。碟の一部の碟に被熱の痕跡が認められたが、土坑の底面・壁面では被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 埋土から早期後葉の土器（1343）が出土した。

S K3006 (図176、図版58)

位置 S 18グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形を呈し、長径0.87m・短径0.77m・深さ0.24mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部で、長径1~13cmの多数の亜角碟が浮上する（土坑D 2 b類）。ただし碟の密度は少ない。碟の一部に被熱の痕跡が認められたが、土坑の底面・壁面では被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 なし。

S K3110 (図176、図版58)

位置 L 6グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不定形である。長径1.14m・短径0.83m・深さ0.25mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。S B41・S K3250を切る。土坑中央東寄りと南西端の埋土上部に、長径10~42cmの亜角碟が浮上する（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

S K3170 (図177、図版58)

位置 M 8・M 9グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は円形である。長径0.97m・短径0.87m・深さ0.34mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。重複遺構はない。埋土上部に長径11~37cmの亜角碟が浮上する。ただしこのうちの北端の碟は、長手立ての可能性がある（土坑D 1 b類）。

出土遺物 埋土から中期後葉の土器（1344）・打欠石錘1点が出土した。

S K3464 (図177)

位置 T28・U28グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は不整円形である。長径0.65m・短径0.57m以上・深さ0.36mを測る。

概要 IX a層上面で検出した。重複遺構はない。土坑中央南寄りの埋土上部に、亜角碟1個（長径20cm・短径17cm・厚さ7cm）を長手立てとする（土坑D 2 c類）。

出土遺物 なし。

5 遺物集積

S U 5 (図版58)

位置 T28グリッドに位置する。

形状と規模 検出面・規模共に不明である。

概要 IV層又はV a層を掘削中に出土し、掘形が検出されなかつたため、遺物集積と判断した。ただし少なくとも底部から胴部上半までが、元の器形に近い状態で出土した点から、埋位が斜位の埋設土器である可能性も残る。

出土遺物 後期末~晩期後葉の土器（1346）が出土した。

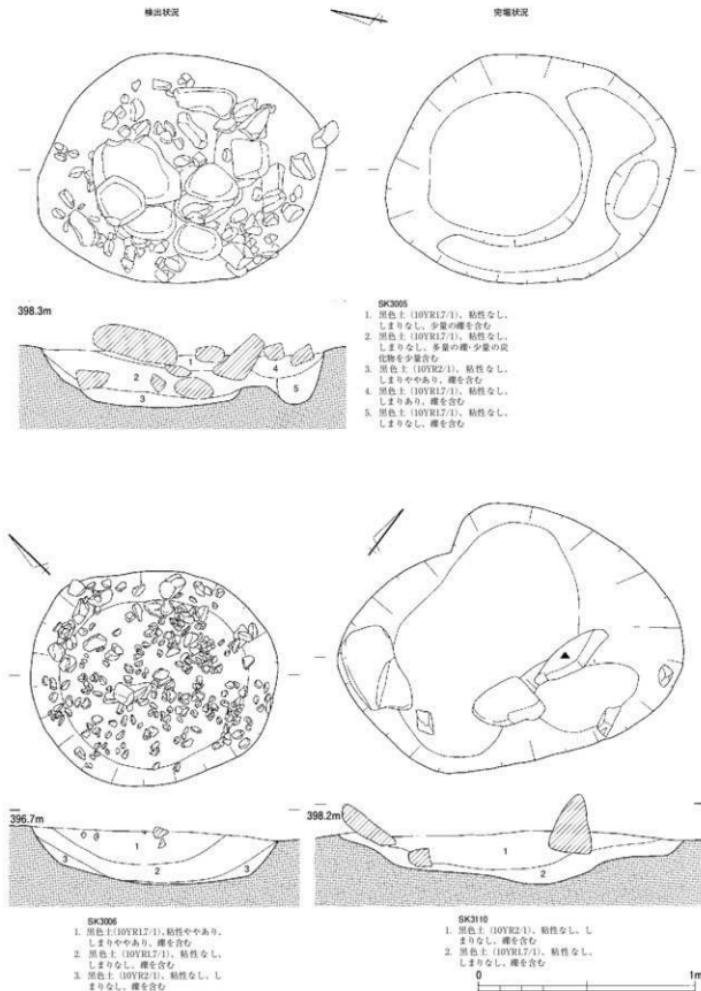


図176 第6調査面検出構造図（1）

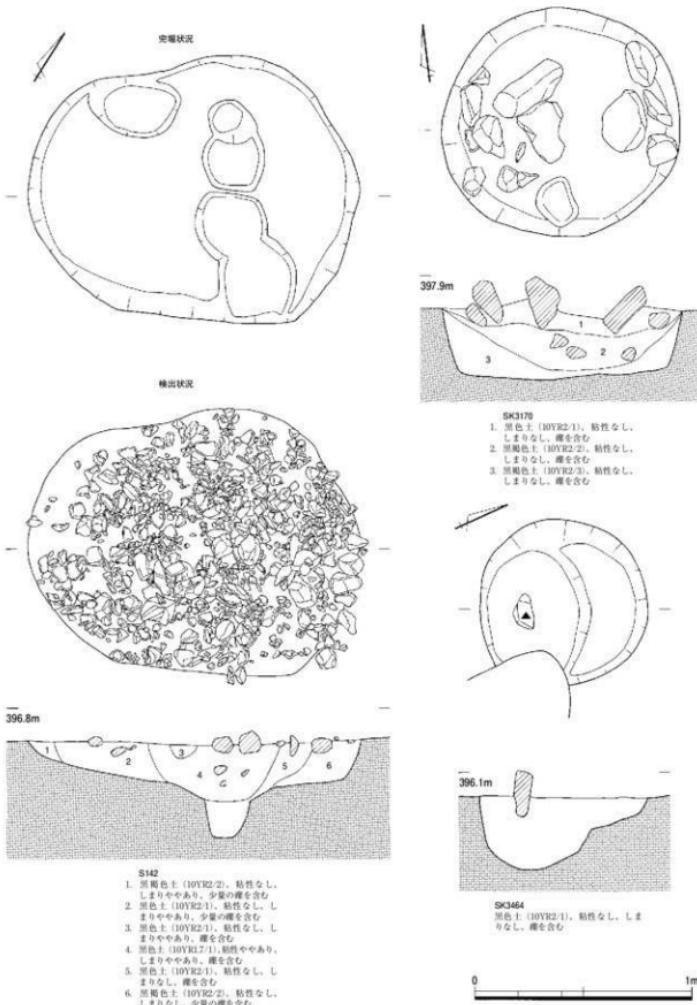


図177 第6調査面検出遺構図（2）

調査区全体図分割図

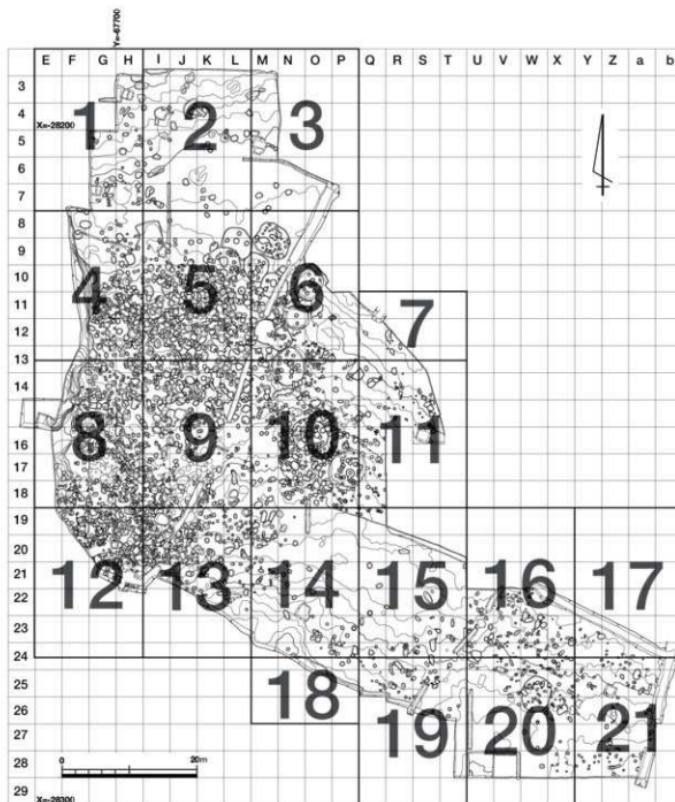


図178 第3B調査面調査区全体図（割付図）

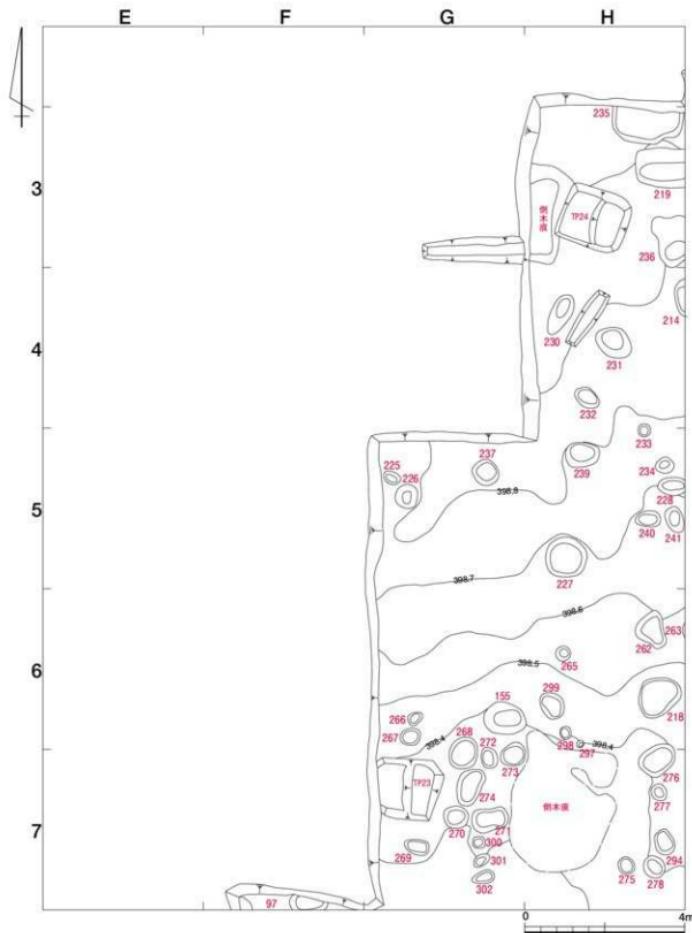


図179 第3B調査面調査区分割図（1）

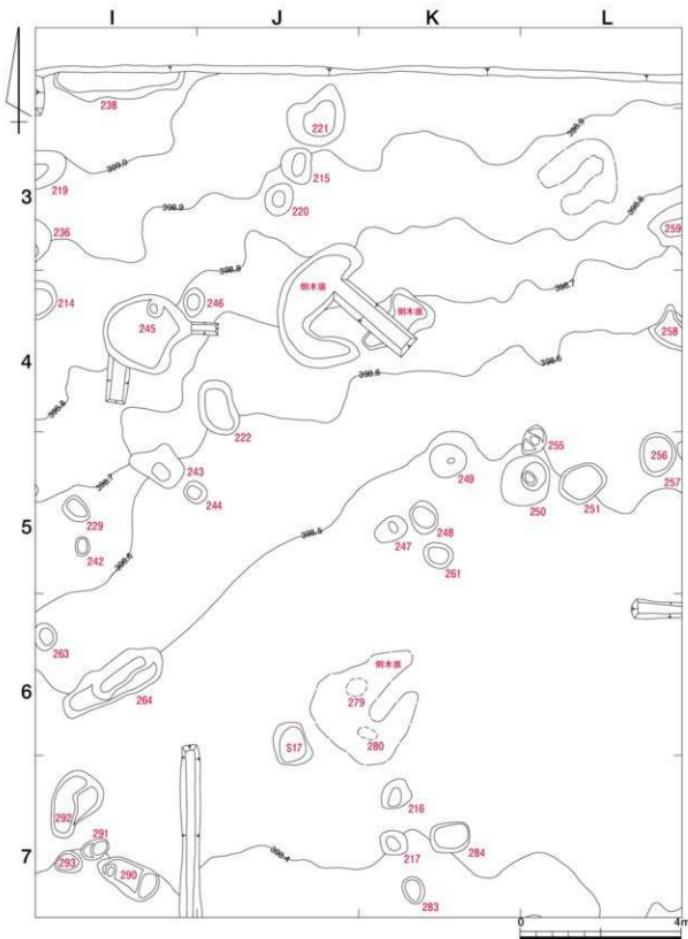


図180 第3B調査面調査区分割図(2)

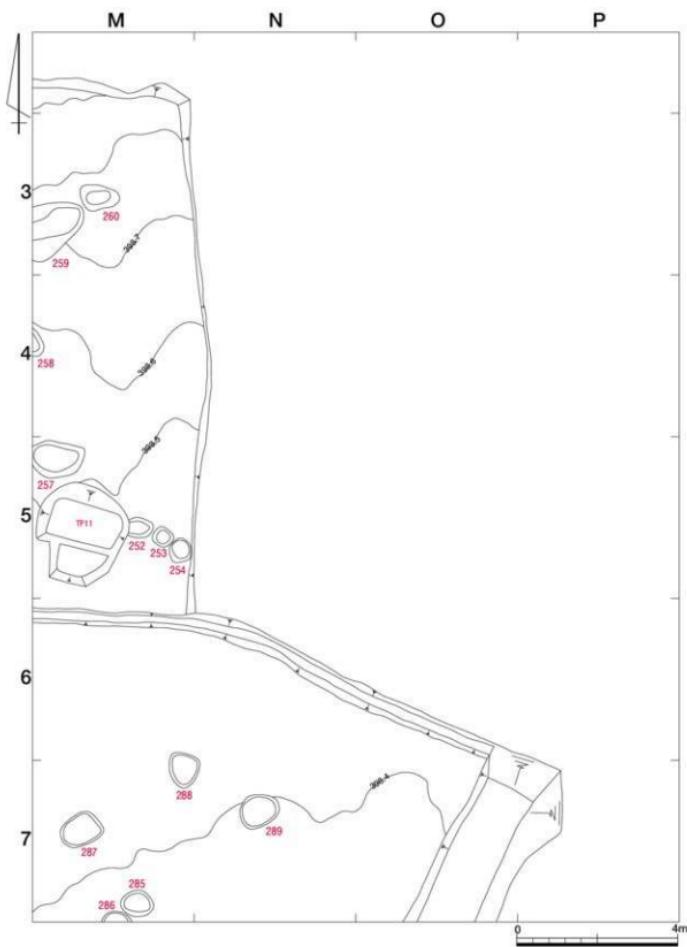


図181 第3B調査面調査区分割図（3）

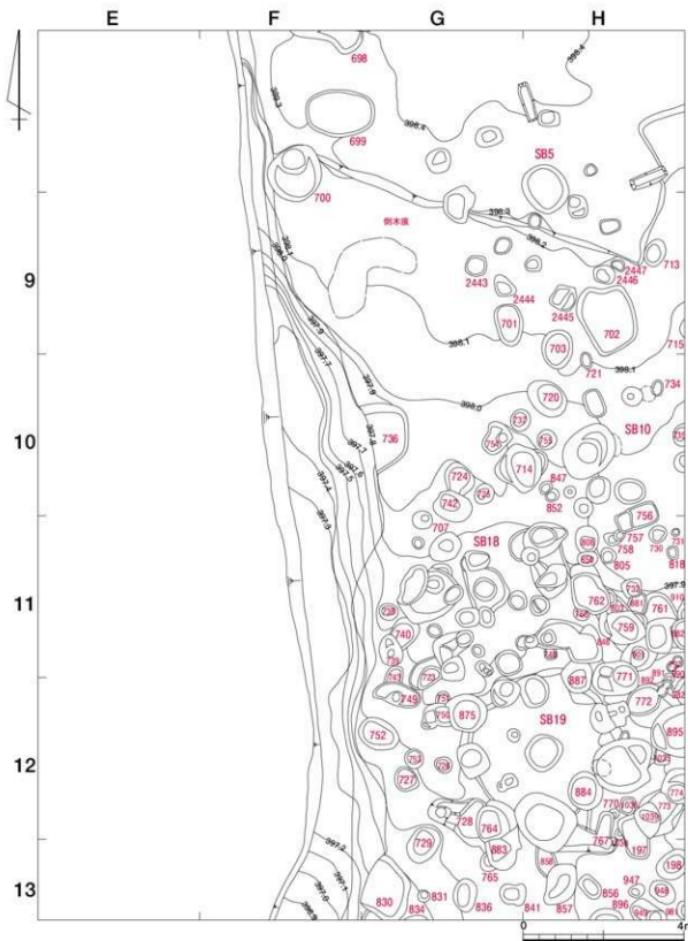


図182 第3B調査面調査区分割図(4)

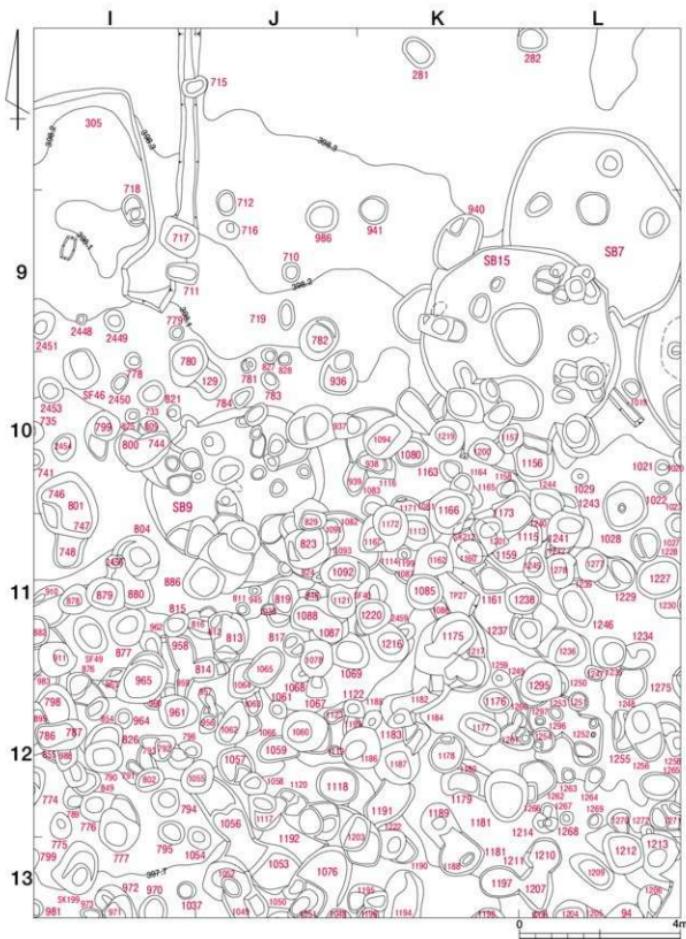


図183 第3B調査面調査区分割図(5)

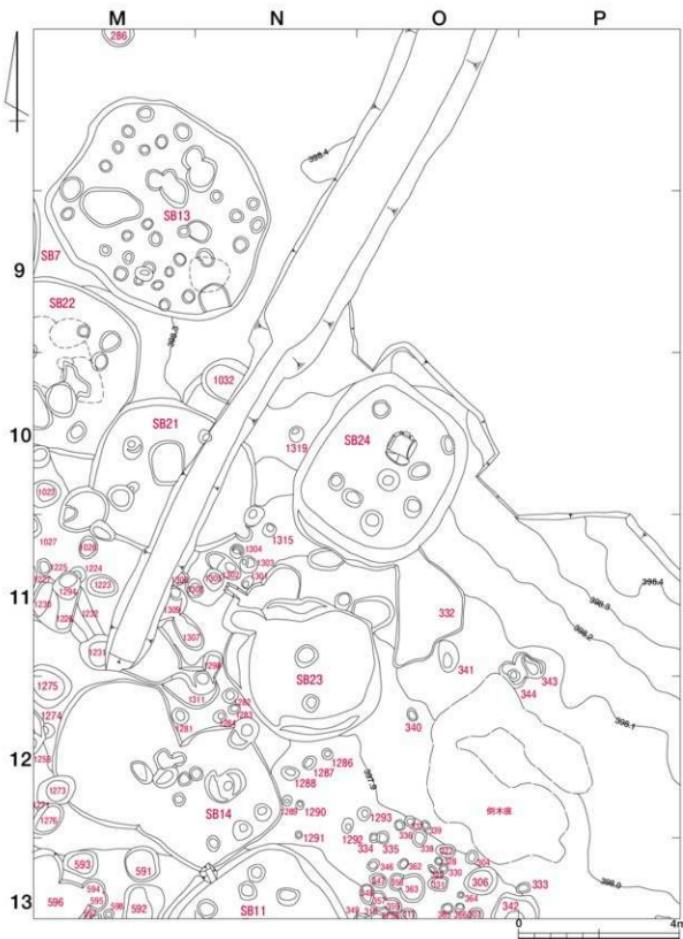


図184 第3B調査面調査区分割図（6）

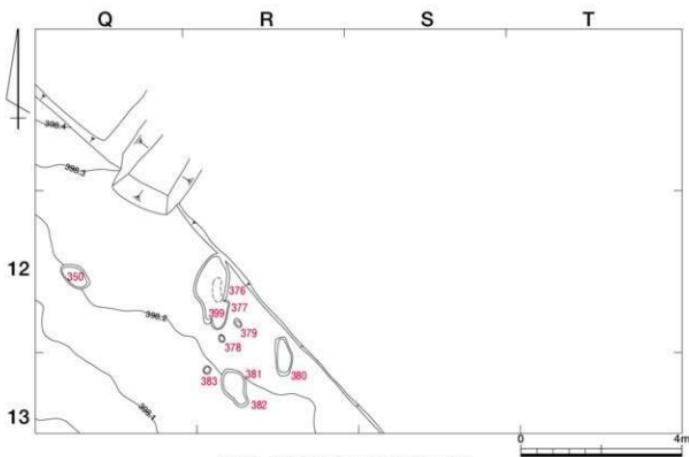


図185 第3B調査面調査区分割図(7)

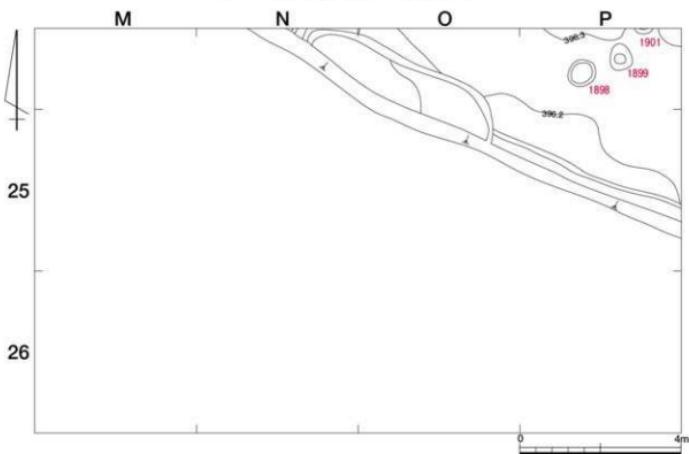


図186 第3B調査面調査区分割図(18)

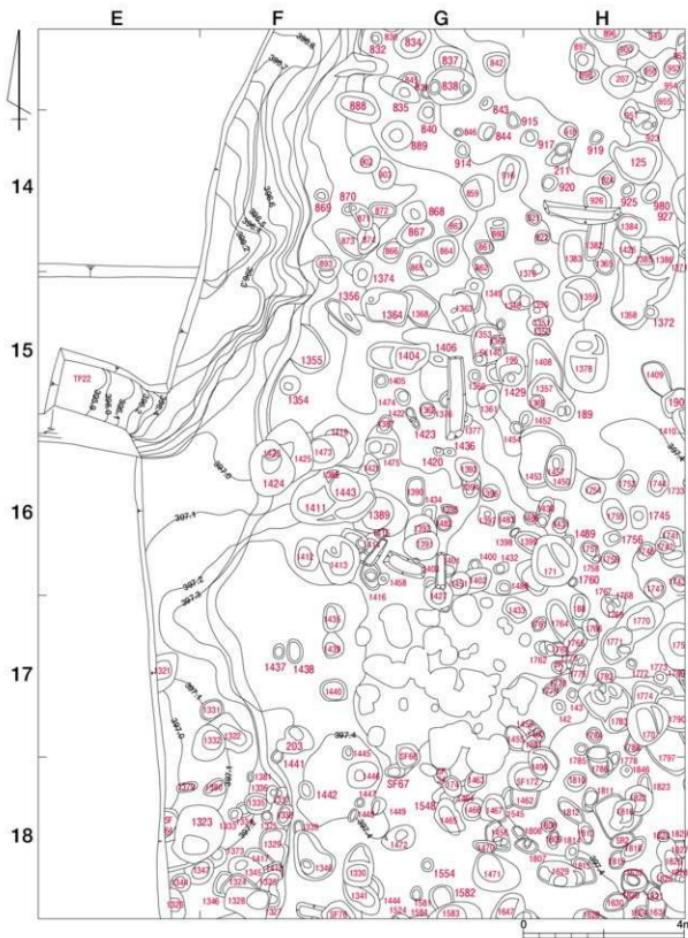


図187 第3B調査面調査区分割図(8)

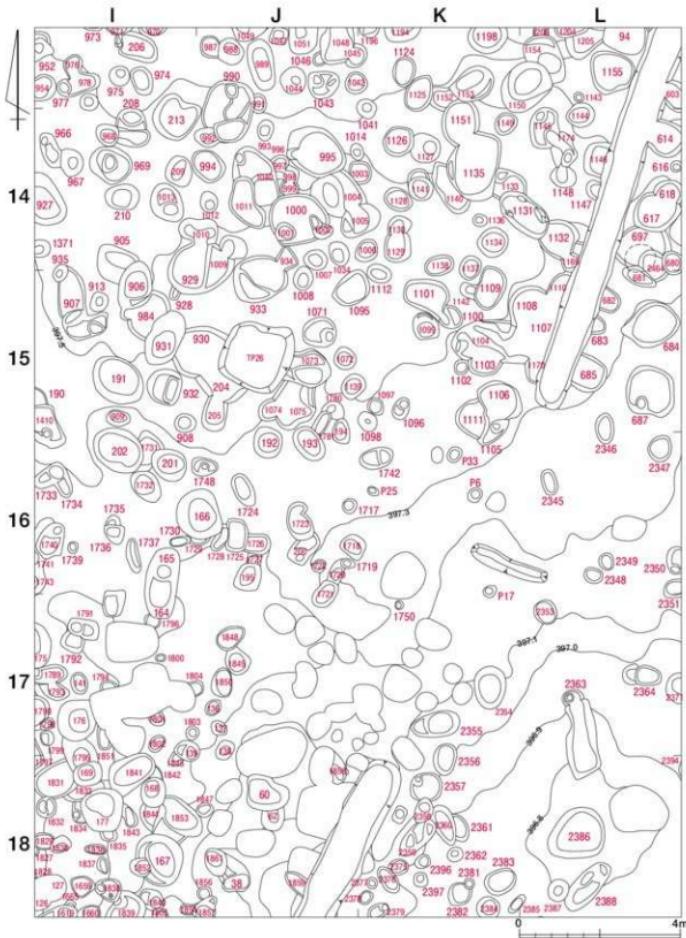


図188 第3B調査面調査区分割図(9)

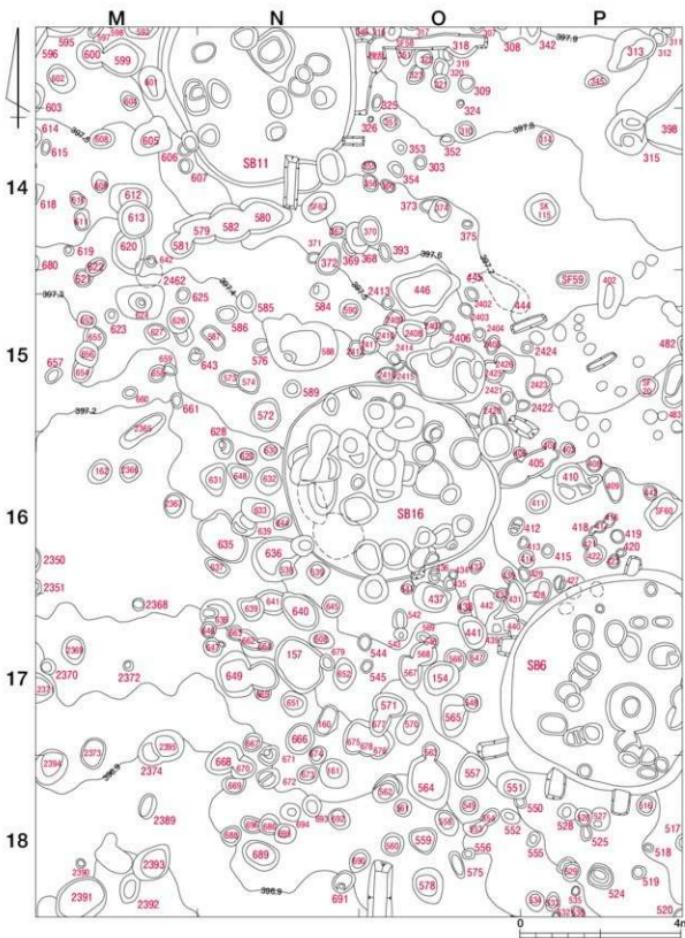


図189 第3B調査面調査区分割図(10)

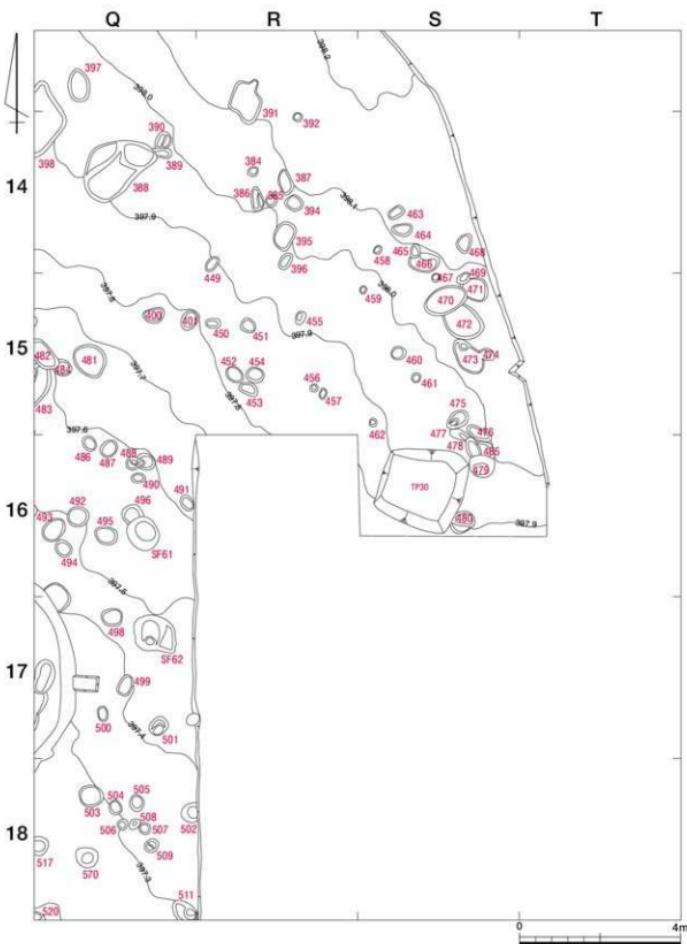


図190 第3B調査面調査区分割図(11)

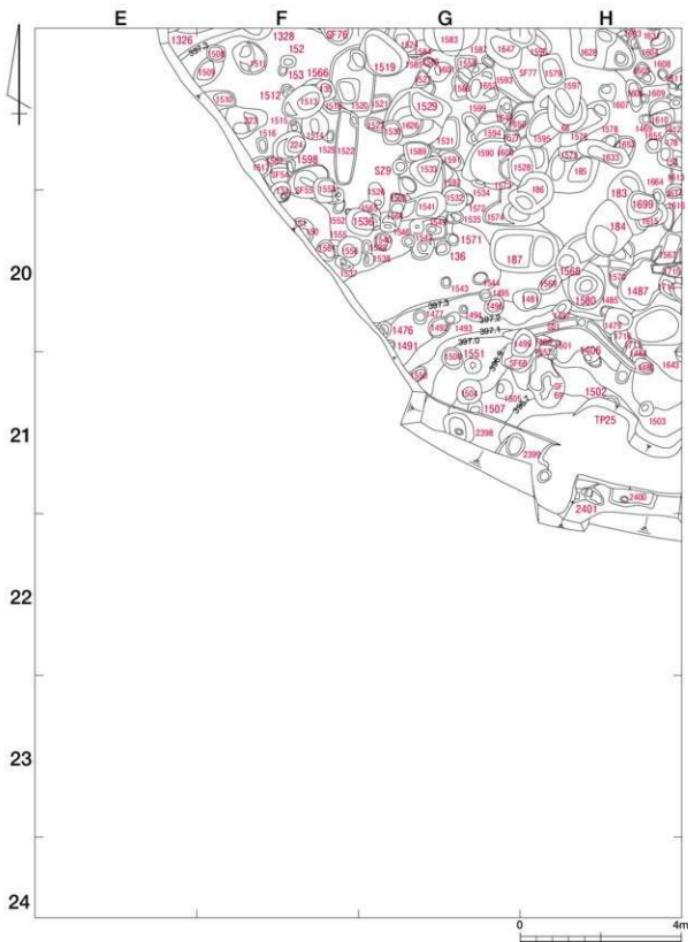


図191 第3B調査面調査区分割図(12)

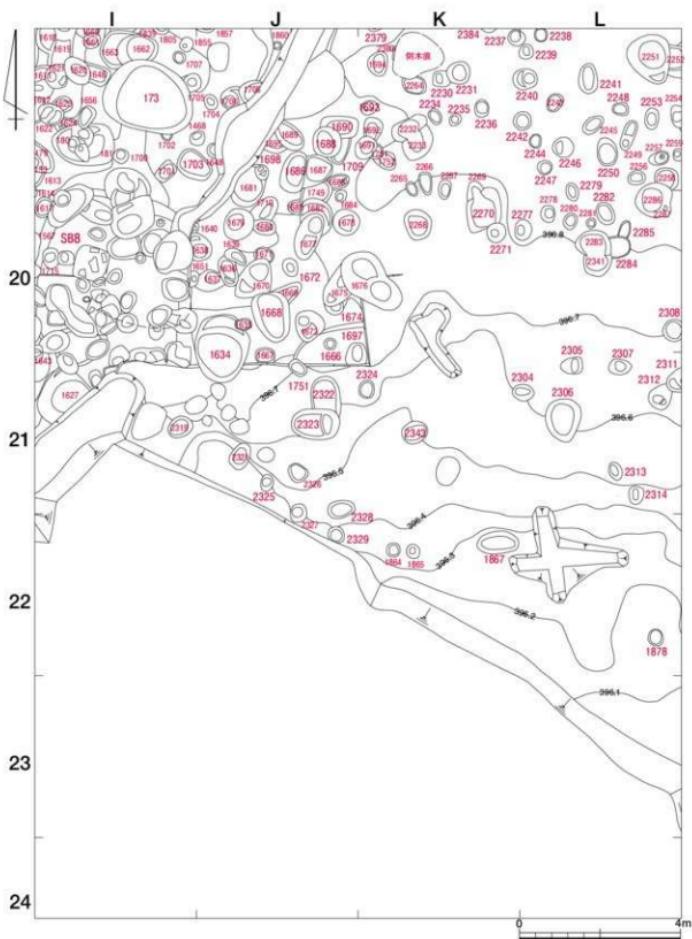


図192 第3B調査面調査区分割図(13)

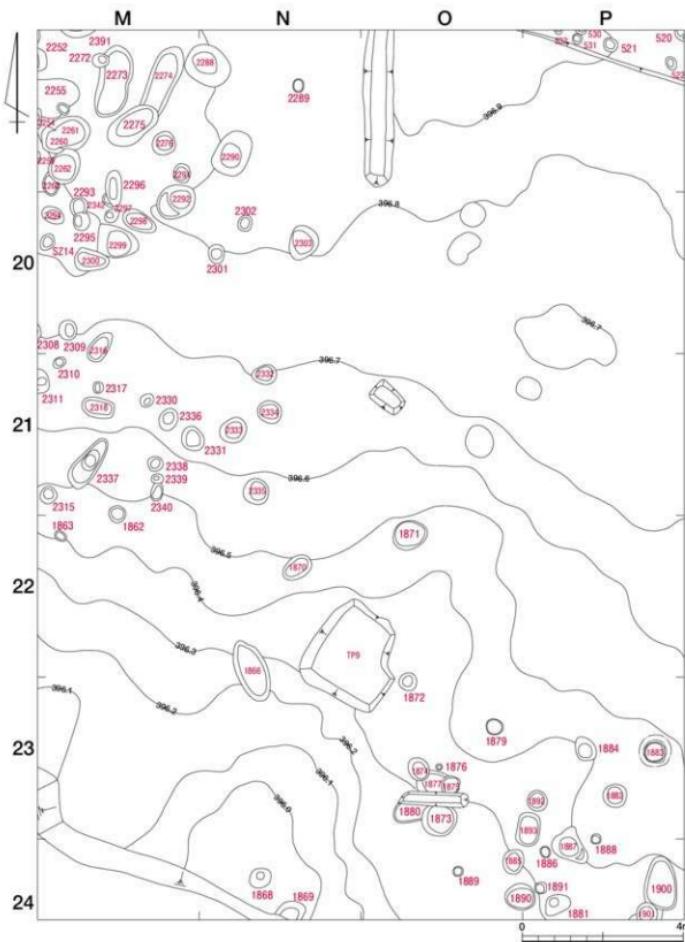


図193 第3B調査面調査区分割図(14)

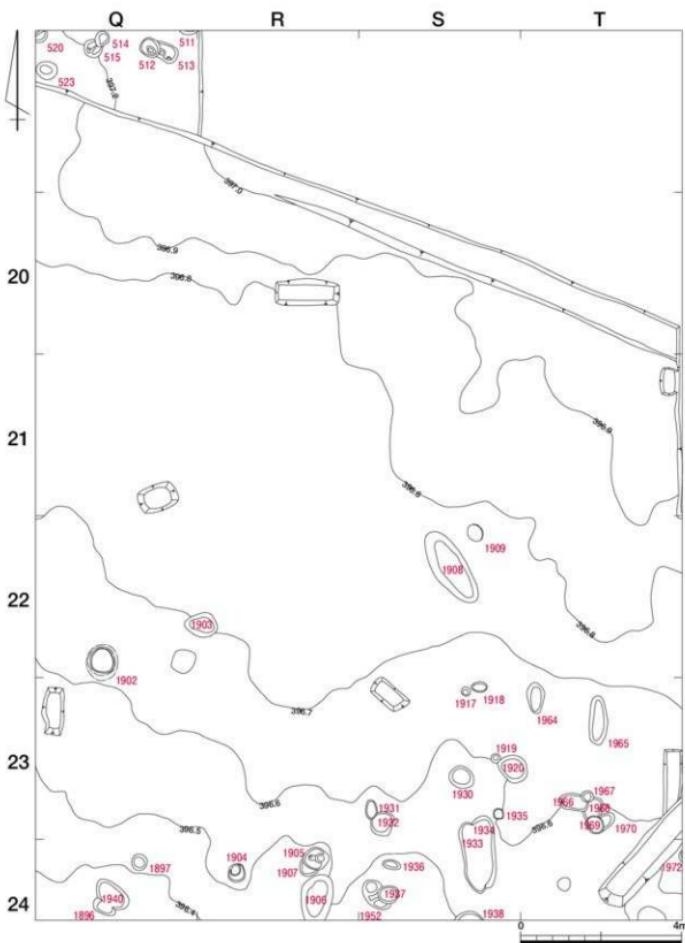


図194 第3B調査面調査区分割図(15)

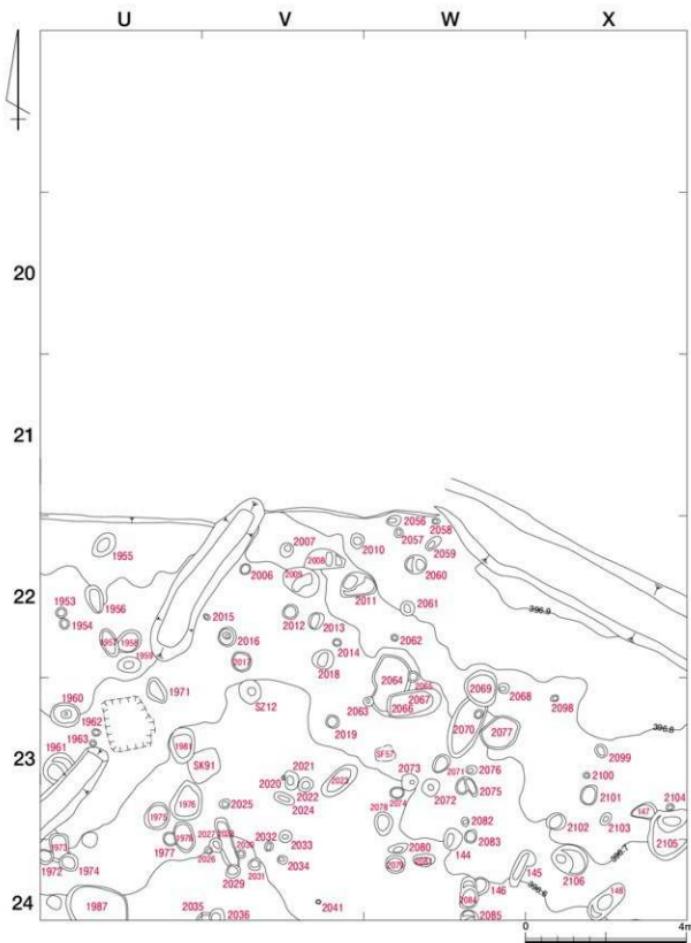


図195 第3B調査面調査区分割図(16)

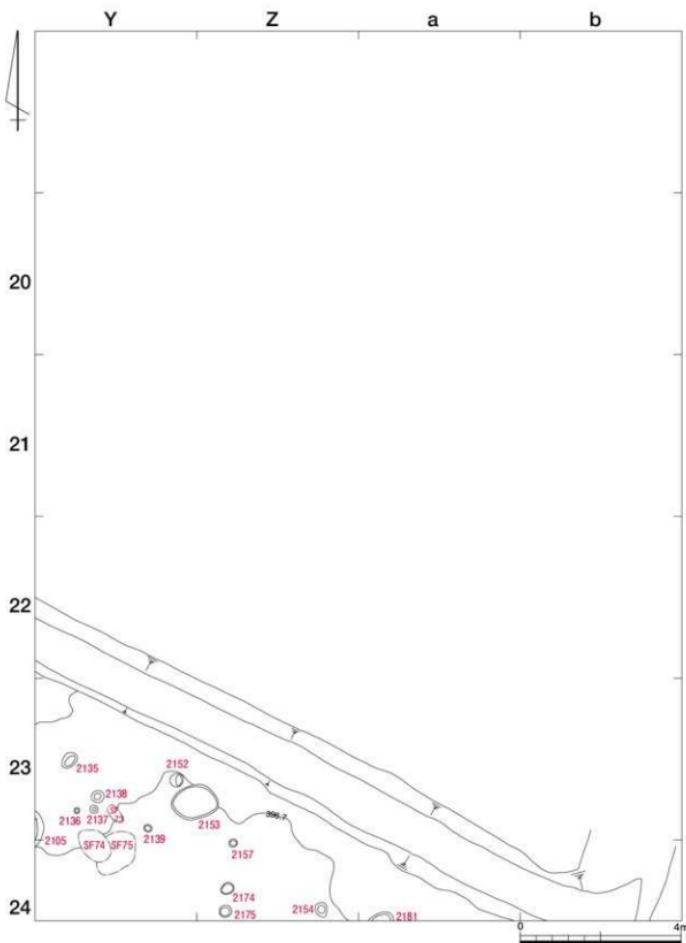


図196 第3B 調査面調査区分割図 (17)

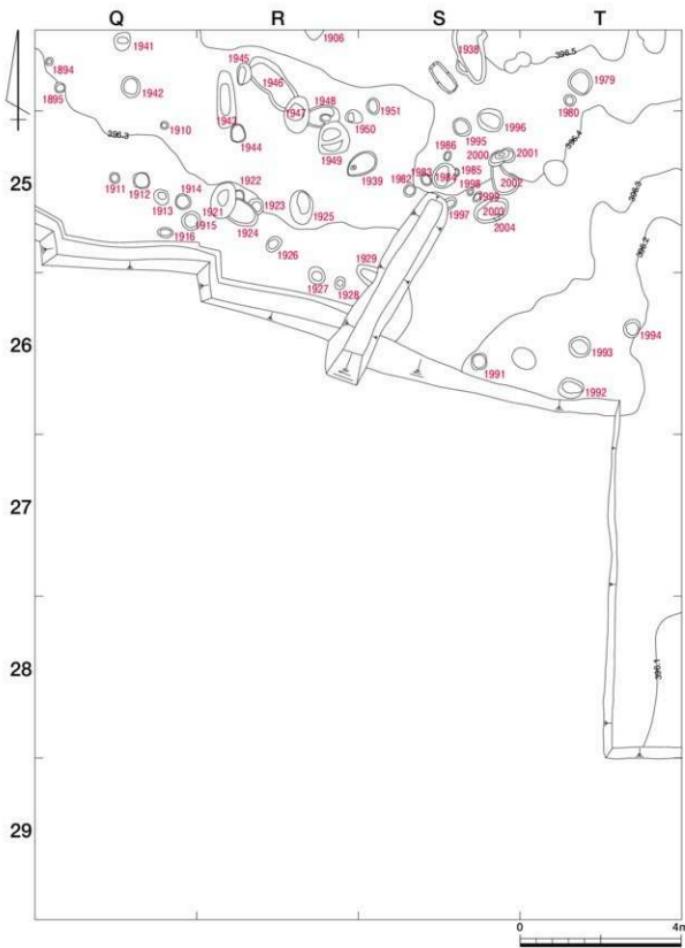


図197 第3B調査面調査区分割図(19)

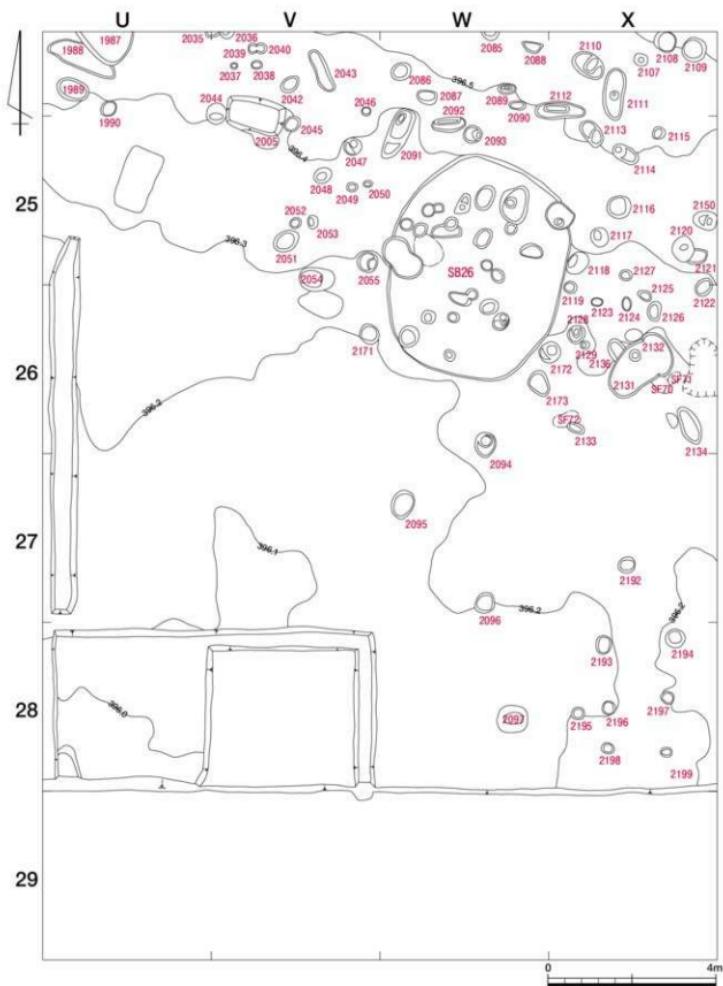


図198 第3B調査面調査区分割図（20）

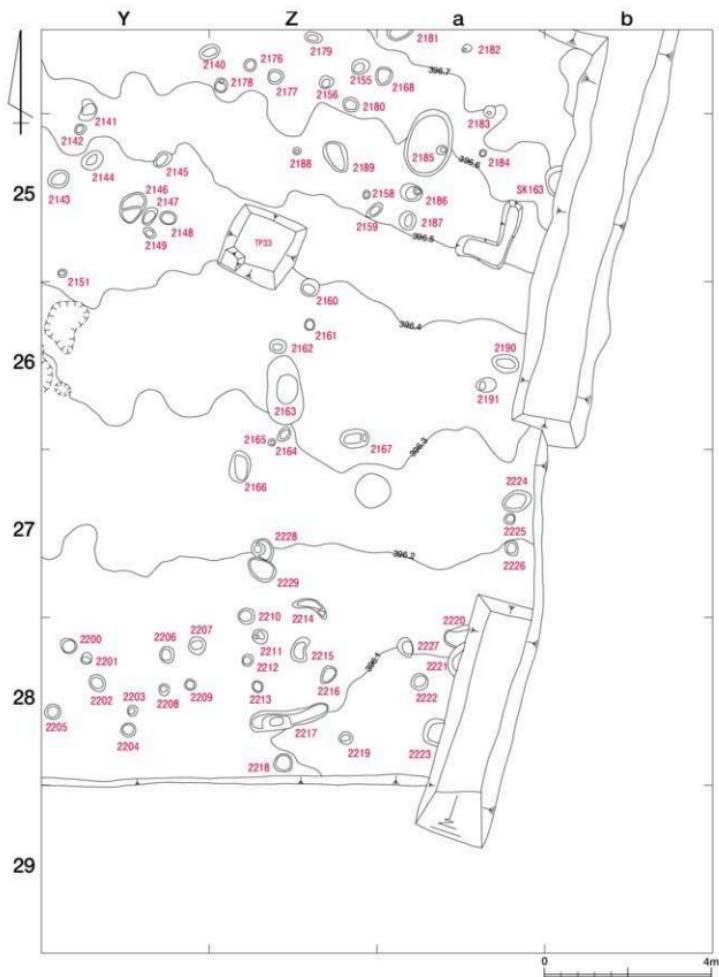


図199 第3B調査面調査区分割図(21)

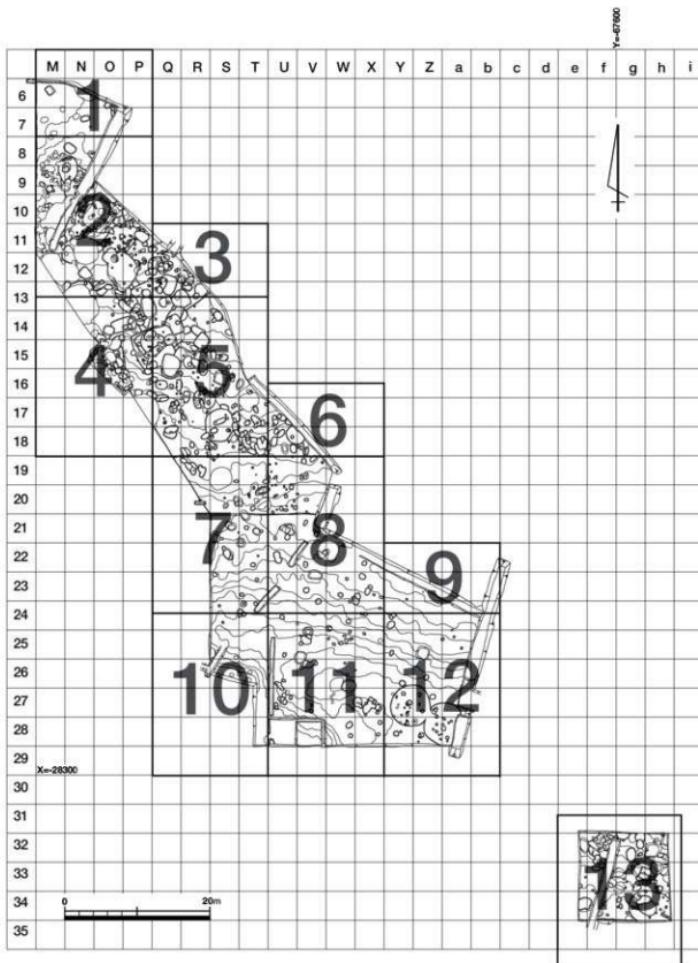


図200 第4・第5調査面調査区全体図（割付図）

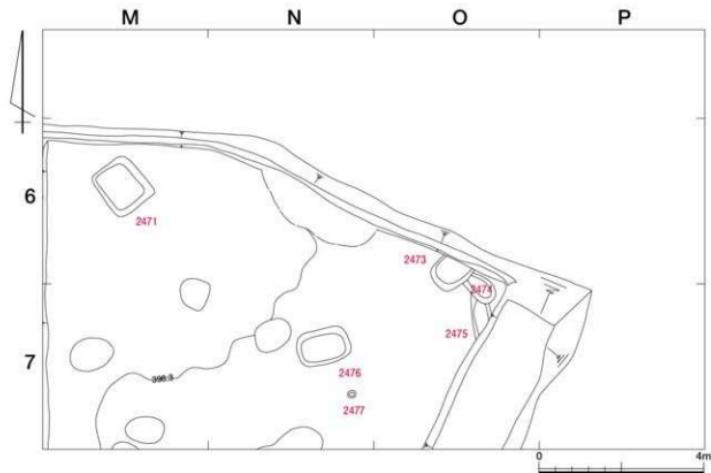


図201 第4・第5調査面調査区割付図（1）

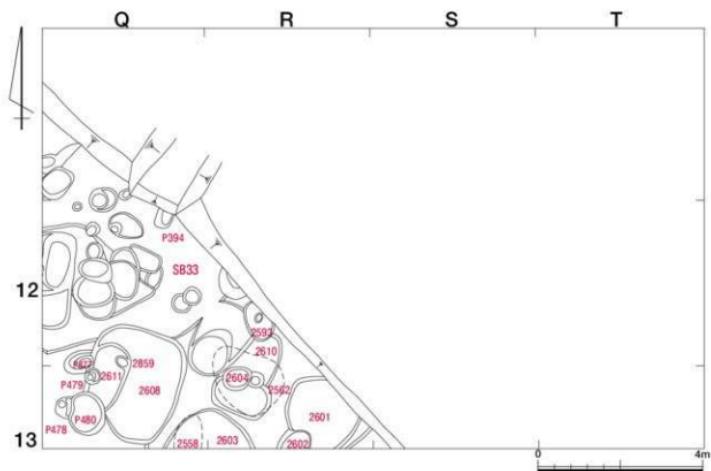


図202 第4・第5調査面調査区割付図（3）

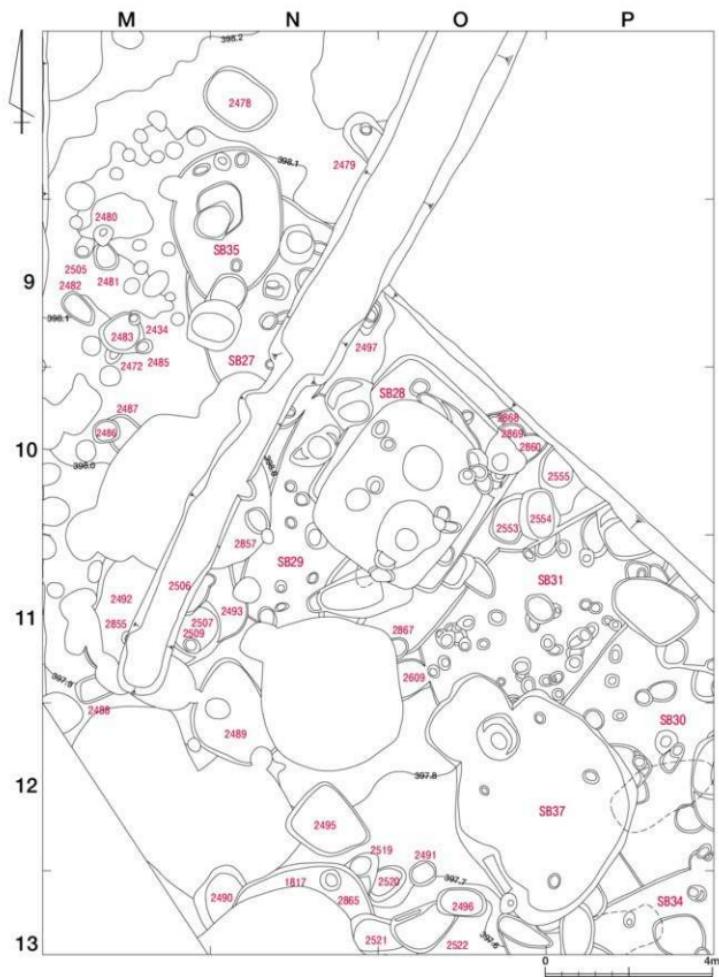


図203 第4・第5調査面調査区分割図（2）

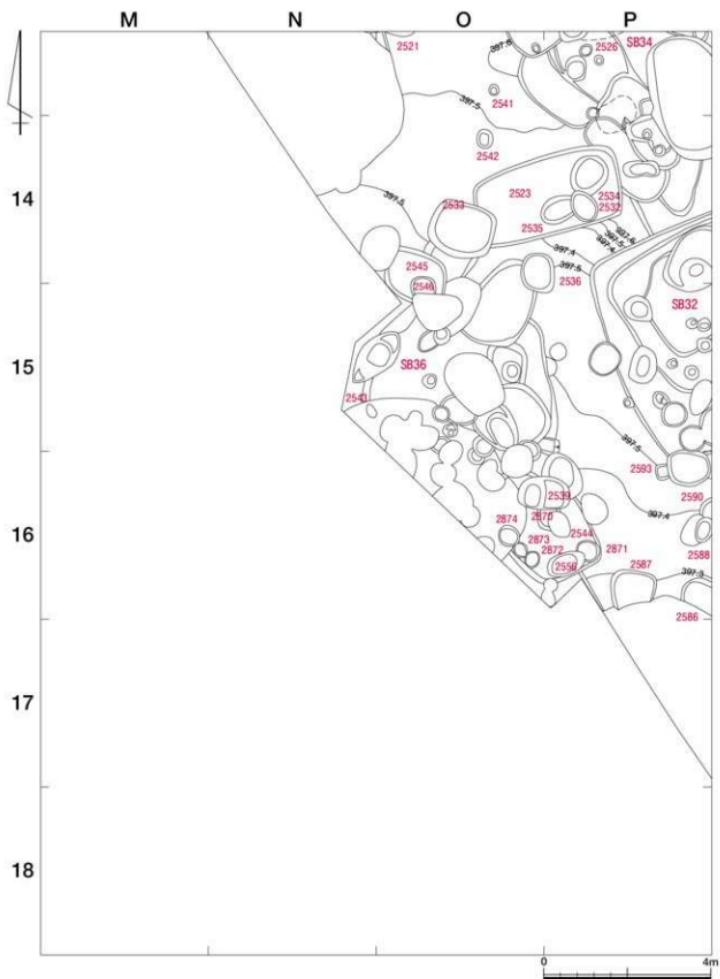


図204 第4・第5調査面調査区分割図(4)

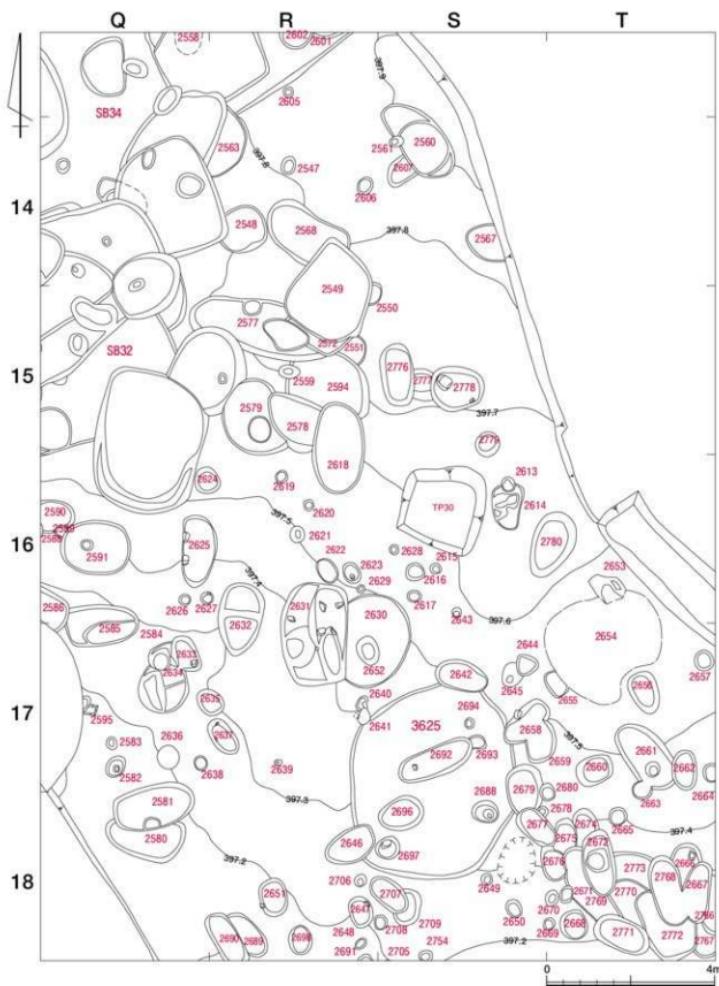


図205 第4・第5調査面調査区分割図(5)

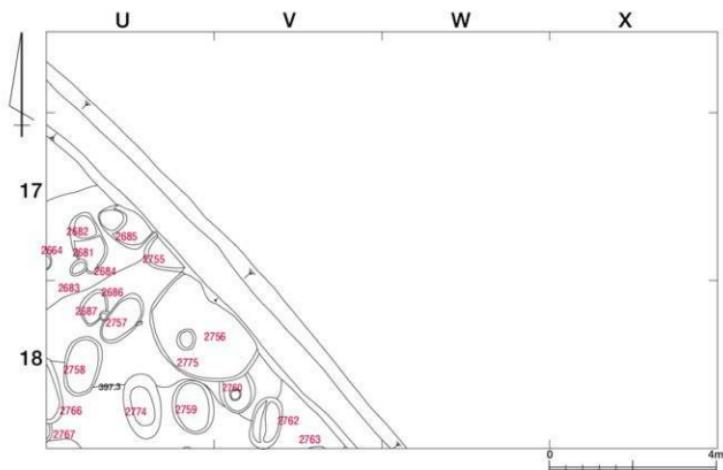


図206 第4・第5調査面調査区分割図（6）

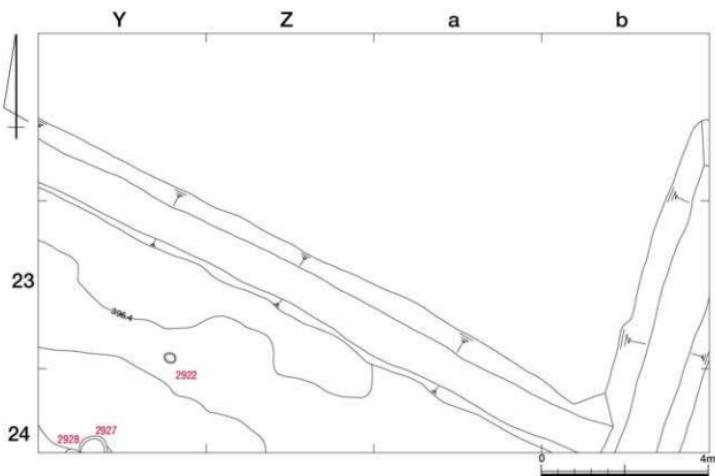


図207 第4・第5調査面調査区分割図（9）

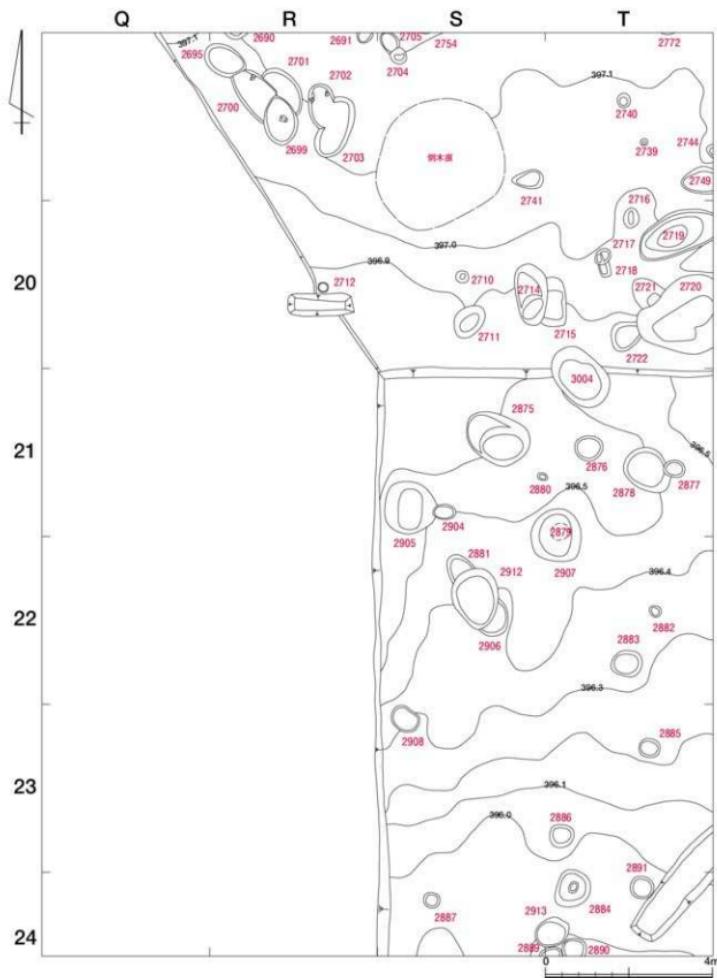


図208 第4・第5調査面調査区分割図(7)

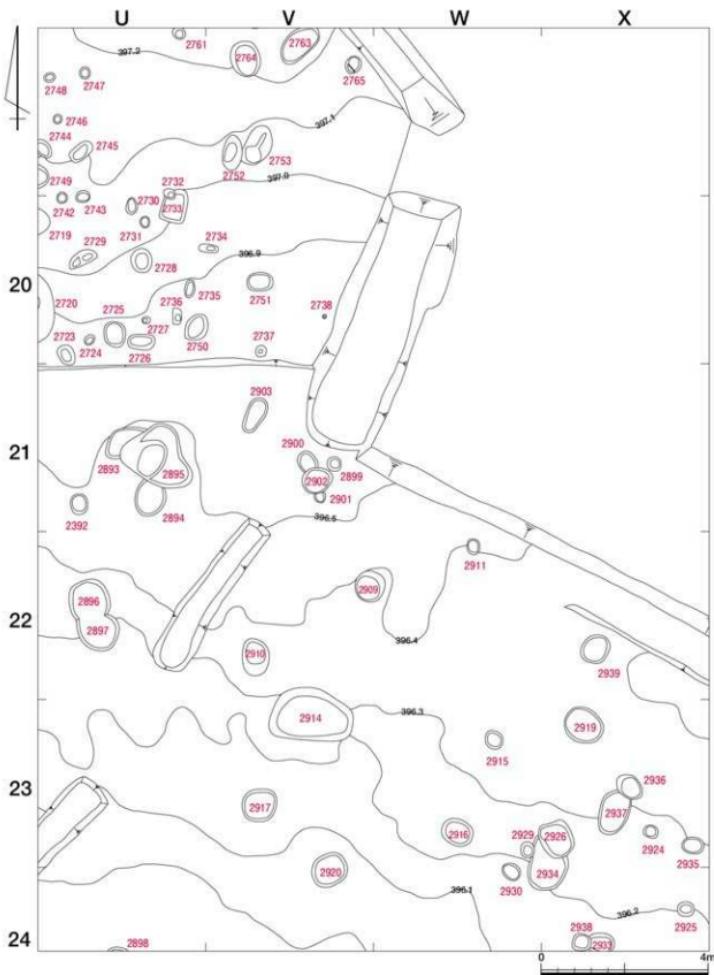


図209 第4・第5調査面調査区分割図(8)

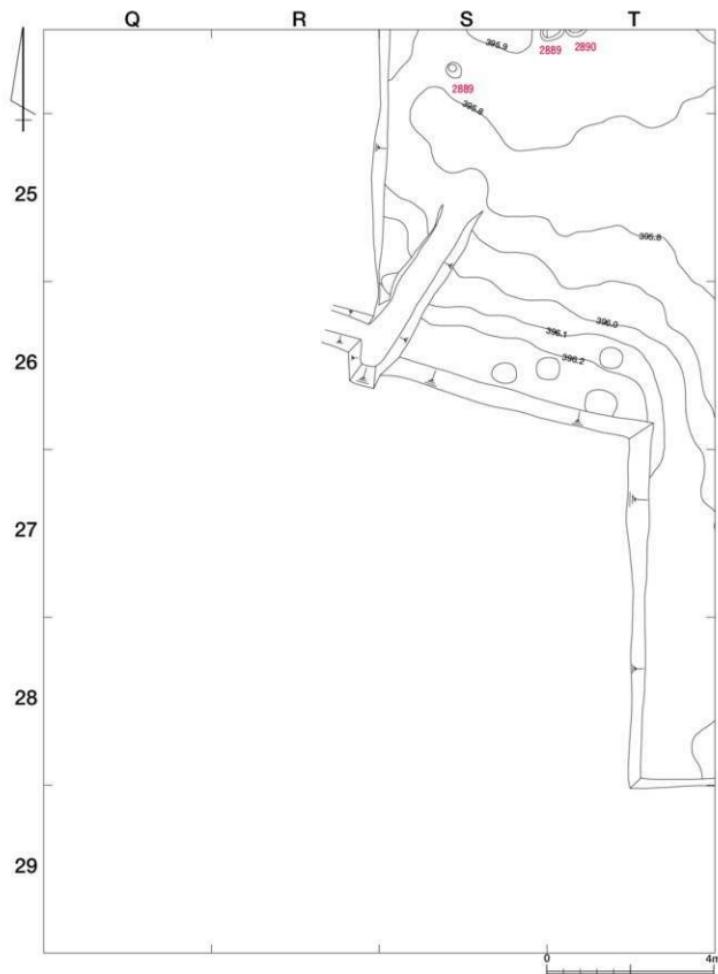


図210 第4・第5調査面調査区分割図(10)

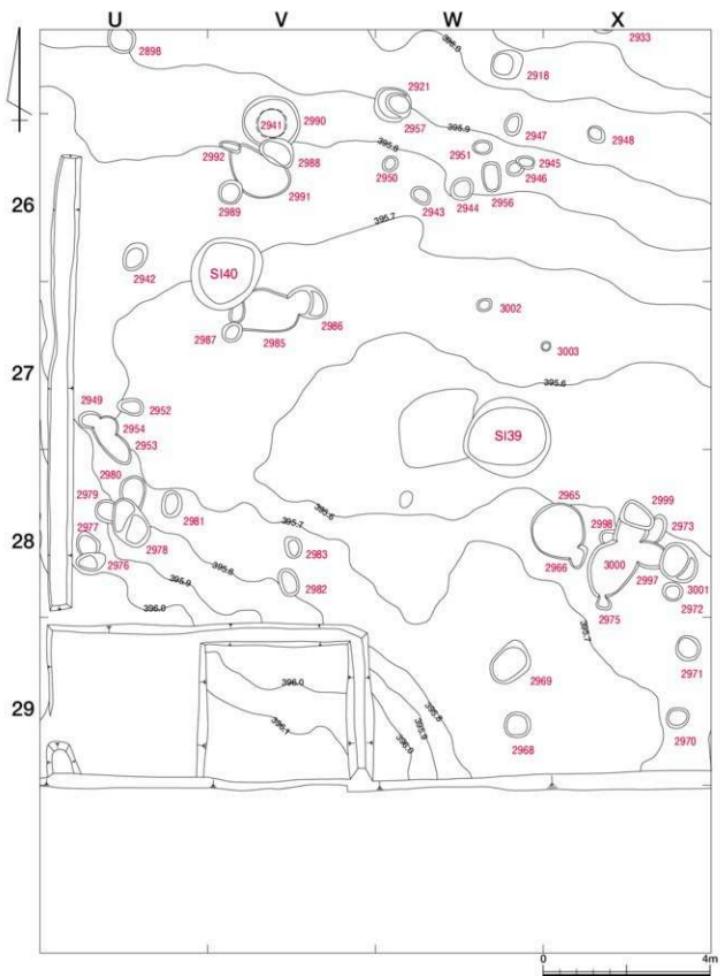


図211 第4・第5調査面調査区分割図(11)

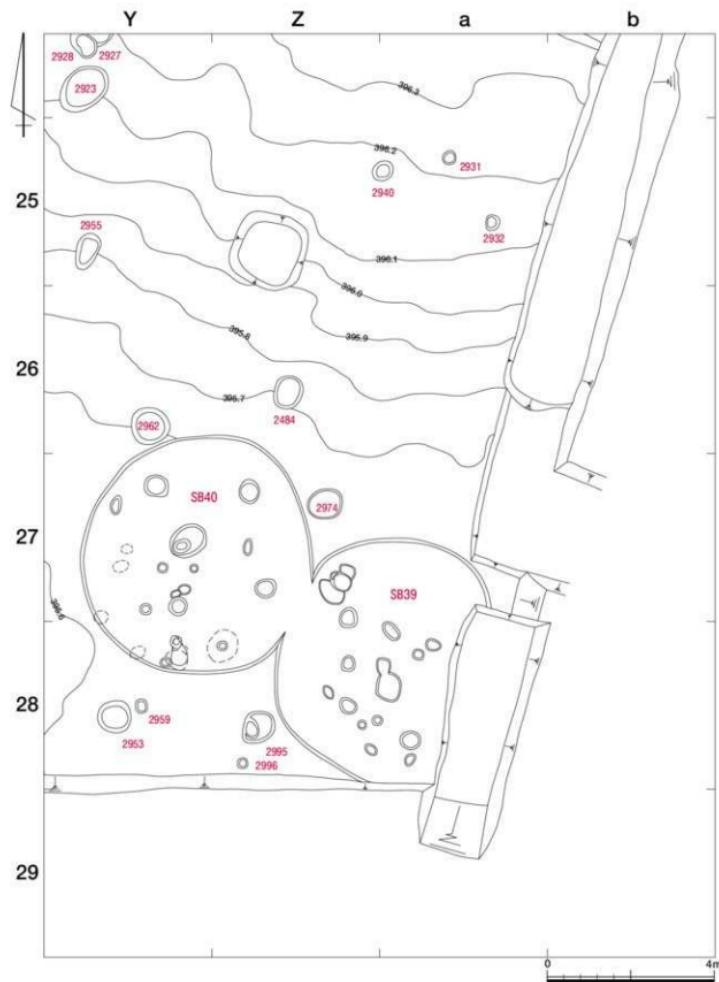


図212 第4・第5調査面調査区分割図(12)

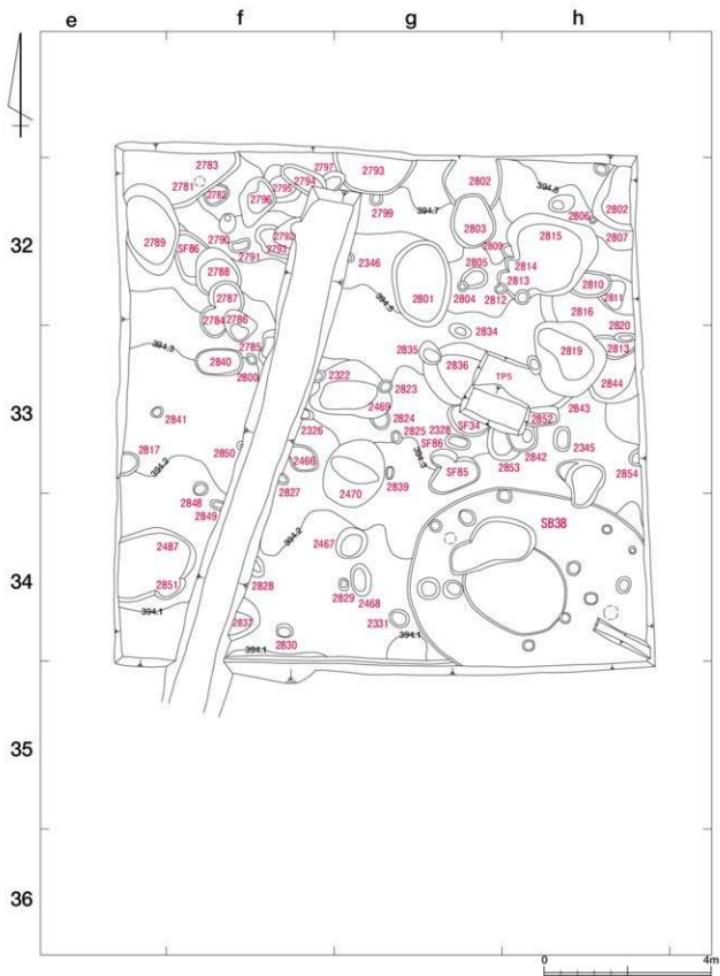


図213 第4・第5調査面調査区分割図(13)

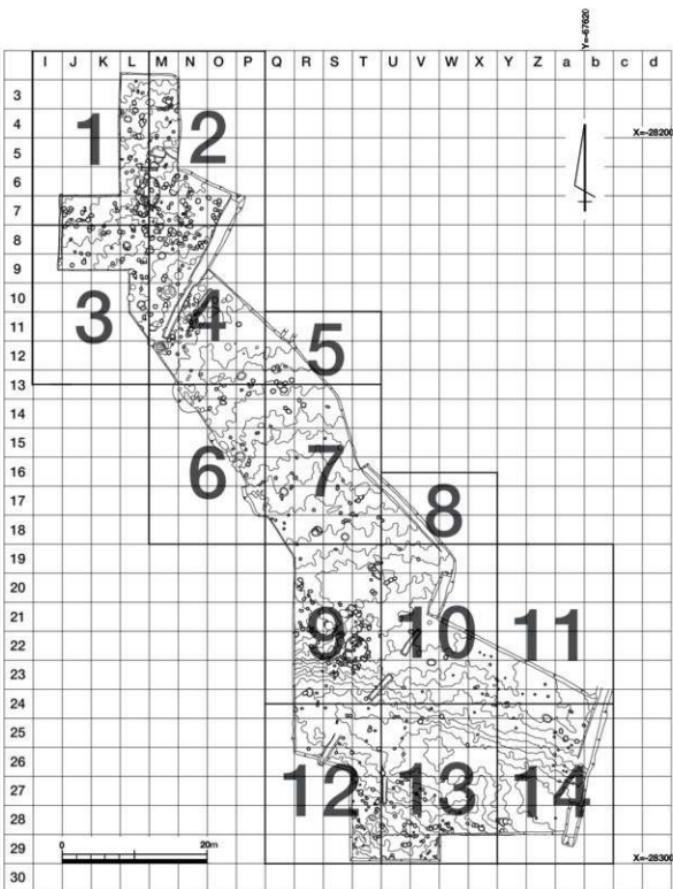


図214 第6調査面調査区全体図(割付図)

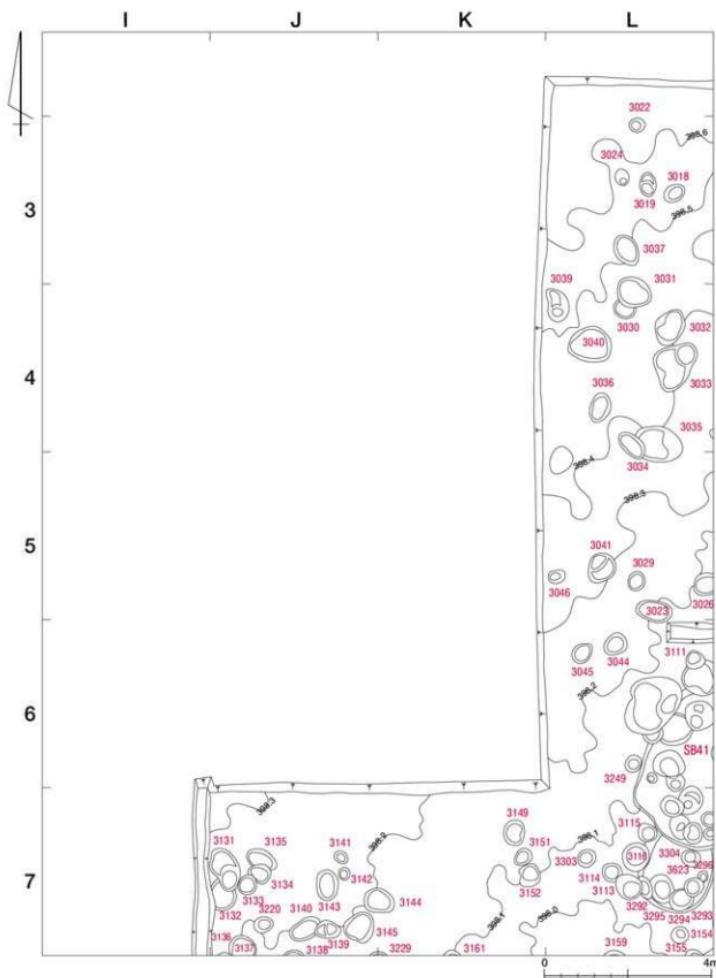


図215 第6調査面調査区割付図(1)

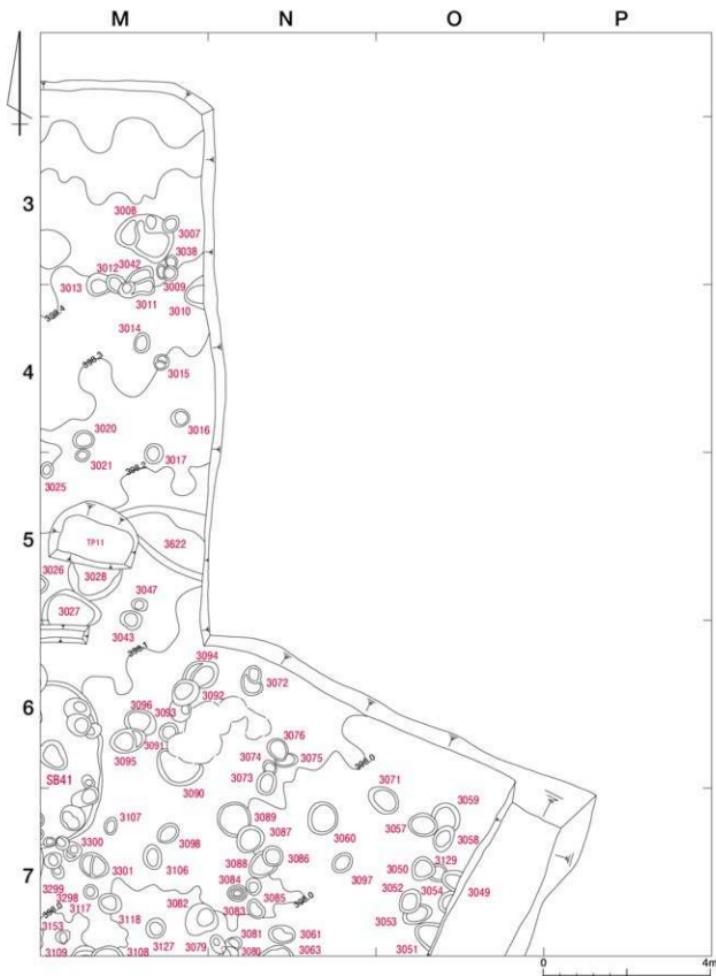


図216 第6調査面調査区分割図（2）



図217 第6調査面調査区分割図（3）

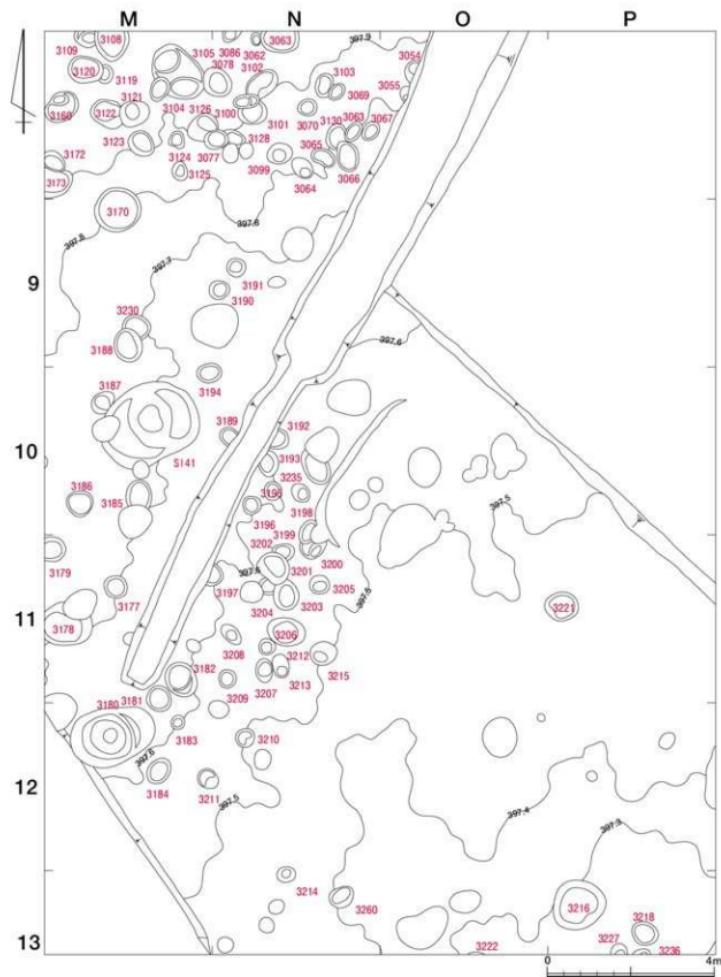


図218 第6調査面調査区分割図（4）

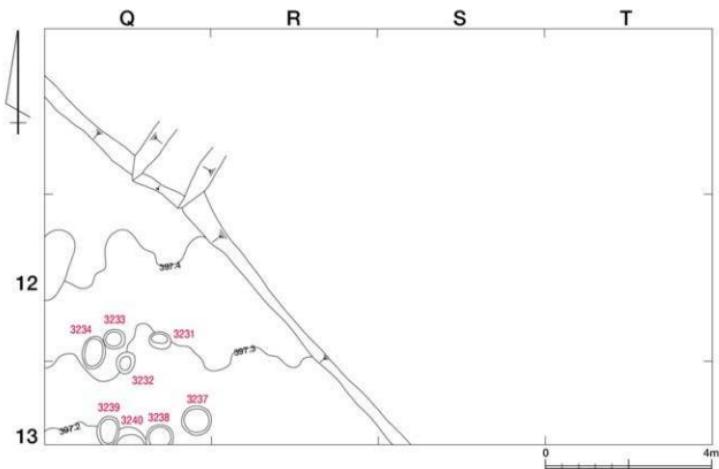


図219 第6調査面調査区分割図(5)

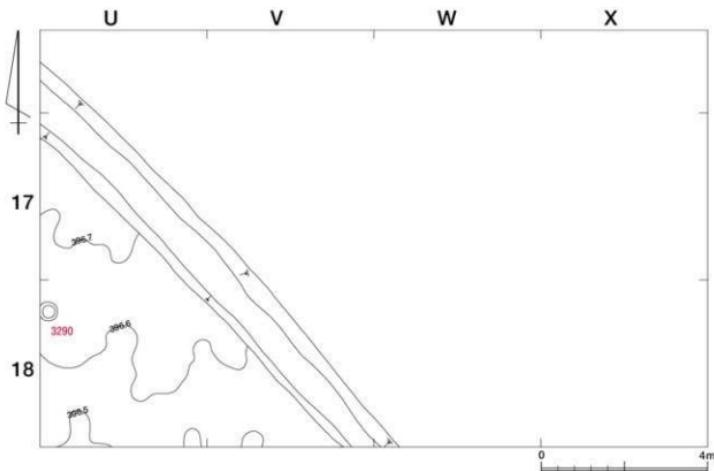


図220 第6調査面調査区分割図(8)

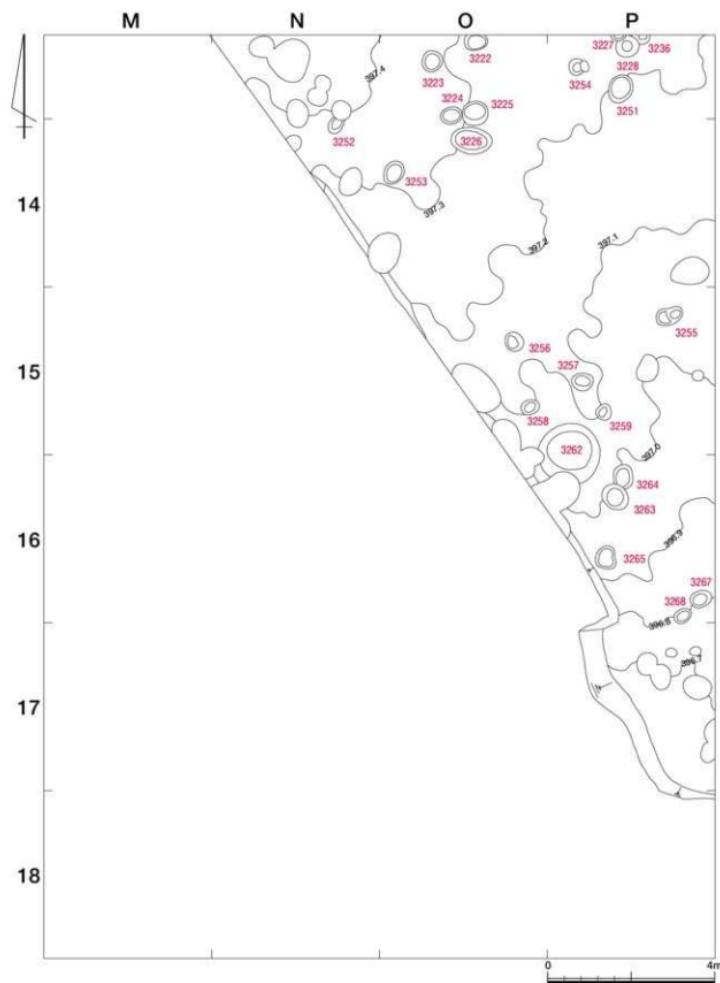


図221 第6調査面調査区分割図（6）

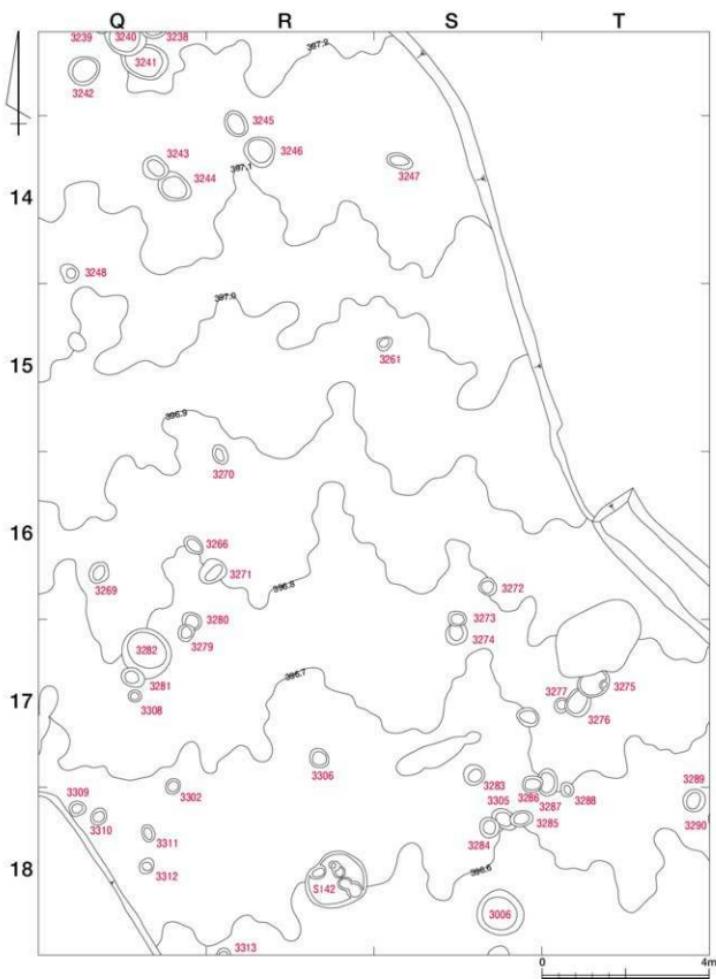


図222 第6調査面調査区分割図(7)

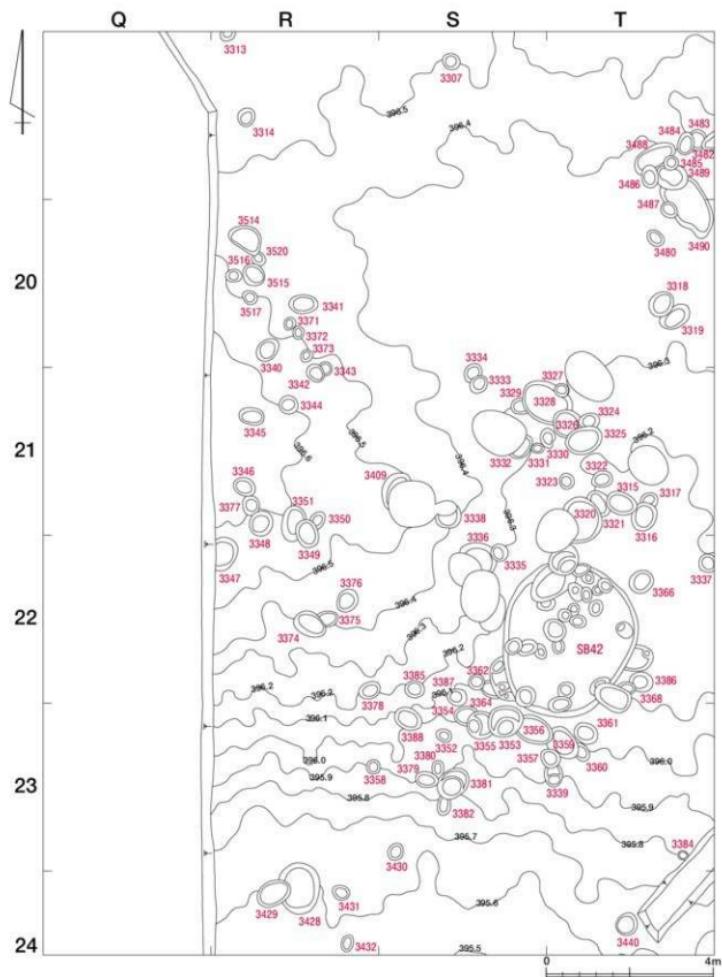


図223 第6調査面調査区分割図（9）

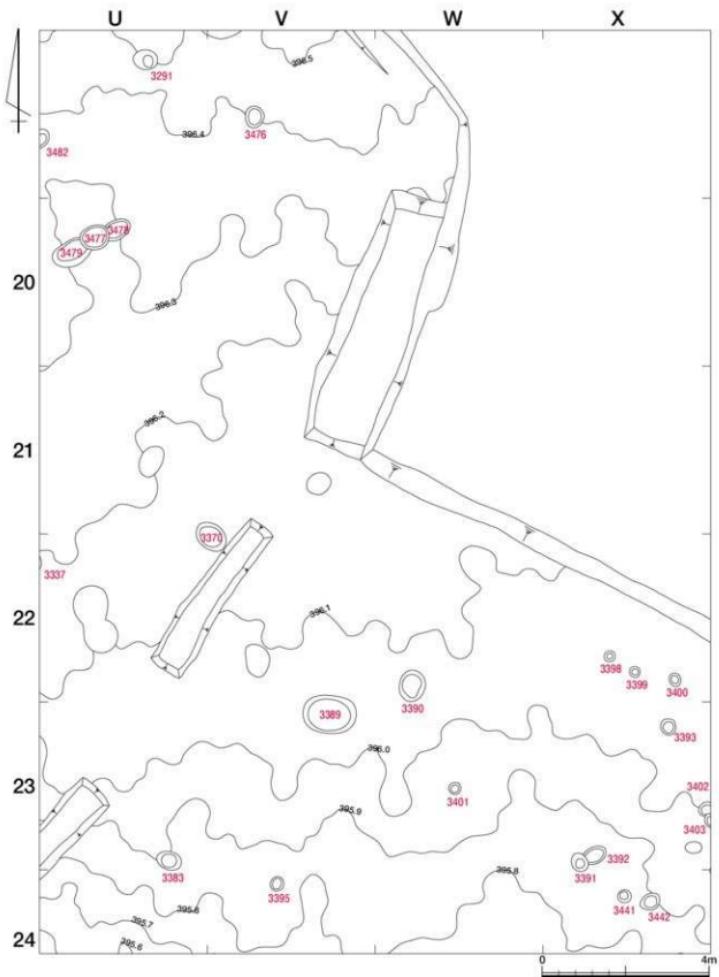


図224 第6調査面調査区分割図(10)

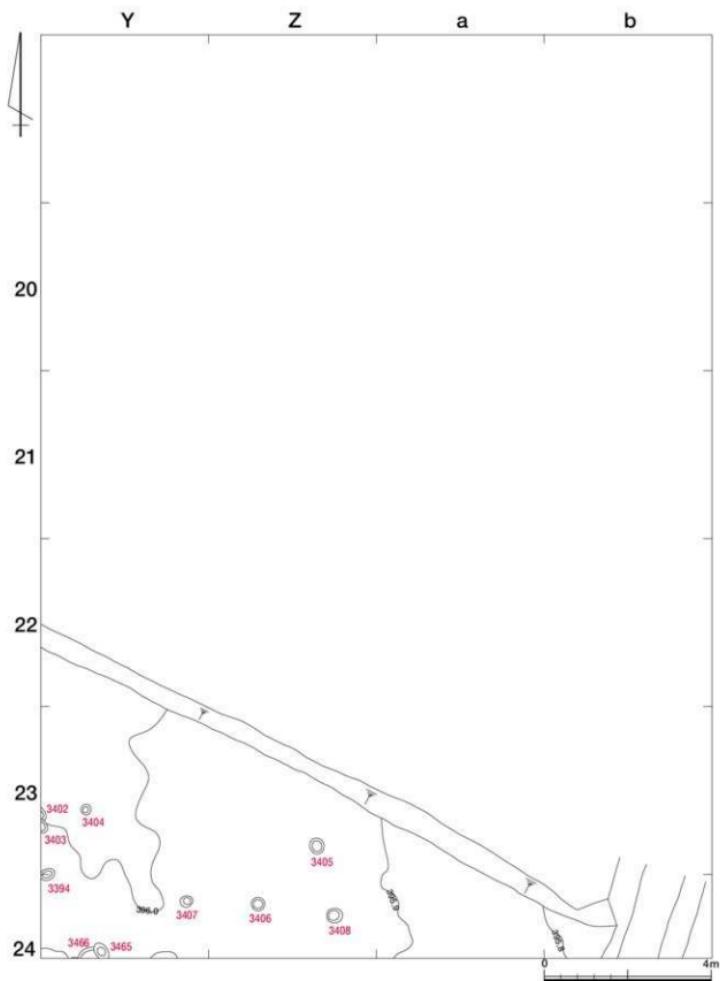


図225 第6調査面調査区分割図(11)

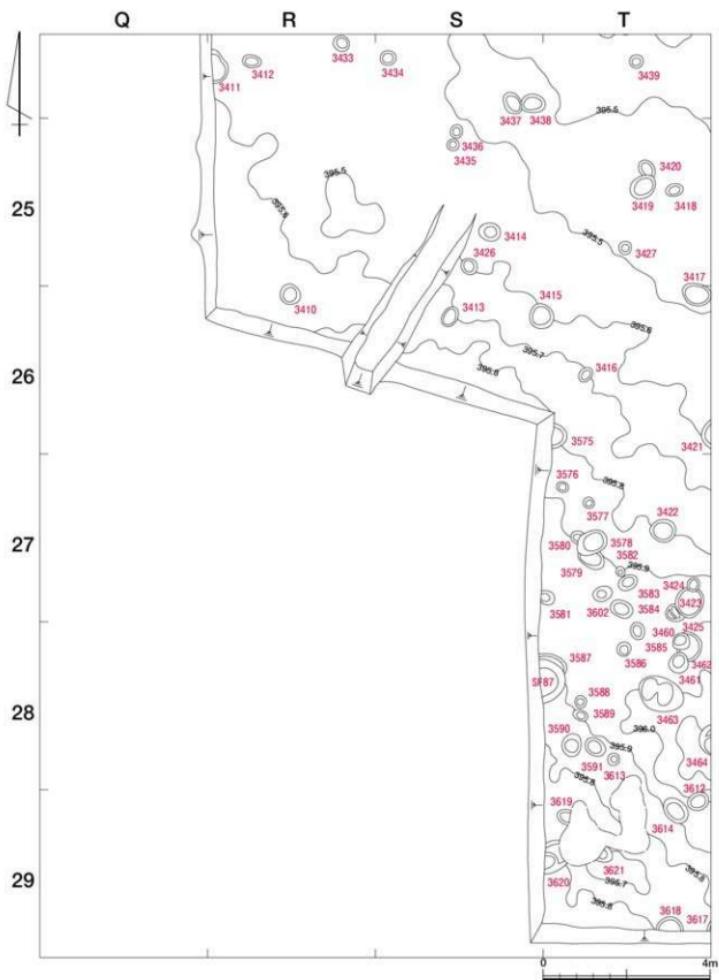


図226 第6調査面調査区分割図（12）

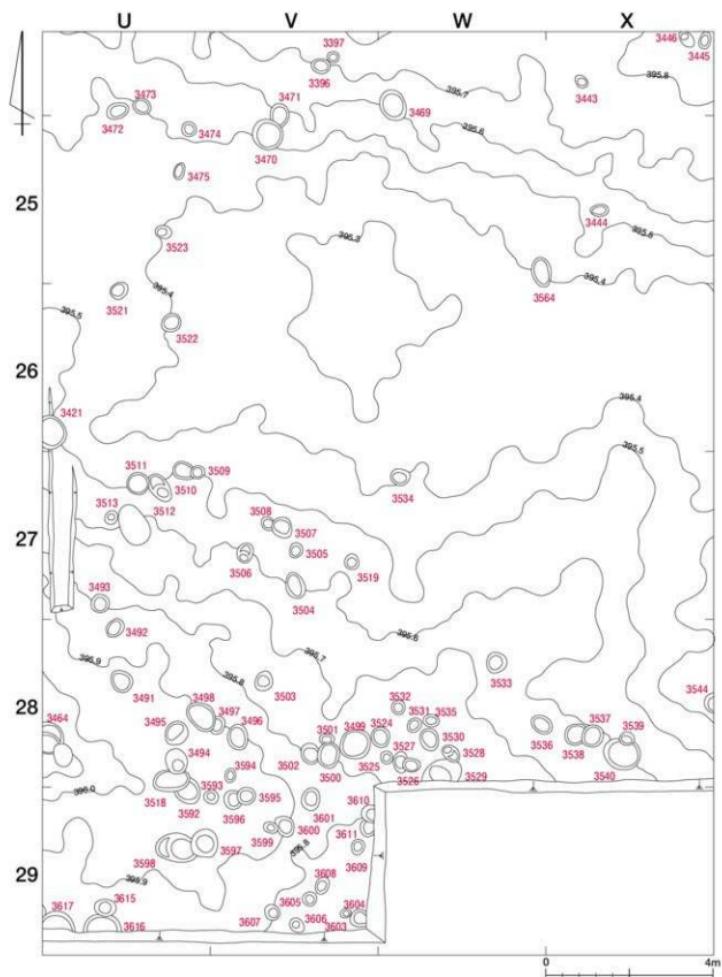


図227 第6調査面調査区分割図(13)

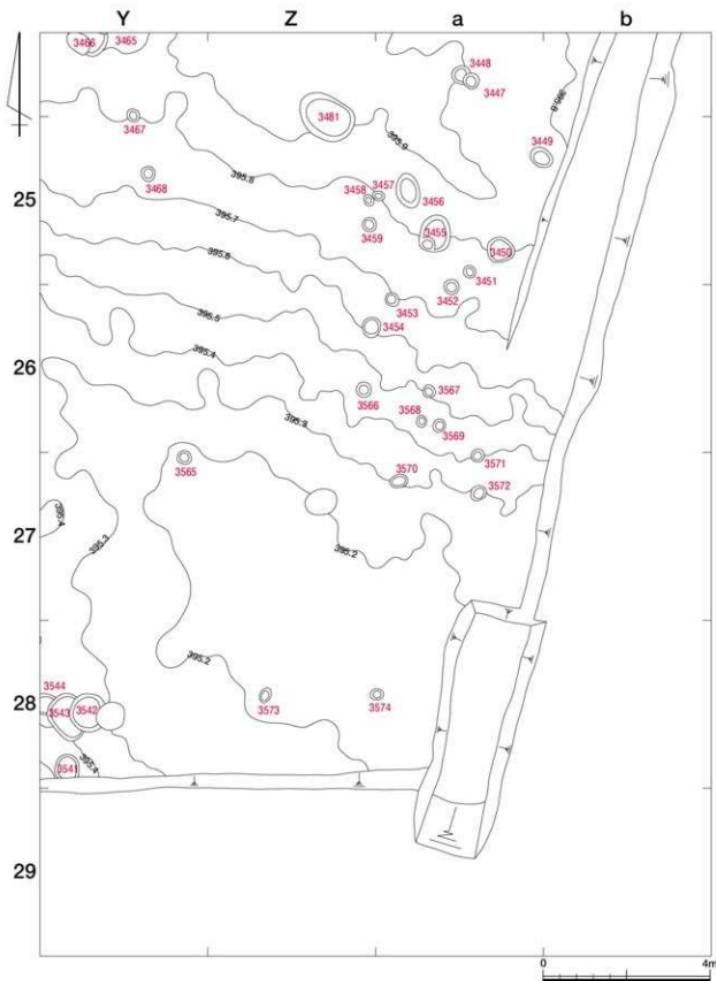


図228 第6調査面調査区分割図 (14)

報告書抄録

ふりがな	つかおくやまいせき					
書名	塚奥山遺跡					
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第103集					
編著者名	三輪晃三、藤岡比呂志					
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058(237)8550					
発行年月日	西暦2007年3月1日					
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北緯	東経	調査期間 調査面積	
塚奥山遺跡	岐阜県揖斐郡 揖斐川町 塚字塚奥山	21401	00919	35° 44' 35"	136° 25' 06"	19960507~ 19961129 19970501~ 19971128 19980420~ 19980918 20010507~ 20011205 20020507~ 20021125 20,200m ²
德山ダム建設事業	特記事項					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		
塚奥山遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡4棟、炉跡、焼土遺構87基、焼窯集積遺構6基、配石遺構36基、立石遺構2基、土坑3,625基、竪穴住居跡内土坑596基、埋甕・埋設土器16基、溝1条、遺物集積5か所	縄文土器・絵画土器・三角墳形土製品・土偶・土製耳飾・土器片円盤・焼成粘土塊・石器・石棒・石冠・石刀・線刻環・块状重飾・玉・小玉・骨角器	縄文時代中期後葉～後期前葉の環状集落、後期前葉の配石遺構	
要約	塚奥山遺跡は、縄文時代早期後葉から晚期前葉にかけての遺構・遺物を確認した遺跡である。遺構の中で特筆すべき点は、中期後葉～後期前葉の集落跡の形態がわかったことである。中期後葉では、中央に環状墓群、その外側に柱穴群・貯蔵穴、外周に竪穴住居跡群が重帯する。環状集落の形態をとることが判明した。後期前葉では、環状となる配石遺構群が重複して検出された。遺物の中でも特筆すべき点は、旧德山村城で絵画土器・三角墳形土製品・ヒスイ製磨製石斧・骨角器の出土は初例であること、顔料等付着遺物の出土量は最も多いことである。これらの成果から、当遺跡は旧德山村城の縄文時代の遺跡の中の拠点集落の一つであり、遺跡間の結びつきが注目される。					

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第103集

塙奥山遺跡
(第1分冊 遺構編)

2007年3月1日

編集・発行 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社 太洋社